史跡 斎宮跡

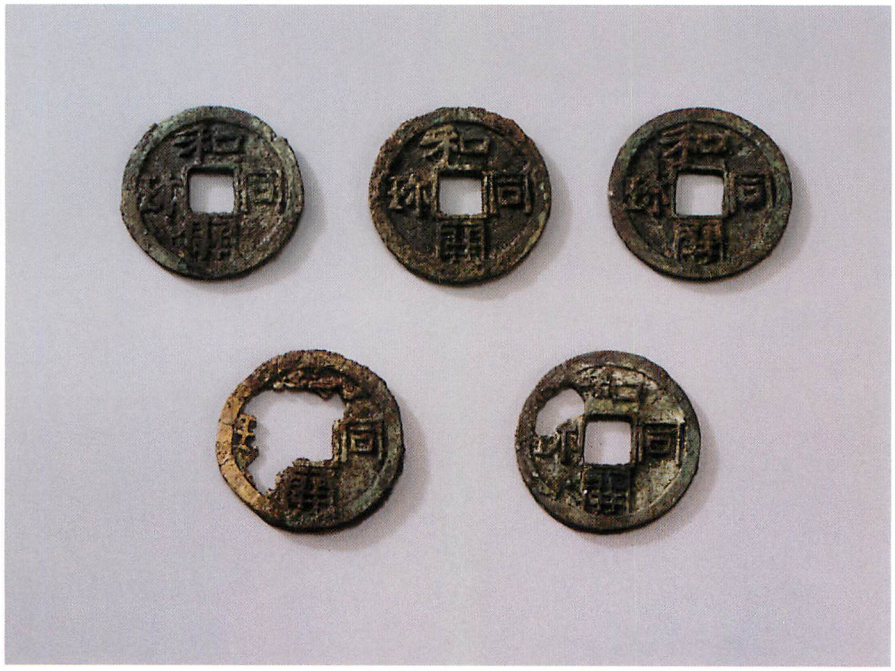
平成９年度発掘調査概報

1999

斎宮歴史博物館

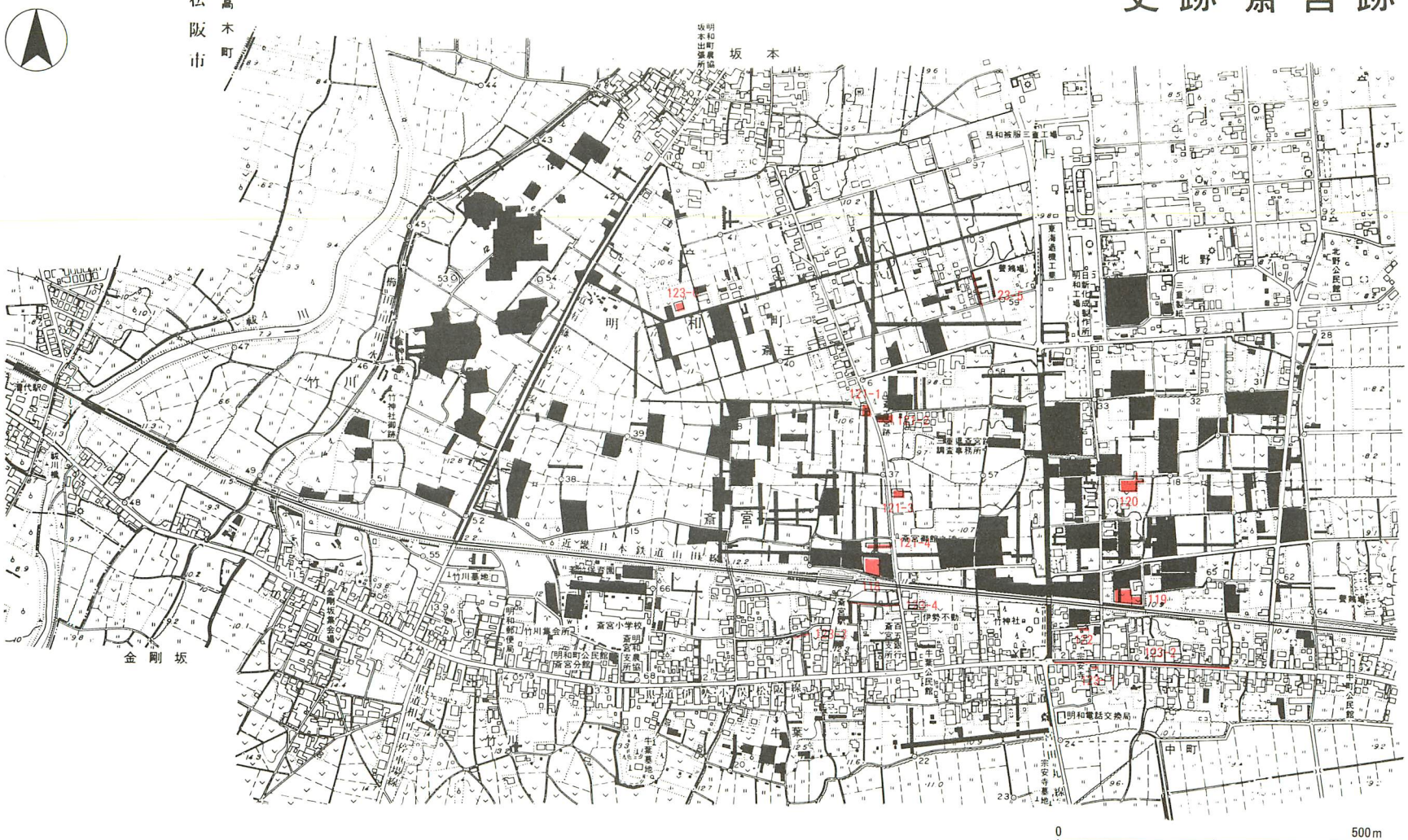
第 119 次調査　航空写真

第 118 次調査　ＳＸ 7860 出土状況復元



第 118 次調査　ＳＸ 7860 出土和同開珎

史跡斎宮跡



第1図　平成9年度発掘調査位置図（1:10,000）

はじめに

斎宮跡は、律令制下において太政官と並ぶ神祇官のもとに設置された斎王の宮殿及び斎宮寮の役所の跡であります。斎宮跡の保護顕彰は江戸時代に遡ります、昭和45年の団地造成計画に端を発した発掘調査により、宮殿の解明と保存対策が問題となりました。地元との協議を経て、昭和54年３月に国の史跡の指定を受け、発掘調査をはじめ、土地の公有化、整備事業等の保護活用事業を国の補助金等を受け、三重県及び明和町で積極的に取り組んでいます。

発掘調査は、既に四半世紀を過ぎ、史跡の東部において平城京、長岡京、平安京の都城制に通じる方格地割が確認されています。近年は、その中枢部の調査を精力的に実施しており、平成９年度調査を行った第119次調査は、斎宮跡の内院地区と想定される地区での調査であり、これまでの斎宮跡の調査で確認された南北に庇をもつ最大級の大型掘立柱建物を確認するとともに、奈良時代後期から平安時代前期にかけての鍵形に配置された建物群の変遷を認めることができ多大な成果をおさめました。しかし、当初予想していました、この地区を二重に取り囲む柵列の内郭柵列が調査区内で確認されず課題を残しております。

第120次調査は、この内院地区北側ブロック北東隅部で実施し、地割を区画する側溝、道路を確認するとともに、この方形区画内における建物配置の一部を確認することができました。

また、第118次調査は、斎宮駅北側の第95次と第99次調査区に挟まれた地区で実施し、方格地割北西隅部における遺構変遷を明らかにすることができました。

一方、整備・活用の面では、平成８年度から着手しました「遺構の活用・演出的整備ゾーン」計画地区において、文化庁の地方拠点史跡等総合整備事業に採択され、事業名も「斎宮跡古代ロマン再生事業」から「斎宮跡歴史ロマン再生事業」に変更し、事業を推進しております。今年度は、新たに設置します「斎宮跡体験学習施設（仮称）」の建築に先立ち、敷地造成及び平成８年度に実施しました西辺の区画外周道路の舗装等を行いました。

この度刊行させていただく本概報は、平成９年度に実施いたしました斎宮跡の計画調査及び整備事業に伴う事前調査の成果の概要をまとめたものであり、これまでの膨大な調査成果の蓄積と相まって斎宮跡の実態解明にとって貴重な資料となるものと信じております。

斎宮跡の保存と調査研究・整備にあたりましては、文化庁をはじめ斎宮跡調査研究指導委員会の先生方の御指導や地元明和町をはじめとする関係機関・各位の御協力の賜物と感謝申し上げます。

平成11年３月

斎宮歴史博物館
館長　大井與生

例　　言

1　本書は、斎宮歴史博物館が平成９年度に国庫補助金の交付を受けて実施した「史跡斎宮跡発掘調査」及び「地方拠点史跡等総合整備事業」に伴う事前調査の概要をまとめたものである。

2　明和町教育委員会が、国庫補助金の交付を受け調査主体となって実施した史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の報告書は、別途明和町教育委員会が刊行している。

3　遺構の実測にあたっては、国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とし、方位は座標北を用いた。

4　遺構の時期区分は、「斎宮の土師器（三重県斎宮跡調査事務所年報1984)」による。

5　遺構表示記号は次のとおりである。
ＳＢ；建物　ＳＡ；柵列　ＳＥ；井戸　ＳＫ；土坑　ＳＤ；溝　ＳＦ；道路　ＳＳ；足場　ＳＸ；その他

6　方格地割における各区画の名称は第33図に示した。

7　特に標示がない限り遺物実測図は実物の４分の１、遺物写真は約３分の１である。

8　用語は、「墓に関わる穴」には廣、「その他の穴」には坑を用いた。また、「わん」は椀「つき」は杯を用いた。

9　斎宮跡の調査全般については、次の先生方の指導を得た。

京都橘女子大学学長	門脇　禎二
千葉大学教授	北原　理雄
聖心女子大学助教授	佐々木恵介
前奈良国立文化財研究所　所長	鈴木　嘉吉
（財）大阪文化財調査研究センター理事長	坪井　清足
聖徳学園女子大学教授	所　　京子
愛知県陶磁資料館総長	楢崎　彰一
三重大学教授	八賀　　晋
皇学館大學教授	渡辺　　寛

10　現地での発掘調査及び本概報の編集・執筆は斎宮歴史博物館調査研究担当（旧調査研究課）の駒田利治、上村安生、大川　操（旧姓赤岩)、角正芳浩、石渕誠人（現美杉村教育委員会）があたり、松月浩子、八木光代がこれを補助した。また、遺物整理には島村紀久子、西村秋子、角谷和代、杉原泰子の協力を得たほか、河合正宏（立命館大学々生)、熊崎　司（京都府立大学々生）の参加を得た。

目　　次

Ⅰ　調査の経過と概要 …… 1
Ⅱ　第118次調査 …… 3
Ⅲ　第119次調査 …… 25
Ⅳ　第120次調査 …… 43
Ⅴ　第121次調査 …… 57
Ⅵ　第122次調査 …… 65
付編１　第118次調査出土和銅開珎の付着物の分析 …… 69
付編２　第119次・第120次調査　花粉・植物珪酸体分析 …… 72
発掘調査報告抄録 …… 102

表・挿図目次

〔表〕１　平成９年度発掘調査一覧 …… 2
２　第118次調査時期別遺構分類表 …… 4
３　第119次調査時期別遺構分類表 …… 26
４　第120次調査時期別遺構分類表 …… 44
５　鍛冶山西ブロック柵列・建物座標一覧表 …… 67
６　掘立柱建物・柵列一覧表 …… 81
７　竪穴住居一覧表 …… 82
８　遺物（土器）観察表 …… 83
９　斎宮跡発掘調査次数一覧表 …… 96

〔図〕１　平成９年度発掘調査位置図（1:10,000） …… i
２　第118次調査　調査区位置図（1:2,000） …… 3
３　〃　遺構実測図(1:200) …… 5
４　〃　SB7905東壁カマド土器出土状況図(1:20) …… 7
５　〃　遺物実測図(1:4) …… 15
６　〃　遺物実測図(1:4) …… 17
７　〃　遺物実測図(1:4) …… 19
８　〃　遺物実測図(1:4) …… 21
９　〃　宮ノ前ブロック内における平安時代前半期の掘立柱建物配置(1:1,000) …… 24
10　第119次調査　調査区位置図（1:2,000） …… 25
11　〃　遺構実測図(1:200) …… 27
12　〃　SB7950柱掘形土層断面図(1:50) …… 29
13　〃　SE7920土層断面図(1:60) …… 30
14　〃　遺物実測図(1:4) …… 34
15　〃　遺物実測図(1:4) …… 36
16　〃　鍛冶山西ブロック建物配置変遷図　1 …… 40
17　〃　鍛冶山西ブロック建物配置変遷図　2 …… 41
18　第120次調査　調査区位置図（1:2,000） …… 43
19　〃　ＳＤ6050土層断面図(1:40) …… 44
20　〃　遺構実測図(1:200) …… 45
21　〃　遺物実測図(1:4) …… 50
22　〃　遺物実測図(1:4) …… 52
23　〃　遺物実測図(1:4) …… 53
24　〃　調査が実施された方格地割の交差点（1:4,000） …… 55
25　第121次調査　調査区位置図（1:2,000） …… 57
26　第121-1･2･4次調査　遺構実測図(1:200) …… 59
27　第121次調査　遺物実測図(1:4) …… 63
28　第121-3次調査　遺構実測図(1:200) …… 64
29　第122次調査　調査区位置図（1:2,000） …… 65
30　〃　遺構実測図(1:200) …… 66
31　〃　遺構配置計画図(1:500) …… 67
32　斎宮跡地区表示 …… 100
33　斎宮跡方格地割区画名称 …… 101

写　真　図　版

巻首１　第119次調査航空写真
巻首２　上：第118次調査SX7860出土状況復原
　　下：第118次調査SX7860出土和同開珎
ＰＬ１　上：第118次調査区全景（北から）
　　下：調査区全景（西から）
ＰＬ２　上：SB7891（西から）
　　下：SB7901（南から）
ＰＬ３　上：SB7881・SB7882（東から）
　　下：SB7882南東隅土器出土状況（北西から）
ＰＬ４　上：SB7905（西から）
　　下：SB7905東壁カマド土器出土状況（北から）
ＰＬ５　上：SB7865（北から）
　　下：SB7865・7871・7872（西から）
ＰＬ６　上：SB7875（西から）
　　下：SB7875・7895・7896（西から）
ＰＬ７　上：SB0250（北から）
　　下：SB7880・7890（西から）
ＰＬ８　上：SB7870・7880・7894（南から）
　　下：SB7880・7885（北から）
ＰＬ９　上：SB7870・7880（東から）
　　下：SB7900（北から）
ＰＬ10　上：SB7900（東から）
　　下：SB6860・6861・6874・0251（北から）
ＰＬ11　上：SB7885・7886（北から）
　　下：SB7885・7886（東から）
ＰＬ12　上：SB7897・7898・7903（南から）
　　下：SB7867土器出土状況（北から）
ＰＬ13　上：SB7887土器出土状況（南から）
　　下：SK6247中畦東壁面出土状況（東から）
ＰＬ14　上：第119次調査区全景（上から）
　　下：調査区全景（西から）
ＰＬ15　上：SB7950（南から）
　　下：SB7950（西から）
ＰＬ16　上：SB7950（東から）
　　下：SB7918・7919（西から）
ＰＬ17　上：SB7947・7948（北から）
　　下：SB7915・7916・7917（南から）
ＰＬ18　上：SA6770・6790・SD6803（北から）
　　下：SB7938・7939・7940（北から）
ＰＬ19　上：SE7920（東から）
　　下：SE7920井戸枠痕跡検出状況（東上から）
ＰＬ20　上：第120次調査区全景（北から）
　　下：調査区全景（西から）
ＰＬ21　上：SD6002・6050，SF6009（西から）
　　下：SD6002（西から）
ＰＬ22　上：SD7965，SK7966（南から）
　　下：SD7970（南から）
ＰＬ23　上：SD6050土層断面（西から）
　　下：SD6050土層断面（東から）
ＰＬ24　上：SB7998・8000（北から）
　　下：SB7995（北から）
ＰＬ25　上：SB7997・7987・7988（北から）
　　下：SB7996（北から）
ＰＬ26　上：SB7991～7994，SK7985・7986（北から）
　　下：SK7980（西から）
ＰＬ27　上：第121-1次調査区全景（北から）
　　下：第121-2次調査区全景（東から）
ＰＬ28　上：第121-3次調査区全景（東から）
　　下：第121-4次調査区全景（西から）
ＰＬ29　上：第122次調査区全景（西から）
　　下：SA7170柱穴断面検出状況（東から）
ＰＬ30　第118次調査出土遺物
ＰＬ31　第118次調査出土遺物
ＰＬ32　第118次調査出土遺物
ＰＬ33　第118次調査出土遺物
ＰＬ34　第119次調査出土遺物
ＰＬ35　第120次調査出土遺物
ＰＬ36　第120次調査出土遺物
ＰＬ37　第120次調査出土遺物
ＰＬ38　第121次調査出土遺物

付　編　　図・表・写真

第１表　第119次・第120次調査花粉・植物珪酸体分析試料一覧表
第２表　第119次・第120次調査植物珪酸体分析結果
第３表　第119次・第120次調査花粉分析結果

第１図　付着繊維と比較サンプルのFT-IRチャート
第２図　第119次・第120次調査花粉化石組成

図版１　第118次調査出土和銅開珎の付着物
図版２　第119次・第120次調査珪藻化石・珪藻分析プレパラート内の現況写真
図版３　第119次・第120次調査花粉化石分析プレパラート内の現況写真

Ⅰ　調査の経過と概要

経　過

古里地区での宅地開発計画に伴い昭和45年に始まる斎宮跡の発掘調査は、文化庁の補助事業として、昭和48年から開始した範囲確認調査を経て、昭和54年３月27日に国の史跡に指定され、指定以降史跡解明の計画調査を継続して実施している。

これまでの発掘調査成果の蓄積から平安時代初期を中心に展開を想定している方格地割において、方形区画内をめぐる柵列や大型掘立柱建物の規則的な配置、祭祀を想起させる土坑の存在等から、当該期斎宮寮の中枢部の可能性が強い牛葉・鍛冶山地区における構造解明に重点をおいて調査を進めている。

また、史跡指定以降、管理団体である明和町が文化庁及び県の補助を得て実施している史跡の買い上げの進捗と相まって、公有地の管理と史跡の活用が課題となり、平成５年度に『史跡斎宮跡整備基本構想検討調査報告書』刊行、平成８年３月に『史跡斎宮跡整備基本構想』策定を行うとともに、平成７年度には、文化庁等の指導を得ながら『史跡斎宮跡「遺構の活用・演出的整備ゾーン」整備基本計画』を確定した。

整備計画地は斎宮駅北側の方格地割北西隅部に想定される地区であり、公有化が最も進捗した地区であるとともに、斎宮跡及び斎宮歴史博物館への窓口の一つであり、また、近代の瓦粘土採掘によって遺構の保存状況が必ずしも良くない地区であることにより『史跡斎宮跡　整備基本構想』の「遺構の活用・演出的整備ゾーン」として、137.1haの広大な広がりをもつ斎宮跡の理解を体験的に深めるため１/10史跡全体模型を核とした体験学習を実施できる整備ゾーンとして位置づけした。

第118次調査

この上園・宮ノ前地区でのこれまでの調査を補完し、施設の建設予定地となる地区を第118次調査として実施した。調査の結果、これまでの調査で確認されていた平安時代後期以降の建物群以外にも、平安時代前半期の大型建物の存在が確認され、方格地割造営を解明する重要な資料となった。また、掘立柱建物の柱掘形内から、土師器の杯に収められ、高杯で蓋をした状態で和銅開珎５点が出土し、建物の地鎮祭祀に関わる遺物とみられる。

第１回調査研究指導委員会

調査期間中の５月22日には、斎宮跡調査研究指導委員会を開催し、第118次調査及び体験学習施設建設にかかる指導をうけるとともに、今後の整備事業について助言を得た。

今年で第15回を迎える「斎王まつり」の開催された６月８日には、現地説明会を開催し、223名の参加を得た。

第119次調査

方格地割の中枢部と考えられている鍛冶山ブロックでは、これまで第44・105・109次調査等で、区画内を二重に巡る板塀と考えられる柵列を確認しているが、内郭柵列の規模等については不明な点があり、その確認と中枢部の遺構配置を解明するため第119次調査区を設定した。調査の結果、内郭柵列は、当該地区まで延びておらず、東西規模が当初想定していたものより短くなることが判明した。一方、斎宮跡調査での最大規模の６間×４間で南北二面に庇をもつ大型掘立柱建物を確認し、６期にわたる規則的配置をもつ建物群が確認されるとともに、方形の井戸を確認し、当該地区が斎宮内院地区であることを裏付ける貴重な資料を得ることができた。

第２回調査研究指導委員会　大きな成果を得た第119次調査と内院構造について指導をうけるため指導委員会を11月５日に開催し、引き続き内院地区の調査を実施していくよう指導を得た。また、整備事業についても、本年度から建設事業に着手するため、施設の最終設計について承認をいただくともに、1/10建物模型の製作についても具体的な指導・助言をいただいた。

第120次調査　内院の北側に位置し、方形区画が中央の道路・溝によって区画され、その西側に物忌殿あるいは神殿と考えられる遺構配置に対して、東側では遺構の確認が進んでいなかったため、当該区画の北東隅部で第120次調査区を設定した。調査の結果、方格地割の交差点及び区画施設内に空閑地を隔てて平安初期以降の建物群を確認することができた。

第121次調査　方格地割北西隅に位置する宮ノ前・上園ブロックの区画施設については、昨年度までの調査により解明されたが、東辺の区画施設の状況については不明瞭な点が多かったため、「斎王の森」周辺をはじめとして、当該区画施設解明の調査区を４か所設けた。「斎王の森」西側の第121-1次調査区では、北西隅部の区画施設は、現道とほぼ重なり合い、蛇行していることが確認できた。「斎王の森」南側及び北から２列目の区画施設確認調査とした第121-2・3次調査区では、近代の瓦粘土採掘により、明瞭な遺構を確認することができなかった。また、体験学習施設の浄化槽建設予定地内でのトレンチ調査である第121-4次調査でも、瓦粘土採掘により遺構は存在しなかった。

第122次調査　内院地区にあたる鍛冶山西ブロックの外郭柵列南部分は、柵列と掘立柱建物の関係が明瞭ではなかったが、その部分にあたる箇所で町道の舗装工事が実施されることが判明し、急遽第122次計画調査として実施した。調査の結果、南北柵列SA7150・7170は鍵形に折れる柵列ではなく、更に南に延長される柵列であることが判明した。

第３回調査研究指導委員会　第120次調査結果が明らかになった３月３日には、現地指導を含めた調査研究指導員会を開催し、第120・121・122次調査の指導を受けるとともに、1/10史跡全体模型のサンプル模型を現地に設営して、検討いただいた。

現状変更調査　その他、史跡現状変更に伴い管理団体である地元明和町教育委員会が調査主体となり、斎宮歴史博物館が担当している事前の緊急発掘調査は、本年度は６件実施し、工事立会い調査を33件実施した。　（駒田利治）

調査次数	地区名	面積	調査期間	地籍・地番	所有者	備考	区分
118	6ADN	950	H 9. 4.14～H 9. 7.23	斎宮字内山3046-14他	明和町	計画調査	1
119	6AFN-EG	697	H 9. 7.30～H 9.12.18	斎宮字鍛冶山2740-3他	個人	計画調査	2
120	6AFI-CE他	805	H10. 1.20～H10. 3.31	斎宮字西加座2711他	個人	計画調査	2
121	6ADH他	843	H 9.12. 3～H10. 2. 7	斎宮字宮ノ前･下園他	明和町	事前調査	1
122	6AFN	28	H10. 1. 5～H10. 1.14	斎宮字鍛冶山2758-8	明和町	計画調査	3
調査面積	合計	3,323					

調査次数	地区名	面積	調査期間	地籍・地番	所有者	備考	区分
123-1	6AFQ-A	45	H 9.12.16～H 9.12.25	斎宮字中西地内	個人	整地	3
123-2	6AFN他	188	H10. 1.19～H10. 2. 7	斎宮字中西・笛川他	明和町	水道改修	3
123-3	6ADP他	27	H10. 2. 2～H10. 2. 4	斎宮字牛葉地内	明和町	水道改修	3
123-4	6ADQ	55	H10. 1.27～H10. 3.18	斎宮字牛葉地内	明和町	水路改修	3
123-5	6AEE-AHR	87	H10. 2. 2～H10. 2.18	斎宮字刈干	明和町	水路新設	3
123-6	6ACC-I	407	H10. 2.23～H10. 3.21	斎宮字塚山3337-1	個人	資材置場	3
調査面積	合計	809					

第１表　平成９年度発掘調査一覧（調査期間は遺構実測まで）

Ⅱ　第118次調査

（6ＡＤＮ　内山地区）

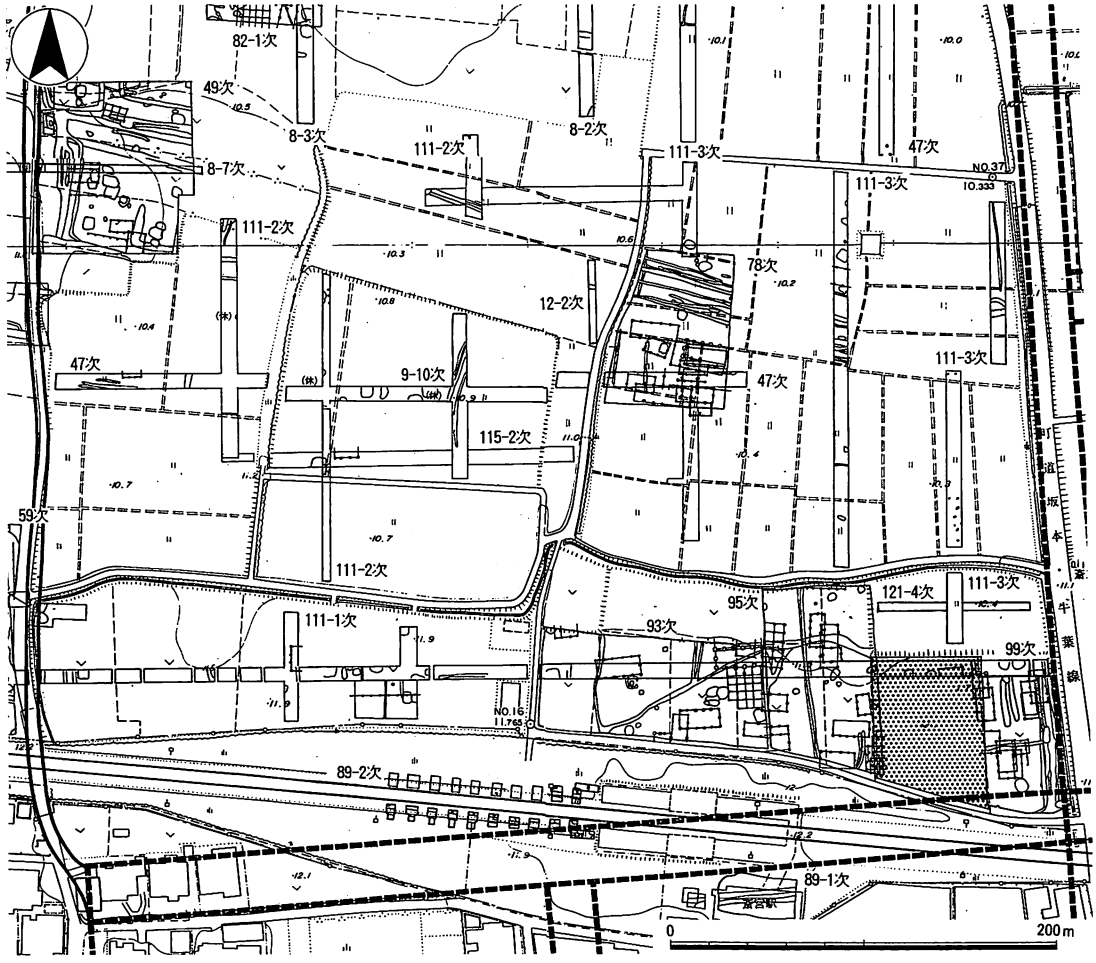
1　はじめに

経　過

平成９年度第１回目の計画調査は、近鉄斎宮駅北側で昨年度から実施している史跡整備の中で、建築物の設置が予定されている内山地区の畑地において実施した。

史跡東半部には一辺が約120ｍの方形区画が東西７列×南北４列に並んだ方格地割を構成することが想定されている。さらに昨年度の調査により、方格地割のうち北西隅４区画分の外周道路は他の区画でみられるような直線的な直交する道路及び側溝で区画されるのではなく、緩やかに蛇行する現道がその外周道路の線形そのものであったこと、そして方形区画４区画分に相当する北西隅部の区画を４つに分ける区画道路はなく４区画一帯として使用されていたと想定され、確認された遺構からは時期的にも平安時代後期になってから東西５列×南北４列の南西隅に４区画の張出をもつ最盛期の方格地割に北西隅の４区画を付加したものである可能性が高い。

今回の調査地は、宮ノ前南ブロックの南東隅に位置し、この場所では昭和49年度の範囲確認調査第8-8次調査（Ｍトレンチ）をはじめ、平成３年度の第93次調査、平成４年度の第95次調査、平成５年度の第99次調査が隣接して行われており、方格地割北西隅４区画分の中では比較的遺構の残存状況が良好な地点であることが判明している。これらの調査の結果から当該地は、平安時代後末期～鎌倉時代の遺構が最も顕著にみ



第２図　第118次調査 調査区位置図（１：2,000）

られる地点で、平安時代初期の遺構もわずかにみられるものの、主として平安時代後期～末期にかけて建物が頻繁に、繰り返し建て替えられた場所であり、鎌倉時代には方格地割隣接地でありながら墓が営まれる地点であることが確認されている。

目　的　こうした中で、平成４年度の第95次調査と平成５年度の第99次調査の間の未調査地の実態解明を目的として、平成９年４月14日～７月23日にかけて東西27ｍ、南北約35ｍの約950㎡を対象に調査を実施した。

現　況　調査地の現況は、民有地である畑と公有地で、調査区中央部が標高11.5ｍと最も高く、南へわずかに傾斜して標高11.45ｍ、また北へ徐々に傾斜していき標高11.2ｍといった勾配をとる。基本層序としては地表から順に、表土（暗褐色土）厚さ0.1ｍ、遺物包含層（黒褐色土）厚さ0.1ｍ、地山（黄橙色粘質土）であるが、調査区北西隅には開墾時の整地とみられる遺物を多量に含んだ攪乱層（灰褐色土）が厚さ5㎝～20㎝にわたって認められた。地山面までは比較的浅く、調査区南辺で標高11.1ｍ、北辺では標高10.7ｍ～11.1ｍと北西隅のみ攪乱のため極端に下がっている他はほぼ平坦である。

２　遺　構

（１）奈良時代中期の遺構

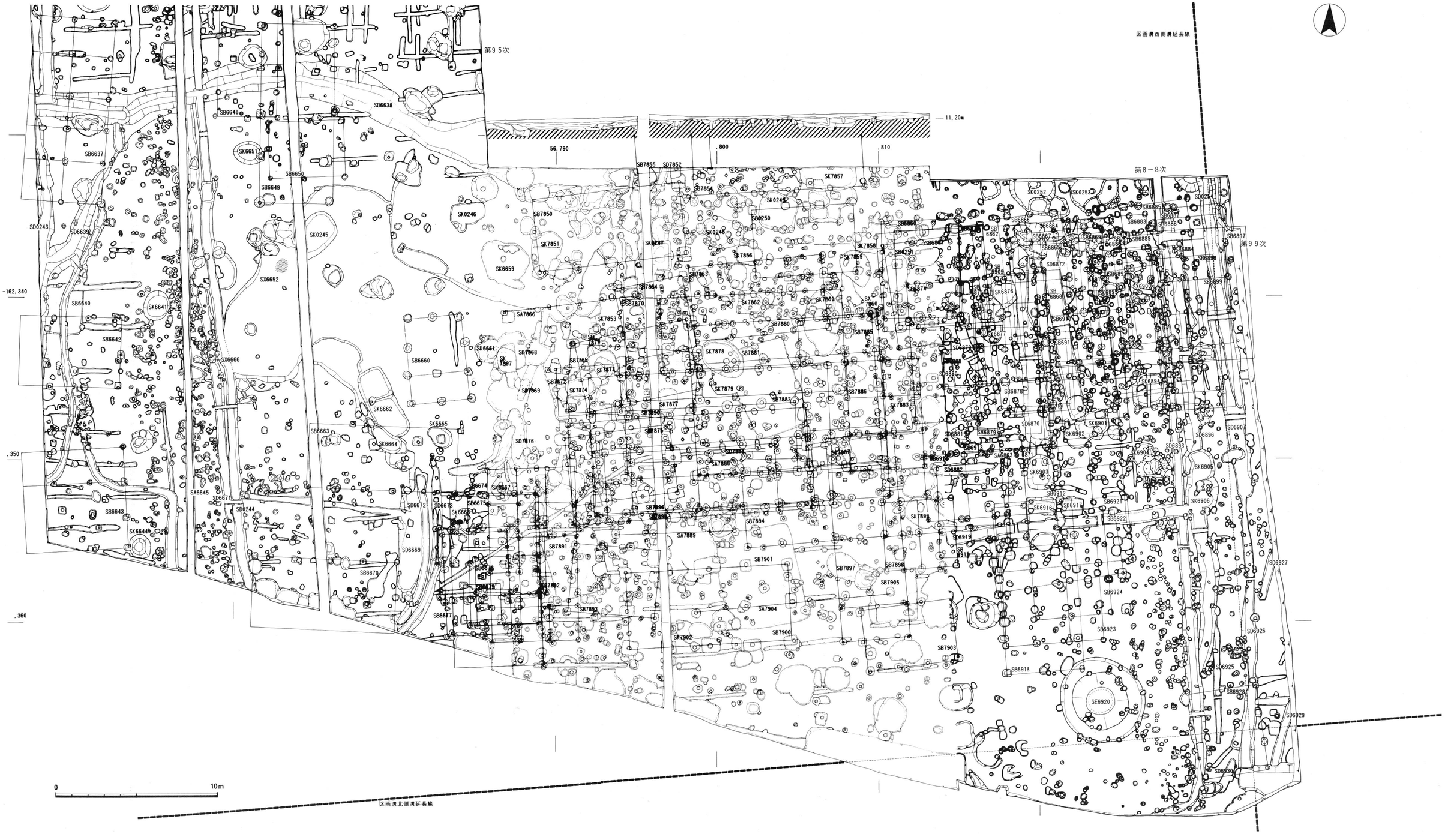
竪穴住居５棟、掘立柱建物１棟、土坑１基がある。

ＳＢ7891　調査区南西部で検出した3.5ｍ×3.9ｍ、遺構検出面からの深さ約20㎝の竪穴住居である。東辺やや南寄りに焼土がみられカマドがあったものと思われる。竪穴住居中央に貼床の痕跡が認められる。主軸方向はＮ17°Ｗで、土師器杯破片が東辺のカマド周辺から散逸的であるが出土した。

ＳＢ7901　調査区南半中央で検出した4.9ｍ×6.2ｍ、遺構検出面からの深さ約5㎝の竪穴住居で

		遺構の種別					
		ＳＢ	ＳＡ	ＳＫ	ＳＤ	ＳＸ
奈良	中　期	7880 7881 7882 7891 7901 7905				7860
平安	初　期	0250 0251 7900		7878 7887		
	前Ⅰ期	7855 7875 7885	7904	7879		
	前Ⅱ期	6679 6915 7850 7890 7895 7896	7866	7857 7861 7862		
	中　期	7865 7893 7903	7889			
	後Ⅰ期	7863 7864 7870 7871 7872 7897 7898		7874 7899		
	後Ⅱ期	6914 7886 7894		7859 7867 7877 7883		
	後　期		7888	7856 7858		
	末　期	6674 6675 6676 6677 6678 6860 6861 6873 6874 6913 6908 7892		0247 0248 0249 6659 6667 7851 7853 7873 7876	6882 6919 7852 7869	
鎌　倉				7868	7884	
時期不明		7854				

第２表　第118次調査　時期別遺構分類表



第３図　第118次調査　遺構実測図(1:200)

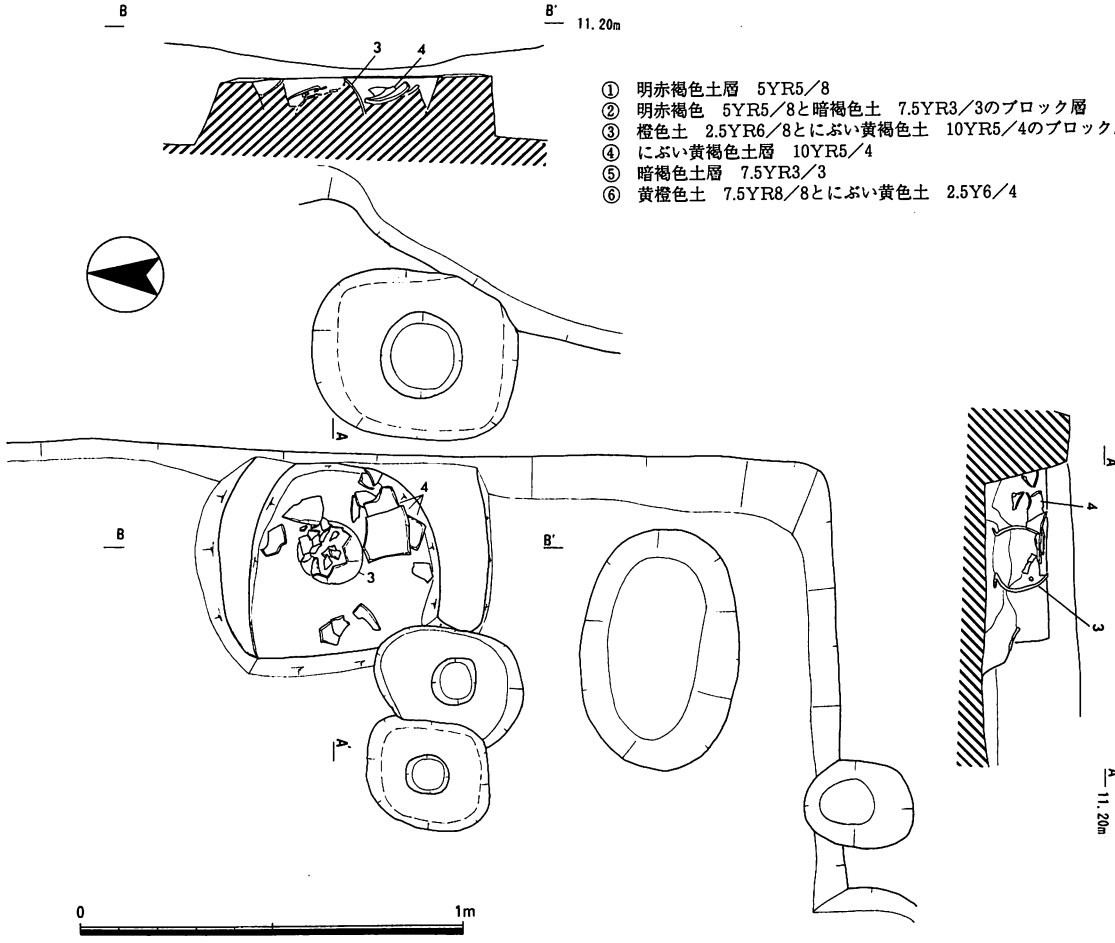
ある。平面規模はやや南北に長い長方形で、カマド・貼床の痕跡は認められなかった。主軸方向はN11°Wである。土師器杯・蓋破片等が出土した。

ＳＢ7881・7882　調査区中央やや北寄りで検出した竪穴住居で、ＳＢ7881は推定規模3.7ｍ×3.2ｍ、ＳＢ7882は推定規模3.5ｍ×3.4ｍ、遺構検出面からの深さはいずれも約10cm～15cmでＳＢ7881がＳＢ7882に先行する。ＳＢ7881は北西隅が土坑ＳＫ7878・7879、南がＳＢ7882と重複しているため、カマド・貼床の状況等の詳細が不明である。ＳＢ7882の方は、東辺中央やや北寄りにカマドを有し、南東隅で土師器長胴甕・甑が出土している。主軸方向はいずれの竪穴住居もN22°Wである。

ＳＢ7905　調査区南東部、前述のＳＢ7901の東約3.5ｍに位置する竪穴住居で、3.0ｍ×3.4ｍ、遺構検出面からの深さ約25cmである。東辺中央にカマドを良好な状態で検出しており、カマド中央部から土師器甕(３)・長胴甕(４)が出土する。このカマド南側に、長径約70cm、短径約45cmの楕円形の小穴を検出しており、土師器杯等が出土する。主軸方向はＮ４°Ｗと他の３基の竪穴住居に比べて大きく向きを違える。

ＳＸ7860　調査区北東部、ＳＢ7880北面庇東端の柱掘形およびＳＢ7885の北東隅柱の柱掘形が重複する柱掘形上面の土坑で、土師器の高杯(124)と、和同開珎５枚(126～130)が土師器杯(125)の底部内面に裏向きに入れられたものが出土している。杯に高杯杯部が被さる形で埋納されたものと考えられる。

これまでの調査で、今回調査区の両隣で実施されている第95次調査のＳＸ6666と、



第４図　ＳＢ7905東壁カマド土器出土状況図（1：20　図中の数字は遺物番号）

第99次調査のＳＸ6900から「延喜通寶」が同形の土師器壺に埋納した形で出土したが、今回のＳＸ7860は土師器杯の底部内面に和同開珎が裏向きで伏せてある。

ＳＢ7880　調査区中央やや東寄りに位置する桁行５間×東梁行３間・西梁行２間、南北両面に庇を伴う大型の東西棟建物である。柱間は桁行2.35ｍ、東梁行で2.27ｍ、西梁行で3.4ｍ、南庇出2.4ｍ、北庇出2.1ｍ、棟方向はＥ４°Ｎである。妻の東西で間数が異なるのは、東面では奇数間とし中央間に開口部をとったものかと考えられる。西妻については３間で構成される可能性は少なく、柱痕跡の遺構検出面からの深さを考えも身舎よりも深く埋設されていることから、２間で6.8ｍの妻を構成したものとみられる。

（２）　平安時代初期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物３棟、土坑２基がある。

ＳＢ0250　調査区北辺で検出の桁行３間×梁行２間の東西棟建物である。柱間は桁行・梁行とも2.1ｍ等間、棟方向はＥ３°Ｎである。ＳＢ7850と同じく北側柱を第8-8次調査で検出しているため、詳細は不明だが、今回調査で検出した南側柱でみると柱掘形は0.6ｍ～0.7ｍの方形、径25㎝の柱痕跡をもつ。東側に建つＳＢ0251の北妻とＳＢ0250の棟筋が直交する位置関係にあるが、両棟が約1.8ｍしか距離をおいていないため、Ｌ字形の配置をとるものの同時存在は考えにくい。ＳＢ0250の南側柱の柱掘形からは、製塩土器、土錘等が出土している。

ＳＢ0251　東隣の第99次調査で東側柱を検出した桁行３間×梁行２間の南北建物である。前述したＳＢ0250と北妻柱筋で直交する建物で、棟方向はＮ３°Ｗである。柱間は桁行1.94ｍ、梁行2.0ｍと異なる。柱掘形は0.6ｍ×0.7ｍで、柱痕跡は径25㎝～30㎝である。

ＳＢ7900　調査区南辺中央で検出した桁行４間×梁行２間の東西棟建物で、柱間は桁行2.5ｍ×梁行2.35ｍである。柱掘形は1.1ｍ×0.7ｍで柱痕跡は径約30㎝、棟方向はＳＢ7896と同じくＥ３°Ｎで、ＳＢ7896の南約3.0ｍの位置に平行に建ち並ぶ建物である。

ＳＫ7878　調査区中央部にあり、竪穴住居ＳＢ7881の北西隅で重複し、ＳＢ7881より後出で、ＳＢ7870・7890に先行する土坑である。長径約3.0ｍ、短径約2.0ｍ、遺構検出面からの深さ約32㎝である。ヘラ描き記号や墨書・墨痕を残す土師器杯・皿をはじめ、土師器杯・皿・甕・鍋が良好な状況で検出された。

ＳＫ7887　調査区中央やや東寄りにある、1.5ｍ×1.8ｍの土坑である。遺構検出面からの深さ約40㎝で、上面からヘラ描き記号や墨書・墨痕のある土師器杯・皿をはじめ、土師器甕・長胴甕・鍋などが良好な状態で検出された。ＳＢ7880より後出する。

（３）　平安時代前Ⅰ期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物３棟、柵列１条、土坑１基がある。

ＳＢ7855　調査区北辺壁際で南側妻のみを検出した建物で、梁行２間の南北棟建物になるものと考えられる。柱間は2.3ｍ等間、棟方向はＮ３°Ｗと思われる。

ＳＢ7875　調査区中央やや西寄りで検出した桁行３間×梁行２間の東西棟建物で、Ｅ４°Ｎの棟方向である。柱間は桁行2.2ｍ、梁行2.1ｍで、柱掘形が0.8ｍ～1.0ｍの方形柱痕跡が径30㎝と、上面を大きく攪乱されていながらも、形状をよく留めていた。

ＳＢ7885　調査区中央やや東寄りに位置する桁行３間×梁行２間、南面妻側に庇を伴う南北棟建物である。柱間は桁行2.27ｍ、梁行2.3ｍ、南庇出2.2ｍ、棟方向はＮ４°Ｗである。柱掘形は0.5ｍの方形、柱痕跡は約20㎝、身舎柱掘形から須恵器甕を転用したとみら

れる硯、土錘などが出土する。

ＳＡ7904　調査区南端で検出した４間の東西柵列である。柱間は3.0ｍ、Ｅ５°Ｎの方向ではあるが、方格地割の区画東西道路の北辺から約10.0ｍに位置し、主要な大型東西建物群の南面約6.0ｍにあることからこれらの南面区画道路からの目隠し的な施設であろうかと考えられる。

ＳＫ7879　先述のＳＫ7878に後出する土坑である。推定規模は径約2.4ｍの不整円形の土坑で、遺構検出面からの深さ約10㎝と浅いものである。土師器杯・高杯脚部、須恵器杯・甕の破片が出土する。

（４）　平安時代前Ⅱ期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物６棟、柵列１条、土坑３基がある。

ＳＢ6679　調査区西隣の第95次調査で検出し、東西×南北各々１間以上の総柱建物と想定されていた建物であるが、今回調査でその延長はみられず、方１間の建物であることが判明した。柱間は桁行2.3ｍ、梁行2.2ｍで棟方向はＥ２°Ｎである。

ＳＢ6915　調査区東隣の第99次調査で検出した桁行３間×梁行２間、身舎の南面に庇を付す建物と想定された。今回調査区内で延長の柱穴を検出し、桁行３間×梁行２間、南面庇を付す建物であり、柱間は桁行1.9ｍ、梁行2.2ｍ、庇出1.9ｍ、棟方向はＮ２°Ｅであることが判明した。

ＳＢ7850　調査区北辺で検出した桁行４間×梁行２間の東西棟建物で、棟方向はＥ７°Ｎである。柱間は桁行2.3ｍ、2.25ｍで東西妻柱と北側柱の一部を第8-8次調査で検出しており、また調査区北西隅は攪乱層により柱掘形も良好な状態では検出されていないが、今回検出した柱掘形は0.8ｍ×1.0ｍと比較的大きく、柱痕跡は径約28㎝で遺構検出面からの深さ約60㎝である。北東隅柱の柱掘形から土錘が出土している。また、南面約2.1ｍに同方向の柵列ＳＡ7866があり、ＳＢ7850に伴ったと推測される。

ＳＢ7890　調査区中央で検出された、桁行７間×梁行４間で身舎の四面に2.2ｍ等間の庇出をもつ四面庇付の東西棟建物である。身舎の柱間は桁行・梁行とも2.1ｍで、棟方向はＥ３°Ｎである。柱掘形は身舎が0.6ｍの方形、庇が0.5ｍの方形、柱痕跡は身舎・庇とも径25㎝～30㎝とほぼ同規模である。北庇がＳＢ7870の南庇と重複する位置に建つもので、ＳＢ7880がＳＢ7890に先行する。この周辺には位置を変えず繰り返し比較的大型の東西棟建物が建て替えられており、小規模な建物が集中するこの一帯で、主要建物の配置される地点であることがうかがえる。

ＳＢ7895　調査区中央で検出した桁行７間×梁行３間の身舎の東・北・西の各面に庇を伴う三面庇の東西棟建物である。身舎の柱間が桁行・梁行とも2.1ｍ、庇出も北・東面は2.1ｍ、西面は2.15ｍとやや広くとる。柱掘形は0.4ｍ～0.6ｍの方形で柱痕跡は20㎝～25㎝である。棟方向はＥ４°Ｎである。身舎・北面柱の柱掘形および柱痕跡から土錘、また北面庇の柱痕跡からは朱付着土器が出土している。

ＳＢ7896　調査区中央で検出した桁行６間×梁行２間、西妻側に庇を伴う東西棟建物である。柱間は桁行2.34ｍ、梁行2.0ｍ、西庇出2.3ｍ、柱掘形は約0.4ｍの方形、柱痕跡は径約20㎝である。棟方向はＥ４°Ｎで柱掘形から緑釉陶器椀片が出土している。

ＳＡ7866　ＳＢ7850の南約2.1ｍにある４間の柵列である。柱間は2.0ｍで、方向もＳＢ7850と同じくＥ７°Ｎで、ＳＢ7850の目隠し塀と思われる。

ＳＫ7857　調査区北辺部で検出した東西約3.5ｍ、遺構検出面からの深さ約53㎝の土坑で、北辺部は調査区外へ続くため規模が不明である。多くの土師器杯・皿・甕・高杯脚部、須恵器甕の破片、緑釉陶器椀片、土錘１個、また製塩土器片が64片と特に多く出土している。

ＳＫ7861　調査区北部にある径約1.8ｍの略円形の土坑で、遺構検出面からの深さが約10㎝である。土師器杯・皿・甕・鍋等の破片、灰釉陶器椀・段皿・瓶口縁片のほか、緑釉陶器椀片が出土した。

ＳＫ7862　調査区北部にある一辺1.5ｍの方形の土坑で、遺構検出面からの深さ約25㎝である。土師器杯・甕破片、灰釉陶器椀・皿片、製塩土器片、土錘、緑釉陶器椀・段皿片が出土している。

（５）　平安時代中期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物３棟、柵列１条がある。

ＳＢ7865　ＳＢ7871の北西隅柱と起点を同じくし、桁行４間×梁行２間で棟方向をＥ４°Ｓとやや南に棟を振る東西棟建物である。柱間は桁行2.0ｍ、梁行2.1ｍで、柱掘形は0.6ｍ×0.8ｍの方形で、柱痕跡は径25㎝～30㎝である。

ＳＢ7893　調査区南端で検出した、桁行３間×梁行２間の東西棟建物である。柱間は桁行1.8ｍ、梁行2.1ｍ、Ｅ５°Ｓと南に棟を振る建物で、柱掘形は0.4ｍ～0.5ｍの方形で、柱痕跡は径20㎝前後である。

ＳＢ7903　調査区東端で検出した桁行３間×梁行２間の東西棟建物である。柱間は桁行1.87ｍ、梁行1.90ｍで、Ｅ７°Ｎの棟方向で、東接する第99次調査検出の柱穴へ続くことが判明した。柱掘形は0.5ｍの方形、柱痕跡は径20㎝～25㎝である。

ＳＡ7889　調査区中央やや南寄りにある３間の東西柵列で、柱間2.4ｍ、Ｅ２°Ｎの方向である。ＳＡ7888の南約4.4ｍに並行しているが、柱筋は通しておらず、同時期の柵列ではないと考えられる。

（６）　平安時代後Ⅰ期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物７棟、土坑２基がある。

ＳＢ7863　調査区北部で検出した桁行４間×梁行２間の東西棟建物である。柱間は桁行2.05ｍ、梁行2.30ｍ、棟方向はＥ５°Ｎである。南側柱の柱掘形から土錘や緑釉陶器椀片、土師器皿・小皿が相重なって出土している。土師器皿・小皿の出土状況からみてこの建物に関わる地鎮を行ったものかと考えられる。

ＳＢ7864　調査区北部、中程で検出した桁行３間×梁行２間の南北棟建物である。柱間は桁行1.5ｍ、梁行2.1ｍ、棟方向はＮ12°Ｗと大きく西に振る建物である。北西隅の柱穴から土師器小皿を中心とした土器が遺構検出面まで相重なって出土した。完形あるいはほぼ完形の、小皿が26点以上、皿が１枚以上、ロクロ土師器小皿２枚が、径22㎝、深さ約24㎝の柱穴に全て上向きで重ねられており、これもＳＢ7863同様、この建物に関わる地鎮を行ったものであろうかと考えられる。

ＳＢ7870　調査区中央やや北寄りに位置する桁行６間×梁行３間、南・西面に庇を伴う二面庇の東西棟建物である。柱間は桁行2.24ｍ、梁行2.25ｍ、南庇出1.8ｍ、西庇出2.3ｍ、棟方向はＥ３°Ｎである。柱掘形は0.4ｍ×0.5ｍの方形で、柱痕跡は径20㎝～25㎝である。身舎の柱掘形から製塩土器片、土錘、南面庇柱掘形から緑釉陶器椀口縁片、柱痕跡か

ら土錘が出土している。

ＳＢ7871　ＳＢ7864に重複し、棟方向を直交して建つ桁行３間×梁行２間の東西棟建物である。柱間は桁行2.37ｍ、梁行2.20ｍで、Ｅ12°Ｎの棟方向だが、先のＳＢ7864とは柱掘形が0.5ｍ～0.6ｍの方形をしていることからも時期を隔てて建てられているものと思われる。東妻柱の柱掘形から緑釉陶器が出土している。

ＳＢ7872　調査区西半中央で検出した桁行２間×梁行１間の東西棟建物である。Ｅ４°Ｎの棟方向で、柱間は桁行2.0ｍ、梁行3.0ｍ、柱掘形は0.5ｍ×0.65ｍの方形で、柱痕跡は径20㎝である。南東隅の柱掘形から土錘が出土している。

ＳＢ7897　調査区東端で検出した桁行６間×梁行２間の南北棟建物の北面・南面に庇を有するものである。柱間は桁行・梁行、南北の庇出も2.1ｍ等間で、Ｎ５°Ｗの棟方向である。柱掘形は身舎・庇ともに0.45ｍ方形、柱痕跡は径15㎝～20㎝である。

ＳＢ7898　調査区東端中央に位置する桁行２間×梁行２間の総柱建物である。柱間は桁行2.2ｍ、梁行2.1ｍ、棟方向はＥ３°Ｎで、柱掘形は約0.5ｍの略方形、柱痕跡は径約20㎝である。

ＳＫ7874　調査区中央やや西寄りにある東西2.0ｍ、南北1.2ｍの楕円形の土坑で、遺構検出面からの深さ約50㎝である。土師器皿・小皿、灰釉陶器椀・瓶破片、緑釉陶器片が出土している。

ＳＫ7899　調査区東端で検出した、径約2.0ｍの不整円形の土坑で、遺構検出面からの深さ約20㎝である。東隣のＳＤ6919の西延長末端に位置する。ロクロ土師器皿、灰釉陶器椀片、製塩土器片が出土する。

（７）　平安時代後Ⅱ期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物３棟、土坑４基がある。

ＳＢ6914　調査区東隣の第99次調査で検出した桁行４間以上×梁行２間の東西棟建物と想定されており、今回調査で桁行５間×梁行２間で完結する建物であることが判明した。柱間は桁行2.05ｍ、梁行2.0ｍ、棟方向Ｅ４°Ｎである。

ＳＢ7886　ＳＢ7885に重複して建つ桁行３間×梁行２間の南北棟総柱建物である。柱間は桁行・梁行とも2.25ｍ等間、柱掘形は0.4ｍの方形、柱痕跡は径約18㎝で、棟方向はＮ３°Ｗである。柱掘形から灰釉陶器の三足盤の脚部が一点のみであるが出土している。

ＳＢ7894　調査区中央やや南寄りで検出した桁行４間×梁行２間の東西棟建物である。柱間は桁行2.15ｍ、梁行2.20ｍ、Ｅ５°Ｎの棟方向である。調査区北寄りで検出のＳＢ7863の南約8.5ｍに妻柱筋を１間東へずらして並立する。

ＳＫ7859　調査区北東部にある東西1.8ｍ、南北2.4ｍの長楕円形の土坑で、遺構検出面からの深さが約10㎝である。土師器小皿、ロクロ土師器小皿、灰釉陶器片、製塩土器片が出土している。

ＳＫ7867　調査区西端で検出した東西1.2ｍ、南北1.5ｍのやや南北に長い土坑で、遺構検出面からの深さ約60㎝である。この土坑からもほぼ完形の土師器皿・小皿が重なって出土した。このほか緑釉陶器片も出土している。

ＳＫ7877　調査区中央部の畦東側で検出の土坑で、南北約1.5ｍ、遺構検出面からの深さ約28㎝である。土師器皿・小皿・台杯皿、製塩土器、土錘、緑釉陶器椀片が出土した。

ＳＫ7883　一辺約0.8ｍの方形の土坑である。上面に拳大の石を用いた石組みがあり、土師器

皿・小皿、ロクロ土師器片、灰釉陶器椀片が出土した。

（８）　平安時代後期の遺構

後Ⅰ期・Ⅱ期の断定がしがたい遺構には、柵列１条、土坑２基がある。

ＳＡ7888　調査区中央でＳＢ6674の北妻の東延長約3.0ｍにある５間の東西柵列である。柱間は2.10ｍで、Ｅ２°Ｎの方向である。柱掘形は約0.4ｍの方形で、柱痕跡は径20㎝、ＳＢ6674・6675・6676・6678に直交する方向で延びる柵列である。

ＳＫ7856　調査区北部にある土坑で、東西1.6ｍ、南北1.2ｍ、遺構検出面からの深さ約24㎝である。土師器皿片のほか白磁椀の玉縁口縁破片が出土した。

ＳＫ7858　調査区北東部にある、第8-8次調査検出の土坑の南延長を検出したものである。東西2.2ｍ、南北1.8ｍ、遺構検出面からの深さ約20㎝で、土師器皿・小皿・甕、緑釉陶器、玉縁口縁片を含む白磁椀片が出土した。

（９）　平安時代末期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物12棟、土坑８基、溝５条がある。

ＳＢ6674　調査区西隣の第95次調査で柵列として検出した南北５間の柱列であったが、今回調査でこの柱列に対応する柱列を検出し、桁行５間×梁行３間の南北棟の総柱建物であることがわかった。柱間桁行2.14ｍ、梁行1.80ｍ、棟方向はＮ２°Ｗである。

ＳＢ6675　第95次調査で検出した、桁行４間×梁行１間以上の南北棟建物の梁行を今回の調査で２間であることを確認した。柱間は桁行2.03ｍ、梁行2.10ｍで、棟方向はＮ２°Ｗである。

ＳＢ6676　第95次調査では桁行２間以上×梁行２間の東西棟建物とされたが、今回調査の対応柱穴から想定して桁行５間×梁行３間の南北棟建物であろうと考えられる。柱間は桁行2.1ｍ、梁行1.84ｍ、棟方向Ｎ２°Ｗである。

ＳＢ6677　第95次調査で検出した桁行３間×梁行２間以上の南北棟建物と想定されたもので、今回の調査区内でさらなる延長の柱穴は認められず、当初検出の桁行３間×梁行２間、柱間は桁行2.1ｍ、梁行2.0ｍ、Ｎ３°Ｗの棟方向の南北棟建物であることが確認された。

ＳＢ6678　第95次調査で桁行１間以上×梁行２間の東西棟建物と想定されたが、今回調査で延長の柱穴を検出した結果、桁行２間×梁行２間の総柱建物で、柱間は桁行2.1ｍ、梁行2.0ｍ、棟方向Ｎ２°Ｗの南北棟建物であることが判明した。

ＳＢ6860　調査区東隣の第99次調査で検出した桁行２間以上の南北棟建物と想定されたもので、今回の調査で桁行３間×梁行２間、柱間が桁行2.0ｍ、梁行2.4ｍ、棟方向がＮ１°Ｗの南北棟建物であることが確認された。

ＳＢ6861　第99次調査で桁行２間以上×梁行１間以上の南北棟建物であると想定されたもので、今回調査で桁行３間×梁行３間、柱間桁行2.17ｍ、梁行1.83ｍ、Ｎ８°Ｗの棟方向をもつ南北棟建物であることが判明した。

ＳＢ6873　第99次調査で桁行２間以上×梁行１間以上の南北棟建物であると想定されたもので、今回の調査により桁行３間×梁行３間、柱間桁行2.2ｍ、梁行2.0ｍ、Ｅ５°Ｎの棟方向の東西棟建物と考えられる。

ＳＢ6874　第99次調査で検出した桁行４間×梁行１間以上と想定された南北棟建物であるが、今回の調査で桁行４間×梁行２間の南北棟建物で、柱間は桁行2.15ｍ、梁行2.05ｍ、棟方向はＮ４°Ｗの南北棟建物であることが確認された。

ＳＢ6908・6913　いずれも第99次調査で西への延長が想定された建物であるが、今回調査区内での延長柱穴は検出されず、第99次調査区内で完結する建物であると考えられる。ＳＢ6908は北面庇を伴う桁行３間×梁行２間の東西棟建物、ＳＢ6913は桁行３間×梁行２間の南北棟建物である。

ＳＢ7892　調査区南西隅で検出した桁行３間×梁行３間の東西棟建物で、西妻は第95次調査で検出されていた柱穴へ続くことが判明した。柱間は桁行2.2ｍ、梁行2.1ｍ、棟方向はＥ３°Ｎである。

ＳＫ0247　調査区北部で検出した検出幅1.1ｍ、南北3.5ｍの長楕円形の土坑である。北半部は第8-8次で検出されており、遺構検出面からの深さが約28㎝で、今回調査区で検出した南半部から多くの土師器皿・小皿片のほか、青磁片、玉縁口縁部破片を含む白磁片、緑釉陶器椀片、山茶椀が出土している。

ＳＫ0248　調査区北部で検出した東西2.4ｍ、南北2.0ｍの不整形土坑である。第8-8次調査でほぼ全体を検出しており、今回調査区内への延長は認められなかった。

ＳＫ0249　調査区北部で検出した東西2.4ｍ、南北2.3ｍの方形土坑である。先のＳＫ0248同様、全体を第8-8次調査で検出している。

ＳＫ6659　調査区北西隅で検出した2.8ｍ×2.3ｍの略方形の土坑である。第95次調査検出の東半部延長を検出したものである。調査区北西隅は攪乱を受けているため検出面からの深さ約8.0㎝と浅い土坑である。土師器皿・小皿片のほか、青磁片、朱が付着した土師器皿が出土した。

ＳＫ6667　調査区西端で、第95次調査検出土坑の延長を検出したもので、径約1.4ｍの不整形土坑で、土師器皿・小皿の破片が多く出土した。

ＳＫ7851　調査区北西隅で検出した南北2.5ｍ、東西2.0ｍの長楕円形の土坑である。第8-8次調査時に北半分を検出したもので、今回の調査で南半部延長を検出したものである。遺構検出面からの深さ約10㎝で、ロクロ土師器小皿、土錘が出土している。

ＳＫ7853　調査区北西部で検出の土坑で、北辺及び東辺が攪乱等のため全体の規模が不明であるが、遺構検出面からの深さ約10㎝の土坑である。土師器皿・小皿・甕・器台脚部、土錘、白磁片などが出土した。

ＳＫ7873　調査区中央やや西寄りにある約1.8ｍ略方形の土坑で、遺構検出面からの深さは約80㎝で、底部に向けてすり鉢状に深くなっているものである。土師器皿・小皿片、ロクロ土師器皿片が出土している。

ＳＤ7876　ＳＤ7869に重複する幅1.2ｍ、長さ約4.0ｍの南北溝である。ＳＤ7869に先行し、山茶椀の転用硯、白磁片などが出土した。

ＳＤ6882　第99次調査からの延長で、ＳＢ6915の北西隅柱の辺りで止まるものである。土師器皿破片が出土した。

ＳＤ6919　同じく第99次調査から延長してくる溝で土坑ＳＫ7899と重複する辺りで止まる。土師器小皿片が出土する。

ＳＤ7852　調査区北端で検出した南北溝で、溝幅約0.5ｍ、遺構検出面からの深さは約0.2ｍで、北下がりの勾配をとる。土師器片のほか、緑釉陶器椀高台片と土錘２個が出土した。

ＳＤ7869　調査区西端の第95次調査から延長してくる南北溝で、幅70㎝、北から南へ向けて下がる勾配をとる。土師器皿・小皿、ロクロ土師器皿・小皿、山茶椀のほか、緑釉陶器

椀片、漆付着の山茶椀、山茶椀の転用硯、青磁・白磁片などが出土した。

(10)　鎌倉時代の遺構

この時期の遺構には、土坑１基、溝１条がある。

ＳＫ7868　調査区西端で検出した東西3.3ｍ、南北2.3ｍの不整形土坑で、遺構検出面からの深さ約10cmである。土師器皿・小皿片で整理箱６箱分の多くの土器が出土し、これらの土師器小皿が重なって出土する土器の間から朱が下側の土器の底部に付着する形で出土した。小皿内面に付着していた朱が剥離したものと見られる。このほか朱が付着する土師器小皿、漆が付着する山茶椀片などが出土している。

ＳＤ7884　調査区西隣の第95次調査区東南部から延長してくる溝で、今回調査区の中央付近でほぼ真東に向きを変え、調査区西端約1.5ｍで直角に北へ向かい、ＳＫ7883との重複部分で止まる。幅は約20cm、南西へ向けての勾配をとる溝である。

(11)　時期不明の遺構

時期不明の遺構には、掘立柱建物１棟がある。

ＳＢ7854　調査区北辺で第8-8次調査区で南側柱のみ検出した桁行５間の東西棟建物である。柱間は2.1ｍ等間で、棟方向はＥ３°Ｎである。柱痕跡については不明である。

３　遺　　物

今回の調査では、全体的に平安時代後期以降の土師器を中心とした土器が、調査区北西隅から大量に出土した。主に土坑から出土した土器が多いが、調査区北部を中心に柱穴が多く、中には土師器皿を多数埋めてある柱穴もある。建物の地鎮に関わると思われるこれらの遺構が点在するのもこの地区の特徴である。遺物整理箱で約229箱ある遺物のうち、土坑出土の土器を中心に概述する。

（１）奈良時代中期の遺物

ＳＢ7891土師器　(1)は東壁のカマド周辺で出土したもので、推定口径20.4cm、器高3.0cm、底部をヘラケズリ、口縁部をヨコナデ、内面をナデ調整する。

ＳＢ7905土師器　(2)の杯のみ東壁カマド南側のピットから出土したもので、(3～5)の甕・長胴甕は東壁カマドから出土したものである。

(3)はカマド中央部で倒立しており、置台と考えられる。口径16.8cm、器高16.4cm、胴部最大径17.0cmでほぼ完形である。口縁部をヨコナデ、外面はタテハケ、内面は上半をヨコハケ、下半を底部から上方へのヘラケズリで調整する。(4)は(3)の周辺から破片で出土したもので、口径24.4cmである。口縁部をヨコナデ、外面をタテハケ、内面上半はヨコハケ、下半は縦方向のヘラケズリである。(5)も同じく(3)の周辺から破片で出土した長胴甕口縁部で、推定口径24.6cmである。口縁外面部ヨコナデ、外面はタテハケ、口縁内面ヨコハケ、内面は横方向のヘラケズリ調整である。

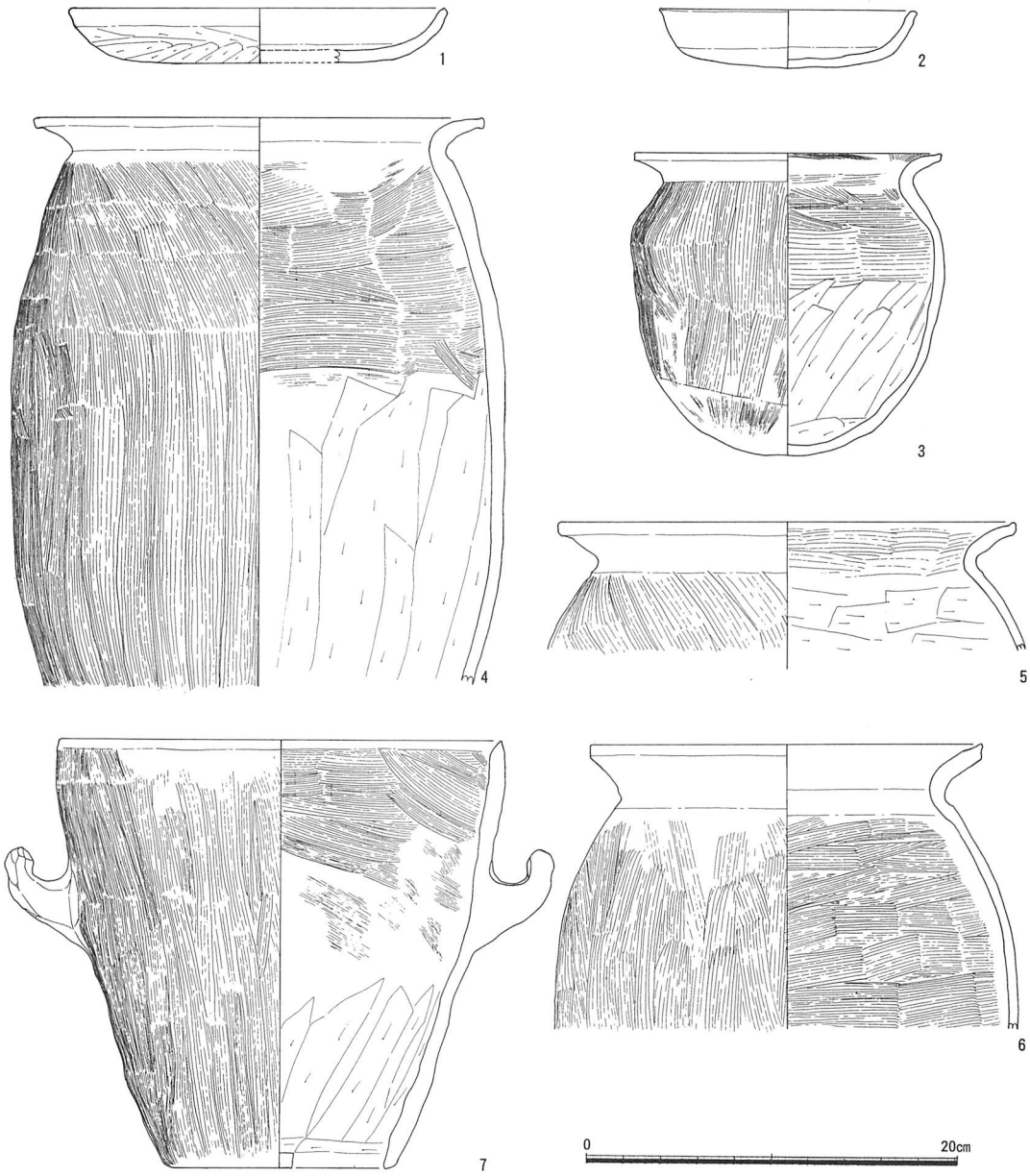
ＳＢ7882土師器　(6・7)はＳＢ7882南東隅から出土したものである。

(6)は長胴甕で口径21.3cmである。口縁部をヨコナデ、外面はタテハケ、内面はヨコハケで調整する。(7)の甑は口径24.0cm、器高23.5cm、底部径11.6cm、口縁端部はヨコナデ、外面はタテハケ、内面は上半をヨコハケ、下半を縦方向のヘラケズリで調整し、底部から口縁部に向けて直線的に開く形状である。底部は残存部が少なく、半円の孔をもつものと推定される。

（２）平安時代初期の遺物

ＳＫ7887土師器　杯には外反する口縁をもち、口縁端部のみやや内弯する(8～12)と、底径が小さく、底部から外方にまっすぐのびる口縁をもつ(13～17)とがある。(11)は外面底部をヘラケズリ後ナデ、また(16)は底部外面をヘラケズリするほかは口縁部をヨコナデ、底部をオサエ後ナデを施すｅ手法で調整するものである。(11)の口縁外面立ち上がり部分には「⋔」のヘラ描き記号、(13)の内面見込みにはヘラ描きで一本線の線刻がある。また(16)の内面には左放射暗文１段が施される。(17)の底部外面に墨痕と習書がみられるが判読はできない。

皿も杯と同様の二種類があり、平坦な底部に外反する口縁部をもち口縁端部のみ弱



第５図　第118次調査　遺物実測図　SB7891：1　SB7905：2～5　SB7882：6・7

く内弯する(18～21)と、口縁と底部の境が不明瞭で断面が弓状に立ち上がる(22～24)とがある。いずれも口縁部をヨコナデ、底部をオサエ後ナデ調整するｅ手法である。(20)の底部外面にはヘラ描き記号があり、1/2しか残存しないため下半を欠損するが、杯(11)のような「⋔」記号であった可能性も考えられる。また(24)の底部外面には墨書があり、「六」と判読される。

(25)は甕で、口径16.2cmである。口縁部はヨコナデ、外面はタテハケ、内面はヨコハケで調整する。(26)は類例をみない甕で、推定口径22.2cm、推定径30.0cmの鍔を口縁端部直下に有する。(27・28)は鍋で、(27)は口径20.0cm、器高9.4cm、口縁部をヨコナデし、外面はタテハケ、底部と内面は横方向のヘラケズリで調整する。丸底で底部外面に二次焼成のための赤変箇所がある。(28)は口径23.6cm、器高10.6cm、底径7.0cmと(27)よりひと回り大きく、ほぼ完形である。口縁部をヨコナデし、外面上半はタテハケ、下半から底部にかけてはヘラケズリ、内面はヨコハケを施した後ナデ調整する平底の鍋である。

（３）平安時代前Ⅱ期の遺物

ＳＫ7857　(29～43)の土器のほか、緑釉陶器椀1片と土錘１個、そして製塩土器64片が出土した土坑で、製塩土器片は比較的大きめの破片である。

土師器　外反する口縁部の端部のみ弱く内弯する(29～32)の杯と、底部と口縁の境が明瞭でなく断面が弓状になる(36～41)の杯があり、いずれも口縁部をヨコナデ、底部をオサエ後ナデ調整するｅ手法で調整する。杯は(29～31)の口径13.2cm～14.2cmのもの、(32)の口径16.0cmのものとがある。(40)の内面には左放射暗文が１段と、底部内面に螺旋暗文が２段以上が施されているものとみられる。

皿(33～35)は底部が平坦で、口縁が外反する。いずれも口縁部はヨコナデ、底部をオサエ後ナデ調整するｅ手法である。口径は15.6cm～16.6cmである。

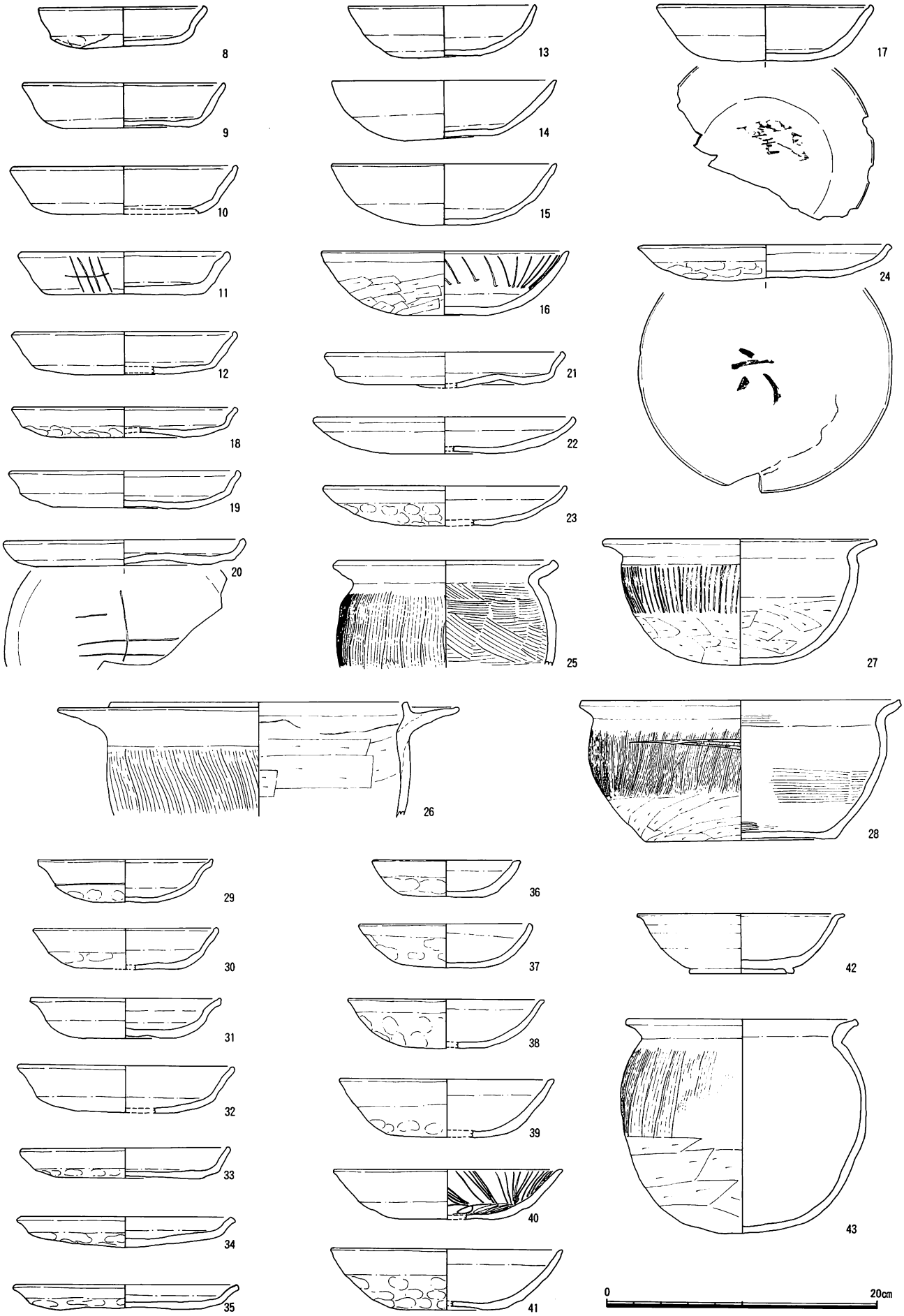
甕(43)は土坑底部で正立した状態で出土したもので、口径17.0cm、器高16.1cm、胴部最大径18.2cmである。口縁部はヨコナデ、外面は粗いタテハケメ、下半は横方向のヘラケズリ、内面はナデ調整する。底部の一部が剥離する箇所があるが完形である。

灰釉陶器　(42)の椀は口径15.2cm、器高4.5cm、高台径7.6cm、約1/2残存し灰釉は刷毛塗りとみられる。

（４）平安時代後Ⅰ期の遺物

ＳＢ7864土師器　ＳＢ7864南西隅の柱穴から小皿26点以上、皿１点、ロクロ土師器小皿２点出土したものである。小皿(44～57)は口径8.2cm～9.4cm、器高1.4cm～1.9cmとほぼ同寸大で柱穴内に上向きに重なっていた。いずれも口縁端部のみヨコナデし、内外面はオサエ後ナデ調整され、断面が弓状となる。(58)の皿は口径15.6cm、器高3.3cm、口縁端部のみヨコナデ、底部はオサエ後ナデ調整する。この皿のみ小皿の脇に立てかける形で出土したものである。

ＳＢ7863土師器　(59～64)の小皿と(65・66)の皿もＳＢ7863の南面庇の柱掘形から出土したものである。(59～64)の小皿は、口径8.6cm～9.5cm、器高1.6cm～2.0cmでほぼ同寸大であるが、ＳＢ7864出土の小皿ほど丁寧に重ねられてはおらず、数量的には多いものの、比較的無秩序に様々な向きで出土したものである。いずれも口縁端部のみヨコナデし、断面弓状のものである。(65・66)は口径13.6cmと14.6cm、器高は3.1cmと3.7cm、口縁端部の



第６図　第118次調査　遺物実測図　SK7887：8～28　SK7857：29～43

みヨコナデし、底部をオサエ後ナデ調整する。

(5)平安時代後Ⅱ期の遺物

ＳＫ7877土師器　(67～71)のほかは一部が欠損するものばかりであるが、数量的には多く出土する。(67～69)は小皿で、口径9.6cm～10.2cm、器高2.2cm～2.4cmである。口縁端部のみヨコナデし、断面弓状になる。(71)は台付小皿で口径10.1cm、器高3.2cm、高台径5.9cmである。

ロクロ土師器　(70)の小皿は口径10.0cm、器高1.6cmである。底部に糸切り痕を残す。このほか口縁部を欠損するが糸切り痕を残す底部破片が出土している。

ＳＫ7867土師器　(72～77)の皿は口径13.0cm～14.6cm、器高2.3cm～3.0cm、口縁端部のみヨコナデし、底部をオサエ後ナデで調整する。(78～81)の小皿は口径7.8cm～8.1cm、器高1.0cm～1.7cm、断面が弓状のものである。土坑底部にまとまって出土したもので、これらのほかに緑釉陶器椀片・青磁片が出土した。

(6)平安時代末期の遺物

ＳＫ7853土師器　(82～84)の小皿は口径8.6cm～8.8cm、器高1.4cm～1.6cm、断面が弓状のものである。(85)の皿は口径14.8cm、器高3.3cmで口縁端部のみヨコナデし、底部は強いオサエ後荒いナデを施す。

山茶椀　(86)の椀は推定口径15.2cm、器高5.6cm、推定高台径7.2cmで底部には糸切り後荒いナデを施す。

ＳＫ7873土師器　(87～90)の小皿は8.0cm～8.6cm、器高1.3cm～1.5cmの断面弓状のものである。(92)はコースター形皿で口径8.6cm、器高1.4cmである。約1/2残存し、微細な雲母片を含み、比較的丁寧なオサエ後ナデで調整される。(93・94)の皿は口径13.6cm～15.8cm、器高2.7cm～3.0cmで、(94)の皿は口縁端部を斜め上方につまみ上げる。

ロクロ土師器　(91)の小皿は口径9.2cm、器高1.8cm、底部外面に糸切り痕を残す。

山茶椀類　(95)は小皿で口径9.6cm、器高2.6cm、高台径4.3cmでロクロ回転は右回りである。(96)の椀は口径16.6cm、器高5.4cm、高台径6.8cm、高台に籾殻痕を残す。

ＳＫ0247　土師器を中心に出土し、土錘、緑釉陶器椀片、青磁・白磁片が出土する。

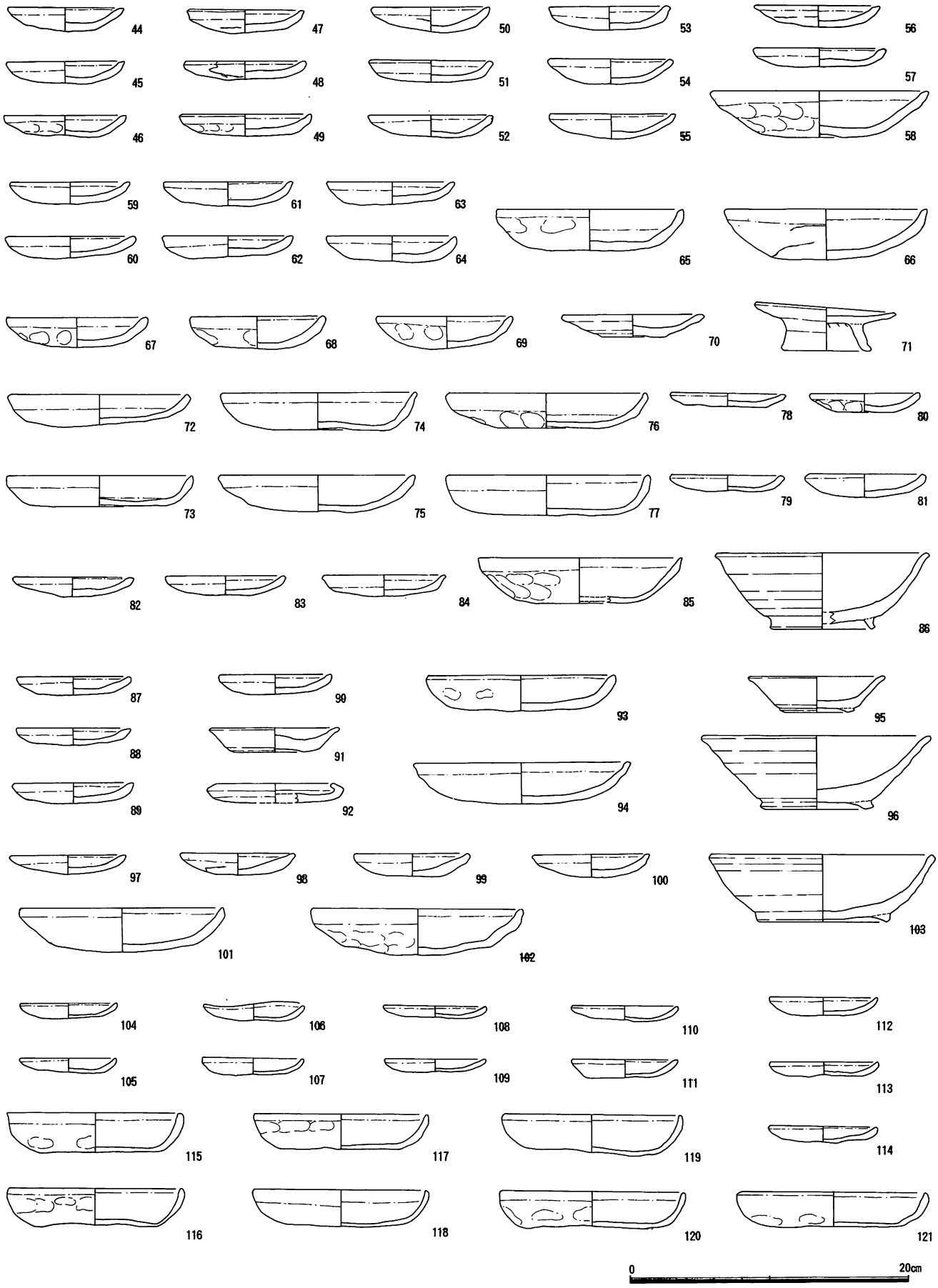
土師器　(97～100)は小皿で、口径8.2cm～8.4cm、器高1.4cm～1.8cm、口縁端部が特に肥厚する。(101・102)の皿は口縁端部のみ真っ直ぐ上方に引き上げ、口径14.8cm～15.2cm、器高3.2cm～3.4cmのもので(102)は指オサエの跡を明瞭に残す。

山茶椀　(103)は口径16.2cm、器高4.9cm、高台径9.2cmの椀で、底部外面はヘラ切り後未調整である。

(7)鎌倉時代の遺物

ＳＫ7868土師器　(104～114)の小皿は口径7.0cm～7.8cm、器高1.0cm～1.4cmで断面弓状のものである。この土坑からは多くの小皿が重なって出土し、小皿と小皿の間からは朱の剥離片がみられた。(114～121)の皿は口径12.2cm～13.2cm、器高2.6cm～3.0cm、口縁端部のみヨコナデし、底部は厚みが薄くオサエ後ナデ調整する。完形で出土するものは少ないが、量的には小皿とほぼ同量出土している。

この他に、緑釉陶器、朱付着土器、漆付着土器が出土した。



第７図　第118次調査　遺物実測図　SB7864：44～58　SB7863：59～66　SK7877：67～71　SK7867：72～81
SK7853：82～86　SK7873：87～96　SK0247：97～103　SK7868：104～121

(8)その他の遺物

ヘラ描き土器　(122)はＳＢ7900出土の土師器蓋で、推定口径20.1cm、器高3.2cm、口縁部ヨコナデ、内外面は横方向のミガキ、つまみは口径からの中心をやや右にずらした位置につけられる。天井部に三本線のヘラ描き記号「≥」がある。

灰釉陶器三足盤　(123)はＳＢ7886出土の三足盤の脚部である。残存高は2.5cm、推定口径は16.0cm前後になるものと考えられる。

ＳＸ7860 高杯　(124)の土師器高杯は、(125)の杯に杯部を被せる状態で出土したもので、口径25.4cm、器高8.8cm、脚径13.8cmである。口縁部はヨコナデ、外面はケズリ、脚部接合部から脚部にかけてタテハケ、脚端部はヨコナデ、杯部内面はナデ調整する。口縁部は完形で、脚部は約1/2のみ残存する。

杯 和銅開珎　(125)の土師器杯は口径19.2cm、器高4.8cm、口縁部はヨコナデ、外面はオサエ後ナデ、内面はナデ調整される。底部内面に「和同開珎」５枚(126～130)がすべて背面を上にして入れられていた。「和同開珎」の大きさはすべて径2.55cm、方孔0.75cm×0.75cm、縁幅0.2cmで、(126)は中央の方孔隅部がわずかに欠損するがほぼ完存する。(127)は欠損はみられず良好な状態で残存する。(128)が最も腐食・破損がひどく半分が粉砕する。(129)も良好な形で残存するが、方孔脇に小穴がみられる。(130)は縁の一部を欠損、また方孔の脇に小穴がみられる。銅銭の重量は(126)が1.31ｇ、(127)が1.22ｇ、(129)は1.42ｇ、(130)は1.49ｇ、(128)は粉状に破損しているため計測不可能であった。銅銭背面は５枚とも無地であった。なお、この銅銭には繊維の付着痕跡がみられ、(付編１「第118次調査出土和銅開珎付着物の分析」参照)、杯に直接入れられたものではなく布を敷いて、あるいは袋状のものに入れられて杯に納められたものと考えられる。また、この杯の外面底部にはヘラ描きの記号・「丁」がある。記号とも考えられるが、「丁」と判読することも可能である。

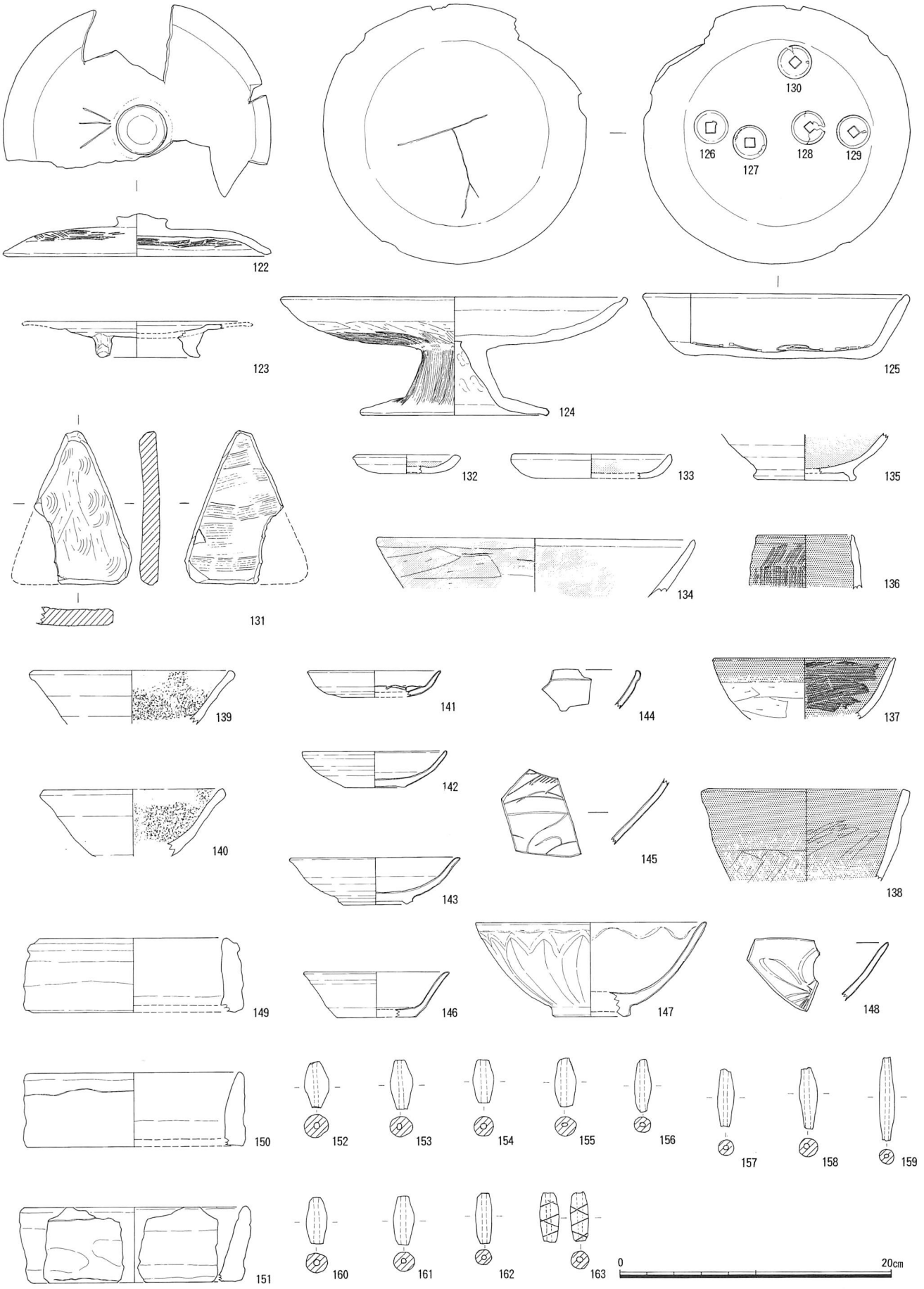
朱付着土器　調査区中央部の遺構上面、ＳＢ7890・7895からの出土が注目され、掲載の４点を含む11点が出土した。

(132)はＳＢ7890出土の土師器皿で内面に朱が付着している。口径7.4cm、器高1.4cmの小皿である。(133)はＳＫ6659出土の土師器皿内面に朱付着の痕跡がみられる。(134)は土師器鉢とみられる口縁破片で、口縁内外面とも朱の付着痕跡が認められる。(135)は灰釉陶器椀の内面を朱墨の転用硯として使用したものである。高台径6.8cm、残存高3.6cm、残存する内面一面に朱墨の擦痕がみられる。

漆付着土器　掲載の２点のほかは調査区南半の遺構上面から出土し、掲載の２点を含む６点が出土している。遺構上面からの出土であるが、灰釉陶器あるいは山茶椀への付着例が多いが、土師器杯への付着もみられる。

(139)はＳＫ7868出土の山茶椀口縁破片で、口縁内壁に漆膜が付着する。推定口径14.7cmである。(140)も同じく山茶椀口縁破片でＳＤ7869で出土した。推定口径13.4cmで口縁内壁に漆膜が付着する。

黒色土器　(136)は鉢の口縁部破片である。推定口径7.0cm、残存高3.8cmで口縁内外面ヨコナデ、外面を縦方向のヘラガキを施す。内外面とも黒化処理を施す。(137)は黒色土器Ａ類の椀口縁破片で、推定口径13.4cm、残存高4.6cm、口縁端部はヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面は横方向のヘラミガキを施す。(138)はＳＫ7879出土の鉢かと思われる口縁



第８図　第118次調査遺物実測図　ヘラ描き土器：122　灰釉陶器三足盤：123　ＳＸ7860出土遺物：124～130
須恵器転用硯：131　朱付着土器：132～135　黒色土器：136～138
漆付着土器：139・140　青磁・白磁：141～148　製塩土器：149～151　土錘：152～163

破片で、口径14.4cm、残存高6.9cmである。口縁端部をヨコナデ、内外面をヘラケズリ調整する。内外面とも黒化処理が施される。

青磁・白磁　青磁・白磁の出土は多く、青磁片68点、白磁片94点と特に白磁の出土数が目立つ。白磁片の中には玉縁口縁破片は26点含まれる。(141～145)は白磁片である。(141)は口径9.8cm、器高2.0cmの小皿で、見込みに陰刻文がみられるが底部を欠損する。内外面とも乳白色の施釉がみられ、胎土は灰白色である。(142)の小皿は口径10.8cm、器高2.7cm、底径4.4cmで約1/2残存する。底部は露胎で、ほかは内外面とも均質に施釉される。(143)の皿は口径12.6cm、器高3.5cm、高台径4.8cmで、高台内面のみ露胎で底部以外全面に均質に施釉される。(144)は玉縁口縁の破片で、内外面に均質に施釉されている。(145)は椀の体部破片であると思われ、内面に陰刻で花文が描かれる。内外面ともに均質な白色の施釉がなされる。

(146～148)は青磁の破片である。(146)は皿で口径10.6cm、器高3.4cm、底径4.0cmである。底部は露胎で、ほかは均質に灰緑色の施釉がなされる。(147)は椀で口径17.2cm、器高7.0cm、高台径4.8cmである。全面に暗灰緑色の施釉がなされる。(148)は椀口縁破片で残存高5.2cmである。内面に陰刻の花文がみられる。

製塩土器　調査区北辺で破片が集中して出土しており、特にＳＫ7857で64点、ＳＫ7861で29点の集中した出土が見られた。(149)は口径14.0cm、器高5.5cmのものである。胎土が粗く砂粒を多く含む。(150・151)はＳＫ7857出土のものである。(150)は残存状況が良好で、口径15.6cm、器高5.5cm、胎土は砂粒を多く含む。(151)は推定口径16.6cm、器高5.7cmのもので、胎土には同じく砂粒を多く含む。

土錘　調査区北半に集中し、総計162点出土した。多くは柱穴からの出土であり、ＳＢ7890の柱掘形からは４点出土する。また各々１点ずつではあるが、ＳＢ7890周辺で頻繁に建替えが行われる大型東西棟建物の柱穴からも出土がみられる。算盤玉状のもの(152～155･160･161)、筒状のもの(156～158･162･163)、細長いもの(159)の３タイプがみられるが、算盤玉状のものが圧倒多数で、細長いものは少ない。(153･155･157～159･161･163)は磨滅した面がみられる。また(163)は包含層出土であるが外面に網目状の線刻がみられる。

緑釉陶器　調査区内での緑釉陶器の出土は、実測可能な破片が少なく小破片ばかりであるが、総計74点が出土した。主として椀類の破片であるが、ＳＫ7862では段皿口縁破片を含む12点、ＳＢ0250の柱掘形からは瓶類の口縁破片を含む４片が出土している。

円面硯・転用硯　ＳＢ7875の柱掘形から灰釉陶器の円面硯小破片が出土したほか、ＳＫ7876・ＳＤ7869から山茶椀の転用硯が各１点ずつ、またＳＢ8900からは須恵器の転用硯が１点の総計４点の出土があった。

須恵器転用硯　(131)は須恵器甕の体部破片で、甕内面を硯として転用した硯と思われる。推定底辺9.0cm、全長11.4cmの二等辺三角形状で、端部の成形は丁寧に行っていないものの、角はかなり丸みを帯びているので、粗略な成形は行ったものとみられる。同心円状のタタキメの面に墨の擦痕がみられる。外面は平行タタキメが残るが、残存状況が悪い。

習書土器　ＳＢ7890の柱掘形から土錘、緑釉陶器片とともに底部に筆揃えの跡と習書とみられる墨書がある土師器皿の破片が１点出土する。墨書の判読は不可能である。

4　まとめ

今回の調査によって、東西両側の調査からでは予想できなかった宮ノ前南ブロック南東部の奈良時代から平安時代前半期の遺構の推移がたどれるようになった。しかし平安時代後期以降の遺構の集中は今回調査区内でも顕著にみられ、さらに現況の畑表土から遺構検出面までの深さが約30cm足らずと非常に浅かったために受けた攪乱も少なくはなかった。その中で検出された建物の地鎮に関わるとみられる遺構について、また周辺調査区ではみられなかった大型の掘立柱建物と方格地割の区画道路との位置関係について若干概述しておきたい。

ＳＸ7860と周辺の地鎮遺構

これまで東西両隣の調査において、平安時代中期の地鎮遺構と思われる土坑内の土師器壺＋「延喜通寶」銭＋土師器杯のセットが出土しており、このことからこの２地点を一辺としてこれに直交する辺あるいは対辺の両端に同様の遺構が存在することなどが指摘されていた。今回のＳＸ7860は前２例よりもかなり遡るもので銅銭の外容器の共通性もない。しかし前２例を結ぶライン上にこのＳＸ7860ものるもので、このラインの方向が方格地割の区画道路の向きＥ４°Ｎに揃ってくるということからも、奈良時代後期に整備されたと考えられている方格地割の区画内には入らない当該地区ではあるが、大型掘立柱建物等の遺構は区画に対応して整えられたものと考えることができ、さらに宮ノ前南ブロック南東隅、当初段階の方格地割からすれば北西(戌亥)隅のこの場所が個別の建物でなく、方格地割の地鎮に関わる区域であった可能性も考えられる。

大型掘立柱建物と方格地割

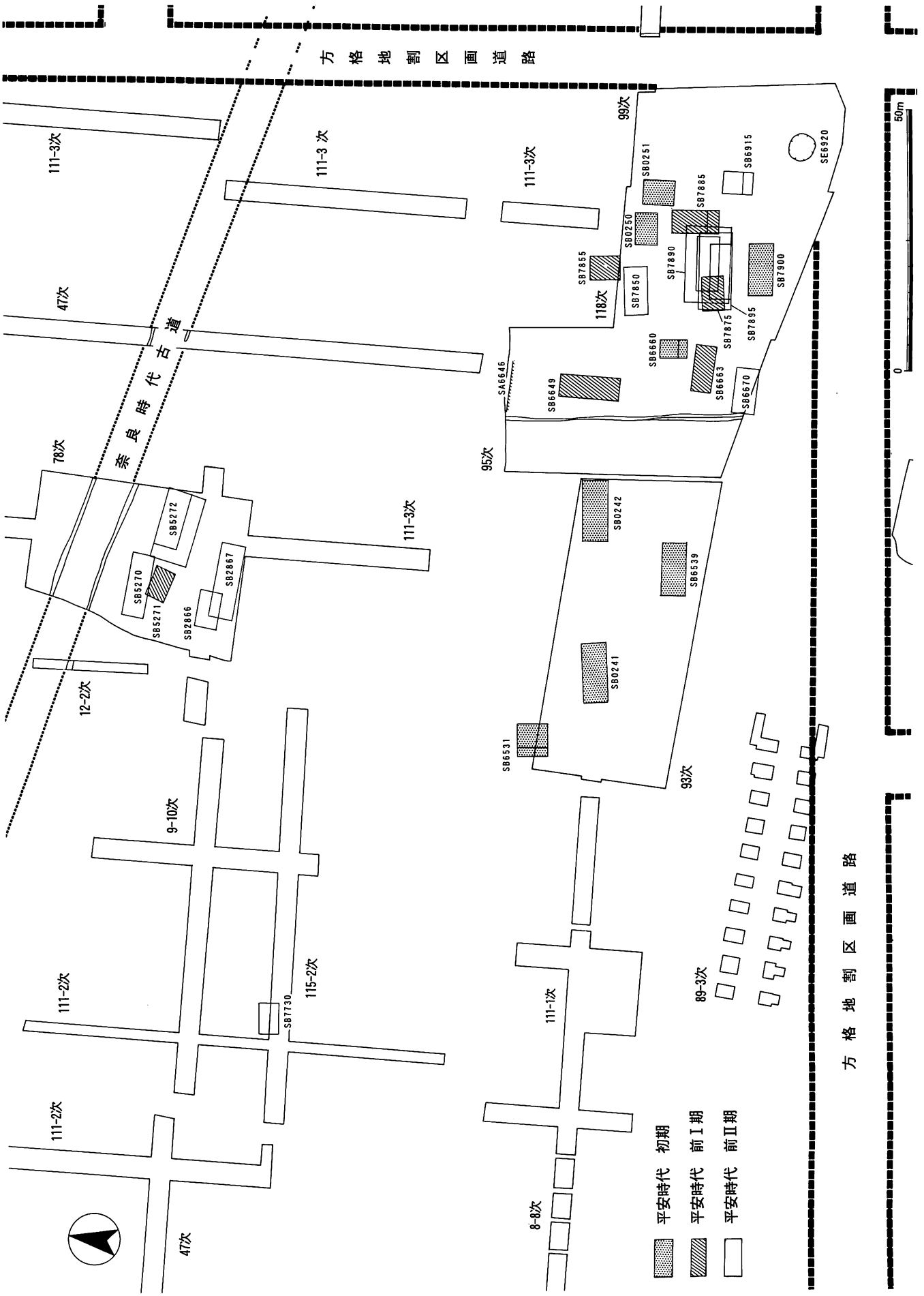
ＳＢ7880をはじめ、ＳＢ7890→7896→7895→7870とほぼ同じ場所で繰り返し建て替えられる東西棟の庇をもつ大型掘立柱建物と方格地割との位置関係をみると、これらの大型の東西棟建物は区画道路の南北道路西側溝から約20ｍ、東西道路北側溝推定延長線から約15ｍの距離をおいて建てられており、この距離に固執した規格性がうかがわれる。この一帯の中心的建物として建て替えが繰り返し行われたと推測される大型の東西棟建物であるが、時期別にみると、平安時代前期までは地形としては比較的高地である一帯を広く十分に活用して建物を建てている分布を示している。また、今回調査区のある宮ノ前南ブロックでは南東隅に偏りがあるが、約70ｍ北で調査した第78次調査では同じ大型の東西棟建物でも平安時代初期には廃絶していると想定される奈良時代古道の方位に規制されており、その基準となる軸をそれぞれ最寄りの主要道路およびその遺制に求めている感がある。

一方、この様相が平安時代後期に入ると、方格地割の北西隅の外周をとりまく道路区画が整うにも関わらず、宮ノ前ブロックの南東隅、特に南北道路西側溝寄りの地点に集約して建つ傾向がみられる。

こうした区画内の建物配置には、時期的に、また方格地割の北西隅４区画という周辺をみても一辺約120ｍの区画内全域を統一的に規格構成していたものではなく、主要道路に対する正面感を意識していたものと思われる。

周辺の調査では希薄であった平安時代初期前後の遺構の分布を確認することができ、大きな成果を得ることができた。またＳＸ7860出土遺物から土師器を中心とする土器編年にも今後検討を要するとともに、周辺調査地との総合的な検討が必要となってくるものと考えられる。

（大川　操）



第９図　宮ノ前ブロック内における平安時代前半期の掘立柱建物配置（1：1,000）

Ⅲ　第119次調査

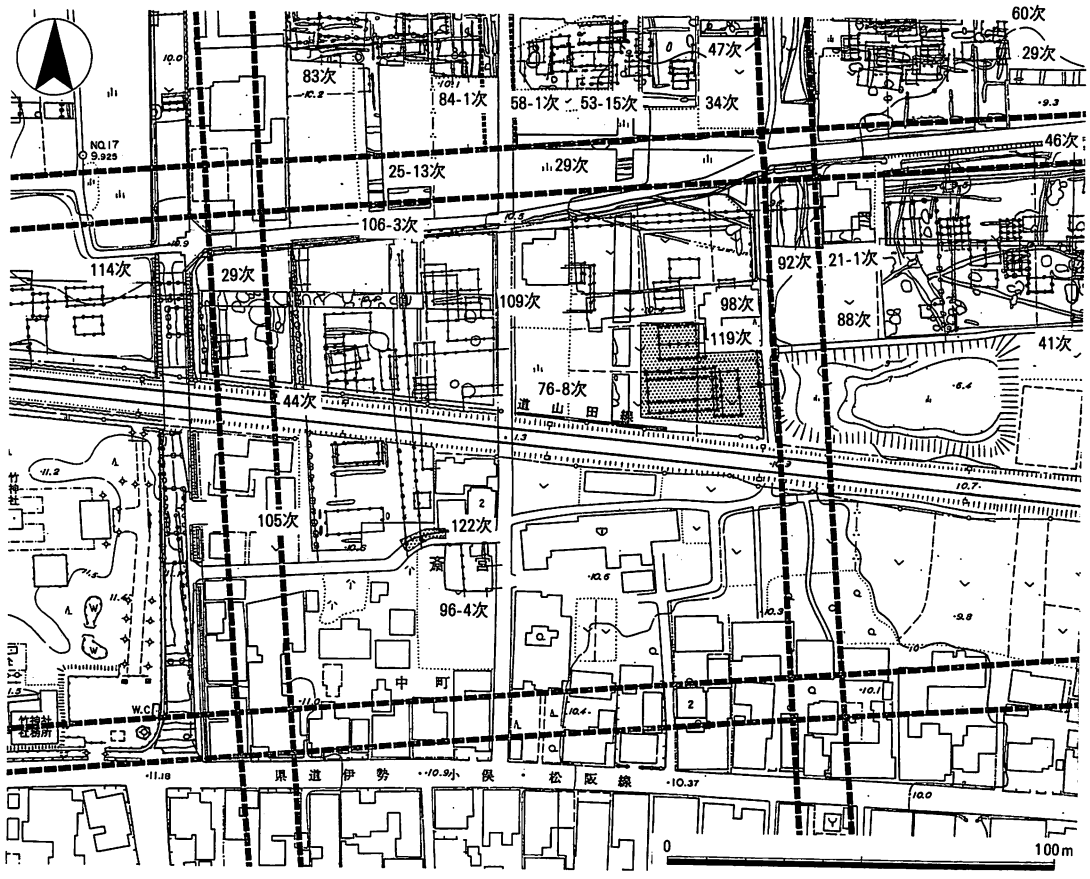
（6ＡＦＭ－Ｅ・Ｇ　鍛冶山地区）

1　はじめに

経　過　奈良時代後期から平安時代初期にかけて史跡東部に造営された方格地割は一辺120ｍを基準とする東西７列、南北４列の方形区画によって構成されるが、東から３列目の西加座北、西加座南ブロックは中央に10ｍの道路が通るため東西幅が130ｍと広くなる。第119次調査は平成９年度第２回目の計画調査として、近年の調査によって、柵列が二重に巡っていたことが明らかとなるなど、他のブロックと異なる様相を見せ、中枢部とみられる鍛冶山西ブロックにおいて実施した。

目　的　今回の調査は、外郭柵列や規則的に配置された大型掘立柱建物、内郭柵列の存在を確認した平成４年度の第98次調査、平成６年度の第105次調査、平成７年度の第109次調査をはじめとするこれまでの調査成果をふまえ、「内院」と推定される鍛冶山西ブロック全体の構造解明と、その性格を明らかにすることを目的とした。調査は第98次調査と近鉄宇治山田線との間に調査区を設置し、面積697㎡を対象に平成９年７月30日から12月18日まで実施した。

現　況　調査地の現況は畑地で標高10.0ｍ～10.4ｍ前後で東に向かって緩やかに傾斜する。遺構面は約0.2ｍの耕作土（黒色土）と約0.4ｍの遺物包含層（黒褐色粘質土）を除去した時点で確認した。遺構面（地山）は黄褐色粘土で、一部赤褐色粘土の部分も見られた。遺構検出面の標高は、調査区の西で10.4ｍ、東で9.6ｍ前後である。



第10図　第119次調査　調査区位置図（1：2,000）

2　遺　構

今回の調査では、弥生時代から平安時代中期までの竪穴住居１棟、掘立柱建物14棟、井戸１基、土坑11基、溝１条、方形周溝墓１基などを検出したが、そのうち10棟の掘立柱建物は鍵型に配置されている。なお、第98次調査で確認された外郭東辺柵列ＳＡ6770、ＳＡ6790は検出されたが、第109次調査で確認され、その延長が想定された内郭柵列北辺ＳＡ2705の延長は検出されなかった。

（１）弥生時代の遺構

ＳＢ7951　調査区南西隅で検出した方形の竪穴住居である。南半は後世の溝によって破壊されているが、東西長約4.0ｍ、検出面からの深さは約10cm～50cmである。高杯、壺底部片が出土している。

ＳＸ7945　調査区南東隅で検出した一辺約7.8ｍ、周溝の幅約0.6ｍ～0.8ｍの方形周溝墓である。東周溝中央やや北寄りが途切れる。西側周溝は後世の遺構によって破壊された可能性もあるが確認されなかった。南辺は調査区外へと続く。周溝埋土は黒褐色土である。周溝北東隅の埋土中から高杯の脚部２個体分が出土した。

（２）奈良時代後期の遺構

この時期の遺構として、掘立柱建物２棟、井戸１基、柵列１条がある。

ＳＢ7941　調査区東半で検出した桁行３間×梁行２間の南北棟で、後述する同時期の掘立柱建物ＳＢ7950の北側柱と北妻柱筋を揃える。柱間は桁行2.4ｍ等間、梁行1.8ｍ等間、棟方向はＮ4°Ｗである。柱掘形は一辺約0.6ｍの略方形で、柱痕跡は径25cm前後である。平安時代初期の掘立柱建物ＳＢ7947との重複関係からこの時期の遺構としたが、３間×２間という建物規模やＳＢ7950と区画の正面と考えられる南ではなく、北側妻柱を揃えることなどからＳＢ7950との併存は考えにくい。奈良時代後期以前の古い時期の建物である可能性も考えられる。

		遺構の種別						
		ＳＢ	ＳＡ	ＳＥ	ＳＫ	ＳＤ	ＳＳ	ＳＸ
弥生	後　期	7951						7945
奈良	後　期	7941 7950	6770	7920			7952	
平安	初　期	7918 7919 7947 7948	6790					
	前Ⅰ期	7915 7916 7917 7938 7939 7940	6790					
	前Ⅱ期	7933 7934	6790		7928 7929 7930 7931 7932			
	中　期				7955 7956 7957 7958 7959 7960	7924		
時期不明					7953 7954	6803 7921 7922 7923		

第３表　第119次調査　時期別遺構分類表

第11図　第119次調査　遺構実測図（1：200）

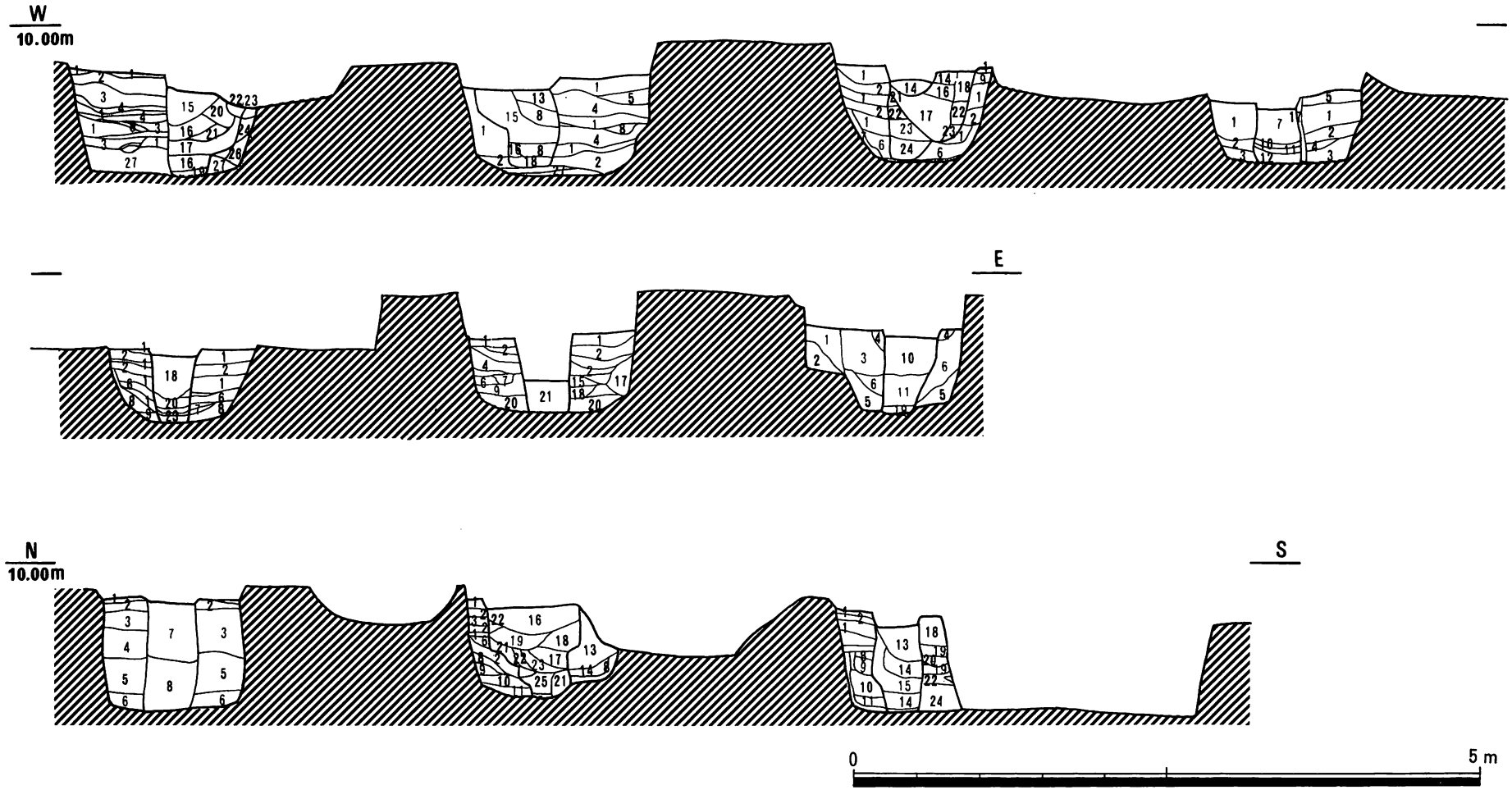
ＳＢ7950　調査区西半で検出した南北に庇が付く桁行６間×梁行４間の東西棟である。柱間は桁行2.95ｍ等間、梁行3.0ｍ等間、庇出は北庇が2.1ｍ、南庇で2.7ｍと２尺分南が広い。棟方向はＥ4°Ｎで、外郭北辺柵列ＳＡ6760と柱筋を揃える。また、身舎の北側柱筋は、第109次調査検出のＳＢ7385の北側柱と筋を揃える。身舎の柱掘形は、上端で一辺1.3ｍ～1.5ｍ、下端で0.7ｍ～1.2ｍのやや東西に長い方形で深さは検出面から0.9ｍ～1.1ｍ（標高8.8ｍ前後）、柱痕跡は径約45㎝である。この柱掘形・柱痕跡の規模は建物の規模（桁行17.7ｍ、梁行10.8ｍ）と併せ、斎宮跡で最大級のものである。柱掘形の埋土は、基本的に地山を形成する黄褐色粘土・黄褐色砂質土・明赤褐色粘土と黒褐色土（黒ボク土）の互層から成り、細かく分層されるものと大きなまとまりを持つものとに分けられる。柱穴埋土には10㎝前後の石が多量に含まれる。この石は、柱の据わる位置に布設した状態にはないため、直接根固めに用いられていたものとは考えにくく、地山に含まれていたものをそのまま埋め戻したものと考えられる。また、ほとんどの柱掘形に柱抜取り痕が確認されている。抜取りの方向は、建物の外に向かうものが多いが、建物の桁方向に沿ったものもある。柱痕跡の底は、若干他の箇所より固く締まっている程度で、沈下を防ぐための礎盤などの痕跡は認められなかった。柱掘形からの遺物としては土師器杯片や須恵器の破片がわずかに出土している。

庇の柱掘形は、北庇で長辺1.5ｍ～2.0ｍ、短辺1.0ｍ前後の長楕円形である。南庇は北半分をＳＤ7961によって削平されているが、北庇と同規模であったと考えられる。したがって、南庇の規模を復元した場合に庇出は2.4ｍ（８尺）では短すぎるため、2.7ｍ（９尺）になると判断される。検出面からの深さは約0.3ｍ～0.4ｍと浅い。埋土は身舎と異なり黒褐色土（黒ボク土）で、柱痕跡は確認できなかった。出土遺物は全くみられない。

ＳＢ7950の南庇の南に約1.0ｍ隔てて並行する柱間3.0ｍの柱穴列を６間分確認しているが、性格などは不明である。

ＳＡ6770　調査区東辺の南北溝ＳＤ6803の埋土を取り除いた後に第98次調査で確認された外郭東辺柵列の延長部分の北東角から14間目に相当する１間分を検出した。柱間は2.94ｍ（10尺）である。柱穴はＳＤ6803によって東半が削平されており完全には確認できなかった。確認できた深さは15㎝～25㎝だが、検出面から復元すると0.6ｍ前後になる。南延長部分については、外郭西辺柵列ＳＡ1411や後出のＳＡ6790が確認されていることから、さらに南へ延長することが予想されるが、ＳＤ6803が浅くなるため途切れることも考えられる。そうした場合、ＳＡ6770の機能は間仕切り的なものであった可能性も考えられる。

ＳＥ7920　調査区北西隅で検出した鍛冶山西ブロックで初めて確認された方形の井戸である。検出面で一辺約5.2ｍ、0.8ｍ掘り下げた地点で一辺約3.6ｍになり、そのまま底までほぼ垂直に下がる。作業の安全上、東側2/3について約1.6ｍ掘削した後、以下は全体の1/2を掘り下げた。検出面から約2.8ｍのところで井戸枠の痕跡と考えられる一辺約2.0ｍの正方形の暗褐色粘土層が確認され、約3.5ｍの地点で暗褐色粘土層の中に一辺約1.8ｍの暗緑灰色粘土層を検出するとともに、その南辺から井戸枠と思われる長さ約1.2ｍの材木片を確認した。材木片は残存状況が悪く、両端が腐食し、加工痕なども確認できない状態である。



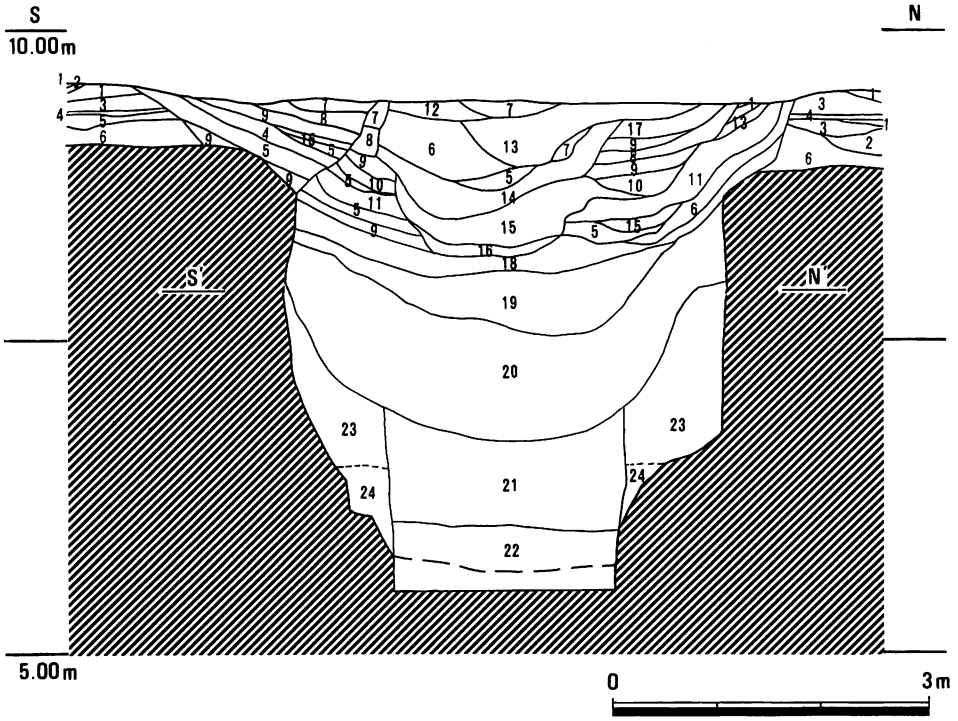
①明黄褐色粘質土 10YR6／6（1～2㎝大礫含む）
②明赤褐色粘質土 5YR5／6に明黄褐色粘質土 10YR6／6混入（1～2㎝大礫含む）
③明黄褐色粘質土 10YR6／6に明赤褐色粘質土 5YR5／6混入（2～5㎝大礫含む）
④黒褐色土 10YR3／1に明黄褐色粘質土10YR6／6混入（2～5㎝大礫含む）
⑤褐灰色土 7.5YR4／1（1～2㎝大礫含む）
⑥黒褐色土 10YR3／1に明赤褐色粘質土粒 5YR6／6混入（3～5㎝大礫含む）
⑦褐灰色土 7.5YR4／1
⑧明赤褐色砂質土 5YR5／6
⑨黒褐色砂質土 7.5YR4／1
⑩黒褐色粘質土 2.5YR3／1（粘質強い）
⑪褐灰色土 7.5YR4／1に明赤褐色砂質土 5YR5／6混入
⑫明赤褐色土 5YR5／6
⑬褐灰色やや砂質土7.5YR4／1
⑭褐灰色やや砂質土7.5YR4／1 ⑬より砂質弱い（2～5㎝大礫含む）
⑮黒褐色土 10YR3／1（2～5㎝大礫含む）
⑯黒褐色砂質土 10YR3／1ににぶい黄褐色粘質土 10YR5／4混入
⑰黒褐色土10YR3／1ににぶい黄褐色粘質土 10YR5／4混入
⑱黒褐色粘質土10YR3／1（粘質強い）
⑲褐灰色粘質土 7.5YR4／1
⑳黒褐色土 10YR3／1に明黄褐色粘質土10YR6／6と明赤褐色砂質土 5YR5／6混入
㉑黒褐色土 10YR3／1に明黄褐色粘質土粒 10YR6／6混入（⑥より粘質強い）
㉒黒褐色土 10YR3／1に褐色土10YR4／4混入（2～5㎝大礫含む）
㉓黒褐色土 10YR3／1に褐色土ブロック 10YR4／4混入（2～5㎝大礫含む）
㉔暗褐色土 10YR3／4に明黄褐色粘質土 10YR6／6と明赤褐色粘質土 5YR5／6混入
㉕暗褐色土 10YR3／4に明黄褐色粘質土 10YR6／6と明赤褐色粘質土 5YR5／6混入
㉖にぶい黄褐色砂質土 10YR5／4（3㎝大礫含む）
㉗黒褐色土 10YR3／1に明赤褐色粘質土ブロック 5YR6／6混入（3～5㎝大礫含む）
㉘黒褐色土 10YR3／1ににぶい黄褐色粘質土 10YR5／4混入 ○17より粘質強い
㉙褐灰色砂質土 7.5YR4／1
㉚褐灰色砂質土 7.5YR4／1（2～5㎝大礫含む）

第12図　ＳＢ7950柱掘形土層断面図（1：50）

井戸底については、湧水が激しく明確にはできなかったが、第22層の下に砂礫層が存在することを確認できたことから井戸底に到達したものと判断される。この時点での標高は約5.7mである。井戸枠以外の遺物としては、建築部材片の他、桃の種や布片が出土している。

鑿井の時期は明確には判断できないが、埋戻された時期については、埋土の上層から平安時代初期以降の掘立柱建物の柱掘形が掘りこまれており、奈良時代後期の遅い時期から平安時代の早い段階に埋め戻されたものと考えられる。土層観察から、中位までは短期間に埋め戻されたことがうかがわれる。埋土上層からは平安時代初期の土師器杯、須恵器蓋などが出土している。

また、ＳＥ7920の周囲は整地が行われており、一辺9.5m～10.0mの範囲を約50cm～60cmの深さまで掘り返した後、最下層に黒色土（黒ボク土）を用い、黒褐色土と黄褐色粘質土・明赤褐色粘質土を互層にして突き固めて埋め戻している。平面的に見ると、ＳＥ7920の周囲に拳大の礫を含む黄褐色土があり、さらにその周囲を幅0.5m～1.0mの黒褐色土（黒ボク土）が取り巻いている。ＳＥ7920はこの整地土層を掘り込む形で掘削されており、整地はＳＥ7920の掘削に先立って、特殊な空間をつくりだすために



①明黄褐色粘質土 10YR6/6
②明黄褐色粘質土 10YR6/6に灰褐色土 7.5YR4/2混入
③明赤褐色粘質土5YR5/6
④明赤褐色砂礫混粘質土5YR5/6
⑤黒褐色土 10YR3/1
⑥黒褐色土 10YR3/2
⑦黒褐色土 10YR3/2に明赤褐色粘質土粒5YR5/6混入
⑧黒褐色土 10YR3/2に明赤褐色粘質土5YR5/6わずかに混入
⑨黒褐色土 10YR3/2と明赤褐色粘質土5YR5/6と明黄褐色粘質土 10YR6/6の互層
⑩暗褐色土 10YR3/3に明赤褐色粘質土5YR5/6混入（炭化物含む）
⑪暗褐色土 10YR3/3に⑩より細かい明赤褐色粘質土粒 5YR6/6混入
⑫黒褐色土 7.5YR3/2に明赤褐色砂質土5YR6/6混入（炭化物、3cm～10cm大礫含む）
⑬黒褐色土10YR3/2に赤褐色粘質土ブロック混入
⑭明赤褐色砂質土5YR5/6に黒褐色土10YR3/2混入
⑮黒褐色土 2.5YR3/2
⑯黒褐色やや粘質土2.5YR3/1
⑰黒褐色やや砂質土 10YR3/2
⑱黒褐色土 10YR3/2（炭化物含む）
⑲暗褐色土 10YR3/3に⑪より大きい明赤褐色粘質土粒 5YR6/6混入
⑳暗褐色砂礫土 10YR3/4（1cm～3cm大礫多く含む）
㉑暗褐色粘質土 7.5YR3/4
㉒暗緑灰色粘質土 7.5GY4/1（粘質かなり強い）
㉓にぶい黄色砂礫土 2.5YR6/3（2cm～10cm大礫を多く含む、地山層）
㉔黒褐色土 10YR3/2（3cm～5cm大礫含む）

第13図　ＳＥ7920土層断面図（１：60）

なされたものであると考えられる。整地土層で散見される礫は、整然と並べられたといった状態ではないが、拳大の礫がかなりの数確認されており、敷石状の遺構であった可能性も考えられる。また、調査区北辺の土層の観察から黄褐色土他の上層の整地が行われる前段階の柱掘形が検出され、奈良時代後期でも古い時期かさらにそれを遡る時期の建物が存在したことが確認されたが、黒色土層よりも新しいことから、整地層の造成およびＳＥ7920の掘削時期を考えるうえで興味深いものである。

ＳＥ7920の周囲を取り巻く黒色土は、ＳＢ7950の柱掘形などにもみられるが、それ以外の平安時代初期以降の遺構ではほとんど見られない。

（３）平安時代初期の遺構

この時期の遺構としては鍵型に配置される掘立柱建物４棟、柵列１条がある。

ＳＢ7918・7919　調査区西半で重複する東西棟である。柱間はともに桁行2.4ｍ等間、梁行2.7ｍ等間、棟方向はＥ4°Ｎである。新旧関係は古いほうからＳＢ7918→ＳＢ7919となる。

ＳＢ7918は、桁行６間×梁行３間で東西にそれぞれ１間ずつの間仕切りを設ける。南面に庇が付き、庇出は約3.0ｍである。身舎の柱掘形は一辺1.0ｍ～1.2ｍの略方形である。柱痕跡は径約35㎝で、柱掘形には拳大の礫が多数含まれる。庇の柱掘形は円形で径0.7ｍである。東西それぞれの１間分については、庇の可能性もあるが、柱間や柱掘形の規模が身舎の柱掘形と同じであることから間仕切りと判断した。

ＳＢ7919は、ＳＢ7918の建て替えと考えられる桁行５間×梁行４間で南北両面に庇が付く。身舎の柱掘形は一辺約1.0ｍ～1.2ｍ、柱痕跡は径約35㎝である。庇の柱掘形は径約0.7㎝の円形で、庇出は南北ともに約3.0ｍである。

ＳＢ7947・7948　調査区東半で検出した南北棟で、ＳＢ7918・7919とセット関係になる。

ＳＢ7947は、桁行１間以上×梁行２間、柱間は桁行、梁行ともに3.0ｍ等間、棟方向Ｎ4°Ｗである。柱掘形は一辺約1.0ｍ～1.2ｍで、柱痕跡は径約30㎝前後である。柱掘形の埋土は黒褐色土（黒ボク土）である。

ＳＢ7948は、柱穴の重複関係からＳＢ7947を北方向に約6.0ｍずらして建て替えたものと考えられる。桁行４間分、梁行２間を検出した。北側の一間については間仕切りとも考えられるが、桁行柱と柱筋をわずかに違えるため束柱と判断される。柱間は桁行2.4ｍ等間、梁行2.7ｍ等間で、庇出は約2.1ｍである。身舎の柱掘形は一辺約1.2ｍ～1.4ｍの長方形である。

ＳＡ6790　第98次調査で検出した外郭東辺柵列の南延長部分で、北東隅から14間目から19間目に相当する６間分を検出し、さらに南へ延長するものと考えられる。柱掘形は一辺約0.9ｍの方形で柱間は2.94ｍである。ＳＡ6770を建て替えたもので、約2.0ｍ南に移動する。柱掘形は東半がＳＤ6803によって削平されているが一辺約1.2ｍ、柱痕跡は約30㎝である。

Ｐit7949　ＳＢ7950の北入側柱西から３番目の柱穴に重複するピットである。重複関係とＳＢ7950の柱痕跡の柱筋とは北にずれることから、ＳＢ7950廃絶後に掘削されたものと判断される。埋土から須恵器杯蓋と壺の口縁部の破片が出土している。

（４）平安時代前Ⅰ期の遺構

この時期の遺構には掘立柱建物６棟あり、前代と同様に南北棟と東西棟が鍵型に配置され、３期にわたって建て替えを行っている。

ＳＢ7915～7917　調査区西半北隅で検出したＳＢ7918・7919の建て替えと考えられる重複する３棟の東西棟である。いずれも南面に庇が付く。北庇は調査区外のため確認されていないが、ＳＢ7919のように両面庇であった可能性もある。柱間はいずれも桁行2.4ｍ等間、梁行2.7ｍ等間、棟方向はＥ4°Ｎである。新旧関係は柱掘形の重複からＳＢ7915→ＳＢ7916→ＳＢ7917となる。

ＳＢ7915は、桁行４間分、梁行３間分を検出した。ただし、庇は５間分を検出しており、調査区外へさらに１間延び、桁行５間×梁行３間の建物になると考えられる。庇出は2.4ｍである。身舎の柱掘形は一辺約0.8ｍ～0.9ｍの略方形で、庇の柱掘形は径0.6ｍ～0.9ｍの楕円形である。柱痕跡はＳＢ7916・7917の重複によって破壊されており、確認されなかった。

ＳＢ7916は、桁行４間分、梁行３間分を検出した。庇出は3.0ｍである。身舎の柱掘形は一辺約1.0ｍ～1.2ｍの略方形で、庇の柱掘形は径約4.0ｍの円形である。柱痕跡はＳＢ7917の重複によって残っていない。ＳＢ7915と同様に南庇は５間分を検出しており、桁行５間×梁行３間の建物であると考えられる。

ＳＢ7917は、桁行４間分、梁行３間を検出した。庇出は2.7ｍである。身舎の柱掘形は一辺約0.4ｍ～0.5ｍの略方形で、柱痕跡は明確にはできなかったが、拳大の礫がかたまっている箇所があり、柱を抜いた痕に放り込んだものと推定される。庇の柱掘形は円形で径約35㎝～40㎝である。ＳＢ7915・7916と同じ桁行５間×梁行３間になると考えられる。

ＳＢ7938～7940　ＳＢ7947・7948に続く掘立柱建物である。調査区東半で重複する桁行５間×梁行３間の南北棟で、いずれも西面に庇が付く。棟方向はＮ4°Ｗである。新旧は柱掘形の重複関係からＳＢ7938→ＳＢ7939→ＳＢ7940の順となる。

ＳＢ7938は、桁行2.4ｍ等間、梁行2.7ｍ等間、庇出2.7ｍで、身舎の柱掘形は略方形で一辺約1.1ｍ～1.2ｍである。柱痕跡は径約40㎝の円形である。

ＳＢ7939は、ＳＢ7938とほぼ同じ位置にやや規模を縮小して建替えたものである。桁行2.4ｍ等間、梁行2.4ｍ等間、庇出2.1ｍで、身舎柱掘形は一辺約0.6ｍ～0.8ｍの略方形である。庇の柱掘形は径約40㎝である。

ＳＢ7940は、桁行2.4ｍ等間、梁行2.7ｍ等間、庇出2.7ｍとＳＢ7938と同規模である。身舎の柱掘形は一辺約0.5ｍ～0.7ｍの略方形、柱痕跡は径約40㎝である。

この時期の建物をみると、建物自体の規模に大きな変化はないが、次第に柱掘形の規模が縮小傾向にあることが看て取れる。

（５）平安時代前Ⅱ期の遺構

ＳＢ7933　調査区北東隅で桁行１間分、梁行２間を検出した南北棟である。東側柱はＳＫ7930の底で確認した。桁行3.0ｍ等間、梁行2.4ｍ等間、柱掘形は一辺約1.0ｍ～1.2ｍである。柱痕跡は明確に捉えることはできなかった。棟方向はＮ4°Ｗである。

ＳＢ7934　ＳＢ7933とほぼ同じ位置に建て替えた建物で、桁行１間分、梁行３間を検出した。西面に庇が付く。桁行2.4ｍ等間、梁行2.4ｍ等間、庇出は2.4ｍである。身舎の柱掘形は一辺約1.0ｍ～1.2ｍ、柱痕跡は径約35㎝である。庇の柱掘形は一辺約0.4ｍの方形である。

ＳＫ7928～7932　調査区東半北辺で検出した重複する土坑群である。重複関係はＳＫ7928→ＳＫ7929

→ＳＫ7930→ＳＫ7931→ＳＫ7932の順に新しくなるが、遺物を見ると大きな時期の差はないと考えられる。

ＳＫ7928・7929は径約1.5ｍ～2.0ｍの楕円形で調査区外へと続く。土師器杯等の破片が出土した。

ＳＫ7930は東西幅約1.5ｍ～3.1ｍ、南北長約9.5ｍでさらに調査区外へと延長する。外郭柵列ＳＡ6790と約1.0ｍ隔てて並行する。検出面からの深さは南端で約10㎝、北端で約30㎝（標高約9.5ｍ～9.7ｍ）である。小片ながら平安時代前Ⅱ期新段階の土師器杯、皿、鉢、甕等がまとまって出土している。

ＳＫ7931は長径約2.3ｍ、短径約1.4ｍの楕円形を呈する。ＳＫ7930と同時期の土師器片などが出土している。

ＳＫ7932はＳＫ7930・7931に重複し、幅約1.0ｍ、長さ約2.0ｍ、検出面からの深さは約0.5ｍである。出土遺物には土師器杯・甕等の破片がある。

（６）平安時代中期の遺構

ＳＫ7955～7960　調査区南東端で東西に重複する土坑群である。規模と形態は径約0.5ｍ～1.5ｍの楕円形で、検出面からの深さは約0.2ｍ～0.3ｍである。重複関係は埋土にほとんど差がないため明確には捉えることができなかった。埋土中には５㎝～10㎝大の礫が含まれる。出土遺物には、土師器小片が数点みられる。

ＳＤ7924　調査区中央部を東西に貫流する東西溝で、溝の方向はＥ4°Ｎである。西は調査区外へと続き、東は他の遺構と重複するため明確にできなかったが、ＳＫ7930との重複は確認されなかったことからＳＫ7930の西際で途切れるものと考えられる。溝幅は上端で約0.5ｍ～0.7ｍ、下端で約0.4ｍ～0.5ｍ、検出面からの深さは約0.1ｍ～0.15ｍ前後で、西から東に向かってわずかに傾斜する。

（７）時期不明の遺構

ＳＫ7953・7954　調査区南端で重複しあう方形の土坑で、規模は一辺約1.5ｍである。

ＳＤ6803　第98次調査で検出した南延長部分である。全体を確認することはできなかったが、調査区東端を南北に貫流し、さらに南へと続く。溝幅は1.5ｍ以上、深さは深いところで0.8ｍを越える。上層から近世の瓦や陶器片が大量に出土したが、下層からはほとんど見られないことから一度埋没した後、再度掘削し投棄されたものと考えられる。全体を確認してはいないが、溝の規模や区画道路西側側溝と近い位置にあることなどから、区画道路の西側側溝を踏襲した溝であることも考えられる。

ＳＤ7921・7922　調査区北辺中央を南北に並行する。検出した長さは約8.0ｍでさらに北は調査区外へ延長する。溝幅はＳＤ7921が約0.3ｍ～0.4ｍ、ＳＤ7922は約0.4ｍ～0.6ｍ、検出面からの深さは約0.05ｍ～0.1ｍである。

ＳＤ7961　調査区南辺をＥ3°Ｓの方向で東西に流れる。西は調査区外へと続き、東は調査区端で南に向かって折れ曲がり、調査区外へ延びる。溝幅は上端で約2.0ｍ～2.5ｍ、下端で約1.2ｍ～1.5ｍである。検出面からの深さは東側で約0.4ｍ～0.5ｍ前後、中央付近で約1.5ｍ、西側で約1.0ｍ前後（標高約9.1ｍ～10.2ｍ）と、中央部分が特に深い。溝のあり方から、近鉄線南側に明治時代初めまでこの地に建っていた蓮光寺に関連する建物を区画する機能を果たしていたように思われる。また、埋土中から近世から近代にかけての大量の瓦や陶磁器等が出土している。

3　遺　物

今回の調査では、ＳＫ7930を中心に近世の遺物を含め整理箱128箱分の遺物が出土した。

（１）弥生時代の遺物

ＳＢ7951　有段高杯の杯部(53)は、復元推定口径は21.4cmである。口縁部は大きく外反する。調整は器壁が著しく磨滅しており不明である。(54)は壺の底部片で、残存高3.8cmである。内面に黒色の付着物が残る。

ＳＸ7945　(55・56)は高杯の脚部である。(55)は２条、(56)は３条の櫛描による横線文が２段に施される。横線文の下部に透孔が２方向に残るが、穴の位置から本来は３方向に穿孔されていたと考えられる。

（２）平安時代初期の遺物

ＳＥ7920土師器　杯には平坦な底部からやや開き気味に口縁がのびる(57)と、断面弓状で内弯気味に立ち上がり端部を内側に折り曲げる(58)がある。

高杯は２点出土している。(59)は脚部、(60)は脚柱部のみ残存する。ともに面取りを施すが、(60)は一部に面取り前に施された縦方向のハケメが残る。脚柱部径は(59)で3.5cm～4.0cm、(60)で4.0cm～4.4cmである。

須恵器　杯蓋(61・62)は、天井部が陣笠状を成す。頂部は右廻りの回転ヘラケズリが施され、つまみが付くものと考えられる。口縁端部はやや内側にむかって折り曲げられる。口径はいずれも復元推定ながら、(61)で17.8cm、(62)で19.4cmである。

(63)は、口縁部をやや内弯気味に折り曲げる。口径は復元推定で13.4cmである。天井部は右廻りの回転ヘラケズリを施す。

(64)は台付杯である。口径15.5cm、高台径7.5cm、器高4.5cmである。口縁はほぼ垂直に立ち上がり、高台はやや開き気味に延びる。調整は内外面ともに回転ナデ調整でしあげる。

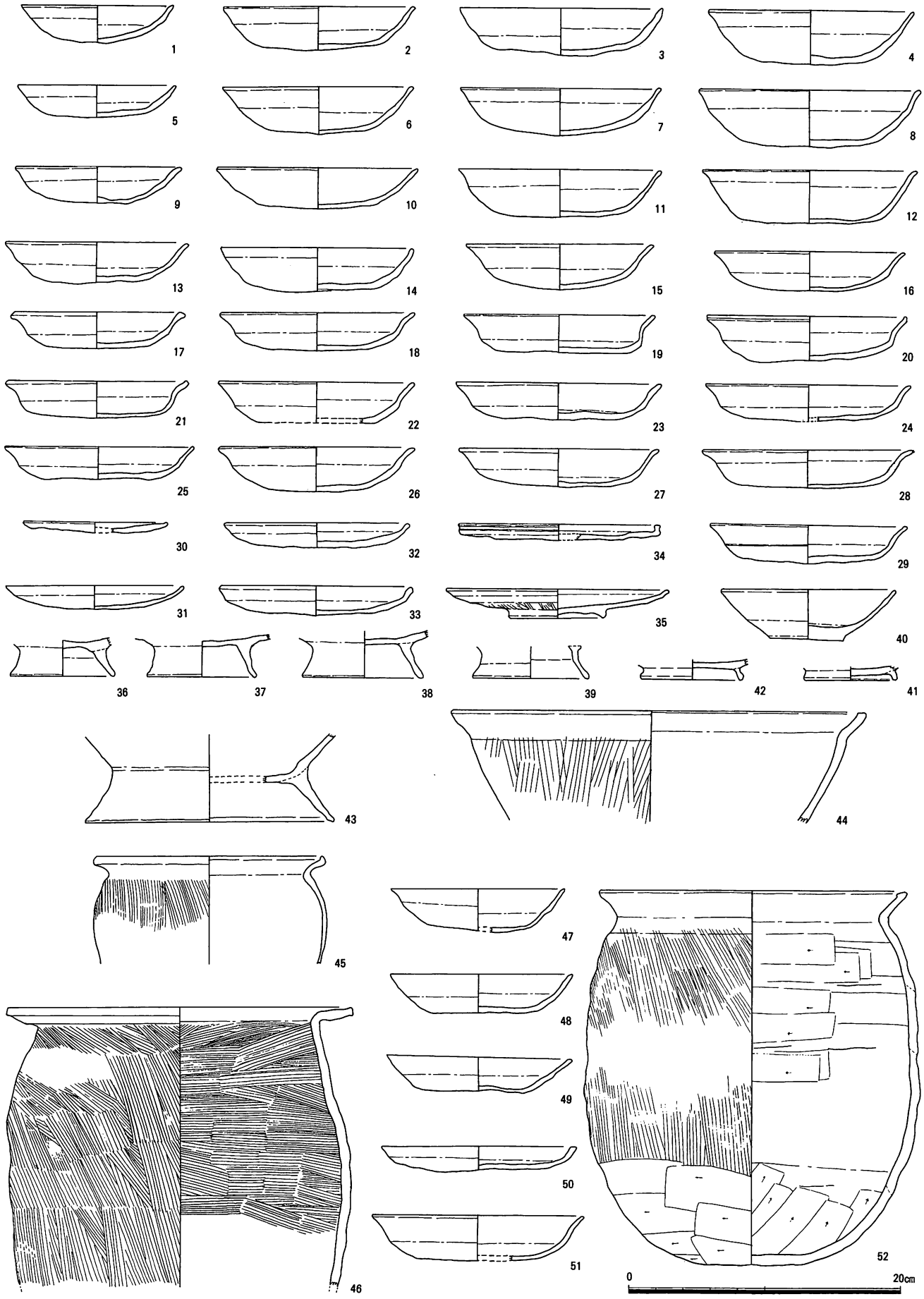
Ｐit7949須恵器　杯蓋(77)は、復元で口径28.6cmである。回転の方向は不明瞭だが頂部を回転ヘラケズリし、内外面は回転ナデ調整する。端部はわずかに下方へつまみ出される。

（３）平安時代前Ⅱ期の遺物

ＳＫ7930土師器　杯(１～29)には、口縁部が内弯ないしは外方へまっすぐにのび、底部が口径に比べ小さい(１～14)と口縁部が強いナデによって外反し、底部が比較的広い(15～29)があり、口縁端部を内弯させるものは見られない。口径は12.0cm～13.0cmの小さいものと14.0cm～16.0cm前後の大きいものとに分けることができる。器高は前者で2.4cm～2.8cm、後者で2.9cm～4.3cmである。調整手法はすべて口縁部をヨコナデし、底部をオサエ後ナデ調整するｅ手法である。ヨコナデの範囲は、器高の1/2と2/3のものとがある。

小皿(30)は、口径11.9cm、器高2.3cmで、口縁端部のみを上方につまみ上げて成形する。口縁端部をわずかにヨコナデし、底部はナデ調整する。皿は、断面が弓状の(31)と口縁部が外反する(32・33)、底部が平坦で口縁端部のみを上方へ引き上げる(34)がある。(32・33)は、口径14cm前後、器高2.0cm前後で、口縁端部のみヨコナデ調整する。台付皿(35)は、口径16.6cm、高台径6.8cm、器高2.3cmである。口縁端部と高台部をヨコナデし、下半に縦方向のハケメが残る。

(36～39)は、高台部のみ残存する台付杯である。端部は丸く仕上げる。(36・37)は



第14図　第119次調査　遺物実測図　ＳＫ7930：１～46　ＳＫ7932：47～52

灰白色である。

鉢(43)は、高台部付近のみ残存する。推定高台径で9.4cmである。台部を貼付けた後ヨコナデする。

鍋(44)は、「く」字状に曲がる口縁が付き、口縁端は内側に面をもつ。推定口径は30cmである。口縁部をヨコナデ、体部は粗いハケ調整を施す。

甕(45)は、体部球形で、体部外面は縦方向のハケ、内面はナデ調整する。外面にスス状の付着物が見られる。(46)は、長胴甕で、口径26.0cmである。胴部外面を縦方向、内面を横方向にハケ調整し、内面下半をケズリ調整をする。口縁部はほぼ水平に折り曲げられる。

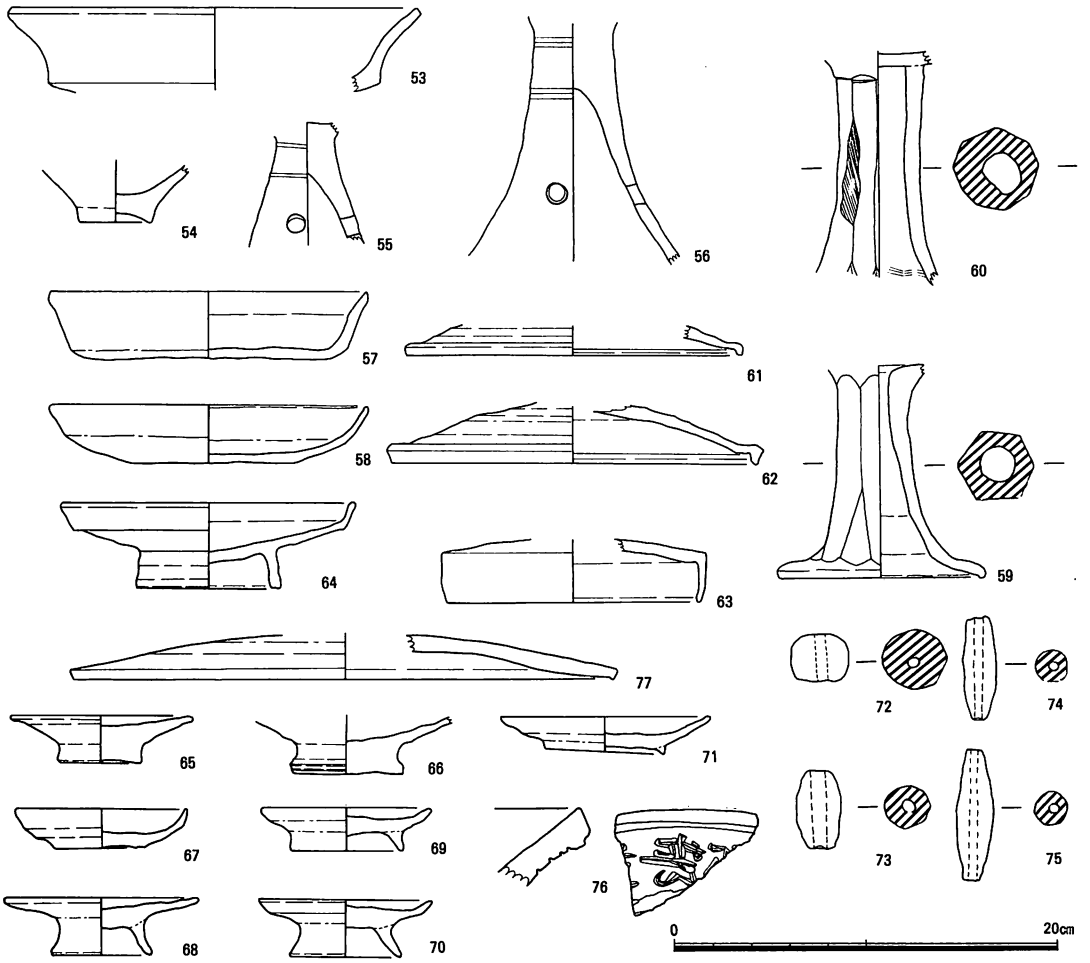
須恵器　杯(40)は、口縁部が底部から上方にまっすぐにのびる。器壁は6mm前後、口縁部を回転ナデ調整し、底部は静止糸切りした後ナデ調整する。焼成不良のためか内外面ともにぶい黄橙色である。椀(41)は高台部のみ残存し、高台径は6.8cmである。高台は真っ直ぐに延び、接地面は平坦である。

灰釉陶器　(42)は、椀の高台部である。やや開き気味にのび、端部は丸い。

ＳＫ7932土師器　杯には、口縁が平坦な底部からまっすぐにのびる(47～49)と、外反する(51)がある。口径は前者で13.5cm前後、後者は16.0cmである。

皿(50)は、口径14.6cm、器高1.8cmで、口縁部をまっすぐに引き上げる。口縁部をヨコナデ、底部をオサエ後ナデ調整するｅ手法で仕上げる。

甕(52)は、器高28.0cm、口径22.6cmで器壁は7.0mm前後である。口縁部をヨコナデし、



第15図　第119次調査　遺物実測図　ＳＢ7951：53・54，ＳＸ7945：55・56，ＳＥ7920：57～64
Pit 7949：77，包含層：65～71，特殊遺物：72～76（76のみ１：２）

体部外面はタテハケ、内面を横方向にケズリ調整する。底部は外面も横方向に、内面は下から上に向かってケズリ調整する。内面に粘土接合痕が約5.0cm幅で残る。

（４）遺物包含層出土土器

ロクロ土師器　包含層から(65～70)が出土している。小皿(67)は、厚い底部に口縁が内弯しながらのびる。台付小皿(65・66・68～70)は、擬高台のもの(65・66)が含まれる。

（５）その他の遺物

灰釉陶器　(71)は完形の皿である。断面三角形の高台が付く。口縁部は平坦な底部から外上方にまっすぐに立ち上がる。口径11.0cm、高台径6.3cm、器高1.8cmである。

刻書土器　(76)は、須恵器壺の口縁部と思われる破片の外面に「□部□」とヘラ書きされ、３文字確認できるが「部」以外は、一部が残るのみで判読できない。ヘラ書きは焼成前に刻まれたもので、斎宮寮の官司名を表すものか、あるいは須恵器の生産地に関するものか検討を要する。

土錘　この他に、土錘(72～75)が４点出土している。

４　まとめ

今回の調査では、奈良時代後期から平安時代前Ⅰ期までの大型掘立柱建物11棟が鍵型に配置され、６小期にわたって建て替えられたことが確認された。そして６期に渡る建替えは、その状況から建物配置の変遷を大きく３期にわけることが可能であり、これまでの周辺調査の成果と併せ、鍛冶山西ブロックの近鉄線以北における建物配置の様相がさらに明らかとなった。そこで、過去幾度かにわたって示された従来の試案と今回の調査の成果を基にして、新たに第Ⅰ～Ⅲ期に分類して検討してみたい。

（１）第Ⅰ期

外郭柵列　奈良時代後期に展開されたと考えられる建物配置で、鍛冶山西ブロックにおいては柱間10尺で東西総長400尺＝約117.6ｍの規模をもつ外郭柵列(北辺ＳＡ6760、東辺ＳＡ6770、西辺ＳＡ1411、南辺未検出)が区画道路から24尺＝約7.0ｍ隔てて区画をめぐる。さらに、この外郭柵列の東側には、区画道路を越えて鍛冶山中ブロックにまで延びる総長160尺＝約47.5ｍの外郭柵列張出(北辺・東辺ＳＡ2800、南辺未検出)が取りつく。このため、この時期に鍛冶山西ブロックと鍛冶山中ブロックとの間の区画道路はなかったものと考えられる。また、東辺柵列ＳＡ6770は後出のＳＡ6790の様に南延長部分が検出されておらず、間仕切り的なものであった可能性もある。

内郭柵列　さらに、この外郭柵列内に外郭柵列と柱筋をあわせて柱間10尺の内郭柵列(北辺ＳＡ2705、西辺ＳＡ7150、東辺・南辺未確認)が外郭北辺柵列ＳＡ6760から110尺、外郭西辺柵列ＳＡ1411から80尺隔てて建てられ内郭を形成する。

内郭柵列の規模であるが、平成７年度の第109次調査試案では東西幅について外郭柵列のセンターラインで折り返した場合240尺＝約71.0ｍになることが想定されたが、今回の第119次調査において想定位置では検出されなかったため、さらに西に寄った位置で南に折り返すものと考えられる。その場合、内郭柵列の東西幅は240尺以下の規模で、しかも内郭柵列の東西の中心は外郭北辺柵列ＳＡ6760のセンターラインから西にずれることになる。つまり、外郭柵列と内郭柵列との間の距離が西辺が80尺であるのに対して、東辺が80尺以上と東辺の方が広いことになる。また、南北幅については、総長170尺(約50.5ｍ)で北から17間目で東進しＳＢ6840に取りつく可能性も想定さ

れたが、今年度実施した第122次調査で西辺柵列ＳＡ7150の南延長部分については確認できたものの、ＳＢ6840に向かって東に鍵の手状に折れ曲がった場合に柱穴が位置すると想定される場所に柱穴を確認し得なかった。このことから、西辺柵列ＳＡ7150はＳＢ6840に取りつく可能性がなくなり、さらにＳＢ6840を取り囲む位置まで真っ直ぐ南へ延びるものと考えられ、内郭柵列の南北幅は210尺＝約62.4ｍ以上の規模をもつこととなる。

掘立柱建物

この区画施設内に外郭・内郭柵列と同様に柱間10尺（１尺＝29.4㎝～30.0㎝）等間を中心とする大型の掘立柱建物（ＳＢ6740・6840・6841・6842・7155・7160・7375・7385・7950）が外郭・内郭柵列に柱筋を揃えて配置される。

この内、外郭柵列内にあって内郭柵列外に配置される建物としてはＳＢ6740・7155・7160・7950がある。第105次調査で検出されたＳＢ7155・7160は外郭西辺柵列ＳＡ1411と内郭西辺柵列ＳＡ7150との間に配置される。ＳＢ7155は、外郭西辺柵列ＳＡ1411と内郭西辺柵列ＳＡ7150との中心に位置する桁行４間×梁行２間で西妻柱筋の南延長にＳＡ7151が取りつく東西棟である。外郭西辺柵列を東西幅と同規模の400尺と想定した場合のセンターラインに妻柱筋があたる。ＳＢ7160は桁行５間×梁行２間の東西棟でＳＢ7155の南側柱から40尺隔てて東妻柱筋を通して配置される。この２棟の周囲には建物の性格の特殊性を示すと考えられる幅約0.7ｍ、深さ約0.4ｍの四隅を接しない溝が取り囲む。

外郭東辺柵列ＳＡ6770と未検出の内郭東辺柵列との間には、第98次調査で検出したＳＢ6740、第119次調査で検出したＳＢ7950が配置される。ＳＢ6740は、第98次調査で北側柱３間分を検出しただけでさらに南へ続く。柱間は1.8ｍと狭いが、柱掘形は一辺約1.2ｍの方形で、柱痕跡は径約40㎝と大きい。斎宮跡で最大規模を持つＳＢ7950は、南北庇の付く６間×４間の東西棟で、北側柱を外郭北辺柵列ＳＡ6760から150尺、西妻柱を外郭東辺柵列ＳＡ6770から60尺隔てて建つ。

内郭柵列内建物としては、ＳＢ6840・6841・6842・7375・7385の５棟がある。ＳＢ6840・6841・6842は第96-4次調査で一部が検出されただけで、全様が明らかにされたわけではないが、外郭・内郭柵列に柱筋を揃える大型の掘立柱建物である。ＳＢ6840は、内郭北辺柵列ＳＡ2705から170尺隔てて位置する。内郭西辺柵列ＳＡ7150に取りついて内郭柵列を形成する可能性もあったが、今年度実施された第122次調査において、内郭西辺柵列ＳＡ7150から鍵の手状に折れ曲がる位置に想定された柱掘形が確認されなかったことによって、桁行４間以上、梁行１間以上の規模を持つ南北棟と考えられる。ＳＢ6841・6842はＳＢ6840の東側柱から20尺隔てて建つ建物で、２棟の間の距離も20尺である。ＳＢ7375は３間×３間の総柱建物で南側柱をＳＢ7950の北側柱と筋を揃え、内郭の北西隅に配置される。ＳＢ7375の東側柱から30尺隔ててＳＢ7385が配置される。ＳＢ7385は、内郭北辺柵列ＳＡ2705から40尺、内郭西辺柵列ＳＡ7150から70尺隔てる。桁行２間以上の東西棟になると考えられ、ＳＢ7375、ＳＢ7950の北側柱と柱筋を揃える。さらに、西妻柱筋はＳＢ6841・6842の西妻柱と筋を揃える。

これらの内郭柵列内に配置された建物は、「内院」のなかでも斎王に直接関わる重要な機能を果たしていたものと考えられる。

外郭張出柵列ＳＡ2800内には、北東隅に第46次調査で検出した桁行５間×梁行２間

のＳＢ2790が配置される。ＳＢ2790は柱間が桁行2.2ｍ、梁行2.15ｍと外郭柵列内の建物としては柱間が小さく、この段階の他の建物とは異なった様相を示す。

井戸

ＳＥ7920は、内郭北辺柵列ＳＡ2705の東延長線上にあって、西側の肩をＳＢ7950の西妻柱とほぼ筋を合わせる。平面形は一辺約3.6ｍの方形で、さらにその周囲約6.5ｍ～7.0ｍの範囲を整地土層が取り囲む。このＳＥ7920から逆「Ｌ」字状に折れ曲がるＳＤ6810が北へ向かって延びる。ＳＤ6810は従来、後出時期の内郭柵列ＳＡ7400にほぼ相対する位置にあることから、区画の北東隅を画する役割を持った区画溝であると考えられていたが、ＳＤ6810によって囲まれた空間に特別な施設が見られないことや、ＳＥ7920以南には延長しないことから、区画のための溝ではなく、ＳＥ7920に付随する排水を目的としてこの時期に掘削された溝である可能性も考えられる。

（２）第Ⅱ期

外郭柵列

平安時代初期に展開された建物構成である。外郭柵列張出ＳＡ2800は廃絶され、区画東辺道路が設けられる。外郭北辺柵列ＳＡ6760は南へ約2.0ｍ移動し、区画道路から31尺（約9.1ｍ）隔てた位置に、ＳＡ6780として建て替えられる。これに伴って、東辺柵列はＳＡ6770からＳＡ6790に、西辺柵列ＳＡ1411からＳＡ2675にそれぞれ建て替えられる。南辺柵列は、北辺柵列ＳＡ6780が南に移動したのに伴い、約2.0ｍ南に移動したか、あるいは、南辺柵列と区画道路との距離を北辺柵列と同じように31尺（約9.3ｍ）であったと考えると、逆に、約1.0ｍ北へ移動したとも考えられる。ただし、南辺柵列が北へ移動したと想定した場合には、外郭柵列によって囲まれる範囲が前段階より狭くなることになる。

外郭柵列の規模については、東西幅400尺＝約117.6ｍと変わりない。南北幅については前段階同様、南辺未検出のため不明であるが東西幅と同規模であれば400尺＝約117.6ｍとなり、南辺が約1.0ｍ北へ移動したとすれば390尺＝114.7ｍとなる。

区画内部の構造も外郭柵列の建て替えに伴って大きく変容する。内郭柵列は北辺柵列ＳＡ2705が廃され、西辺柵列のみＳＡ7150からほぼ平行する形で南北柵列ＳＡ7400に建て替えられ、囲みの構造がなくなる。第109次調査で検出されたＳＡ7400は、外郭北辺柵列ＳＡ6780と約２間隔てた位置から建てられ、南は近鉄線を挟んで南接する第105次調査で検出されておらず、両調査区の間で止まるものと考えられる。内郭東辺柵列の建て替え柵列でこの南北柵列ＳＡ7400に対応する柵列は現在のところ確認されていない。このことから、ＳＡ7400の機能としては空間を区切るものではなく、特に、区画北半において間仕切り的要素を持つものである可能性が高いといえよう。しかし、前段階で井戸の排水溝としたＳＤ6810は、ＳＡ7400に対応する位置にある。

掘立柱建物

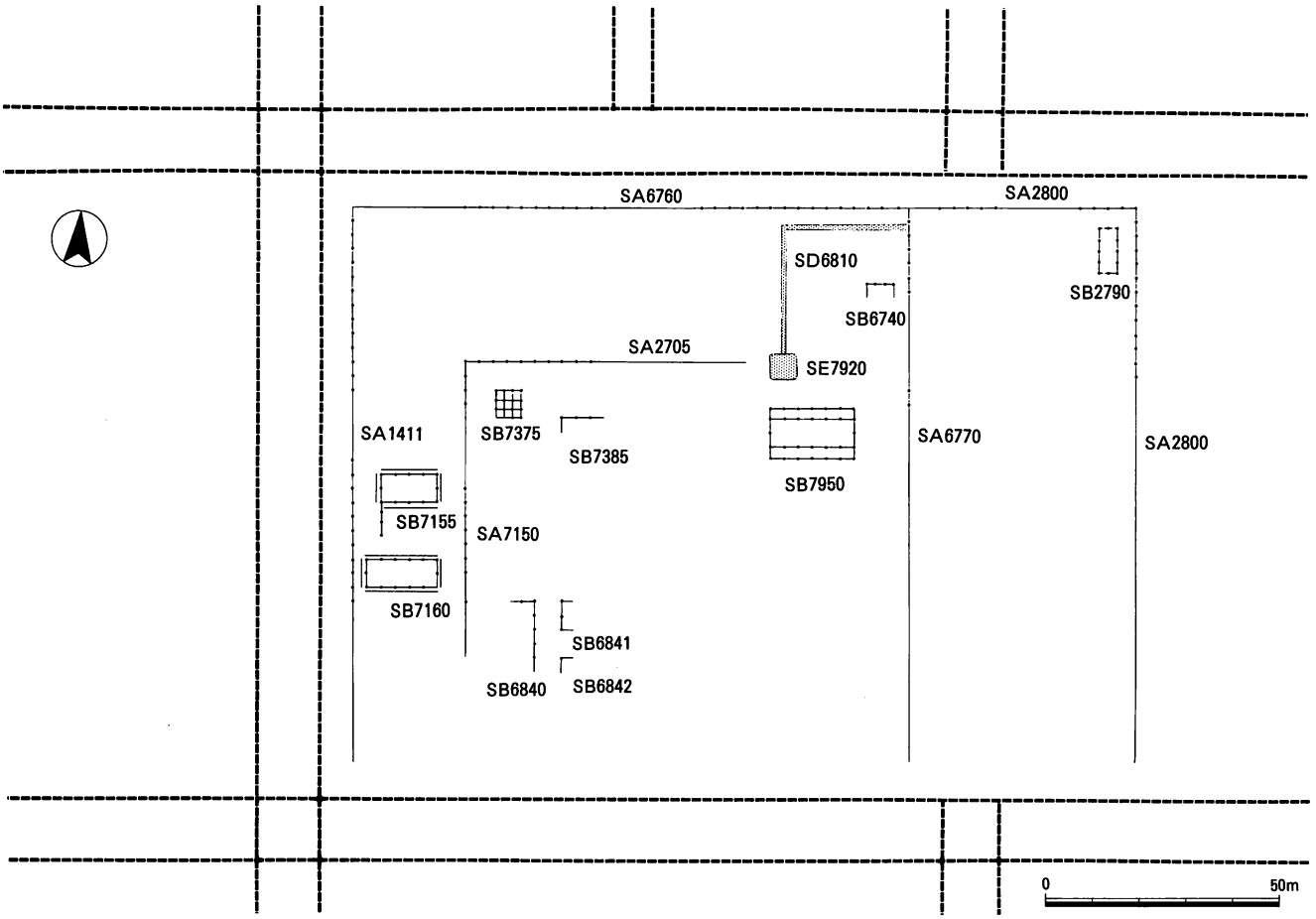
この時期の掘立柱建物をみると、前段階より一回り規模を小さくし、柱間寸法で概ね桁行８尺、梁行９尺の規模で構成され、１回もしくは２回の建て替えを行う。

まず、外郭西辺柵列ＳＡ2675と南北柵列ＳＡ7400との間には、両柵列の中心上に、第44次調査検出のＳＢ2680が外郭北辺柵列ＳＡ6780から60尺隔て、同じく第44次調査検出のＳＢ2685と、第105次調査検出で先行するＳＢ7155の建て替えであるＳＢ7190がその南に40尺ずつ間をおいて、柱筋を揃えて等間隔に配置される。ＳＢ2680・2685・7190はいずれも５間×２間の東西棟である。南北柵列ＳＡ7400以東では、外郭北辺柵列ＳＡ6780から約30尺隔てた位置に南北柵列ＳＡ7400に北側桁柱筋を揃えて東西棟で

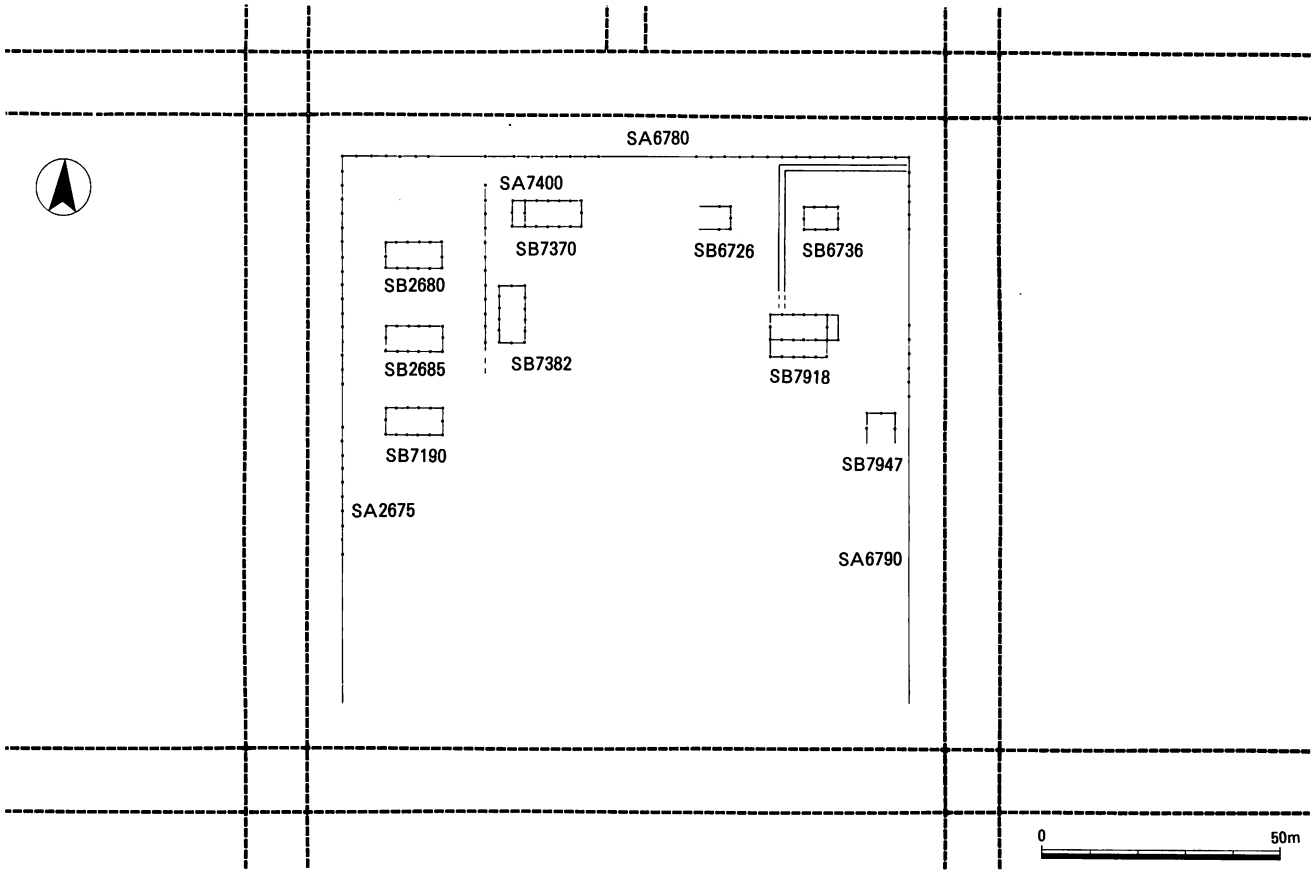
第109次調査検出のＳＢ7370が建ち、その後、南面・西面に庇の付くＳＢ1430に建て替えられる。また、南北柵列ＳＡ7400に南側桁柱の筋を揃える５間×２間の東西棟ＳＢ7390も、やや南に位置しているがＳＢ1430の建て替えと考えられる。このＳＢ7390の南側桁柱に北妻柱を、ＳＢ7370・1430の西妻柱に東側柱筋を揃えて第109次調査で検出された５間×２間の南北棟ＳＢ7382が建つ。ＳＢ7382はほぼ同じ位置で２度建て替えを行っており、ＳＢ7381、ＳＢ7380の順に建て替えられる。

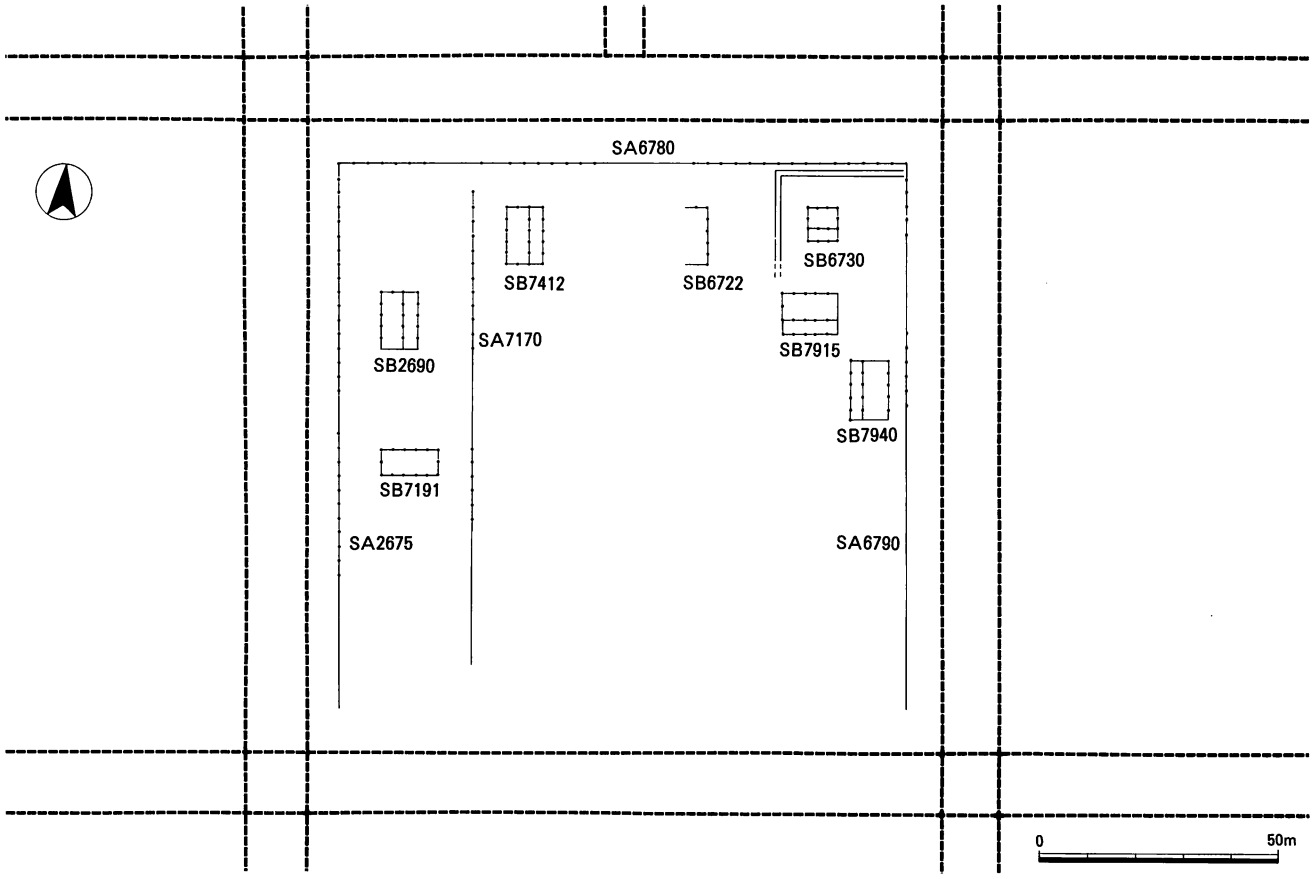
区画の東側では、北辺に第98次調査で検出された東西棟ＳＢ6725とＳＢ6736が桁柱筋を揃え、約50尺隔てて配置される。ＳＢ6725は全体像が不明だが、ＳＢ6736は桁行３間×梁行２間で柱間は桁行2.4ｍ、梁行2.5ｍである。また、前段階のＳＢ7950の建て替えである桁行６間×梁行２間で南面に庇の付くＳＢ7918と、南北棟ＳＢ7947が鍵型に配置される。この２棟は、それぞれ建て替えを行っており、東西棟ＳＢ7918はＳＢ7919に、南北棟ＳＢ7947はＳＢ7948に建て替えられる。

この段階で、区画の中央部に位置し、中心的機能を果たしたと考えられる建物は現在のところ確認されていない。ただし、第105次調査で調査区の東辺で大型の柱掘形が検出されているが、いずれも建物としての全容をうかがい知るには手掛かりが少ないため、これらの建物については今後の調査の進展に合わせ再検討する必要がある。また、南北柵列ＳＡ7400が区画の南まで延長しないことも区画の構造を考えるうえで注目される。



第16図　鍛冶山西ブロック建物配置変遷図　1





第17図　鍛冶山西ブロック建物配置変遷図　2

（３）第Ⅲ期

外郭柵列

平安時代前期と考えられる建物配置である。外郭柵列は前段階の構成を踏襲したと考えられ、北辺ＳＡ6780、東辺ＳＡ6790、西辺ＳＡ2675、南辺未検出と変わらない。

第105次調査・第109次調査・第122次調査で検出されたＳＡ7170は、ＳＡ7400からやや西に位置を変えて建て替えられ、外郭西辺柵列ＳＡ2675から95尺隔てて並行する。外郭北辺柵列ＳＡ6780から２間隔てた地点から、南はこれまで23間（約67.6ｍ）分が確認されていたが、第122次調査によって２間分延長し総長25間（73.5ｍ）以上となることが判明し、さらに南へ延びる可能性が高い。ＳＡ7170の機能としては、ＳＡ7400と同様に間仕切り的なものであったと想定されるが、ＳＡ7400に比べ総延長で規模が拡大したことから、このＳＡ7170によって仕切られる鍛冶山西ブロック南半における区画構造に変化が生じたとも考えられる。

掘立柱建物

外郭西辺柵列ＳＡ2675と南北柵列ＳＡ7170との間の西側外郭には、第44次調査で検出された柱間８尺等間で桁行５間×梁行３間、東面に庇が付くと想定される南北棟ＳＢ2690が、外郭北辺柵列ＳＡ6780から90尺、外郭西辺柵列ＳＡ2675から30尺隔てて建つ。この南には外郭北辺柵列ＳＡ6780から200尺隔てた地点にＳＢ2690の西桁側柱に西妻柱筋を揃えてＳＢ7191が建つ。ＳＢ7191は第105次調査で検出されており、先行するＳＢ7155・7190の建て替えと考えられ、桁行５間×梁行２間で柱間は桁行８尺、梁行９尺である。南北柵列ＳＡ7170の東側では、北辺に南北棟のＳＢ7412とＳＢ6722が約29.0ｍ隔てて、相対する位置に桁側柱筋を揃えて並び建つ。ＳＢ7412は、桁行５間×梁行３間、柱間８尺で東面に９尺の庇が付く。ＳＢ6722は、全体が確認されていないが、柱間８尺でＳＢ7412と同じ桁行５間×梁行２間になると考えられる。この２棟は、それぞれ２回の建て替えを行う。さらに、この２棟の南妻柱と庇の柱筋を揃えて桁行３間×梁行３間で南面に庇の付くＳＢ6730がＳＢ6722の東に建つ。

前段階で鍵型に配置されたＳＢ7918・7919、ＳＢ7947・7948はわずかに北へ位置をずらしてＳＢ7915、ＳＢ7938に建て替えられる。ＳＢ7915は、西妻柱筋を外郭北辺柵列ＳＡ6760に揃える桁行５間×梁行３間と想定される東西棟で、南面に庇が付く。ＳＢ7938は、桁行５間×梁行３間の南北棟で西面に庇が付く。柱間は、いずれも桁行８尺、梁行９尺である。この東西棟、南北棟もそれぞれ２回の建て替えを行う。

（４）まとめ

平安時代も中期になると、それまで「内院」として機能していた鍛冶山西ブロックは、しだいに衰退していくために、建物配置などの状況は掴みづらいものになっている。その傾向は今回の調査でもみられ、14棟の建物を確認したが平安時代前Ⅱ期の新しい段階に位置づけられる建物が最も新しいものであった。

今後の課題は、建物の配置の計画性や柱掘形の規模、出土遺物などから再整理し、鍛冶山西ブロックの構造を復元していくことであり、同時に周辺ブロックの再検討も必要となるであろう。

（角正芳浩）

Ⅳ　第120次調査

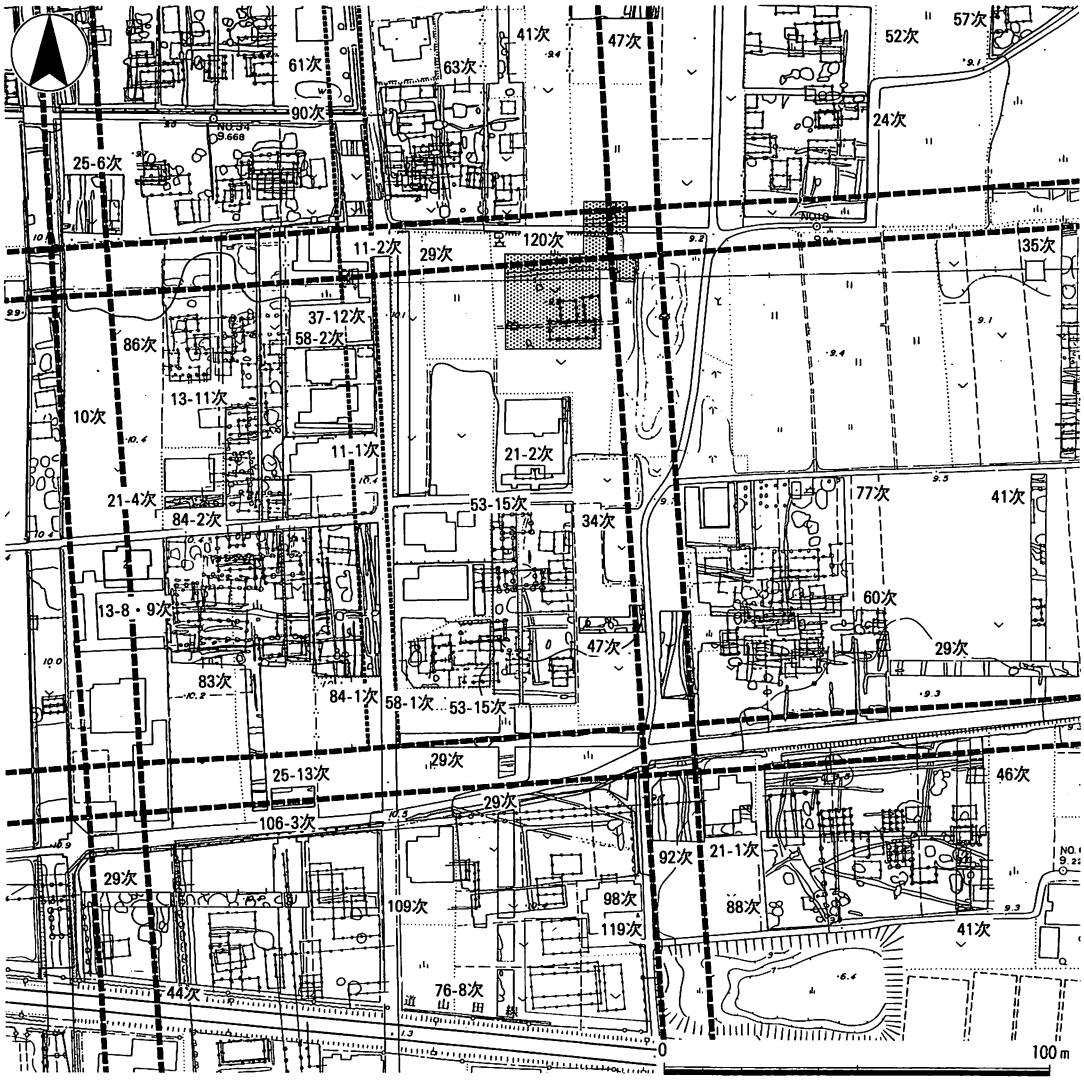
（6AFI－C・E，6AFG－R　西加座地区）

1　はじめに

経　過　第120次調査は、昭和60年度に行った第63次調査の南東側で実施した。調査面積は約800㎡で、現況は休耕田で畑地である。

目　的　史跡東半の地域では奈良時代後期に造営されたと考えられる一辺約120ｍを基本とする方格地割がみられることがこれまでの調査で明らかになっているが、今回の調査は、西加座南ブロックの北東隅の実態を解明するとともに、区画道路と区画溝の交差点の状況を把握することを目的として行った。調査は平成10年１月20日から開始し、平成10年３月31日に最終的に埋め戻しが終了した。

現　況　現況の表土から遺構面までの深さは、北西隅で0.4ｍ、南西隅で0.1ｍ～0.2ｍ、北東隅で深く0.6ｍ、南東隅0.3ｍである。遺構面は、赤褐色土で捉えた。遺構検出面の標高は南西で9.7ｍ、北東で9.3ｍ前後で北東隅に向かって緩やかに傾斜し、周辺の微地形で一番高い場所を調査した。遺構検出面までの基本的層位は、第１層灰色土（耕作土）、第２層黒褐色土（遺物包含層）、第３層赤褐色土（地山）である。



第18図　第120次調査　調査区位置図（１：2,000）

2　遺　構

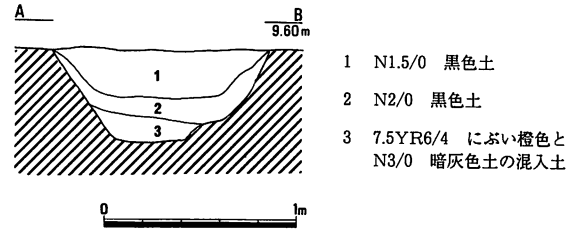
（1）奈良時代後期の遺構

この時期の遺構には、土坑２基、溝４条、道路１条がある。

ＳＫ7966　調査区の北東隅にある複数の小土坑が重なるものである。最下層から完形の土師器皿が出土している他、土師器杯、須恵器甕の細片が少量出土している。

ＳＫ7980　南北1.7ｍ、東西2.1ｍ、遺構検出面から深さ20㎝の不整形な楕円形の土坑で埋土は黒褐色土である。出土遺物には土師器杯・椀・皿・甕、須恵器甕がある。

ＳＤ6002・6050　ＳＤ6002・6050・7965・7970は方格地割をなす区画溝である。ＳＤ6002・6050は約70ｍ西で調査を実施した第86次調査の際に検出されている溝の延長にあたり東西道路ＳＦ6009の北側の区画溝がＳＤ6002、南側の区画溝がＳＤ6050である。道路の規模は溝の心々で約12.5ｍである。ＳＤ6002は北側に拡張した調査区で延長約11ｍを検出した。検出面で幅1.40ｍ、底で幅0.4ｍ、深さ0.4ｍである。溝の勾配は溝底が西端で標高8.70ｍ、東端で標高8.50ｍであり、東の方が低くなる。ＳＤ6050は調査区の西端から東へ約15ｍまでは溝の両肩が確認できたが、それに続く部分約８ｍについては攪乱土坑のためわずかに痕跡を確認できただけであり、さらに東については痕跡すら確認できなかった。これは複数の溝や攪乱土坑が重複することもあるが、ＳＤ7967の検出面は東端で標高9.25ｍ前後であり、ＳＤ6050の溝底の標高が9.40ｍ前後であることから溝の延長は削平されているかあるいはもともと東西道路と南北道路の交差点までは延びていなかった可能性が考えられる。ＳＤ6050は検出面で幅1.00ｍ～1.20ｍ、底で幅0.8ｍ、深さは0.1ｍ前後で非常に浅い。溝底の標高は前述のように全体に9.40ｍ前後



第19図　第120次調査　ＳＤ6050土層断面図（１：40）

		遺構の種別			
		ＳＢ	ＳＦ	ＳＫ	ＳＤ
奈良	後　期		6009	7980　7966	6002　6050　7965　7970
平安	初　期	7998　7999 8000　8003	6009	7990	6002　6050　7965　7970
	前Ⅰ期	7995　7996			
	前Ⅱ期	7989　7992 7993　7994 8002		7985　7986 7987　7988 8004	
	中　期	7991　7997 8001			
	後　期				7967　7968　7974　7976　7977 7978　7979　7981　7982　7983
時期不明				7984	7969　7971　7972　7973　7975

第４表　第120次調査　時期別遺構分類表

第20図　第120次調査　遺構実測図（１：200）

で東西方向の傾斜はみられない。ただ、調査区の中央付近では、土坑状に深くなる所が２ヶ所ある。西側の底の標高は9.30ｍ、東側は9.00ｍである。東側の埋土は第19図にあるように第１層と第２層が黒色土、第３層がにぶい橙色土と暗灰色土の混入土である。断面の形はほぼ逆台形である。

ＳＤ7965・7970　南北道路の西側の区画溝である。ＳＤ7965は北側の調査区でＳＤ6002と直交する状況で検出された。幅1.2ｍ、検出面からの深さは0.06ｍ～0.1ｍと非常に浅く、南に傾斜する。標高は8.8ｍ前後で、ＳＤ6002とは溝底レベルで約0.3ｍの差がある。ＳＤ7970は、東側に拡張した調査区で延長2.7ｍを検出した。幅は1.0ｍ、検出面からの深さは約0.1ｍで非常に浅い。溝底の標高は9.2ｍ前後である。北端は土坑状にやや深くなる。東西方向の区画溝ＳＤ6050との関係は、ＳＤ6050が交差点付近まで延びていない可能性があり、ＳＤ7970も北端の検出面の標高が9.25ｍ前後であることから、交差点まで延びず、ＳＤ6002・7965のように接する可能性は少ないと考えられる。

ＳＦ6009　方格地割の区画道路ＳＦ6009は北側の区画溝ＳＤ6002、南側の区画溝ＳＤ6050により、道路の規模は溝の心々で約12.5ｍであることが確認できる。両側の区画溝以外には道路上での轍の跡などは確認できなかった。道路面の標高はＳＤ6002の検出面では8.9ｍ前後、ＳＤ6050の検出面では9.3ｍ前後であり、北の方が0.4ｍ前後低くなっている。

区画溝・区画道路の存続時期　なお、これらの区画溝のうちＳＤ6002は埋土の最上層から近世以降の遺物が出土しており、比較的長い間、溝としての機能が継続していたようである。その他の溝については最終的な埋没の時期は明確ではないが、第86次調査など周辺の調査の状況から平安時代初期までは継続するであろう。区画道路についても同様である。

（２）　平安時代初期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物４棟、土坑１基、前代から引き続く溝４条、道路１条がある。

ＳＢ7998・7999 8000・8003　調査区の南東隅で重複する掘立柱建物である。柱掘形の重複関係からＳＢ8000よりＳＢ7998・7999の方が新しい。また、ＳＢ8003はＳＢ8000と重複する位置にあるがその前後関係は不明である。これらの建物の棟方向はＳＢ7998がＮ５°Ｗである他はすべてＥ２°Ｎで揃っている。

ＳＢ8000は東西棟建物で、桁行５間×梁行２間の規模で、柱間はどちらも2.4ｍ等間である。柱掘形は桁行筋の両端は一辺1.1ｍの方形、その他は1.2ｍ×0.8ｍの東西方向の長方形で、柱痕跡は径約30㎝である。柱掘形から土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・甕が出土している。

ＳＢ7998は南北棟建物で、桁行３間×梁行２間の規模で、柱間は桁行が1.9ｍ、梁行が2.1ｍである。柱掘形は一辺0.6ｍ～0.8ｍの方形であるが東側の桁行筋の方がやや大きい。柱痕跡は径約20㎝である。柱掘形から土師器杯・皿・甕、須恵器甕が出土している。

ＳＢ7999は東西棟建物で北面庇が付く。桁行は２間を確認したがさらに東へ続く。梁行は３間である。柱間は庇の出を含めすべて2.1ｍ等間である。柱掘形は一辺0.5ｍ前後の方形であるが、やや形がくずれている。柱痕跡は径約20㎝である。柱掘形から土師器杯・皿・甕、須恵器蓋・甕が出土している。

ＳＢ8003は東西棟建物で、桁行３間×梁行２間の規模で、柱間は桁行が1.9ｍ、梁行が2.1ｍである。柱掘形は一辺約0.5ｍの方形である。柱痕跡は径約20㎝である。柱掘形から土師器杯・皿・甕、須恵器蓋・甕が出土している。

ＳＫ7990　調査区の南東隅にある径2.9ｍの半円形の土坑でさらに南へ続く。検出面からの深さは10㎝前後で浅い。埋土は暗褐色土である。土師器杯・椀・皿、須恵器甕の他、土師器鍋のミニチュアが出土している。

（３）　平安時代前Ⅰ期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物２棟がある。

ＳＢ7995・7996　ＳＢ7995の東梁行筋はＳＢ8000の西梁行筋とほぼ重複するが、柱掘形の重なりからＳＢ8000より新しい。東西棟建物で桁行３間×梁行２間の規模である。柱間は桁行、梁行ともに1.9ｍ等間である。建物の棟方向はＥ２°Ｎで前代の建物の方向と同じである。柱掘形は一辺約0.6ｍの方形である。柱痕跡は径約30㎝である。柱掘形から土師器杯・皿・蓋・甕、須恵器杯・蓋・甕が出土している。

ＳＢ7996はＳＢ7995の北側に位置し、区画溝ＳＤ6050から約６ｍほど離れている。桁行２間×梁行２間の規模であるが桁行の柱間は2.1ｍ、梁行の柱間は1.3ｍであるため東西棟建物とした。棟方向はＥ０°Ｗである。柱掘形は一辺0.5ｍ～0.7ｍの方形である。柱痕跡は不明瞭で抜き取り痕跡が一部にみられる。柱掘形から土師器杯・甕が出土している。

（４）　平安時代前Ⅱ期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物５棟、土坑５基がある。

ＳＢ7989　ＳＢ7989の西梁行筋はＳＢ7996の西梁行筋とほぼ重複するが、柱掘形の重なりからＳＢ7996より新しい。東西棟建物で桁行５間×梁行２間の規模である。柱間は桁行が1.9ｍ、梁行が1.95ｍである。建物の棟方向はＥ０°ＷでＳＢ7996と同じである。柱掘形は径0.3ｍ前後の円形である。前代までの方形から円形に変わる。柱掘形から土師器杯・皿・甕、須恵器蓋、灰釉陶器椀が出土している。

ＳＢ8002　ＳＢ8002はＳＢ7995・8000と重複する位置にある桁行５間×梁行２間の東西棟建物で、棟方向はＳＢ7989と同じＥ０°Ｗである。柱間は桁行が1.8ｍ、梁行が1.9ｍである。柱掘形は約30㎝の円形である。柱掘形から土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・甕、灰釉陶器椀が出土している。

ＳＢ7992・7993・7994　調査区南西隅に位置する南北棟の掘立柱建物群である。柱掘形の重複から新しい順にＳＢ7992・7993・7994である。いずれも梁行は２間で、桁行は２間分を確認しており、さらに南へ続く。柱掘形は0.4ｍ～0.7ｍの円形あるいは楕円形である。柱間は梁行はいずれも2.1ｍであるが、桁行はＳＢ7992が2.1ｍ、ＳＢ7993が1.9ｍ、ＳＢ7994が2.0ｍである。いずれも柱掘形から土師器杯・皿・甕、須恵器蓋・甕が出土しているがＳＢ7992には灰釉陶器椀も含まれる。建物の棟方向はＳＢ7992が北に位置する東西棟建物ＳＢ7989と揃いＮ０°Ｓで、ＳＢ7993・7994はいずれもＮ５°Ｅである。

ＳＫ7985・7986・7987・7988　ＳＫ7985・7986は前述の南北棟建物群のすぐ北に位置し、一部が重複する土坑である。埋土はいずれも暗褐色土で、遺構の前後関係は不明である。出土した遺物からも前後関係は判断できない。ＳＫ7985は短軸1.9ｍ、長軸2.1ｍの不整形な楕円形で検出面からの深さは0.3ｍ前後、ＳＫ7986は短軸1.6ｍ、長軸1.7ｍの不整形な楕円形で検出

面からの深さは0.1m前後である。ＳＫ7986からの出土遺物は少ないが、ＳＫ7985からはまとまった遺物が出土しており、土師器杯・皿・蓋・台付杯・甕・鍋、須恵器杯・蓋、灰釉陶器椀・皿・段皿、製塩土器、土錘がある。

ＳＫ7987・7988は前述の南北棟建物群のすぐ東に位置し、一部が重複する土坑である。埋土はいずれも暗褐色土で、遺構の前後関係は不明である。ＳＫ7985・7986と同じ時期と思われ、やはり遺物からも前後関係を判断できない。ＳＫ7988はさらに南へ続き規模は確定しないが、ＳＫ7987は短軸1.6m、長軸2.1mの楕円形をしており、ほぼ同じ規模の土坑と思われる。検出面からの深さは、どちらも0.1m前後と浅い。

ＳＫ8004　調査区南端中央のＳＢ8002と重複する位置にあり、短軸1.4m、長軸1.6mの楕円形の土坑である。検出面からの深さは0.1m前後、他の土坑と同じく埋土は暗褐色土である。土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・甕、灰釉陶器椀が出土している。

（５）　平安時代中期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物３棟がある。

ＳＢ7991・7997　いずれも前代の南北棟建物群と重複する南北棟建物である。柱掘形はともに0.4m～0.5mの円形あるいは楕円形で柱掘形痕跡は径20cm前後である。柱掘形から土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・甕、灰釉陶器椀が出土している。ＳＢ7991は桁行３間×梁行２間の規模であるが、ＳＢ7997はさらに南へ続くため規模は確定しない。前代のＳＢ7992・7993・7994も含めて同規模の建物の建て替えが繰り返し行われたようである。建物の棟方向はＳＢ7991がＮ０°Ｓ、ＳＢ7997がＮ２°Ｗである。

ＳＢ8001　南北棟建物群のやや東に位置する桁行３間×梁行２間の東西棟建物である。柱間は桁行2.0m、梁行1.8mである。建物の棟方向はＥ５°Ｎである。柱掘形は約0.4mの円形である。柱掘形から土師器杯・甕が出土している。

（６）　平安時代後期の遺構

この時期の遺構には、溝10条がある。いずれも土師器杯・甕などが出土しているがその量は少なく、細片が多い。よって、後Ⅰ期、後Ⅱ期の区別はできなかった。

ＳＤ7967・7976　7977・7982　7983　調査区の東端に位置する南北方向の溝である。溝の幅は0.7m～1.1mで深さは現存で0.1mから0.3mである。いずれも溝底の標高は南端で9.4m前後、北端で8.9m前後で北に傾斜する。調査区の北端ではＳＤ7967・7976・7977が重複するが、埋土の重なりから一番新しい溝はＳＤ7976、古い溝はＳＤ7967である。また、調査区の東端中央付近では攪乱が激しく、溝の繋がりが分かりにくいので、遺構番号では別の番号で示したが、ＳＤ7976の延長にあたるのがＳＤ7983、ＳＤ7977の延長にあたるのがＳＤ7982と思われる。また、ＳＤ7967は東西方向の溝が分れ７mほど東へ延びている。それぞれの溝の振れはＳＤ7976がＮ３°Ｗ、ＳＤ7977がＮ６°Ｅ、ＳＤ7967がＮ０°Ｗで東西方向に延びる箇所についてはＥ６°Ｓである。

ＳＤ7974・7978　調査区の中央付近に位置する南北方向の溝で、溝の肩で１m前後しか離れいない。埋土はどちらも淡灰褐色土であり、溝の振れもほぼＮ２°Ｗで同じである。あまりにも近接するため、同時期に存在したものか堀り直しによるものかは判断しがたい。溝の幅はＳＤ7974が0.8m～1.3m、ＳＤ7978が0.8m前後である。溝の深さはどちらも0.1m～0.3mであり、勾配は南が高く、北が低い。

ＳＤ7968　調査区の西端に位置する南北方向の溝である。東西方向の溝ＳＤ7979と交差するが

埋土の重なりから南北溝の方が古い。他の溝と同様に溝の勾配は南から北へと低くなる。あまり真っ直ぐな溝ではないが溝の振れはほぼＮ３°Ｅである。溝の埋土は灰褐色土である。

ＳＤ7979・7981　調査区の西端中央から東西方向に延び、調査区の中央で鍵の手に南へ折れ、調査区の南端まで続く溝がＳＤ7979である。また、南北方向の溝に平行し、東西方向の溝に繋がる溝をＳＤ7981とした。両者は溝の心々間で約７ｍ離れている。区画溝としての意識があるのだろうが、今回の調査区内では他に同時期の遺構は確認されていない。

（７）　その他の遺構

その他時期不明の遺構として土坑１基、溝５条がある。

ＳＫ7984　調査区の南東隅に位置する土坑で、現在の耕作面から1.5ｍほど掘削されている。土取りによる攪乱土坑である。

ＳＤ7969・7971　7972・7973　7975　いずれも南北方向の溝で、埋土はしまりのない黒色土で耕作に伴う溝である。区画溝ＳＤ6050と重複することからその溝の遺物を含んでいる。溝の振れはＮ９°Ｅですべてきれいに揃っている。

３　遺　物

今回の調査では、奈良時代後期から平安時代後期にかけての土器が出土しており、遺物整理箱で69箱分ある。比較的まとまった遺物は奈良時代後期の遺物がＳＤ6050から、平安時代前Ⅱ期の遺物がＳＫ7985から出土している。

（１）　奈良時代後期の遺物

ＳＤ6050　大半の遺物は土坑状に深くなった箇所から出土している。埋土は３層に分れるが須恵器杯(12)は第１層と第３層の破片が接合し、短期間で埋没したものと思われる。

土師器　杯には器高の深い椀タイプの(2)と浅いタイプ(3)、粗製椀の系譜にある(4・5)がある。(2)は歪んでおり、口径17.6cm～18.5cm、器高5.8cmである。器壁の残りが悪く、調整が不明瞭であるが、底部外面と口縁部1/2ほどにヘラケズリを施し、内面は放射暗文を施す。また、底部内面には螺旋暗文がみられるがほとんど残っていない。(3)も底部外面はヘラケズリを施す。(4)は粘土接合の痕跡を残している。

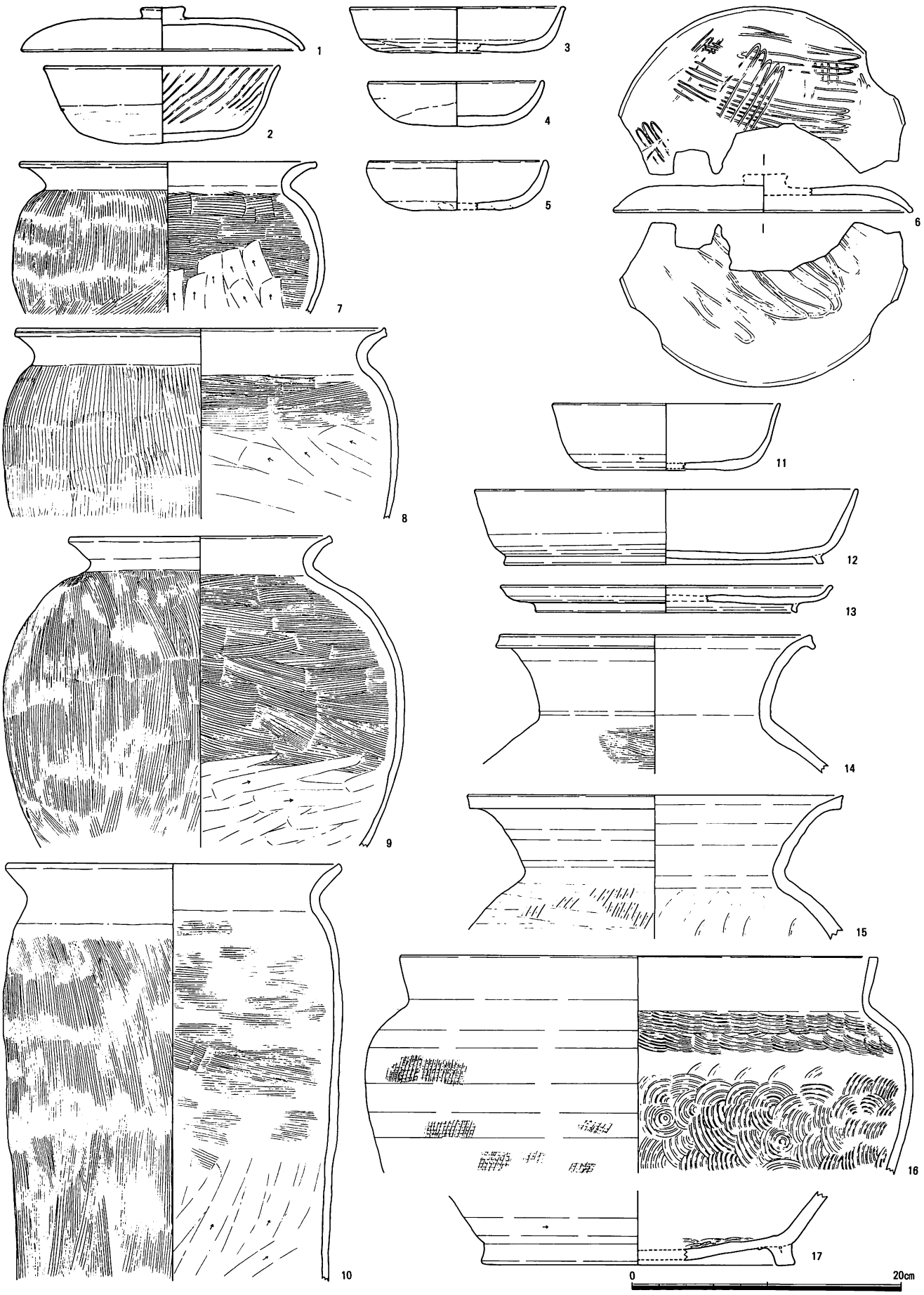
蓋(1)は器壁の残りが悪く、外面のヘラミガキ、内面の螺旋暗文もほとんど残らないがわずかに確認できる。(6)は内外面ともヘラケズリの後ヘラミガキを施す。(1)は口径21.2cm、器高3.3cmであるが、(6)は口径22.2cm、器高2.1cmで、やや偏平である。高杯や皿の可能性も考えたが、ヘラミガキの手法から蓋と判断した。

鍋(7・8)はともに口径と体部最大径がほぼ同じである。(7)は体部にやや丸みがある。破片のため把手が付くかどうか不明であるが、丸底になると思われる。

甕(9)は体部最大径が口径の1.5倍になる球胴の甕である。(10)は口径と体部最大径がほぼ同じで肩部の張りもあまりなく胴部がまっすぐのびる長胴甕である。体部外面のタテハケは４段確認できるので、あと１段で底部になると思われる。鍋、甕ともに外面はタテハケ、内面上部はヨコハケ、下半はヘラケズリで調整する。

須恵器　須恵器には高台の付かない杯Ａ(11)と高台の付く杯Ｂ(12)、有台盤(13)、頸部が長く、口縁部が外方に開く甕Ａ(14・15)、口頸部が短く広口の甕Ｂ(16)がある。

杯Ａ(11)は口径17cm前後で器高は５cm前後である。底部外面には回転ヘラケズリが施される。杯Ｂ(12)は口径28.6cm、器高5.7cm、底径23.8cmと大型のもので、底部外面



第21図　第120次調査　遺物実測図ＳＤ6050：１～17

には墨痕と判読不明の墨書がある。回転ヘラケズリが不定方向のナデのような痕跡で消されているので、転用硯として使用した可能性もある。

有台盤(13)は口径24.8cm、器高2.0cm、底径19.6cmで、口縁端部は上方へ挽き上げられるだけである。高台は外端で接地する。

甕A(14・15)のうち(14)は口縁端部に内傾する面をもち、(15)は外傾する面をもつ。甕B(16)は口径35.8cmと大型で外面は格子状のタタキをナデ消している。高台径23.5cmの底部(17)は同一個体と思われる。

その他、ＳＤ6050と重複する溝から出土した遺物の中には、ＳＤ7971出土の土師器杯(96)・台付杯(97)、ＳＤ7973出土の須恵器蓋(98)、ＳＤ7968出土の須恵器蓋(99)など本来はＳＤ6050の埋土に含まれていたと考えられるものがある。

ＳＤ7970須恵器　(100)は底径11.0cmの鉢である。底部のみの破片で外面には暗オリーブ色の自然釉がかかっている。

ＳＫ7980土師器　杯には器高の浅いタイプ(87)と深い椀タイプ(88)がある。(87)は口径16.0cm、器高3.5cmで底部外面と口縁部1/3ほどにヘラケズリを施す。(88)は外面をヘラケズリの後粗いヘラミガキで調整し、内面には放射暗文を施す。甕(89)は口縁部のみの破片で内面にはヨコハケを施す。

ＳＫ7966土師器　土坑群の最下層で地山に接する状況で出土した皿(90)は、口径17.0cm、器高2.3cmで底部はユビオサエ後ナデで調整される。

（２）　平安時代初期の遺物

この時期の遺物は今回の調査では比較的少なく、掘立柱建物の柱掘形から図示できる遺物が出土している。

ＳＢ8000土師器　杯(78)は口径12.7cm、器高2.9cmで底部はユビオサエ後ナデで調整されるが、外端を強くナデ、口縁部の立ち上がりとの境が明瞭となる。口縁部はヨコナデし、端部は丸く内弯する。

須恵器　高台の付く杯B(79)と付かない杯A(80)は同じ柱掘形から出土している。(80)は口径16.5cm、器高6.2cmで非常に深いものである。底部外面は回転ヘラケズリされ、口縁部の立ち上がりは明瞭な稜をなす。

ＳＢ7998土師器　杯(81・82)はともに口縁部ヨコナデ、底部はユビオサエ後ナデで調整される。

須恵器　蓋(83)は口径15.8cmの偏平なもので、外面は全体に灰オリーブ色の自然釉をおびている。土師器、須恵器とも別々の柱掘形から出土している。

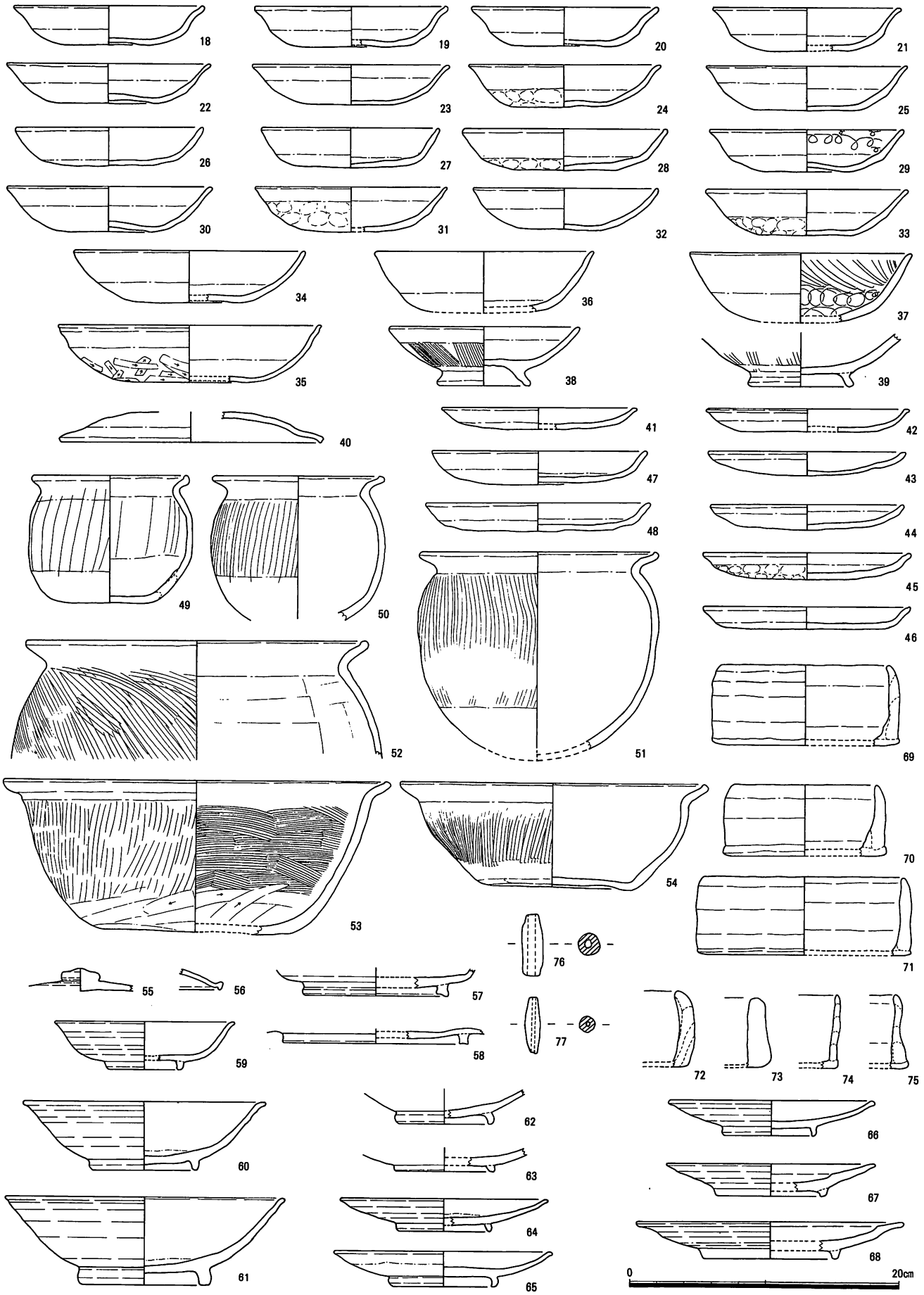
ＳＢ8003土師器　皿(84)は口径16.9cm、器高3.0cmで、底部外面はユビオサエの後粗いヘラケズリを施し、口縁部はヨコナデを施すが、外面の一部には粗いヘラミガキがみられる。内面は放射暗文と螺旋暗文が施される。胎土は密で雲母片を多く含んでおり、他の土師器とは異なり、斎宮周辺地域以外の製品の可能性がある。

（３）　平安時代前Ⅰ期の遺物

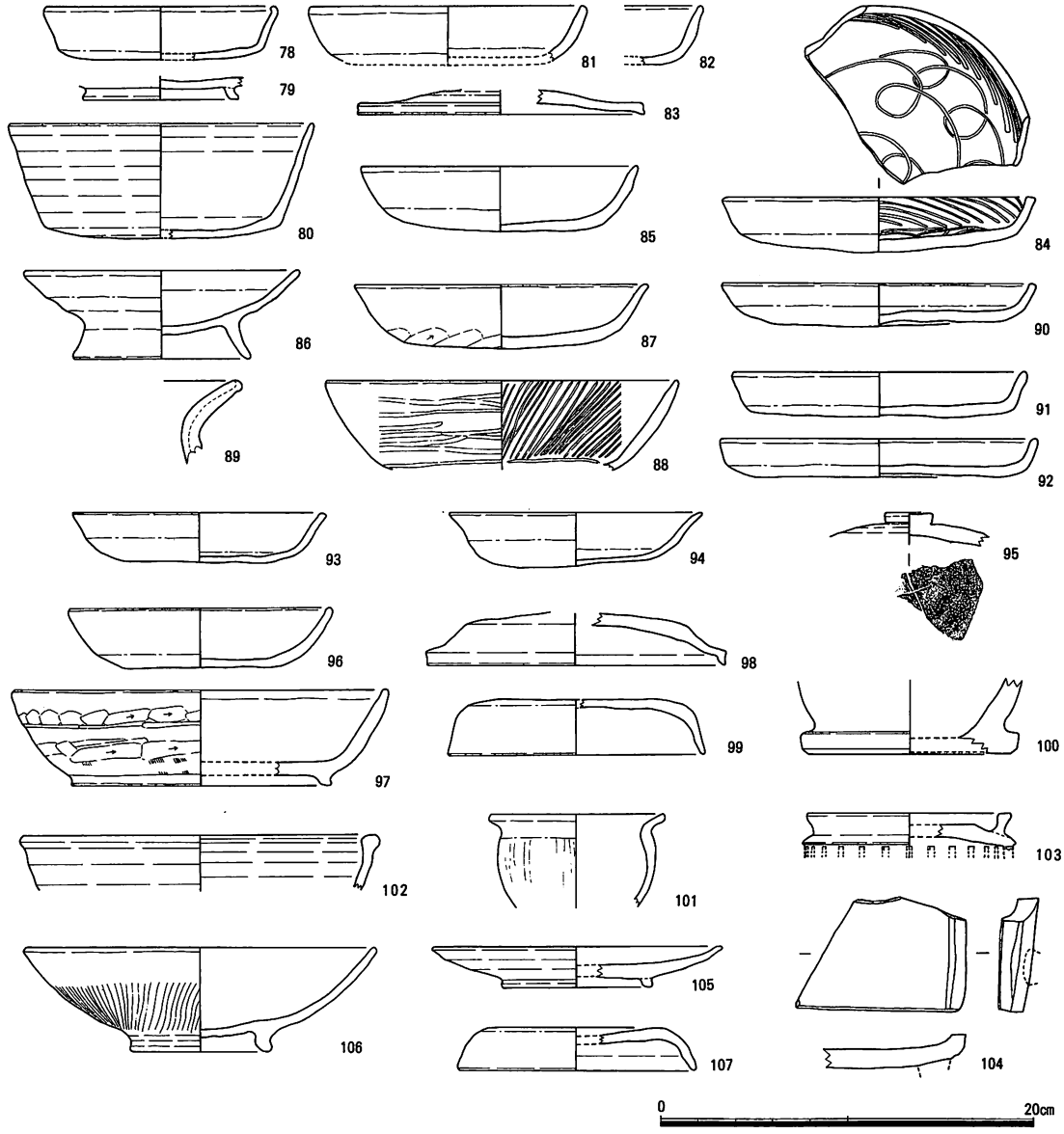
この時期は掘立柱建物が２棟あるだけで遺構が少ないためほとんど遺物は出土していない。

ＳＢ7996土師器　杯(85)はほぼ完形である。口径は15.0cm～15.7cmで歪みがあり、器高は3.5cmである。底部外面はユビオサエ後ナデ、口縁部は1/2以上ヨコナデする。

（４）　平安時代前Ⅱ期の遺物



第22図　第120次調査　遺物実測図ＳＫ7985：18～77



第23図　第120次調査　遺物実測図ＳＤ8000：78～80、ＳＢ7998：81～83、ＳＢ8003：84、ＳＢ7996：85、ＳＢ7997：86、ＳＫ7980：87～89、ＳＫ7966：90、ＳＫ7990：91・92、ＳＫ7987：93～95、ＳＤ7971：96・97、ＳＤ7973：98、ＳＤ7968：99、ＳＤ7970：100、遺物包含層出土：101～107

ＳＫ7985土師器　杯は前代までのものに比べて器壁が薄くなる。口縁部の形態により、外反するが端部はやや内弯する前Ⅰ期までの様相を残すもの(18・19)、外反するもの(20～25)、ほぼ平坦な底部からまっすぐのび、断面が弓状のもの(26～35)、器高が深く椀に近いもの(36・37)がある。(35)を除けば、すべて口縁部をヨコナデし、底部はオサエ後ナデを施すｅ手法で調整する。(35)は底部外面から口縁部の約1/2にかけてヘラケズリを施す。また、(29)の内面には螺旋暗文が、(37)の内面には放射暗文と螺旋暗文が施される。法量は(34)が口径17.2cm、器高3.9cm、(35)が口径19.6cm、器高4.3cmと大きいが、他は口径13cmから15cm前後、器高3.0cm～3.4cmである。なお、口縁部のヨコナデの範囲は器高の1/2のものと1/3のものがあるが前者が主体をなす。椀に近い(36)の器高は4.7cm前後、(37)の器高は5.8cm前後である。杯には高台のつくもの(38・39)がある。高台の接合部から口縁部の約1/2にかけてタテハケを施す。

蓋(40)は口径19.8cmで残存高2.3cmのものである。口縁部はヨコナデ、天井部はユビ

オサエ後ナデ、内面はナデで調整する。内面に煤が付着する。

皿は杯と同様、口縁部と底部の境が明瞭でなく断面弓状のもの(41～45)ほぼ平坦な底部から口縁部が外反気味にまっすぐのびるもの(46～48)がある。法量は、口径15cm前後、器高1.6cm～2.0cmのもの(41～46)と、口径16cm～17cm、器高2.0cmを越えるもの(47・48)がある。

甕は口径11.8cm、器高9.5cmで平底の小型の甕(49)、口径12.8cmとやや大きくなるが小型の甕(50)、口径18.8cmの球胴の甕(51)、口径25.5cmの長胴甕(52)がある。いずれも口縁部はヨコナデ、胴部の外面はタテハケ、下方はナデ、内面は板状工具によるナデで調整される。

鍋は口径の方が体部最大径より大きくて偏平で平底になる(53・54)がある。体部外面はタテハケ、下方を横方向のヘラケズリで調整する。内面は(53)がヨコハケと下方をヘラケズリ、(54)はナデで調整する。

須恵器　蓋のつまみの部分(55)と口縁端部(56)、杯の底部(57・58)がある。

灰釉陶器　椀は腰の張りが比較的弱く、ゆるやかに立ち上がり口縁端部がやや外反する(59～61)がある。(59)は口径13.4cmで器高も3.6cmと浅いものである。(62)も椀である。

皿は腰部から横に開くように口縁部へひきあげ、内面底部は偏平に近い(64～66)がある。(63)も皿であろう。

段皿には広縁段皿(67)と狭縁段皿(68)がある。

これらの灰釉陶器の高台は低く内側が内弯し、外側は直線に近い逆台形状のものが多いが、(62・65)のように内側が内弯が顕著で外側も弧状になり弱い稜をなす所謂「三日月高台」もみられる。いずれも猿投窯の編年の黒笹90号窯式の時期に相当するものである。

黒笹90号窯式

製塩土器　口径の復元できたものは(69)が12.2cm、(70)が10.6cm、(71)が14.6cmである。器高は5.2cm～6.0cmである。胎土は密で砂粒をほとんど含まないものと粗で2mm～10mm前後の砂粒を多く含むものがある。すべて所謂「志摩式製塩土器」である。

土錘　やや中膨らみで細身の管状土錘(76・77)が出土している。

ＳＫ7987土師器　杯には口縁部の外反の弱い(93)と強く外反する(94)がある。いずれも底部外面はユビオサエ後ナデ、口縁部はヨコナデを施す。

須恵器　(95)は須恵器蓋であるが内面中央に「×」のヘラ記号がみられる。

（５）　平安時代中期の遺物

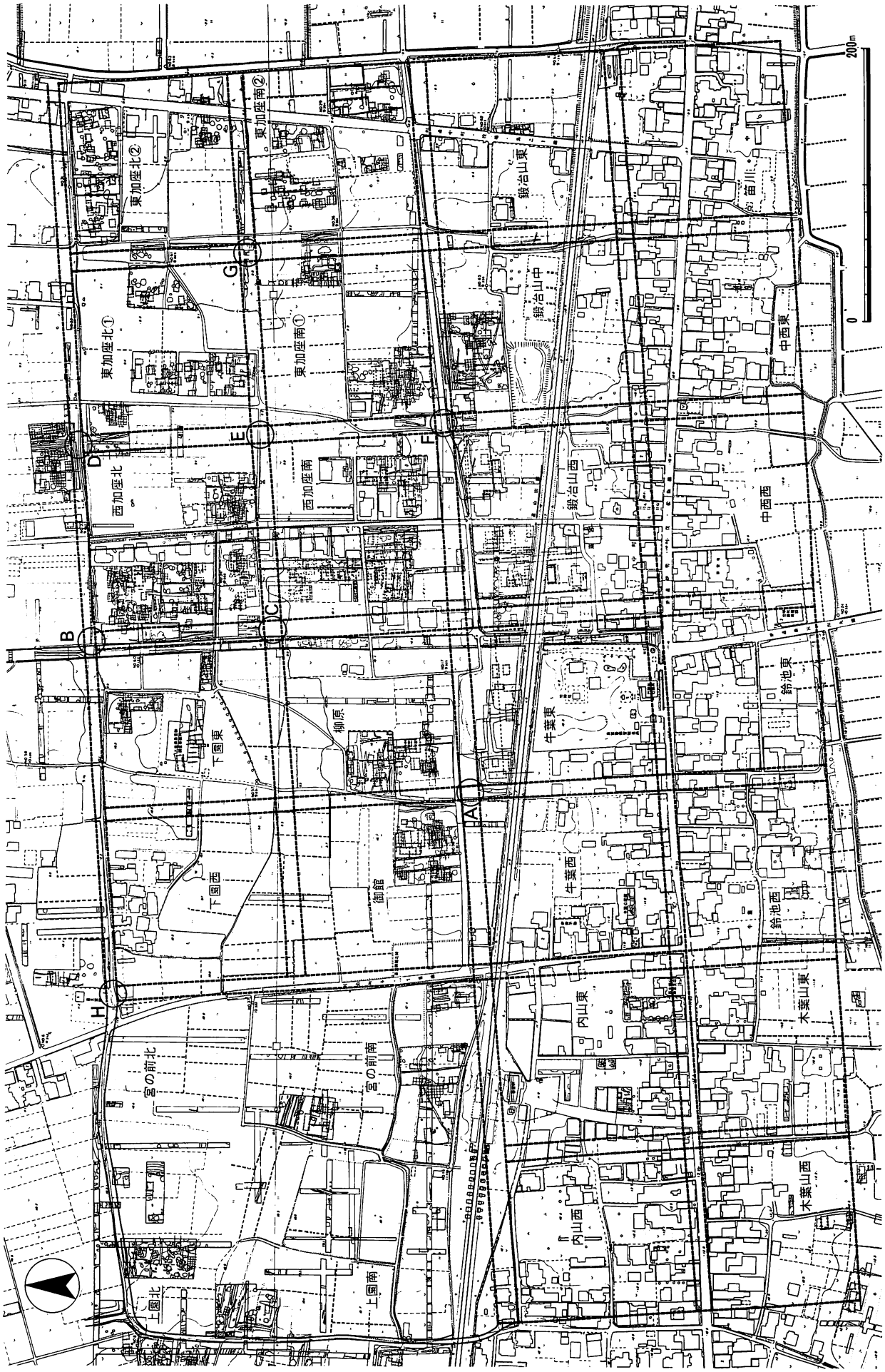
中期の遺物も掘立柱建物が３棟あるだけで遺構が少ないため、ほとんど出土していない。

ＳＢ7997土師器　柱掘形から台付杯(86)が出土している。口径15.0cm、器高4.8cm、高台形9.6cmである。断面弓状の杯部にやや高い高台が付くものである。

（６）　遺物包含層出土土器

須恵器　(102)は玉縁口縁の鉢で、細片のため口径・傾きに若干のズレがあるかもしれないが、斎宮跡での出土例は少ないものである。(107)の杯は調査区の東端に位置する掘立柱建物ＳＢ7999の西側梁行の庇の付近にみられる焼土痕跡直上から出土したものである。削平された竪穴住居に伴う遺物の可能性もある。

灰釉陶器　皿(105)は内面全面にオリーブ黄の釉がかかるもので、口径15.8cm、器高2.2cm、高



第24図　調査が実施された方格地割の交差点（１：4,000）

台径8.2cmである。ＳＫ7985に伴う可能性がある。

土師器　台付杯(106)は高台の接合部から口縁部の約1/2にかけてタテハケを施し、ＳＫ7985に伴う可能性がある。

（７）　その他の遺物

今回の調査で出土したその他の遺物には、緑釉陶器35点、黒色土器６点、製塩土器10個体以上、風字硯１点、円面硯２点、青磁椀４点、青磁壺１点、土錘８点、ミニチュアの土師器鍋２点、墨書土器５点、墨痕のみられる土器６点、朱の痕跡のみられる土器２点、漆の付着する土器３点、釘などの鉄製品15点がある。

(101)はミニチュアの土師器鍋、(103)は円面硯、(104)は風字硯でいずれも遺物包含層から出土している。

４　まとめ

今回の調査では区画道路と区画溝の交差点の状況を一部ではあるが、明らかにすることができた。東西方向の区画道路ＳＦ6009の北側の区画溝ＳＤ6002は交差点で途切れることなく西から東へと続く。しかし、南側の区画溝ＳＤ6050は交差点の手前で途切れている。交差点付近は攪乱土坑と平安時代後期の溝が重複しており、溝の痕跡すら確認しにくい状況であるため、本来はＳＤ6002同様に南北道路を横切っていた可能性は残る。一方、この道路と交差する南北道路の区画溝については北側、南側とも西側の区画溝を検出したが、北側ではＳＤ7965がＳＤ6002と繋がるのに対し、南側ではＳＤ7970が交差点の手前で途切れている。よって、西加座南ブロックの北東の隅は東西方向の区画溝と南北方向の区画溝が繋がらない可能性も考えられるが、交差点付近の状況が良くないため断定はしがたい。

これまで方格地割の交差点を調査した例は第24図にあるようにＡ～Ｈ地点まで８ヶ所がある。Ａ地点では、東西方向の区画道路を南北方向の区画道路の東側の区画溝が横切っている。ただし、西側については調査区外のため不明である。このような例はトレンチ調査のため不確定ではあるもののＧ地点でもみられる。また、東西方向の区画溝が南北方向の区画道路を横切る例はＨ地点以外の各調査地点で確認されており、基本的には東西方向の区画溝は西から東へと繋がると考えてよさそうである。ただ、その要因については、自然地形の傾斜を反映するものか、区画をするという行為の際の意識の問題なのか、さらに他の要因によるものか定かではない。

また、今回のように南北道路の区画溝と東西道路の区画溝が接しない調査例はＢ地点とＤ地点でもみられるが、検出面と溝底のレベル差が10cm前後と浅いため本来は繋がっていたものが削平された可能性も考えられる。

なお、今回の調査では平安時代初期の４棟を含め14棟の掘立柱建物を検出したが、調査区内において建物配置などの規格性はみられない。　　（上村安生）

参考文献

①齊藤孝正・後藤健一　『須恵器集成図録』　第３巻東日本編Ｉ　雄山閣出版　1995
猿投窯編年の年代観は本書による。

第121次調査

（6ADH　篠林，6ADJ－D　宮ノ前北，6AEK－A・C　下園，
6AEM　御館，6ADN　内山地区）

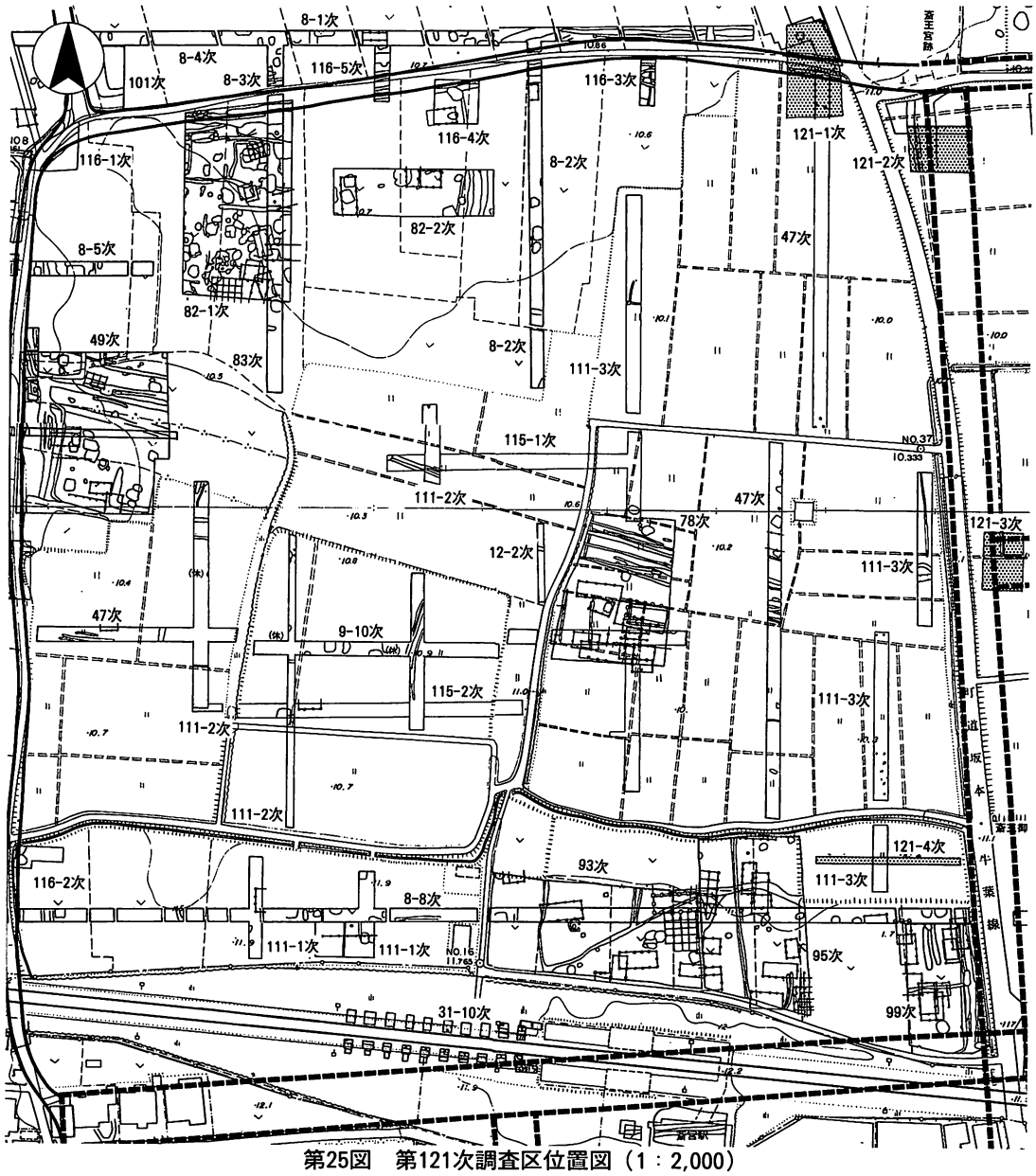
1　はじめに

経　過　　方格地割北西隅は、他の区画と異なり、平安時代後期に設置され、4区画が大きな1区画をなし、区画道路は緩やかに蛇行し、線形・幅等は現在の農道とほぼ一致する。

目　的　　第121-1次調査は、宮ノ前北ブロックの北東隅に位置する。第121-2次調査は下園西ブロックの北西隅で、「斎王の森」の南側にあたり、第42-2次調査区（昭和57年度）の南辺に接する。第121-3次調査区は下園西・御館ブロック西辺の字界に位置する。上記3か所の調査区は、方格地割区画施設の確認を目的として設定した。

第121-4次調査区は、第118次調査区の北側の低地に位置し、第111-3次調査区と直交する。現況は、南側より一段低くなっており、遺構状況の確認を目的とした。

調査面積は、4箇所の調査区を合わせて約840m²である。



第25図　第121次調査区位置図（1：2,000）

2　第１２１－１次調査

（１）遺　構

調査区は、東西の農道を境に北側の高い面と南側の低い面とに明確に分かれる。低地部分では、旧耕作土による削平により攪乱を受けたと考えられ、遺構は認められない。北側の一段高い調査区で、平安時代末期から鎌倉時代の井戸１基、溝５条、道路１条等が確認された。

ＳＤ8011　調査区中央よりやや北側に位置し、東西に延びる溝である。上幅約0.8m・底幅約0.6m、深さ約0.2mで、中央部から東側では２段の落ち込み状をなしている。西半の溝底の標高は約9.8mでほぼ平坦である。

ＳＤ8012
ＳＦ8014　調査区中央部に位置し、約0.5m低くなった段の下をＳＤ8011に平行して、東に流れる溝である。上幅約0.4m、下幅約0.3m、深さは南の一段低い面から約0.05mを残すのみである。ＳＤ8011とは、溝底の心々距離が約4.2mほどであり、この両溝を側溝として、道路ＳＦ8014が存在したと考えられる。

ＳＤ8016　ＳＤ8012より新しく、ＳＤ8012が削平を受け底部を残すのみという状態に対し、検出面から約0.4m～0.6mの深さまで更に掘り込んでいる。埋土は、上層では淡灰褐色粘質土、下層では暗黄灰色含礫砂層（径５㎝程の小円礫を多量に含む）であった。陶器鉢の底部が１点出土した。

ＳＤ8017　ＳＤ8012よりも新しくその両端東壁面と西壁面で一部を検出した。埋土は淡灰褐色粘質土であった。西壁面近くから山茶椀の底部が１点出土した。

ＳＥ8010　調査区の北西で検出した円形の素掘り井戸である。確認面での直径は約2.1mで、壁面は検出面から約0.3mで、淡黄灰色の砂礫層と脆くなり、作業の安全上から深さ約1.6mで調査を止めた。埋土は、小石を多く含む黒褐色土である。平安時代後期～鎌倉時代にかけての土師器杯・鉢・鍋、山茶椀が一括出土した。

ＳＤ8013　調査区のほぼ中央に位置し、ＳＤ8011とＳＤ8012に挟まれた真中に位置し、現道の北側側溝とほぼ一致する。時期は、不明である。

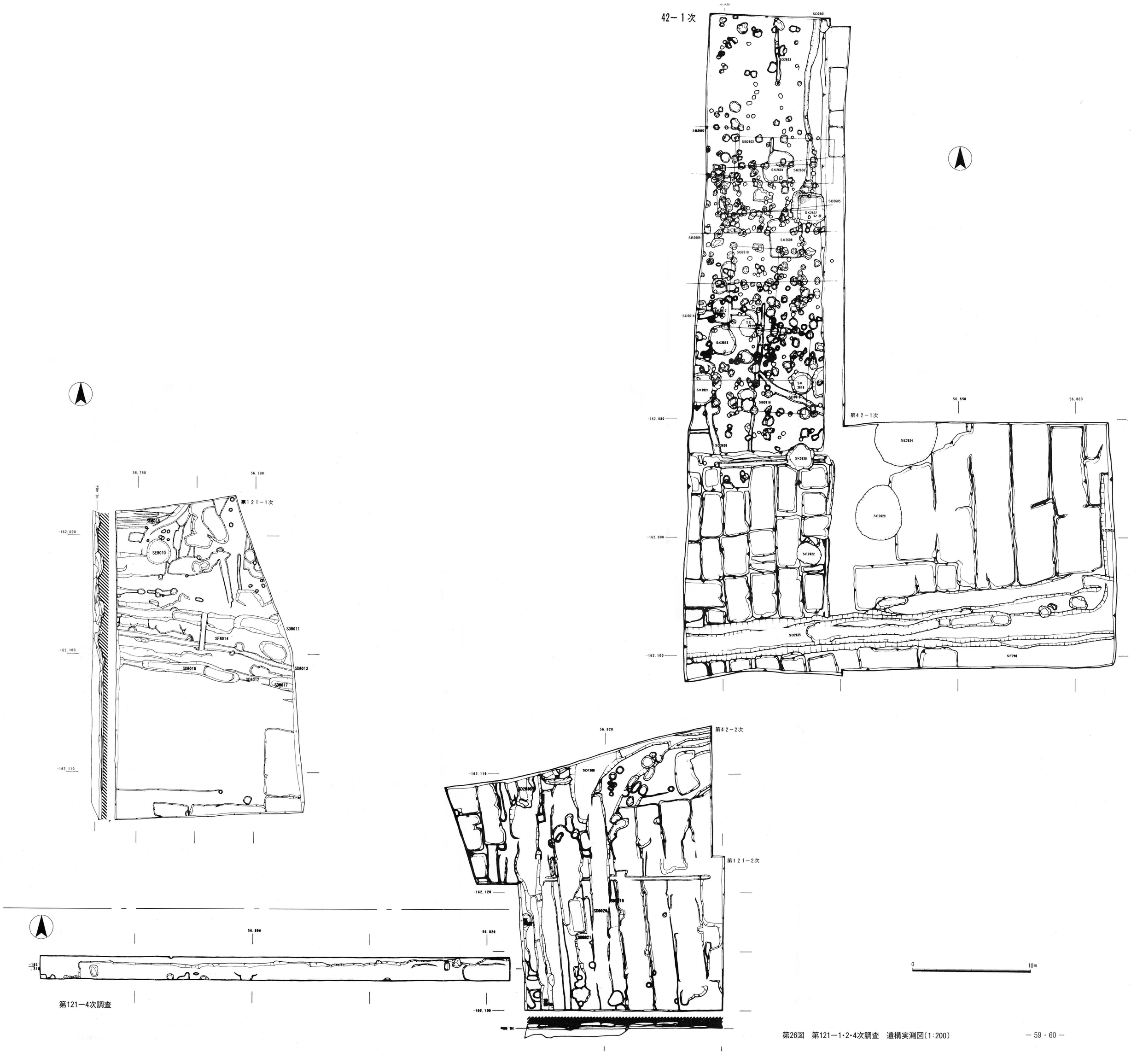
（４）遺　物

ＳＥ8010 土師器　土師器杯・小皿・鉢・甕と山茶椀が出土した。土師器杯（１～20）は、杯から皿への変化を示しており、大別して口径に対して器高が高く、やや丸みをもつ底部から口縁部がわずかに内弯気味に立ち上がるＡ類（１～５）と口径に対して器高が低くなり、口縁部の立ち上がりが緩く皿状に近い器形を示すようになるＢ類（６～20）がある。さらに、Ｂ類は口縁部が肥厚し、口縁外面に面をつくるB_2類（12～14）、底部と口縁部の境が不明瞭で断面が弧状に近くなるB_3類（15～18）に細分できる。また、底部中央部に焼成前に外面から直径８㎜ほどの穿孔を施した杯が２点ある。

杯の法量は、Ａ類で口径14.2㎝～17.1㎝・器高3.0㎝～3.6㎝、B_1類で口径14.4㎝～15.6㎝・器高2.5㎝～3.3㎝、B_2類で口径14.4㎝～16.1㎝・器高2.5㎝～2.7㎝、B_3類で口径15.3㎝～16.8㎝・器高3.2㎝～3.6㎝である。

Ａ類・Ｂ類ともに口縁部をユビオサエで成形したのち、ヨコナデ調整する。底部外面は不調整のままであり、底部内面を不定方向にナデ調整する。

小皿（21・22）は、口径8.7㎝～8.9㎝・器高1.3㎝～1.5㎝で、断面弧状をなし、ヨコナデ調整する。



第26図　第121－1・2・4次調査　遺構実測図(1:200)

鉢(23)は、口径20.8cm・器高6.2cm・底径13.6cmで、底部に貼り付けられた口縁部がユビオサエで成形され、口縁上部が屈曲気味にヨコナデされ外反して開く。口縁端部は、わずかに内傾する面をもつ。

数個体が出土しており、ともに口縁部が大きく「く」字形に屈曲して開くものである。口縁部の屈曲が緩く外反気味に開く(25)と大きく屈曲して開く(24・26・27)がある。体部外面はユビオサエの圧痕を残す(24～26)とヨコハケ調整する(27)があり、体部内面は、上半部をヨコハケ調整し、下半部を横方向にヘラケズリする。

山茶椀　口縁部がわずかに内弯して開き、端部が外反し、断面方形のやや高い高台が貼り付けられる(28)と、口縁部が直線的に開き、高台は低く押し潰れたようなものとなる(29～31)の2種がある。

白磁椀　(32)は、口縁部の小片であり、口径は不測。口縁端部の断面形は、玉縁状を呈する。

ＳＤ8011　灰釉陶器椀(34)、山茶椀(35～38)等が出土しているが、量的には山茶椀が多い。

灰釉陶器　高台径6.8cmの灰釉陶器椀(34)の高台部分のみの出土である。高台断面は、やや丸みをもった逆三角形状をなす。

山茶椀　山茶椀(35～37)は、底部と高台のみの破片で、高台断面は逆台形状をなし、低く外方に踏ん張る。

陶器鉢　山茶椀系の鉢(38)は、高台径14.8cm。高台断面が逆台形をなし、ほぼ直立する。

ＳＤ8012 山茶碗　山茶椀(39)は、高台径8.4cm。高台は、断面が逆三角形をなし、低い。高台外面にはモミガラ圧痕が残る。

ＳＤ8015 陶器壺　壺(40)は、底径6.4cmの蛇の目高台をもつ小型の壺の底部と考えられる。外面は浅黄色である。

ＳＤ8016 土師器　羽釜(41)は、推定口径21cmで、口縁部は直立し、鍔は水平に引き出される。口縁部内面を板ナデし、体部外面にはユビオサエの成形痕を残す。鍔を貼り付けた後ヨコナデ調整する。

その他の遺物
墨書山茶椀　山茶椀(33)は、調査区北東隅の小穴から出土した。高台内側に墨書が見られ、一部が欠けているものの「上」とも判読できる。

3　第１２１－２次調査

現況は、町道から「斎王の森」へと通じる低地部分に盛土を行い、道路跡と溝跡が整備されている。調査は、整備の盛土を重機によって除去することから始めた。遺構検出面は、低地部分の地表面から約0.3m下であり、そのほとんどは、近代の粘土採掘及び水田の開墾等によって削平を受けており、遺構の保存状況は極めて悪い。

(１) 遺　構

確認できた遺構についても検出面から浅い部分では、数cmを残すのみであった。平安時代末期から鎌倉時代の南北溝を4条検出し、方位はいずれも約N4°Wとなる。

ＳＤ2635　調査区の北西隅に位置する。幅約1.5m、深さ約0.3mである。第42-2次調査区から南への続きであり、埋土は暗灰色粘質土で粘性が非常に強い。

ＳＤ8018　ＳＤ2635の南に位置し、方位もほぼ同じでＮ４°Ｗの南北溝である。幅約0.9m、深さ約0.3mで一部掘り下げられる個所が見られる。埋土は暗褐灰色粘質土である。

ＳＤ8019　調査区中央で検出した。幅0.3m、深さ約0.5mほどでわずかに南に傾斜する。山茶椀の底部が1点出土した。埋土は暗灰褐色粘質土であった。

ＳＤ8020　ＳＤ1580の南に位置し、この溝の延長と考えられる溝であるが、北端は粘土採掘による削平を受ける。幅約1.3m、深さは約0.05mでその上面のほとんどが削平を受けたものと思われる。溝はわずかに南に傾斜し、埋土は暗褐色粘質土である。土師器杯、須恵器壺、山茶椀が出土している。

ＳＤ8021　調査区の中央よりやや西側で検出した。ＳＤ8020と平行する南北溝である。上幅約0.6m、深さは約0.1mである。時期は不明である。

（３）遺　物

ＳＤ8018 山茶椀　(56・57)は、高台の断面形が逆台形をなすもので、直立する(56)とやや外開する(57)があるが、比較的高い。

ＳＤ8020 土師器　土師器杯(51)、須恵器壺(55)、山茶椀(58)が出土している。杯(51)は、平坦な底部から大きく内弯した口縁部が開き、端部が大きく外反する。器壁は薄い。口縁部下半部から底部をユビオサエで成形し、口縁部上半部をヨコナデする。

須恵器　杯(55)は、高台径7.0cmで、高台部は底部端からやや内側に貼り付けられ、断面方形で直立する。

山茶椀　(58)は、高台径6.7cmで、高台断面が逆台形で直立する。高台外面にモミガラ圧痕が残る。体部は、丸味をもち、大きく内弯して開くものと思われる。

ＳＤ8019 山茶椀　(59)は、高台径9.0cmの低く、小さな高台が貼り付けられる。

ＳＫ8022 土師器　杯(50)は、推定口径14cm、器高2.8cmで、口縁部と底部の境が不明瞭となり器形全体が丸味をもつ。口縁部が肥厚し、端部外面はヨコナデによりわずかに凹む。

包含層　粘土採掘坑から土師器杯(52～54)等が出土した。口径14.0cm～14.4cm・器高2.7～3.2cmで、緩く内弯する口縁部が端部で外反して開く。底部は、平らなもの(52)と凹むもの(53・54)がある。口縁部の下半にはユビオサエの成形痕が残り、上半はヨコナデ調整される。

表土層直下から、緑釉陶器陰刻花文椀(60)が出土。高台径8.1cmで、断面方形の直立する高台が貼り付けられる。４葉の花弁と間弁が陰刻され、浅黄色を呈する。

４　第１２１－３次調査

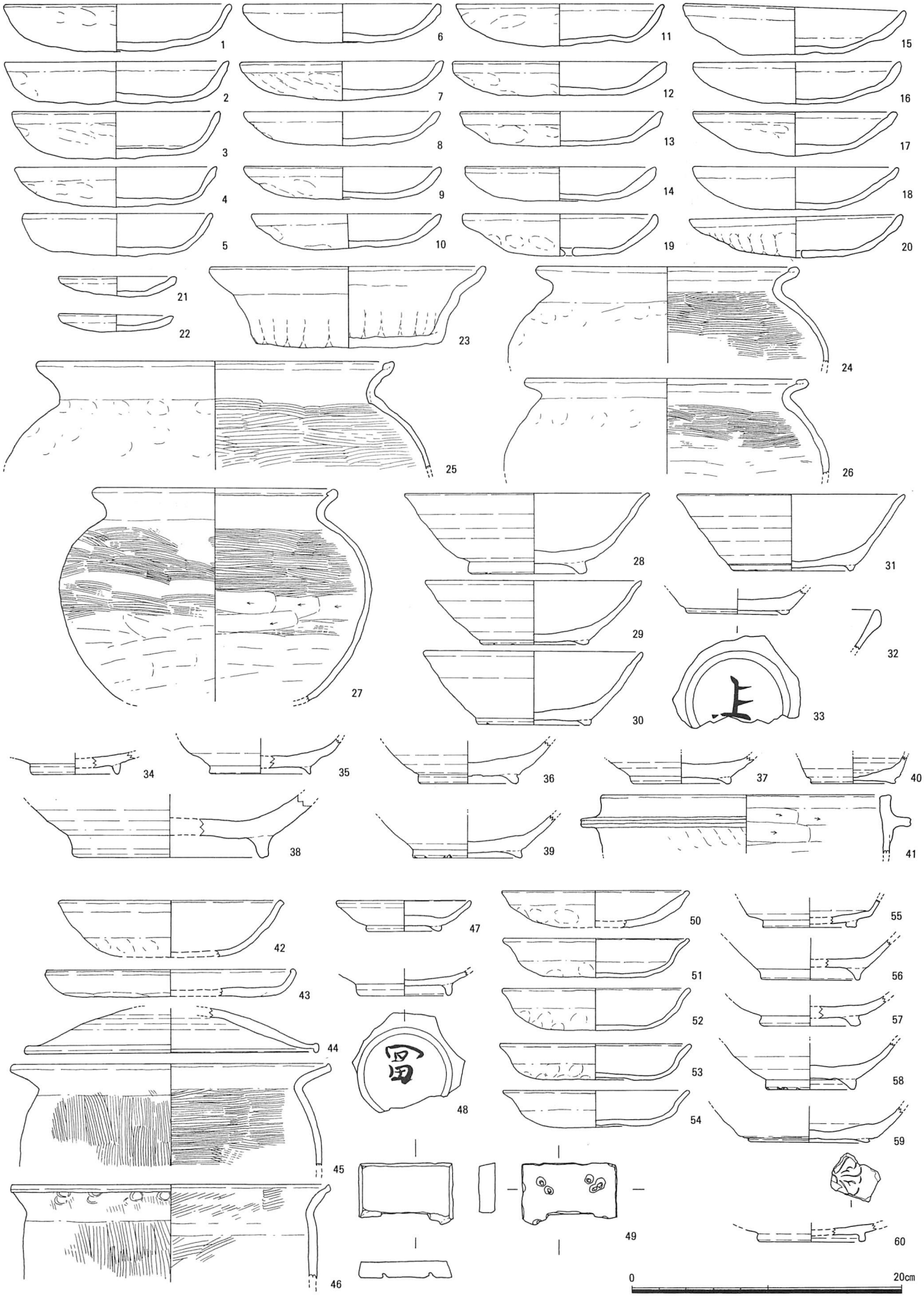
（１）遺　構

「斎王の森」から南に延びる南北区画道路と方格地割北から２列目の東西区画道路との交差点を確認する目的で設定した調査区ではあったが、近代の瓦粘土採掘のため、遺構面が攪乱され、区画施設の遺構は確認できなかった。調査面は、現表土上面から約0.9mで、遺構面は標高9.0m～9.3mである。

（２）出土遺物

粘土採掘の攪乱坑から、平安時代前期の土師器杯・皿・甕、須恵器蓋、平安時代後期の灰釉陶器椀、山皿のほか石帯が出土している。

土師器　杯(42)は、口径17.0cm・器高4.2cmのやや深目の椀に近い器形をなす。底部から口縁部下部にユビオサエの成形痕を残し、口縁部を広くヨコナデ調整する。皿(43)は、口径18.9cm・器高2.1cmで、口縁部は内弯して外開し、端部は内側に巻き込まれる。甕(45・46)は、長胴甕であり口縁部が大きく「く」字形に屈曲する(45)、屈曲の少ない(46)がある。ともに体部内面をヨコナデ、外面をタテハケ調整し、口縁部をヨコナデ調整する。ヨコナデ調整が弱い(46)では、ハケ目痕が残り、口縁部外面には竹



第27図　第121次調査　出土遺物

管文が施される。

須恵器　蓋(44)は口径22.0cmで、陣笠状の天井部をなし、口縁端部は水平に引き出され、下方に丸く引き出される。

灰釉陶器椀　(48)は、高台径7.2cmの三日月高台をもつもので、底部外面に「冨」の墨書が薄く認められる。

小椀(47)は、口径10.3cm・器高2.3cmで低い高台が貼り付けられる。

石帯　(49)は、長辺3.55cm・厚0.6cmの巡方で、長方形の透かしをもつ。裏側には、帯への止め孔が対角線上に2孔1対で4か所ある。

5　第121－4次調査

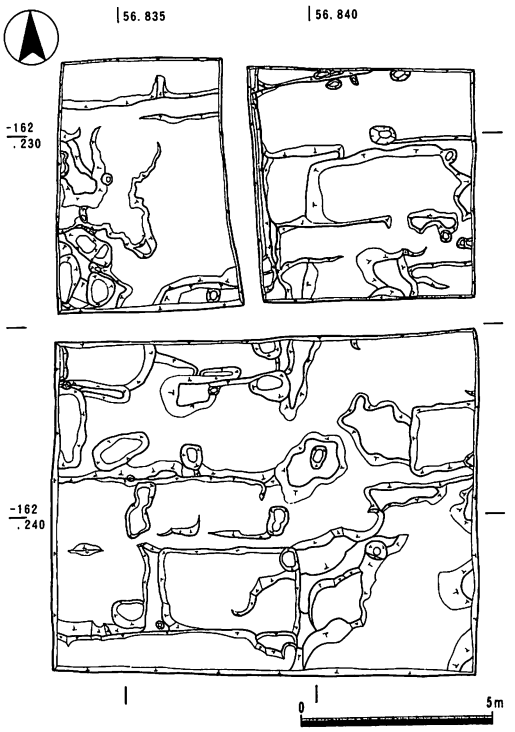
第99次及び第118次調査区の北に位置するこの調査区は、聞き取り調査及び周辺地形から、かつては第99次及び第118次調査区から農道へ続いていたものである。調査の結果、遺構・遺物とも削平されていた。

6　まとめ

第121次調査は、斎宮跡方格地割の北西隅部における区画施設である道路・溝の確認を目的とした調査であり、当該地区の方格地割北辺の区画施設の埋没時期は、平安時代後期から鎌倉時代であることが確認されるとともに、その区画は、史跡東部における直線的な地割りではなく、緩く蛇行していることも平成8年度の調査結果と同様である。区画外周が、史跡東部の方格地割と繋がる「斎王の森」付近での状況は、「斎王の森」と町道坂本・牛葉線下にあり不明である。「斎王の森」から南に延びる南北道路は、第121-2次調査区で東西の側溝を確認し、道路幅約4.0mと判断される。

下園西ブロックと御館ブロックの境を東西に区画する道路と、交差点については近代の粘土採掘により確認できなかった。しかし、攪乱坑から出土した遺物は、当該区画内が平安時代には機能していたことを裏付けているものと思われる。

（石渕誠人・駒田利治）



第28図
第121-3次調査区　遺構実測図(1:200)

第122次調査

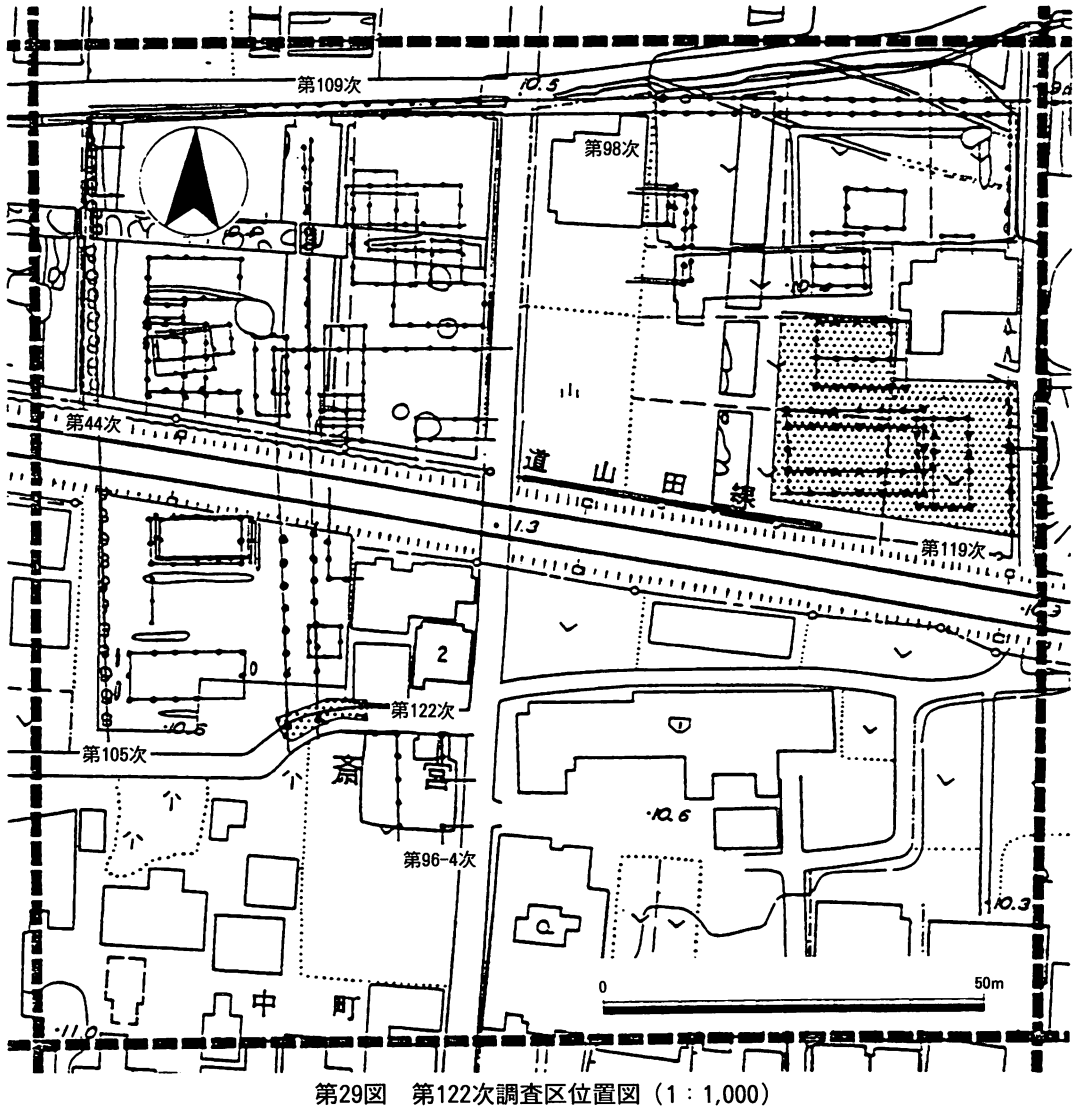
（6AFN）

1　はじめに

経　過　第122次調査は、第119次調査と同じく斎宮跡の「内院」と推定される鍛冶山西ブロック内に位置し、調査予定地内には第44次・第105次・第109調査で検出されている内郭柵列ＳＡ7150・7170が存在することが想定されている。ＳＡ7150はこの地点から更に南へ直進するのか、或いは一度東に折れ、第96-4次調査で確認されているＳＢ6840に繋がり、鍵型の内郭を形成するかについては当該地区の調査に委ねられていた。

目　的　この間、地元住民の要望を受け町建設課で町道舗装計画が予定されていたため、舗装工事に先立ち、内郭柵列ＳＡ7150の状況を確認するため計画調査として実施したものである。調査は、町道舗装工事のうち斎宮字鍛冶山2758-8番地で28m²を対象として、平成10年１月５日から同年１月14日まで行った。

現　況　調査の結果、調査区の北部分を中心に既存の水道工事による撹乱が認められ、遺構面は損なわれていた。調査区の南部分は遺構の保存状況も良く、道路整地層約0.2ｍの下層に黒褐色粘質土の遺物包含層約0.25ｍが堆積し、その下層で黄褐色粘土層の地山を確認し、遺構はこの面で検出された。遺構検出面の標高は9.5ｍ～9.9ｍである。



第29図　第122次調査区位置図（1：1,000）

2　遺　構

内郭柵列ＳＡ7150及び後出する南北柵列ＳＡ7170の柵列柱穴をそれぞれ１穴確認するとともに、小さな柱穴を確認した。しかし、遺物は、遺物包含層及び柱穴からも出土量も少なく、かつ細片であり時期判断の資料とはならない。従って、確認された柱穴については、これまでの時期判断に従い報告する。

（１）奈良時代後期

ＳＡ7150

第44次調査区南東隅部で、西側柱３間が確認されて建物と想定したＳＢ2705は、第105次調査で確認された南北方向の柵列ＳＡ7150の６間分の延長線上に位置することが確認され、第109次調査でＳＢ2705の北妻柱筋で東に延びる柵列ＳＡ2705が９間確認されたことにより、内郭を構成する柵列であることが判明した。しかし、柵列の南及び東方面での状況は、調査が行われておらず不明であった。ただ、南では第105次調査区と道路を隔てた南東部で現状変更による第96-4次調査が行われており、10尺等間の大型建物の柱列を確認していた。ＳＢ6840は、南北方向に３間の東側柱列と北妻柱１間を確認していたが、鍛冶山西ブロック内における建物配置を検討するため行った10尺方眼の検討結果から、ＳＡ7150は第105次調査区で検出した南端から２間南で東に折れ、ＳＢ6840に繋がることも考えられ、試案として提示した。しかし、詳細な検討は、当該地区の発掘調査を待たねばならなかった。

今回の調査で東に折れると想定された地点で、保存状況は必ずしも良くはないが一辺約100cm・深さ約12cmの略方形の柱穴を確認したが、東側には柱穴の存在が認められず、ＳＡ7150は東に折れず、更に南に延びるものと判断した。従ってＳＢ6840は、桁行４間以上、梁行３間以下の南北棟の掘立柱建物であると判断される。柱穴の標高は、9.5ｍである。出土遺物は、土師器細片のみである。

ＳＡ7170

第105次調査で内郭柵列として、ＳＡ7150の東約4.5ｍの位置で、ほぼ平行して南北方向に延び、調査区内では６間分検出した。その後、第109次調査で北への延長が確認され、総長23間(67.6ｍ)が確認できている。北辺では、外郭柵列ＳＡ6780の手前２間で途切れる。南へは、今回の確認により更に直進するものと推定される。検出した柱穴は、一辺約120cmの方形、深さ約40cmで、比較的保存状況は良い。柱穴底の標高は、9.5ｍである。遺物は、土師器細片のみである。

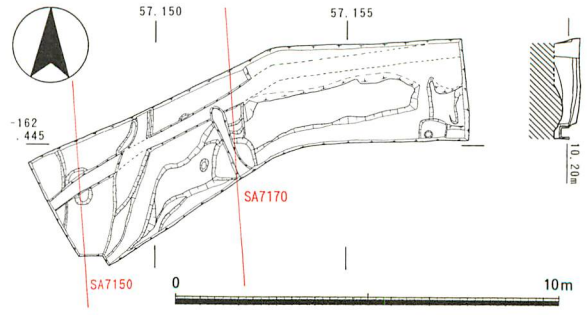
3　まとめ

ＳＡ7150

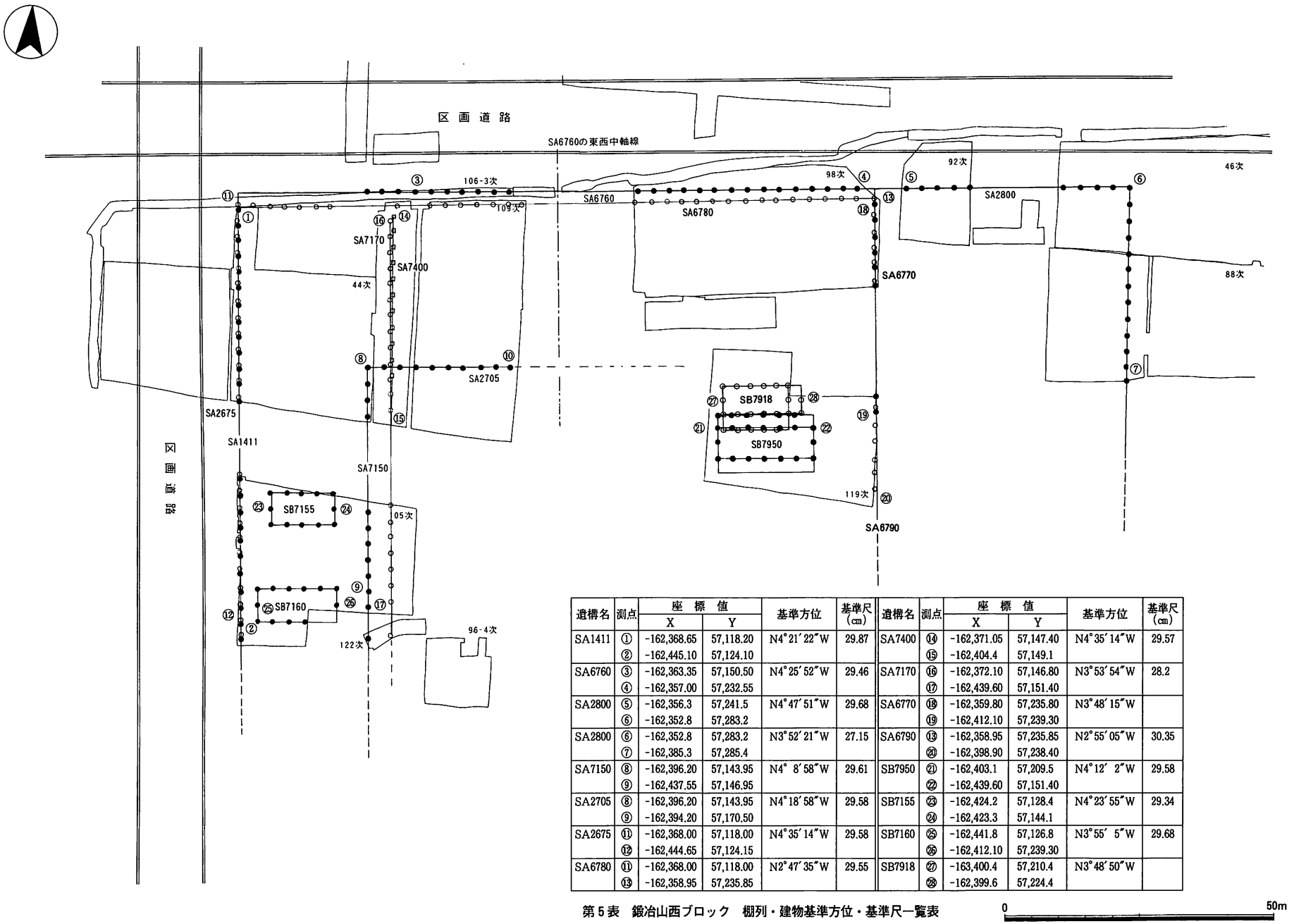
ＳＡ7150は、外郭西辺柵列ＳＡ1411の東約23.6ｍ(80尺)で柱筋を揃え、第122次調査で確認した柱穴から北へ17間の地点で直角に東に折れ、外郭北辺柵列ＳＡ6760の南約32.6ｍ(110尺)で柱筋を揃えるＳＡ2705となり、内郭柵列を構成する。また、調査地点から、東のＳＢ6840に繋がることなく、更に南に延びる柵列と考えられる。

ＳＡ7170

ＳＡ7170は、外郭柵列のＳＡ1411に後出するＳＡ2675に柱筋を揃える南北柵列であり、ＳＡ7150・7400に後出する柵列と考えられる。



第30図　第122次調査　遺構実測図（1：200）



遺構名	測点	座標値 X	座標値 Y	基準方位	基準尺(cm)	遺構名	測点	座標値 X	座標値 Y	基準方位	基準尺(cm)
SA1411	①	-162,368.65	57,118.20	N4°21′22″W	29.87	SA7400	⑭	-162,371.05	57,147.40	N4°35′14″W	29.57
	②	-162,445.10	57,124.10				⑮	-162,404.4	57,149.1		
SA6760	③	-162,363.35	57,150.50	N4°25′52″W	29.46	SA7170	⑯	-162,372.10	57,146.80	N3°53′54″W	28.2
	④	-162,357.00	57,232.55				⑰	-162,439.60	57,151.40		
SA2800	⑤	-162,356.3	57,241.5	N4°47′51″W	29.68	SA6770	⑱	-162,359.80	57,235.80	N3°48′15″W	
	⑥	-162,352.8	57,283.2				⑲	-162,412.10	57,239.30		
SA2800	⑥	-162,352.8	57,283.2	N3°52′21″W	27.15	SA6790	⑬	-162,358.95	57,235.85	N2°55′05″W	30.35
	⑦	-162,385.3	57,285.4				⑳	-162,398.90	57,238.40		
SA7150	⑧	-162,396.20	57,143.95	N4° 8′58″W	29.61	SB7950	㉑	-162,403.1	57,209.5	N4°12′ 2″W	29.58
	⑨	-162,437.55	57,146.95				㉒	-162,439.60	57,151.40		
SA2705	⑧	-162,396.20	57,143.95	N4°18′58″W	29.58	SB7155	㉓	-162,424.2	57,128.4	N4°23′55″W	29.34
	⑨	-162,394.20	57,170.50				㉔	-162,423.3	57,144.1		
SA2675	⑪	-162,368.00	57,118.00	N4°35′14″W	29.58	SB7160	㉕	-162,441.8	57,126.8	N3°55′ 5″W	29.68
	⑫	-162,444.65	57,124.15				㉖	-162,412.10	57,239.30		
SA6780	⑪	-162,368.00	57,118.00	N2°47′35″W	29.55	SB7918	㉗	-163,400.4	57,210.4	N3°48′50″W	
	⑬	-162,358.95	57,235.85				㉘	-162,399.6	57,224.4		

第5表　鍛冶山西ブロック　棚列・建物基準方位・基準尺一覧表

0　50m

第31図　鍛冶山西ブロック主要遺構・座標測定位置図（1：1,000）

柵列ＳＡ7150・7170は、ともに10尺等間を基準として計画されたものであり、１間は29.4～29.5cmを基準としている。

次に、斎宮跡方格地割の施行に伴う基準方位並びに基準尺の設定にかかわる課題について、中心殿舎が確認されていない段階で課題も多いが、この鍛冶山西ブロックの柵列を中心に検討を加えてみる。

基準方位

斎宮跡の遺構の方位については、これまでの調査でも建物の方位を中心に検討が加えられ、史跡東部の方格地割における奈良時代後期から平安時代前期では北に対して４°ほど西に振っており、時代が降るとともに西に振る角度を減じ、平安時代中期には北に対して東に偏り、後期になると再び北に対して西に振る傾向が認められてきた。一方、方格地割側溝も幾度となく掘り返しが認められるが、側溝の検出事例から北から４°西に振ることが確認されている。この４°の数値は、概数であり、分或いは秒の単位での数値ではない。今回、鍛冶山西ブロックにおける方格地割施行と相前後して設けられたと考えられる柵列を中心に国土調査法による第Ⅵ座標系の数値によりこれまでの事実関係を検証してみる。

奈良時代後期後葉に設置されたと考えられる外郭柵列ＳＡ1411，6760，2800は、北から西に4°21′22″～4°47′51″振り、この時期に区画内を区画した内郭柵列ＳＡ7150・2705は、10′の誤差をもつが、西に4°08′58″～4°18′58″振る。また、この時期に造営されたＳＢ7950・7155の棟方向は、北から西に4°12′02″・4°23′55″振るが、同時期と考えられるＳＢ7160は3°55′05″とわずかに振りが小さい。

一方、柵列の第Ⅱ期にあたるＳＡ2675・6780・7170・6770は、北から西に4°35′14″～2°47′35″とばらつきが大きいが、4°未満の角度を示すものが多くなる。建物においてもＳＢ7950・7155に後出するＳＢ7918では、3°48′05″と同じく4°未満の値を示しており、方格地割創設時は基準方位を北から西に4°21′22″～4°47′51″に求めて計画されたと考えられる。その後、方格地割の再編成或いは変遷を通じて遺構配置は、次第に西方位に振る度合が小さくなったと考えられる。基準方位の確定は、中心殿舎が確認されていないこと、座標数値の読みとりに正確さを求めることが課題となっており、方格地割の基準方位の検討と合わせて今後の大きな課題となる。(註1)

基準尺

奈良時代後期における建物配置並びにその建築にあたっての基準単位は、検出遺構柱痕跡から29.4～30.0cmの数値が得られているが、実際の建築状況からは個々の柱穴では、ばらつきが多く基準尺を特定することは困難な状況にある。しかし、方格地割施行時の奈良時代後半から平安時代初期では、基準尺を29.6cm前後において計画されたと推定することが可能である。　（駒田利治）

（註）

(1) 座標数値は、1/20の遺構実測図を概報作成のため縮小編集した1/100遺構図から読みとった数値であり、±10cm程度の誤差があると考えられる。座標数値の正確さを期するため、或いは調査基準点間の誤差修正のため、平成10年度から図面管理も兼ねて、既存実測図（1/100）のデジタル化によるコンピューターへの入力作業を行っており、近い将来正確な検討が可能となる。

付編１　第118次調査出土和同開珎付着物の分析

１　はじめに

平成９年度の第118次調査において、地鎮に関連する遺構とみられるＳＸ7860が見つかり、土師器杯内部に和同開珎５枚が裏向きに置かれ、土師器高杯で蓋をするようにして埋納されていた。これらの和同開珎は劣化がすすみ、銭貨の形状を保つことも困難な状態であったために、平成10年度事業として、これらの保存処理を行い、あわせて銭貨表面の付着物を分析調査する事とした。保存処理と分析は、㈶元興寺文化財研究所に委託した。今回はこの分析調査の結果について報告する。

２　試料の分析

（１）使用機器及び分析条件

銭貨の付着物は、顕微鏡などの観察で布の一部と見られたため、下記の機器及び条件で分析を行なった。

使用機器

・フーリエ変換型赤外分光光度計（FT-IR）（日本電子㈱製　JIR-6000）

試料に赤外線を照射し、そこから得られる分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物の種類を同定する。

測定条件：ＫＢｒ錠剤法＊　分解能４$^{-1}$cm、検出器ＴＧＳ

（＊ＫＢｒ（臭化カリウム）錠剤法　試料をＫＢｒと混合、圧縮し、錠剤を作成して行なう分析法）

・生物顕微鏡（㈱オリンパス　ＢＸ－50）

・実体顕微鏡（㈱オリンパス　ＳＺＨ－ＩＩＬＤ）

分析の方法

（２）付着物の分析

布の残存が僅かであり、経糸と緯糸を区別する事ができなかったため、分析は表出した繊維を採取して行った。

組織観察

組織観察では、和同開珎５枚のうち、２枚に僅かに布が観察された（図版１）。実体顕微鏡下では、比較的採取が容易な（130）から繊維を数本採取し、生物顕微鏡で繊維の側面観察を行った。繊維種同定に重要な繊維断面の観察は、試料が少なく不可能であった。

FT－IR分析

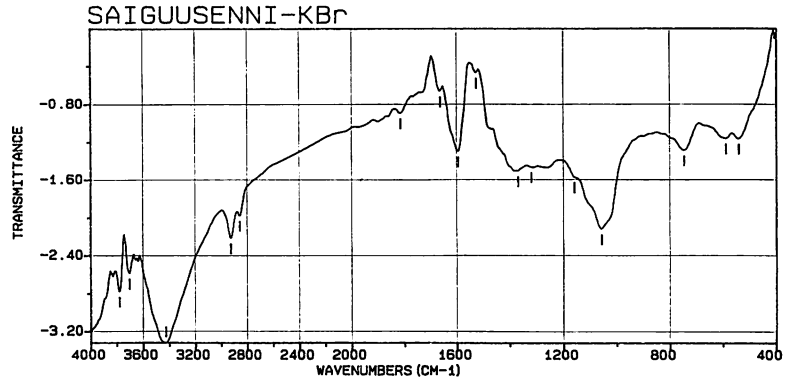
（130）から繊維を微量採取し、ＫＢｒ錠剤法で分析を行なった。比較として、大麻、苧麻も同様に分析を行った。

３　分析の結果

生物顕微鏡による組織観察の結果、繊維の幅は20～25μｍで、繊維側面に縦の条線、所々に横の条線が見られた（図版１下）。以上により、布の繊維は麻系（大麻か苧麻）のじん皮組織である。

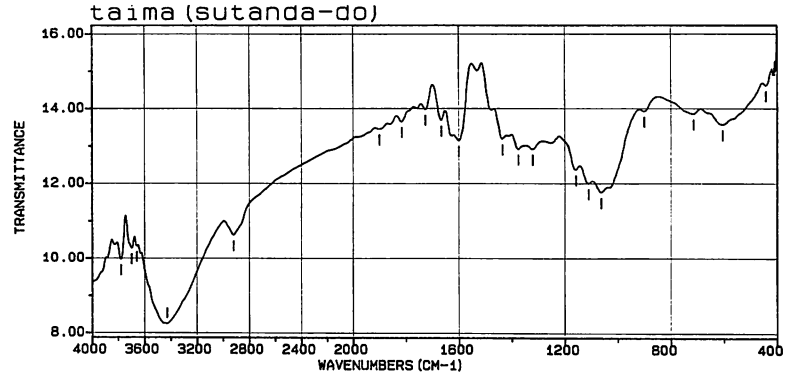
また、FT－IR分析をあわせて行った結果、繊維は苧麻ではなく、大麻の可能性が高い（第１図）。

付着繊維の
ＦＴ－ＩＲチャート



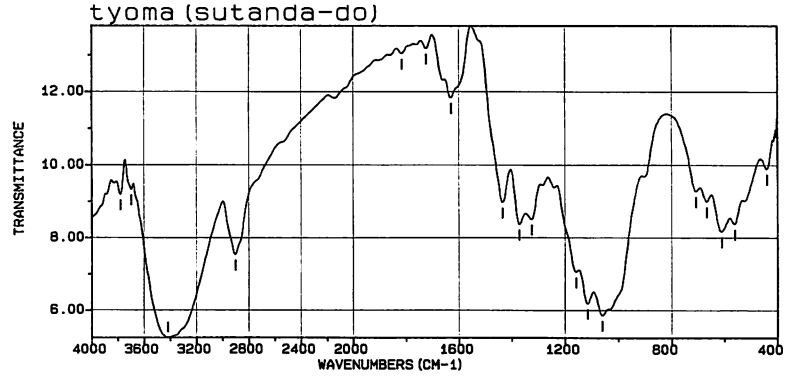
RESOL	: 4cm-1	3779.84	-2.77	1319.09	-1.46
SCANS	: 1000	3702.70	-2.58	1159.02	-1.57
AMPGAIN	: x8	3428.86	-3.32	1056.81	-2.12
P.INT	: 2cm-1	2927.45	-2.21	746.33	-1.29
BEAM	: single	2858.02	-1.97	588.19	-1.16
S.SPEED	: TGS	1814.71	-0.89	539.98	-1.16
S.NUMBER	: 630	1664.29	-0.66		
M.DATE	: 9/8/98	1594.86	-1.29		
		1527.36	-0.46		
		1369.23	-1.51		

大麻の
ＦＴ－ＩＲチャート



RESOL	: 4cm-1	3779.84	9.98	1434.80	13.19
SCANS	: 585	3698.84	10.27	1375.01	12.92
AMPGAIN	: x8	3658.35	10.33	1321.02	12.92
P.INT	: 2cm-1	3430.78	8.25	1159.02	12.37
BEAM	: single	2921.66	10.63	1110.81	12.00
S.SPEED	: TGS	1899.56	13.45	1062.60	11.77
S.NUMBER	: 417	1814.71	13.65	900.60	13.93
M.DATE	: 11/26/97	1726.00	13.98	715.47	13.86
		1666.22	13.68	605.55	13.57
		1600.65	13.15	441.62	14.62

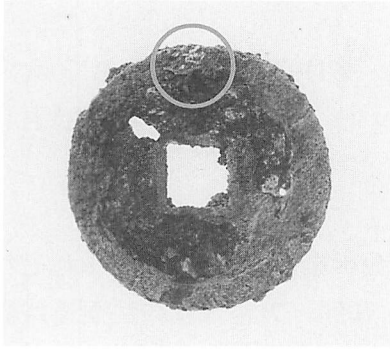
苧麻の
ＦＴ－ＩＲチャート



RESOL	: 4cm-1	3779.84	9.20	1159.02	7.07
SCANS	: 450	3696.92	9.34	1116.60	6.19
AMPGAIN	: x16	3419.21	5.22	1060.67	5.86
P.INT	: 2cm-1	2902.38	7.54	707.76	9.28
BEAM	: single	1814.71	13.05	667.26	9.00
S.SPEED	: TGS	1724.07	13.19	611.33	8.18
S.NUMBER	: 414	1629.57	11.84	561.19	8.38
M.DATE	: 11/26/97	1434.80	8.98	439.70	9.90
		1371.16	8.37		
		1324.87	8.52		

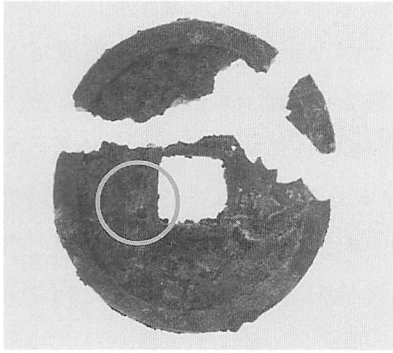
第１図　付着繊維と比較サンプルのFT-IRチャート

図版１　第118次調査出土和銅開珎の付着物

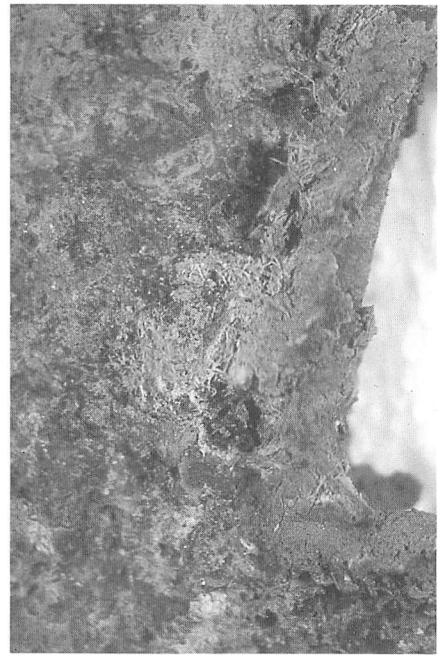


（129）

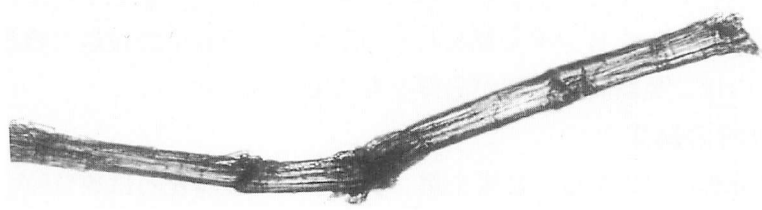
（×５）



（130）



（×10）



（130）より採取した繊維　（×150）

付編２　第119次・第120次調査花粉・植物珪酸体分析

１　はじめに

今回は、平成９年度実施した発掘調査のうち、第119次調査および第120次調査で採取した土壌サンプルの花粉・植物珪酸体分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。以下にその結果について報告する。

２　試　料

試料採取地点　第119次調査・第120次調査で珪藻分析・花粉分析を行った試料は、それぞれ掘立柱建物跡・方形周溝墓ＳＸ7945周溝部・井戸ＳＥ7920・方格地割の区画道路側溝ＳＤ6050の遺構埋土の計12点である。分析試料の詳細は第１表に示す。

３　分析の方法

植物珪酸体分析　試料で湿重で５ｇ秤量し、過酸化水素水、塩酸の順に化学処理し、試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適当量計り取りカバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に、200個体以上同定・計数する。(珪藻化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、K.Krammer and Lange-Bertalot (1986・1988・1991a・1991b)、K.Krammer (1992)、Reichrdt, E.(1995)、Lange-Bertalot,H.&D.Metzeltin(1996)、Lange-Bertalot,H.K.Kulbs,T.Lauser,M.Noerpel-Schempp&M.Willmann(1996)、Metzeltin,D.&A.Witkowski(1996)などを用いる。同定結果は、産出種を、アルファベット順に並べた一覧表で示す。堆積環境の解析にあたり、塩分濃度に対する適応性から産出種を海水生種、海水～汽水生種、汽水生種、淡水生種に分類し、淡水生種については更に塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応性に基づいて生態区分する。そして、主要な分類群について、主要珪藻化石の層位分布図を作成する。図中の海水～淡水生種の比率と各種産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水性種の合計を基数とした相対頻度で算出する。

花粉分析　試料約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛:比重2:2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率を算出し、図示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

４　分析の結果

珪藻分析の結果　珪藻分析については、結果を第２表に示す。珪藻化石は第119次調査・第120次調査のいずれの試料からもほとんど産出せず、珪藻殻の破片も無かった。

花粉分析の結果　花粉分析の結果は第３表、第２図に示す。各試料とも検出される花粉化石は保存状

態が悪く、外膜が溶けて薄くなっていたり、壊れていたりする。また、第119次調査試料番号８（ＳＥ7920）を除く11試料では、花粉化石の検出個体数も少ない。第119次調査の試料番号８における木本花粉の出現傾向は比較的単調であり、マキ属・ツガ属・マツ属が多産し、次いでモミ属・スギ属・コナラ亜属・アカガシ亜属などが検出される。草本花粉は、イネ科・カヤツリグサ科・オミナエシ属・ヨモギ属・キク亜科などが検出されるが、全体的に出現は低率である。

5　分析結果の考察

今回の試料では、概して花粉化石の保存が悪く、一部の試料を除いてほとんど検出されなかった。花粉化石は、水成層など嫌気的な状況下では分解されにくいが、好気的な状況下では分解されやすい。このことから、今回対象とした堆積物の大部分は、好気的な状況下で堆積が進んだ可能性がある。なお、これまで行った調査成果をみると、平成８年度の第116次調査区では、比較的花粉化石が多く検出されたが、第114次調査区・第115次調査区では花粉化石の保存が悪い。

今回唯一花粉化石の多産が見られたのは、奈良時代後期の井戸ＳＥ7920から採取された試料（試料番号８）である。検出された花粉化石は、マキ属・モミ属・ツガ属・マツ属・スギ属など温帯性針葉樹を主体とする。おそらく、これらの種類は後背の山地を中心に生育していたものと考えられる。これまで行った成果をみると、第116次調査に見られるように、草本類主体の組成や、湿地・河畔などを中心に生育するような木本類が主体の組成であった。これらは、主として沖積地の植生を反映していると考えられる。今回の調査では、これまでと違い、後背山地の植生を反映していると考えられるが、おそらく堆積環境等の違いによるものと考えられる。 一方、珪藻化石に関しても、保存状況が悪かった。生体内に珪酸質を作る植物は珪藻以外にイネ科植物などにみられる植物珪酸体がある。土壌中に堆積した珪酸体の挙動に関しては不明な点も多いが、比較的早い段階で溶解し、植物に再吸収されたり、粘土の生成に関与したりしていることが指摘されている（近藤, 1998)。今回の場合も、何らかの理由で珪藻化石が堆積後に溶解したと思われる。

引用文献

Asai,K. and Watanabe,T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groupes relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10,35-47.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌 6, p.23-45.

近藤錬三（1988）植物珪酸体（Opal Phytolith）からみた土壌と年代. ペドロジスト, 32, p.189-91.

Krammer,K. and Lange-Beratalot,H. (1986) Bacillariophyceae,Teil 1,Navicula-ceae. Band 2/1 von:Die Sueesswasserflora von Mitteleuropa,876p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer,K. and Lange-Beratalot,H. (1988) Bacillariophyceae,Teil 2,Epithemia-ceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von:Die Sueesswasser flora von

Mitteleuropa,536p.,Gustav Fischer Verlag.
Krammer,K. and Lange-Beratalot,H. (1991a) Bacillariophyceae,Teil 3,Centra -les, Fragilariaceae,Eunotiaceae. Band 2/3 von:Die Sueesswasserflora von Mitteleuropa,230p., Gustav Fischer Verlag.
Krammer,K. and Lange-Beratalot,H. (1991b) Bacillariophyceae,Teil 4,Achnan -thaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae)und Gomphonema. Band 2/4 von:Die Sueesswasserflora von Mitteleuropa,248p.,Gustav Fischer Verlag.
Krammer,K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. p.1−353., BERLIN・STUTTGART.
Reichardt,E.(1995) Die Diatomeen(Bacillariophyceae) in Ehrenbergs Material von Cayenne, Guyana Gallica(1843).Iconographia Diatomologica 1.,107p., Koeltz.-Koenigstein.
Lange-Bertalot,H.&D.Metzeltin (1996) Oligotrophie-Indikatoren.800 Taxa reprasentativ fur drei diverse Seen-Typen. Iconographia Diatomologica 2., 390p.,Koeltz.-Koenigstein.
Lange-Bertalot,H. K.Kulbs,T.Lauser,M.Noerpel-Schempp & M.Willmann (1996) Dokumentation und Revision der von G.Krasske beschriebenen Taxa.,358p., Iconographia Diatomologica 3.,Koeltz.-Koenigstein.
Metzeltin,D.&A.Witkowski (1996) Diatomeen der Baren-Insel.Suesswasser-und marine Arten.,287p.,Iconographia Diatomologica 4.,Koeltz.-Koenigstein.

第１表　第119次・第120次調査　花粉・植物珪酸体分析試料一覧表

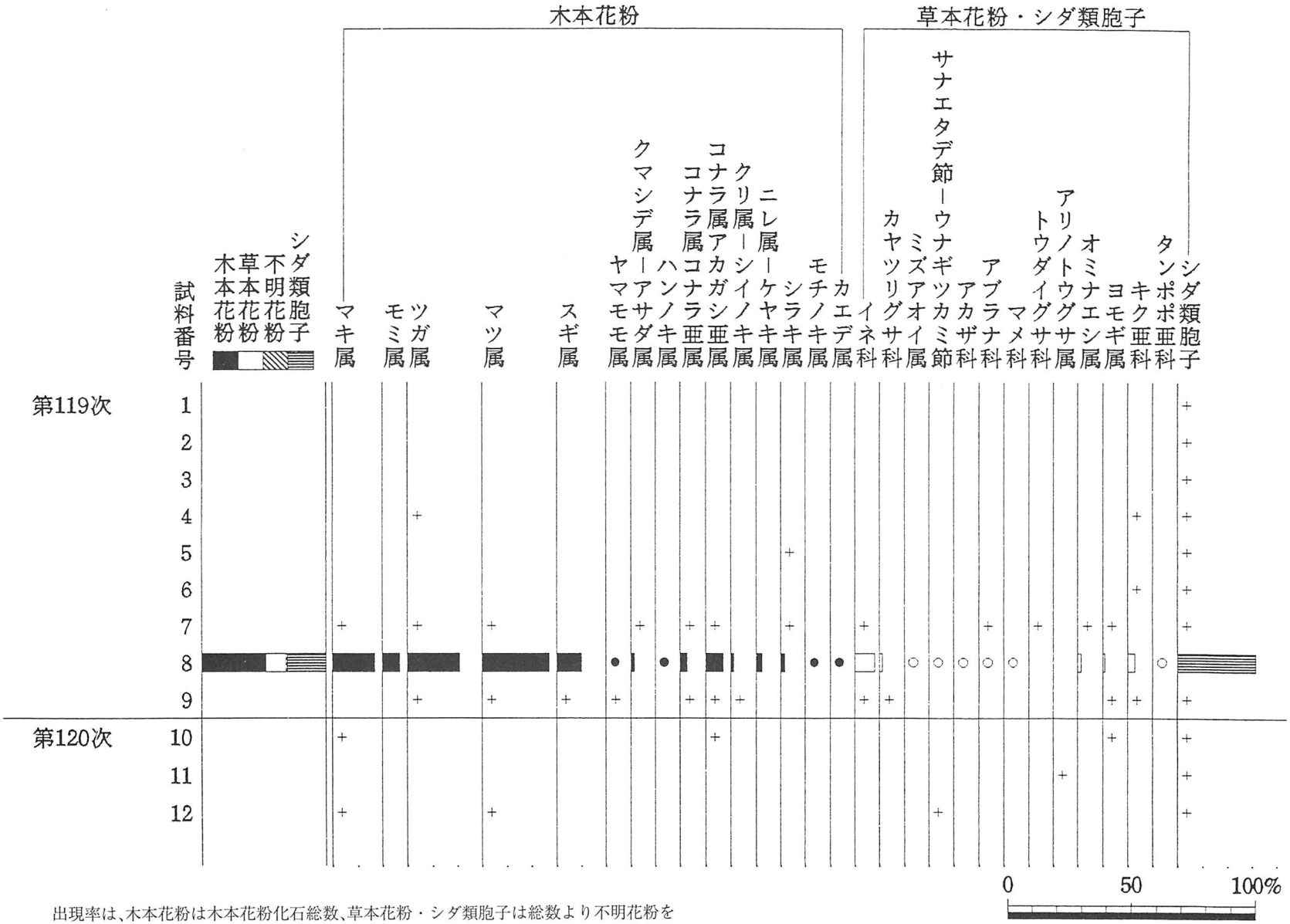
試料No.	調査次数	遺　構　名	時　　期	備　　考
1	第１１９次	ＳＢ７９５０ Ｒ－12　Ｐ２	奈良時代末 ～平安時代初期	南庇
2	第１１９次	ＳＢ７９５０ Ｑ－15　Ｐ11	奈良時代末 ～平安時代初期	身舎
3	第１１９次	ＳＢ７９４７ Ｒ－17 P2,4,5	平安時代初期 ～平安時代前Ｉ期	
4	第１１９次	ＳＸ７９４５	弥生時代後期	
5	第１１９次	ＳＢ７９３８ Ｐ－17　Ｐ20	平安時代前Ｉ期	身舎
6	第１１９次	ＳＢ７９３８ Ｐ－17　Ｐ17	平安時代前Ｉ期	身舎
7	第１１９次	ＳＥ７９２０ 周囲整地土	奈良時代後期	
8	第１１９次	ＳＥ７９２０ Ｌ＝ 5.750ｍ	奈良時代後期	
9	第１１９次	Ｑ－17　Ｐ33	不明	
10	第１２０次	ＳＤ６０５０ 第１層	奈良時代後期	
11	第１２０次	ＳＤ６０５０ 第２層	奈良時代後期	
12	第１２０次	ＳＤ６０５０ 第３層	奈良時代後期	

第２表　第119次・第120次調査　植物珪酸体分析結果

種　　類	環境指標種	遺構番号	SB7950		SB7947	SX7945	SB7938		SE7920		P33	SD6050		
		試料 No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
Nitzschia palea (Kuetz.) W.Smith	好汚濁性種		1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	陸生珪藻・広域適応性種		—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
Navicula contenta Grunow	陸生珪藻・好清水性種		—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—	—
Navicura mutica Kuetzing	陸生珪藻・好汚濁性種		—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
Caloneis aerophila Bock	陸生珪藻		—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
Nitzschia spp.	不明		—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Navicula spp.	不明		—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
Pinnularia spp.	不明		—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—
珪藻化石総数			1	0	0	1	0	0	4	0	1	2	0	0

第３表　第119次・第120次調査　花粉分析結果

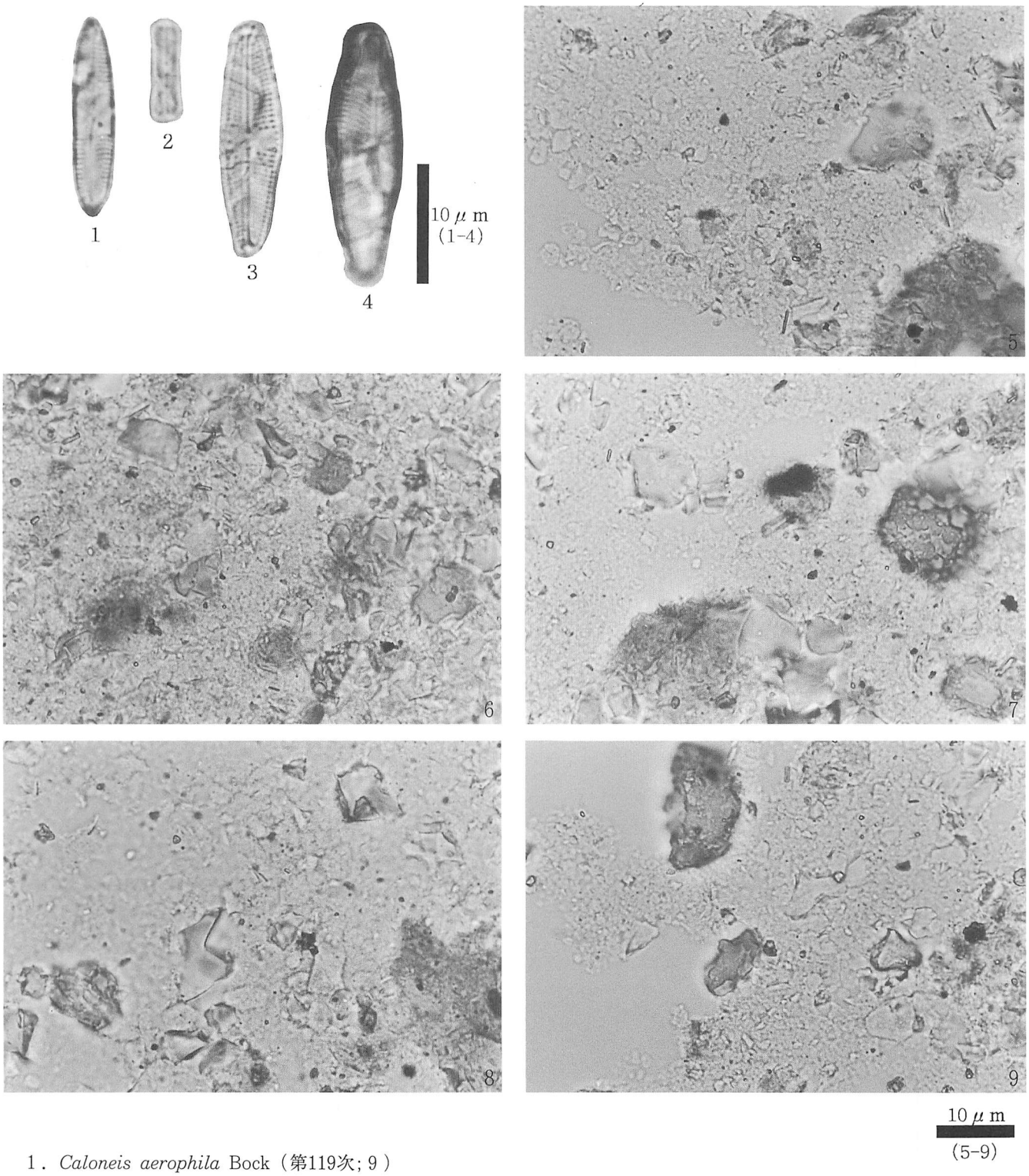
種　　類	遺構名	SB7950		SB7947	SX7945	SB7938		SE7920		P33	SD6050		
	試料No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
木本花粉													
マキ属		—	—	—	—	—	—	5	42	—	1	—	1
モミ属		—	—	—	—	—	—	—	17	—	—	—	—
ツガ属		—	—	—	1	—	—	2	52	3	—	—	—
マツ属		—	—	—	—	—	—	3	67	3	—	—	1
スギ属		—	—	—	—	—	—	—	25	1	—	—	—
ヤマモモ属		—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—
クマシデ属－アサダ属		—	—	—	—	—	—	1	4	—	—	—	—
ハンノキ属		—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
コナラ属コナラ亜属		—	—	—	—	—	—	1	7	2	—	—	—
コナラ属アカガシ亜属		—	—	—	—	—	—	3	17	1	1	—	—
クリ属－シイノキ属		—	—	—	—	—	—	—	3	1	—	—	—
ニレ属－ケヤキ属		—	—	—	—	—	—	—	6	—	—	—	—
シラキ属		—	—	—	—	1	—	1	4	—	—	—	—
モチノキ属		—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
カエデ属		—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
草本花粉													
イネ科		—	—	—	—	—	—	4	38	6	—	—	—
カヤツリグサ科		—	—	—	—	—	—	—	5	1	—	—	—
ミズアオイ属		—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—
サナエタデ節－ウナギツカミ節		—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	1
アカザ科		—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
アブラナ科		—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—
マメ科		—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
トウダイグサ科		—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
アリノトウグサ属		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
オミナエシ属		—	—	—	—	—	—	1	7	—	—	—	—
ヨモギ属		—	—	—	—	—	—	9	5	22	1	—	—
キク亜科		—	—	—	1	—	1	—	14	1	—	—	—
タンポポ亜科		—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—
不明花粉		—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	—
シダ類胞子													
シダ類胞子		4	3	4	8	2	7	14	151	26	10	3	21
合　　計													
木本花粉		0	0	0	1	1	0	16	248	12	2	0	2
草本花粉		0	0	0	1	0	1	16	79	30	1	1	1
不明花粉		0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0
シダ類胞子		4	3	4	8	2	7	14	151	26	10	3	21
総計（不明花粉のぞく）		4	3	4	10	3	8	46	478	68	13	4	24
その他													
鞭虫卵		—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、○●は１％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

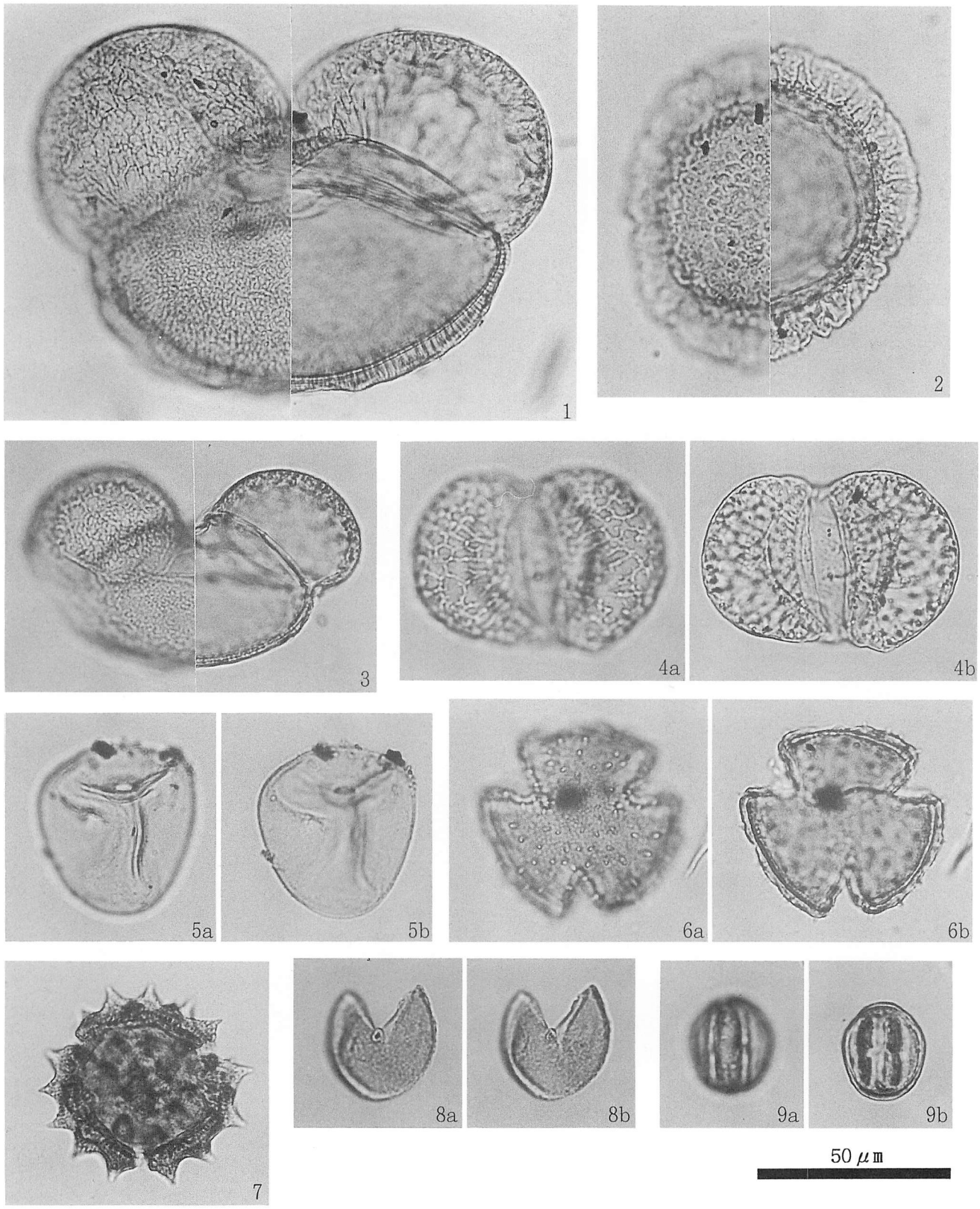
第２図　第119次・第120次調査花粉化石組成

図版２　第119次・第120次調査珪藻化石・珪藻分析プレパラート内の現況写真



1．*Caloneis aerophila* Bock（第119次; 9）
2．*Navicula contenta* Grunow（第119次; 7）
3．*Navicula mutica* Kuetzing（第119次; 7）
4．*Stauroneis obtusa* Lagerst（第119次; 7）
5．状況写真（第119次; 2）
6．状況写真（第119次; 5）
7．状況写真（第119次; 5）
8．状況写真（第119次; 6）
9．状況写真（第119次; 8）

図版３　第119次・第120次調査花粉化石分析プレパラート内の現況写真



１．モミ属（第119次; ８）
２．ツガ属（第119次; ８）
３．マツ属（第119次; ８）
４．マキ属（第119次; ８）
５．イネ科（第119次; ８）
６．オミナエシ属（第119次; ８）
７．キク亜属（第119次; ８）
８．スギ属（第119次; ８）
９．コナラ属アカガシ亜属（第119次; ８）

第６表　掘立柱建物・柵列一覧表

遺構番号	規　模	棟方向	桁行（m）	梁行（m）	柱間寸法（m） 桁行	柱間寸法（m） 梁行	時　期	備　考
第１１８次調査（６ＡＤＮ）								
SB7880	5×5	E 4° N	11.75	11.31	2.35	2.27	奈良中期	北庇出2.1m、南庇出2.4m 西梁行柱間寸法3.4m
SB0251	3×2	E 3° N	5.82	4.00	1.94	2.00	平安初期	
SB0250	3×2	E 3° N	6.30	4.20	2.10	2.10	〃	
SB7900	4×2	E 3° N	10.00	4.70	2.50	2.35	〃	
SB7855	−×2	N 3° W	−	4.60	−	2.30	平安前Ⅰ期	
SB7875	3×2	E 4° N	6.60	4.20	2.20	2.10	〃	
SB7885	3×2	N 4° W	6.80	4.60	2.27	2.30	〃	南庇出2.2m
SA7904	4	E 5° N	12.00		3.00		〃	
SB6679	1×1	E 2° N	2.30	2.20	2.30	2.20	平安前Ⅱ期	
SB6915	3×2	N 2° E	5.70	4.40	1.90	2.20	〃	南庇出 1.9m
SB7850	4×2	E 7° N	9.20	4.50	2.30	2.25	〃	
SA7866	4	E 7° N	8.20		2.05		〃	
SB7890	7×4	E 3° N	14.90	8.60	2.10	2.10	〃	北庇出2.2m・南庇出2.2m・東庇出2.2m・西庇出2.2m
SB7895	7×3	E 4° N	14.75	6.30	2.10	2.10	〃	北庇出2.1m、東庇出2.1m、西庇出2.15m
SB7896	6×2	E 4° N	13.50	4.00	2.24	2.00	〃	西庇出2.3m
SB7865	4×2	E 4° S	8.00	4.20	2.00	2.10	平安中期	
SA7889	3	E 2° N	7.20		2.40		〃	
SB7893	3×2	E 5° S	5.40	4.20	1.80	2.10	〃	
SB7903	3×2	E 7° N	5.61	3.80	1.87	1.90	〃	
SB7863	4×2	E 5° N	8.20	4.60	2.05	2.30	平安後Ⅰ期	
SB7864	3×2	N12° W	4.50	4.20	1.50	2.10	〃	
SB7870	6×3	E 3° N	13.50	6.30	2.24	2.25	〃	南庇出1.8m、西庇出2.3m
SB7871	3×2	E12° N	7.11	4.40	2.37	2.20	〃	
SB7872	2×1	E 4° N	4.00	3.00	2.00	3.00	〃	
SB7897	6×2	N 5° W	12.60	4.20	2.10	2.10	〃	北庇出2.1m、南庇出2.1m
SB7898	2×2	E 3° N	4.40	4.20	2.20	2.10	〃	総柱建物
SB6914	5×2	E 4° N	10.25	4.00	2.05	2.00	平安後Ⅱ期	
SB7886	3×2	N 3° W	6.75	4.50	2.25	2.25	〃	総柱建物
SB7894	4×2	E 5° N	8.60	4.40	2.15	2.20	〃	
SA7888	5	E 2° N	10.50		2.10		平安後期	
SB6674	5×3	N 2° W	10.70	5.40	2.14	1.80	平安末期	
SB6675	4×2	N 2° W	8.10	4.20	2.03	2.10	〃	
SB6676	5×3	N 2° W	10.50	5.52	2.10	1.84	〃	
SB6677	3×2	N 3° W	6.30	4.00	2.10	2.00	〃	
SB6678	2×2	N 2° W	4.20	4.00	2.10	2.00	〃	総柱建物
SB6860	3×2	N 1° W	6.00	4.80	2.00	2.40	〃	
SB6861	3×3	N 8° W	6.51	5.49	2.17	1.83	〃	
SB6873	3×3	E 5° N	6.60	6.00	2.20	2.00	〃	
SB6874	4×2	N 4° W	8.60	4.10	2.15	2.05	〃	
SB6908	3×2	E 5° N	6.00	4.20	2.00	2.10	〃	
SB6913	3×2	E 5° N	6.00	3.60	2.00	1.80	〃	
SB7892	3×2	E 3° N	6.60	4.20	2.20	2.10	〃	
SB7854	5×−	E 3° N	10.50	−	2.10	−	時期不明	

掘立柱建物・柵列一覧表

遺構番号	規　模	棟方向	桁行（m）	梁行（m）	柱間寸法（m） 桁行	柱間寸法（m） 梁行	時　期	備　考
第１１９次調査（６ＡＦＭ－Ｅ・Ｇ）								
ＳＢ7941	3×2	N4°W	7.2	3.6	2.4	1.8	奈良後期	
ＳＢ7950	6×4	E4°N	17.7	10.8	2.95	3.0	〃	北庇出2.1m　南庇出2.7m
ＳＡ6770	（1）	N4°W	(3.0)		3.0		〃	98次調査検出の延長
ＳＢ7918	6×3	E4°N	14.4	8.4	2.4	2.7	平安初期	南庇出3.0m
ＳＢ7919	5×4	E4°N	12.0	11.4	2.4	2.7	〃	南北庇出3.0m　ＳＢ7918より新
ＳＢ7947	(1)×2	N4°W	(3.0)	6.0	3.0	3.0	〃	
ＳＢ7948	(4)×2	N4°W	(9.6)	5.4	2.4	2.7	〃	ＳＢ7947より新
ＳＡ6790	（6）	N4°W	17.6		2.94		〃	98次調査検出の延長
ＳＢ7915	(4)×3	E4°N	(9.6)	8.1	2.4	2.7	平安前Ⅰ期	南庇出2.4m　ＳＢ7919より新
ＳＢ7916	(4)×3	E4°N	(9.6)	8.4	2.4	2.7	〃	南庇出3.0m　ＳＢ7915より新
ＳＢ7917	(4)×3	E4°N	(9.6)	8.1	2.4	2.7	〃	南庇出2.7m　ＳＢ7916より新
ＳＢ7938	5×3	N4°W	12.0	8.1	2.4	2.7	〃	西庇出2.7m　ＳＢ7948より新
ＳＢ7939	5×3	N4°W	12.0	6.9	2.4	2.4	〃	西庇出2.1m　ＳＢ7938より新
ＳＢ7940	5×3	N4°W	12.0	8.1	2.4	2.7	〃	西庇出2.7m　ＳＢ7939より新
ＳＢ7933	(1)×2	N4°W	(3.0)	4.8	3.0	2.4	平安前Ⅱ期	
ＳＢ7934	(1)×3	N4°W	2.4	7.2	2.4	2.4	〃	西庇出2.4m　ＳＢ7938より新
第１２０次調査（６ＡＦⅠ－Ｃ・Ｅ，６ＡＦＧ－Ｒ）								
ＳＢ7998	3×2	N5°W	5.7	4.2	1.9	2.1	平安初期	ＳＢ8000より新
ＳＢ7999	(2)×2	E2°N	(4.2)	4.2	2.1	2.1	〃	北庇出2.1m　ＳＢ8000より新
ＳＢ8000	5×2	E2°N	12.0	4.8	2.4	2.4	〃	
ＳＢ8003	3×2	E2°N	5.7	4.2	1.9	2.1	〃	
ＳＢ7995	3×2	E2°N	5.7	3.8	1.9	1.9	平安前Ⅰ期	
ＳＢ7996	2×2	E0°W	4.2	2.6	2.1	1.3	〃	
ＳＢ7989	5×2	E0°W	9.5	3.9	1.9	1.95	平安前Ⅱ期	
ＳＢ7992	(2)×2	N0°S	(4.2)	4.2	2.1	2.1	〃	ＳＢ7993・7994より新
ＳＢ7993	(2)×2	N5°E	(3.8)	4.2	1.9	2.1	〃	ＳＢ7994より新
ＳＢ7994	(2)×2	N5°E	(4.0)	4.2	2.0	2.1	〃	
ＳＢ8002	5×2	E0°W	9.0	3.8	1.8	1.9	〃	
ＳＢ7991	3×2	N0°S	5.7	4.4	1.9	2.2	平安中期	
ＳＢ7997	(2)×2	N2°W	(4.2)	4.2	2.1	2.1	〃	
ＳＢ8001	3×2	E5°N	6.0	3.6	2.0	1.8	〃	

（注）桁行・梁行はそれぞれの柱筋の全長を示し、柱間寸法は建物の身舎部分での計測値を示す。

第7表　竪穴住居一覧表

遺構番号	規模（m）	長軸方向	深さ(cm)	柱　穴	カマド	時　期	備　考
第１１８次調査（６ＡＤＮ）							
SB7881	3.7 × －	N22°W	10～15	－	－	奈良中期	
SB7882	3.5 × －	N22°W	10～15	－	東？	奈良中期	
SB7891	3.5 × 3.9	N17°W	20	－	東	奈良中期	
SB7901	4.9 × 6.2	N11°W	5	－	東？	奈良中期	
SB7905	3.0 × 3.4	N 4°W	25	－	東	奈良中期	
第１１９次調査（６ＡＦＭ－Ｅ・Ｇ）							
ＳＢ7951	－× 4.0	N4°E	10	——	——	弥生後期	

第８表　遺物（土器）観察表

第１１８次調査

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	ＳＢ7891	土師器 皿	(口径) 20.4cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、外面ケズリ、内面ナデ	精緻	良好	内：にぶい橙 5YR7／4 外：黄橙 7.5YR8／8	25%		R 1
2	ＳＢ7905	土師器 杯	(口径) 13.8cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面不定方向のナデ、	精緻 クサリ礫・黒色粒子含む	やや不良	内：黄橙 10YR8／6～黄橙7.5YR7／8 外：明黄褐10YR7／6～橙 7.5YR7／6	完形		R 2
3	ＳＢ7905	土師器 甕	(口径) 16.8cm (器高) 16.4cm (最大径) 17.0cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、内面ヨコハケ、縦方方向のケズリ	精緻 微細なウンモ片含む	良好	内：にぶい橙 7.5YR6／4～7.5YR7／4 外：にぶい橙 7.5YR7／4～灰褐7.5YR6／2	ほぼ完形	底部を一部欠損するのみ外面底部は細かい不定方向のタテハケ	R 3
4	ＳＢ7905	土師器 長胴甕	(口径) 24.4cm (残高) 31.0cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、内面ヨコハケ、縦方方向のケズリ	精緻 クサリ礫・ウンモ片含む	良好	内：明黄褐10YR7／6～褐灰 10YR4／1 外：暗灰黄 2.5Y4／2～浅黄2.5Y7／4	25%		R 4
5	ＳＢ7905	土師器 長胴甕	(口径) 24.6cm (残高) 7.0cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、内面ヨコハケ、横方向のケズリ	やや粗い クサリ礫・1mm大砂粒含む	良好	内：にぶい黄橙10YR7／4～10YR6／4 外：橙 7.5YR6／6～にぶい黄橙 10YR7／4	口縁部のみ1／3残存		R 5
6	ＳＢ7882	土師器 長胴甕	(口径) 21.3cm (残高) 15.5cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、内面ヨコハケ	やや粗い 1mm大砂粒含む	良好	内：橙 5YR7／6 外：橙 7.5YR7／6	40%	外面にススト付着	R 6
7	ＳＢ7882	土師器 甑	(口径) 24.0cm (器高) 23.5cm (底径) 11.6cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、内面ヨコハケ、縦方向のケズリ	精緻 黒色粒子・クサリ礫含む	良好	内：明黄褐 10YR7／6 外：橙 7.5YR7／6	70%	底部は破片を一部残すのみでほとんど欠損	R 7
8	ＳＫ7887	土師器 杯	(口径) 12.7cm (器高) 2.9cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	精緻	良好	内：明赤褐 2.5YR5／8 外：〃 〃	90%	底部に粘土紐巻上げ痕あり	R 44
9	ＳＫ7887	土師器 杯	(口径) 15.3cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、外面ナデ内面ナデ	精緻 クサリ礫・金ウンモ片含む	やや不良	内：明赤褐 2.5YR5／8 外：明赤褐 5YR5／8	ほぼ完存		R 46
10	ＳＫ7887	土師器 杯	(口径) 17.2cm (器高) 3.5cm	口縁部ヨコナデ、外面ナデ内面ナデ	精緻 微細なウンモ片含む	良好	内：明赤褐 2.5YR5／8 外：〃 〃	20%		R 36
11	ＳＫ7887	土師器 杯	(口径) 15.6cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、外面不定方向のケズリ後ナデ、内面不定方向のナデ	精緻 クサリ礫・ウンモ片含む	良好	内：橙 2.5YR6／8 外：橙 5YR6／8	40%	口縁部外面にヘラ描き記号あり「卌」	R 138
12	ＳＫ7887	土師器 杯	(口径) 17.0cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、外面ナデ内面ナデ	精緻	良好	内：橙 5YR6／8 外：〃 〃	25%		R 39
13	ＳＫ7887	土師器 杯	(口径) 14.2cm (器高) 3.8cm	口縁部ヨコナデ、外面ナデ内面ナデ	精緻	良好	内：明赤褐 2.5YR5／6 外：赤褐 10YR4／8	80%	内面に一本線のヘラ描き記号あり	R 45
14	ＳＫ7887	土師器 杯	(口径) 16.8cm (器高) 4.3cm	口縁部ヨコナデ、外面ナデ内面ナデ	精緻	良好	内：明赤褐 2.5YR5／8 外：橙 7.5YR6／8	70%	器形ややひずむ	R 43
15	ＳＫ7887	土師器 杯	(口径) 16.8cm (器高) 4.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面不定方向のナデ	精緻 クサリ礫・金ウンモ片含む	やや不良	内：橙 7.5YR6／8 外：〃 〃	60%		R 42
16	ＳＫ7887	土師器 杯	(口径) 18.6cm (器高) 4.8cm	口縁部ヨコナデ、外面ケズリ、内面ナデ、左向放射暗文	精緻	良好	内：橙 7.5YR7／6 外：明赤褐 5YR5／8	40%		R 41
17	ＳＫ7887	土師器 杯	(口径) 16.0cm (器高) 4.2cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面不定方向のナデ	精緻 クサリ礫多く含む	良好	内：橙 2.5YR6／8 外：橙 2.5YR6／6	60%	底部外面に墨書（判読不明）と墨痕あり	R 137
18	ＳＫ7887	土師器 皿	(口径) 16.7cm (器高) 2.3cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	精緻	良好	内：橙 5YR7／8 外：橙 5YR6／8	50%		R 35
19	ＳＫ7887	土師器 皿	(口径) 16.9cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後不定方向のナデ、内面一定方向のナデ	精緻 クサリ礫・黒ウンモ片含む	良好	内：明赤褐 2.5YR5／8 外：〃 〃	70%		R 40
20	ＳＫ7887	土師器 皿	(口径) 18.2cm (器高) 1.9cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	精緻	良好	内：明赤褐 2.5YR5／8 外：〃 〃	50%	外面底部にヘラ描き記号あり「キ」	R 139
21	ＳＫ7887	土師器 皿	(口径) 17.6cm (器高) 2.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後荒いナデ、内面ナデ	精緻	良好	内：明赤褐 2.5YR5／8 外：〃 〃	40%		R 38
22	ＳＫ7887	土師器 皿	(口径) 19.2cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	精緻	良好	内：橙 2.5YR6／6 外：橙 2.5YR6／8	40%		R 34
23	ＳＫ7887	土師器 皿	(口径) 18.4cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後粗いナデ、内面一定方向のナデ	精緻 クサリ礫・黒ウンモ片含む	良好	内：明赤褐 2.5YR5／8 外：明赤褐 2.5YR5／6	50%		R 37
24	ＳＫ7887	土師器 皿	(口径) 18.2cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後粗いナデ、内面一定方向のナデ	精緻 クサリ礫・微細なウンモ片含む	良好	内：橙 2.5YR6／8 外：赤橙 10YR6／8	ほぼ完存	外面底部に墨書「六」	R 136
25	ＳＫ7887	土師器 甕	(口径) 16.2cm (残高) 8.0cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、内面ヨコハケ	精緻 微細なウンモ片含む	良好	内：浅黄橙 7.5YR8／3 外：にぶい黄橙 10YR7／2	45%		R 47
26	ＳＫ7887	土師器 甕	(口径) 22.2cm (残高) 8.5cm (鍔径) 30.0cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、内面横方向のケズリ	精緻	良好	内：浅黄橙 7.5YR8／3 外：にぶい黄橙 10YR7／2	口縁部のみ1／3残存	内外面に黒色の付着物あり	R 48
27	ＳＫ7887	土師器 鍋	(口径) 20.0cm (器高) 9.4cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、横方向のケズリ、内面ナデ、ケズリ	精緻 クサリ礫・微細なウンモ片含む	良好	内：浅黄橙 7.5YR8／3 外：〃 〃	60%	外面底部に二次焼成のために赤変する箇所あり	R 49
28	ＳＫ7887	土師器 鍋	(口径) 23.6cm (器高) 10.6cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、ケズリ、内面ヨコハケ後ナデ	精緻 金ウンモ片含む	良好	内：橙 2.5YR7／8 外：〃 〃	95%		R 50
29	ＳＫ7857	土師器 杯	(口径) 13.2cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面一定方向のナデ	精緻	良好	内：にぶい橙 7.5YR6／4 外：黄灰2.5Y5／1～にぶい黄橙10YR6／3	30%		R 52

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
30	ＳＫ7857	土師器 杯	(口径) 13.6cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面一定方向のナデ	精緻 クサリ礫・金ウンモ片含む	良好	内：浅黄橙7.5YR8／4～ にぶい橙7.5YR7／4 外：〃	50%		R60
31	ＳＫ7857	土師器 杯	(口径) 14.2cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面一定方向のナデ	精緻 クサリ礫・金ウンモ片含む	良好	内：橙 5YR7／8 外：橙 2.5YR7／8	40%		R56
32	ＳＫ7857	土師器 杯	(口径) 16.0cm (器高) 3.5cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	精緻 クサリ礫・黒ウンモ片含む	良好	内：橙5YR7／8～ 褐灰5YR5／1 外：橙2.5YR7／6～ 赤灰2.5YR5／1	40%		R57
33	ＳＫ7857	土師器 皿	(口径) 15.6cm (器高) 2.3cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	やや粗	良好	内：橙 5YR6／6 外：〃 〃	75%		R54
34	ＳＫ7857	土師器 皿	(口径) 15.8cm (器高) 2.3cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面不定方向のナデ	精緻 クサリ礫・微細なウンモ片含む	良好	内：橙 2.5YR7／8 外：橙 2.5YR6／8	50%		R62
35	ＳＫ7857	土師器 皿	(口径) 16.6cm (器高) 1.9cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面一定方向のナデ	精緻 クサリ礫多く含む	良好	内：橙 5YR7／8 外：橙 5YR7／6	80%	口縁のひずみ著しい	R63
36	ＳＫ7857	土師器 杯	(口径) 10.8cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面一定方向のナデ	やや粗	やや不良	内：浅黄橙 10YR8／3 外：浅黄橙10YR8／3～ にぶい黄橙10YR7／2	90%		R58
37	ＳＫ7857	土師器 杯	(口径) 12.8cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面一定方向のナデ	クサリ礫・微細なウンモ片・1mm大砂粒含む	良好	内：浅黄橙7.5YR8／4～ 褐灰10YR5／1 外：浅黄橙 7.5YR8／4	90%		R59
38	ＳＫ7857	土師器 杯	(口径) 14.8cm (器高) 3.7cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	精緻	良好	内：にぶい黄橙 10YR7／3 外：にぶい橙 7.5YR7／4	40%		R53
39	ＳＫ7857	土師器 杯	(口径) 16.1cm (器高) 4.4cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	やや粗 1mm大砂粒含む	良好	内：橙 5YR6／6 ～ にぶい黄橙10YR7／3 外：橙 5YR6／6	30%	器壁磨滅のため不明瞭	R51
40	ＳＫ7857	土師器 杯	(口径) 17.2cm (器高) 4.8cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ、左放射暗文、螺旋暗文	精緻 クサリ礫・微細なウンモ片含む	良好	内：橙 5YR7／8 ～ 浅黄橙10YR8／4 外：〃	60%	放射暗文１段 螺旋暗文２段以上	R55
41	ＳＫ7857	土師器 杯	(口径) 17.4cm (器高) 4.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後粗いナデ、内面不定方向のナデ	やや粗 クサリ礫多く含む	やや不良	内：橙 2.5YR7／8 外：橙 2.5YR6／8	50%		R61
42	ＳＫ7857	灰釉陶器 椀	(口径) 15.2cm (器高) 4.5cm (台径) 7.6cm	体部ロクロナデ、高台貼付	精緻	良好	内：灰 7.5Y6／1 外：〃 〃	40%		R65
43	ＳＫ7857	土師器 甕	(口径) 17.0cm (器高) 16.1cm (最大径) 18.2cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、下半横方向のケズリ内面ナデ	やや粗 1mm大砂粒含む	やや不良	内：浅黄橙10YR8／4～ 淡赤橙2.5YR7／4 外：〃	ほぼ完存		R64
44	ＳＢ7864	土師器 小皿	(口径) 8.2cm (器高) 1.8cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	やや粗	不良	内：浅黄橙 10YR8／4 外：にぶい黄橙 10YR7／4	90%		R12
45	ＳＢ7864	土師器 小皿	(口径) 8.5cm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	黒色粒子含む	良好	内：浅黄橙10YR8／4～褐灰10YR6／1 外：浅黄橙10YR8／4～褐灰10YR5／1	完形	器形にひずみあり	R21
46	ＳＢ7864	土師器 小皿	(口径) 8.8cm (器高) 1.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	精緻	良好	内：浅黄橙 10YR8／4 外：〃 〃	95%		R13
47	ＳＢ7864	土師器 小皿	(口径) 8.4cm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	精緻	良好	内：橙 7.5YR7／6 外：〃 〃	ほぼ完存		R17
48	ＳＢ7864	土師器 小皿	(口径) 8.6cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	粗い	不良	内：橙 2.5YR7／8 外：〃 〃	完形	器形にひずみあり	R18
49	ＳＢ7864	土師器 小皿	(口径) 9.3cm (器高) 1.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	やや粗	やや不良	内：浅黄橙 10YR8／4 外：にぶい黄橙 10YR7／4	完形		R19
50	ＳＢ7864	土師器 小皿	(口径) 8.4cm (器高) 1.8cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	やや粗 クサリ礫含む	やや不良	内：橙7.5YR6／6～浅黄橙 10YR8／4 外：〃 〃	ほぼ完存		R10
51	ＳＢ7864	土師器 小皿	(口径) 8.6cm (器高) 1.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	やや粗 クサリ礫含む	良好	内：浅黄橙 10YR8／3 外：浅黄橙7.5YR8／4～ 浅黄橙10YR8／3	完形		R9
52	ＳＢ7864	土師器 小皿	(口径) 9.0cm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	黒色粒子・クサリ礫含む	良好	内：橙 7.5YR7／6 外：にぶい橙 7.5YR7／4	95%		R15
53	ＳＢ7864	土師器 小皿	(口径) 8.4cm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	やや粗 クサリ礫多く含む	不良	内：橙5YR8／6～ 浅黄橙7.5YR8／4 外：〃 〃	完形		R11
54	ＳＢ7864	土師器 小皿	(口径) 8.8cm (器高) 1.9cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	やや粗 クサリ礫含む	やや不良	内：浅黄橙 7.5YR8／4 外：浅黄橙 10YR8／4	完形	器形にひずみあり	R8
55	ＳＢ7864	土師器 小皿	(口径) 9.2cm (器高) 1.8cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	やや粗 黒色粒子少量含む	やや不良	内：にぶい黄橙10YR7／2～ 浅黄橙10YR8／4 外：にぶい黄橙 10YR7／3	95%		R14
56	ＳＢ7864	土師器 小皿	(口径) 9.0cm (器高) 1.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	精緻 微細なウンモ片含む	良好	内：浅黄橙10YR8／4～褐灰10YR5／1 外：〃 〃	口縁部1／3 欠損のみ		R20
57	ＳＢ7864	土師器 小皿	(口径) 9.4cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	微細なウンモ片・クサリ礫含む	良好	内：浅黄橙7.5YR8／4～ にぶい橙7.5YR7／4 外：灰褐7.5YR6／2～ 浅黄橙10YR8／4	70%		R16
58	ＳＢ7864	土師器 皿	(口径) 15.6cm (器高) 3.3cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	精緻	やや不良	内：黄橙 7.5YR7／8 外：橙 7.5YR7／6～褐灰 7.5YR5／1	25%		R22
59	ＳＢ7863	土師器 小皿	(口径) 8.6cm (器高) 1.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	精緻	不良	内：浅黄橙7.5YR8／6～橙 7.5YR7／6 外：〃 〃	口縁部の1／4 のみ欠損		R30
60	ＳＢ7863	土師器 小皿	(口径) 9.2cm (器高) 1.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	やや粗	やや不良	内：黄橙10YR8／6～明黄褐10YR7／6 外：〃 〃	完形	口縁部のひずみあり	R27

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
61	SB7863	土師器 小皿	(口径) 9.5cm (器高) 1.8cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後粗いナデ、内面ナデ	精緻 クサリ礫含む	やや不良	内：橙 5YR7/8 外：橙 5YR7/6	ほぼ完存	口縁部のひずみあり	R28
62	SB7863	土師器 小皿	(口径) 9.3cm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	ウンモ片・クサリ礫・1mm大砂粒含む	やや不良	内：浅黄橙 10YR8/4 外：浅黄橙 7.5YR8/6	ほぼ完存		R29
63	SB7863	土師器 小皿	(口径) 9.5cm (器高) 1.8cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	精緻 クサリ礫・ウンモ片含む	不良	内：浅黄橙7.5YR8/6～浅黄橙10YR8/4 外：〃 〃	完形	器形のひずみあり	R26
64	SB7863	土師器 小皿	(口径) 9.4cm (器高) 2.0cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	微細なウンモ片含む	やや不良	内：橙7.5YR7/6～浅黄橙 10YR8/4 外：	ほぼ完存		R31
65	SB7863	土師器 皿	(口径) 13.6cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	黒色粒子・金ウンモ片含む	やや不良	内：灰褐7.5YR5/2 ～にぶい橙5YR6/3 外：灰褐7.5YR6/2～浅黄橙7.5YR8/4	70%		R33
66	SB7863	土師器 皿	(口径) 14.6cm (器高) 3.7cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	精緻 クサリ礫多く含む	やや不良	内：橙 2.5YR7/8 外：橙2.5YR7/8 ～ 橙 5YR7/8	70%	外面に粘土紐巻上げ痕あり	R32
67	SK7877	土師器 小皿	(口径) 10.2cm (器高) 2.2cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	精緻	良好	内：黄橙 10YR8/8 外：浅黄橙 7.5YR8/6	ほぼ完存		R102
68	SK7877	土師器 小皿	(口径) 9.6cm (器高) 2.4cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	精緻 1mm大砂粒含む	良好	内：浅黄橙 7.5YR8/6 外：浅黄橙 7.5YR8/4	完形		R105
69	SK7877	土師器 小皿	(口径) 9.9cm (器高) 2.3cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	精緻	良好	内：浅黄橙 10YR8/3 外：〃 〃	完形		R104
70	SK7877	ロクロ土師器 小皿	(口径) 10.0cm (器高) 1.6cm	口縁部ロクロナデ、内面ナデ、底部外面糸切痕	精緻	良好	内：浅黄橙 10YR8/3 外：〃 〃	70%		R103
71	SK7877	土師器 台付小皿	(口径) 10.1cm (器高) 3.2cm (台径) 5.9cm	口縁部ヨコナデ、内外面ナデ、高台貼付時のナデ	精緻	良好	内：黄橙 7.5YR7/8 外：黄橙 7.5YR8/8	ほぼ完存		R101
72	SK7867	土師器 皿	(口径) 13.0cm (器高) 2.3cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	やや粗 1mm大砂粒含む	良好	内：橙 5YR7/6 外：〃 〃	80%		R89
73	SK7867	土師器 皿	(口径) 13.5cm (器高) 2.3cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻 1mm大砂粒含む	良好	内：浅黄橙 7.5YR8/6 外：〃 〃	60%		R90
74	SK7867	土師器 皿	(口径) 14.0cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	やや粗	やや不良	内：浅黄橙 10YR8/4 外：〃 〃 (一部のみ橙 7.5YR8/6)	90%		R88
75	SK7867	土師器 皿	(口径) 14.1cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	やや粗	やや不良	内：浅黄橙 10YR8/4 外：浅黄橙 7.5YR8/6	ほぼ完存		R93
76	SK7867	土師器 皿	(口径) 14.4cm (器高) 2.6cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻	良好	内：浅黄橙 10YR8/4 外：〃 〃	90%		R94
77	SK7867	土師器 皿	(口径) 14.6cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻	良好	内：浅黄橙 10YR8/4 外：〃 〃	70%		R92
78	SK7867	土師器 小皿	(口径) 8.1cm (器高) 1.0cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻 微細なウンモ片・クサリ礫含む	やや不良	内：黄橙 7.5YR8/8 外：浅黄橙 7.5YR8/6	ほぼ完存		R99
79	SK7867	土師器 小皿	(口径) 8.0cm (器高) 1.2cm	口縁部ヨコナデ、内面不定方向のナデ、外面オサエ後不定方向のナデ	精緻 微細なウンモ片・黒色粒子含む	良好	内：浅黄橙 7.5YR8/6 外：にぶい橙 7.5YR7/4	90%		R100
80	SK7867	土師器 小皿	(口径) 7.8cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	やや粗 1mm大砂粒含む	やや不良	内：浅黄橙 10YR8/4 外：浅黄橙 10YR8/3	95%		R97
81	SK7867	土師器 小皿	(口径) 8.2cm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻 微細なウンモ片含む	良好	内：浅黄橙 7.5YR8/6 外：〃 〃	完形		R98
82	SK7853	土師器 小皿	(口径) 8.6cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	1.5mm大の砂粒含む	不良	内：浅黄橙10YR8/4～橙 7.5YR7/6 外：〃 〃	50%	底部に焼成後の穿孔あり	R106
83	SK7853	土師器 小皿	(口径) 8.6cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻 微細なウンモ片含む	良好	内：浅黄橙7.5YR8/8～橙 5YR7/6 外：橙 5YR7/8	完形		R107
84	SK7853	土師器 小皿	(口径) 8.8cm (器高) 1.6cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻	良好	内：橙 5YR7/6 外：〃 〃	70%		R108
85	SK7853	土師器 杯	(口径) 14.8cm (器高) 3.3cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	やや粗	良好	内：にぶい黄橙10YR7/3～10YR7/4 外：にぶい黄橙10YR6/3～10YR7/4	70%		R109
86	SK7853	灰釉陶器 椀	(口径) 15.2cm (器高) 5.6cm (台径) 7.2cm	口縁部内外面ロクロナデ、高台貼付時のナデ、底部外面ヘラ切り後荒いナデ	精緻 黒色粒子含む	良好	内：灰白 2.5Y8/2 外：灰白 5Y8/1	40%		R110
87	SK7873	土師器 小皿	(口径) 8.2cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻	良好	内：にぶい橙 7.5YR7/4 外：〃 〃	50%		R112
88	SK7873	土師器 小皿	(口径) 8.2cm (器高) 1.3cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	粗い	不良	内：黄橙 10YR8/6 外：〃 〃	50%		R115
89	SK7873	土師器 小皿	(口径) 8.6cm (器高) 1.5cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻	やや不良	内：にぶい黄橙 10YR7/4 外：〃 〃	60%		R113
90	SK7873	土師器 小皿	(口径) 8.0cm (器高) 1.5cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	やや粗 クサリ礫含む	不良	内：橙7.5YR7/6～ 橙7.5YR6/6 外：〃 〃	70%		R114
91	SK7873	ロクロ土師器 小皿	(口径) 9.2cm (器高) 1.8cm	口縁部ロクロナデ、内面ナデ、底部外面糸切り後未調整	1mm大砂粒・クサリ礫多く含む	良好	内：橙 7.5YR7/6 外：〃 〃	80%		R116
92	SK7873	土師器 皿	(口径) 8.6cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面ナデ	精緻 微細なウンモ片含む	良好	内：橙 7.5YR7/6 外：〃 〃	50%	コースター形皿	R117
93	SK7873	土師器 皿	(口径) 13.6cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻 黒色粒子含む	良好	内：浅黄橙 10YR8/4 外：明黄褐 10YR7/6	60%		R119

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
94	SK7873	土師器 皿	(口径) 15.8cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	微細なウンモ片含む	やや不良	内：黄橙 7.5YR7／8 外：橙 7.5YR7／6	60%		R118
95	SK7873	陶器 小皿 (山皿)	(口径) 9.6cm (器高) 2.6cm (台径) 4.3cm	口縁部内外面ロクロナデ、 底部外面ヘラ切後荒いナデ	精緻 黒色粒子含む	良好	内：浅黄 2.5Y7／3 外：灰白 5Y7／2	70%	ロクロ右回り	R120
96	SK7873	陶器 椀 (山茶椀)	(口径) 16.6cm (器高) 5.4cm (台径) 6.8cm	口縁部内外面ロクロナデ、 底部外面ヘラ切後未調整	やや粗 微細なウンモ片 ・1mm大砂粒含む	良好	内：にぶい黄 2.5Y6／4 外：灰白 5Y7／1	80%	高台に籾殻痕跡あり	R121
97	SK0247	土師器 小皿	(口径) 8.4cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後不定方向のナデ	精緻 微細なウンモ片 ・クサリ礫含む	良好	内：橙2.5YR7／6～ 灰赤2.5YR6／2 外：橙2.5YR7／8～ 赤灰2.5YR6／1	75%		R124
98	SK0247	土師器 小皿	(口径) 8.2cm (器高) 1.6cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻	良好	内：橙 5YR7／6 外：〃 〃	完形		R125
99	SK0247	土師器 小皿	(口径) 8.4cm (器高) 1.8cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻 微細なウンモ片 ・クサリ礫含む	良好	内：橙 5YR7／6 外：〃 〃	80%		R122
100	SK0247	土師器 小皿	(口径) 8.4cm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	やや粗	やや不良	内：浅黄橙 10YR8／4 外：浅黄橙 10YR8／3	完形		R123
101	SK0247	土師器 杯	(口径) 14.8cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	粗い クサリ礫含む	不良	内：にぶい橙7.5YR7／4 ～ 浅黄橙10YR8／3	完形	器形にひずみあり	R126
102	SK0247	土師器 杯	(口径) 15.2cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後粗いナデ	精緻 クサリ礫・微細 なウンモ片含む	良好	内：橙 5YR7／6 外：橙 5YR7／8	50%		R127
103	SK0247	陶器 椀 (山茶椀)	(口径) 16.2cm (器高) 4.9cm (台径) 9.2cm	口縁部内外面ロクロナデ、 底部外面ヘラ切後未調整	精緻	良好	内：灰オリーブ5Y6／2～灰 5Y6／1 外：灰白 5Y7／1	70%		R128
104	SK7868	土師器 小皿	(口径) 7.2cm (器高) 1.1cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻 クサリ礫多く含む	良好	内：橙 2.5YR6／8 外：橙2.5YR6／8～淡橙 5YR8／4	ほぼ完存		R76
105	SK7868	土師器 小皿	(口径) 7.0cm (器高) 1.1cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	やや粗 1.0mm大砂粒含む	良好	内：浅黄橙10YR8／4～橙 5YR6／6 外：橙5YR7／6～ 淡橙 5YR8／4	完形		R77
106	SK7868	土師器 小皿	(口径) 7.2cm (器高) 1.2cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻 ウンモ片含む	良好	内：橙 5YR7／6 外：〃 〃	90%		R84
107	SK7868	土師器 小皿	(口径) 7.4cm (器高) 1.3cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻	良好	内：にぶい赤褐 5YR5／4 外：にぶい橙 5YR6／4	90%		R85
108	SK7868	土師器 小皿	(口径) 7.4cm (器高) 1.0cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻 クサリ礫多く 含む	良好	内：橙 5YR7／8 外：橙 5YR7／6	ほぼ完存		R83
109	SK7868	土師器 小皿	(口径) 7.4cm (器高) 1.0cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻 黒色粒子・クサリ礫含む	良好	内：橙5YR7／8～浅黄橙 7.5YR8／4 外：橙5YR7／8～浅黄橙 10YR8／4	完形		R81
110	SK7868	土師器 小皿	(口径) 7.6cm (器高) 1.2cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻 微細なウンモ片 含む	良好	内：橙 5YR7／6 外：〃 〃	完形		R78
111	SK7868	土師器 小皿	(口径) 7.6cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻 クサリ礫含む	良好	内：橙 5YR7／6 外：〃 〃	ほぼ完存		R82
112	SK7868	土師器 小皿	(口径) 7.8cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻 クサリ礫・微細 なウンモ片含む	良好	内：橙5YR7／6～浅黄橙 7.5YR8／4 外：橙5YR6／6～橙 5YR7／6	ほぼ完存		R79
113	SK7868	土師器 小皿	(口径) 7.8cm (器高) 1.1cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻 微細なウンモ片 含む	良好	内：橙 5YR7／8 外：黄橙 7.5YR8／8	ほぼ完存		R75
114	SK7868	土師器 小皿	(口径) 7.8cm (器高) 1.2cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻 微細なウンモ片 含む	良好	内：橙 2.5YR6／8 外：〃 〃	完形		R80
115	SK7868	土師器 皿	(口径) 12.2cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、内面不定 方向のナデ、外面オサエ後 ナデ	やや粗 1.0mm大砂粒・ クサリ礫含む	不良	内：黄橙 10YR8／6 外：浅黄橙 10YR8／4	ほぼ完存		R70
116	SK7868	土師器 皿	(口径) 12.6cm (器高) 2.9cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻 クサリ礫・微細 なウンモ片含む	良好	内：黄橙 7.5YR7／8 外：黄橙 7.5YR8／8	ほぼ完存		R99
117	SK7868	土師器 皿	(口径) 12.6cm (器高) 2.6cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻 微細なウンモ片 含む	良好	内：にぶい黄橙10YR7／4～10YR6／4 外：黄橙 10YR8／6	ほぼ完存		R74
118	SK7868	土師器 皿	(口径) 12.6cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻	良好	内：橙 7.5YR7／6 外：橙 5YR7／8	90%		R69
119	SK7868	土師器 皿	(口径) 12.8cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻 クサリ礫・微細 なウンモ片含む	良好	内：橙 5YR7／8 ～浅橙 5YR8／4 外：浅黄橙7.5YR8／4～ 浅黄橙7.5YR8／3	ほぼ完存		R73
120	SK7868	土師器 皿	(口径) 13.2cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	やや粗 クサリ礫・微細 なウンモ片含む	やや不良	内：黄橙 10YR7／8 外：浅黄橙 7.5YR8／6	完形		R72
121	SK7868	土師器 皿	(口径) 13.4cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 外面オサエ後ナデ	精緻 クサリ礫含む	不良	内：黄橙 10YR8／6 外：〃 〃	90%		R68
122	SB7900	土師器 蓋	(口径) 20.1cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、内面不定 方向ナデ、ミガキ、外面ナ デ、荒いミガキ、ツマミ貼 付時のナデ	精緻 黒色粒子・微細 なウンモ片含む	良好	内：明赤褐 2.5YR5／8 外：橙 2.5YR6／8	60%	天井部外面にヘラ描き記 号「>」あり	R141
123	SB7886	灰釉陶器 三足盤	(口径) 16.6cm (残高) 2.5cm	内外面ロクロナデ、脚部貼 付時のナデ	精緻 黒色粒子含む	良好	内：オリーブ黄 7.5Y6／3 外：灰白 5Y7／1	20%		R143

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
124	S X 7860	土師器 高杯	(口径) 25.4cm (器高) 8.8cm (脚径) 13.8cm	杯部口縁ヨコナデ、外面ケズリ、放射状にハケメ、内面丁寧なナデ、脚部タテハケ、脚部口縁ヨコナデ、脚部内面ナデ	精緻 黒色粒子・クサリ礫少量含む	良好	内：橙 2.5YR7／8 外：〃 〃	80%	杯部はほぼ完存、脚部口縁の1／3を欠損、130（R143)の「和同開珎」入り杯の上面より天地逆転して出土	R 129
125	S X 7860	土師器 杯	(口径) 19.2cm (器高) 4.8cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後丁寧なナデ、内面ナデ	クサリ礫・微細なウンモ片含む	良好	内：橙 2.5YR7／8 外：〃 〃	ほぼ完形	内面見込み部に裏向きの「和同開珎」5枚（R131～R135）あり、外面底部にヘラ描き「イ」あり	R 130
131	S B 7885	須恵器 転用硯	(残存長) 11.4cm (残存幅) 6.0cm	硯面同心円状タタキ、背面平行タタキ	1.2mm～1.5mm 大の砂粒・微細なウンモ片含む	やや不良	硯面：灰 10Y5／1 背面：灰 5Y5／1	90%	須恵器甕破片の転用による硯、推定底辺9cmの二等辺三角形型呈す	R 142
132	S B 7890	土師器 小皿	(口径) 7.4cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	粗い 1mm大の砂粒多く含む	やや不良	内：浅黄橙 10YR8／3 外：〃 〃	20%	朱付着土器、小皿内面に朱:明赤褐2.5YR5／8付着	R 148
133	S K 6659	土師器 皿	(口径) 11.6cm (器高) 1.8cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	クサリ礫・微細なウンモ片少量含む	やや不良	内：黄橙 7.5YR8／8 外：黄橙 7.5YR7／8	20%	朱付着土器、皿内面に朱:暗赤褐2.5YR3／6付着	R 147
134	M37 遺構上面	土師器 鉢	(口径) 23.4cm (残高) 4.3cm	口縁部ヨコナデ、外面横方向のケズリ、内面ナデ?	精緻	やや不良	内：橙 2.5YR6／8 外：〃 〃	20%	朱付着土器、鉢内面に朱:赤褐2.5YR4／8付着	R 149
135	N33 包含層	灰釉陶器 椀	(台径) 6.8cm (残高) 3.6cm	ロクロナデ、高台貼付時のナデ、糸切り痕未調整	精緻 黒色粒子含む	良好	内：灰黄 2.5Y7／2 外：灰白 5Y7／1	30%	朱墨転用硯、灰釉陶器椀内面に朱:赤10R4／8の痕跡あり	R 150
136	L35 遺構上面	黒色土器 鉢	(口径) 7.0cm (残高) 3.8cm	口縁部ヨコナデ、外面ミガキ、内面ヨコナデ	精緻 微細なウンモ片含む	やや不良	内：暗灰 N3／ 外：〃 〃	10%		R 145
137	N32 包含層	黒色土器 椀	(口径) 13.4cm (残高) 4.6cm	口縁部ヨコナデ、外面横方向のケズリ、内面ミガキ	精緻 微細な金ウンモ片含む	良好	内：暗灰 N3／ 外：橙 7.5YR6／6	12%		R 144
138	S K 7879	黒色土器 鉢	(口径) 14.4cm (残高) 6.9cm	口縁部ヨコナデ、外面ケズリ、内面ケズリ	微細なウンモ片・0.8mm大の砂粒含む	やや不良	内：灰 N4／ 外：暗灰 N3／	15%		R 146
139	S K 7868	陶器 椀 (山茶椀)	(口径) 14.7cm (残高) 4.0cm	口縁部ロクロナデ	やや粗 黒色粒子含む	良好	内：灰黄 2.5Y7／2 外：灰白 5Y7／1	35%	漆付着土器、内面に漆:オリーブ黒7.5Y3／1付着	R 151
140	S D 7869	陶器 椀 (山茶椀)	(口径) 13.4cm (残高) 5.0cm	口縁部ロクロナデ	やや粗 黒色粒子含む	良好	内：灰黄 2.5Y7／2 外：灰白 2.5Y7／1	15%	漆付着土器、内面に漆:黒2.5Y2／1付着	R 152
141	S B 7880	白磁 小皿	(口径) 9.8cm (器高) 2.0cm	口縁部ロクロナデ、内外面に均質に施釉	精緻	良好	胎土：灰白 7.5Y7／1 釉：〃 〃	25%		R 169
142	表土	白磁 小皿	(口径) 10.8cm (器高) 2.7cm (底径) 4.4cm	口縁部・内外面ロクロナデ底部露胎、底部以外に均質に施釉	精緻	良好	胎土：灰白 5Y8／1 釉：灰白 10Y7／2	50%		R 171
143	M38 Pit9	白磁 皿	(口径) 12.6cm (器高) 3.5cm (台径) 4.8cm	口縁部・内外面ロクロナデ削り出輪高台、高台内面露胎、底部以外に均質に施釉	精緻 黒色粒子含む	良好	胎土：灰白 2.5Y8／2 釉：明オリーブ灰 2.5GY7／1	35%		R 168
144	L33 Pit17	白磁 椀	(残高) 3.1cm	口縁部ロクロナデ、内外面に均質に施釉	精緻	良好	胎土：灰白 2.5Y8／2 釉：灰白 5Y8／2	口縁の一部のみ残存	玉縁口縁	R 170
145	K35 遺構上面	白磁 鉢	(残高) 6.3cm	口縁部ロクロナデ、内外面に均質に施釉	精緻	良好	胎土：灰白 2.5Y7／1 釉：灰白 2.5GY8／1	体部破片一部のみ残存		R 172
146	K33 包含層	青磁 椀	(口径) 10.6cm (器高) 3.4cm (底部) 4.0cm	口縁部・内外面ロクロナデ底部以外に均質に施釉	精緻	良好	胎土：灰白 10YR7／1 釉：明オリーブ灰 2.5GY7／1	15%		R 174
147	S D 7869	青磁 輪花椀	(口径) 17.2cm (器高) 7.0cm (台径) 4.8cm	口縁部・内外面ロクロナデ残存部全面に均質な施釉	精緻	良好	胎土：灰白5Y7／1～浅黄橙 10YR8／4 釉：緑灰 7.5GY6／1	12%		R 175
148	L32 遺構上面	青磁 椀	(残高) 5.2cm	口縁部・内外面ロクロナデ残存部全面に均質な施釉	精緻	良好	胎土：灰 N6／ 釉：オリーブ灰 10Y6／2	口縁の一部のみ残存		R 173
149	K37 遺構上面	製塩土器	(口径) 14.0cm (器高) 5.5cm	口縁部・内外面ナデ	1.0mm～1.5mm 大の砂粒含む粗い	不良	内：橙 7.5YR7／6 外：にぶい橙 7.5YR7／4	口縁部のみ1／6残存		R 155
150	S K 7857	製塩土器	(口径) 15.6cm (器高) 5.5cm	口縁部・内外面ナデ	1.0mm～1.5mm 大の砂粒・クサリ礫含む、粗い	やや不良	内：橙 7.5YR7／6 外：にぶい橙7.5YR7／4～橙7.5YR7／6	40%		R 154
151	S K 7857	製塩土器	(口径) 16.6cm (器高) 5.7cm	口縁部・内外面ナデ	1.2mm大の砂粒多く含む、粗い	やや不良	内：橙 5YR7／6 外：橙 5YR6／8	口縁部のみ1／8残存		R 153

No.	出土遺構	器種	法量		胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
152	S B 7855	土製品 土錘	(長) 3.4cm (幅) 1.8cm	(孔径) 0.5cm (残重) 9.47g	黒色粒子・クサリ礫含む、精緻	やや不良	にぶい黄橙 10YR7／4	ほぼ完存	管状土錘 土師質	R 156
153	S B 0250	土製品 土錘	(長) 3.7cm (幅) 1.7cm	(孔径) 0.4cm (残重) 8.72g	クサリ礫・微細なウンモ片含む	やや不良	暗灰黄 2.5Y5／2	完形	管状土錘、土師質 使用による磨滅箇所あり	R 157
154	S B 7881	土製品 土錘	(長) 3.2cm (幅) 1.6cm	(孔径) 0.4cm (残重) 6.21g	微細なウンモ片含む	やや不良	橙2.5YR7／6～ にぶい橙 5YR7／4	完形	管状土錘 土師質	R 166
155	M36 Pit36	土製品 土錘	(長) 3.7cm (幅) 1.6cm	(孔径) 0.4cm (残重) 7.99g	クサリ礫含む	やや不良	明赤褐5YR5／8～ 灰白 10YR8／2	完形	管状土錘、土師質 一面のみ著しく磨滅	R 167
156	S B 7882	土製品 土錘	(長) 3.9cm (幅) 1.2cm	(孔径) 0.3cm (残重) 4.70g	クサリ礫含む	良好	にぶい黄橙10YR7／3～褐灰10YR6／1	ほぼ完存	管状土錘 土師質	R 165
157	S A 7888	土製品 土錘	(長) 4.3cm (幅) 1.1cm	(孔径) 0.3cm (残重) 6.18g	微細なウンモ片含む	良好	にぶい橙5YR6／3～ 褐灰 5YR5／1	ほぼ完存	管状土錘、土師質 使用による磨滅箇所あり	R 159
158	N34 Pit9	土製品 土錘	(長) 4.6cm (幅) 1.4cm	(孔径) 0.4cm (残重) 7.29g	微細なウンモ片含む	やや不良	褐灰7.5YR4／1～にぶい橙 7.5YR6／3	ほぼ完存	管状土錘、土師質 使用による磨滅箇所あり	R 160

No.	出土遺構	器種	法量	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
159	K35 Pit43	土製品 土錘	(長) 6.2cm (孔径) 0.3cm (幅) 1.2cm (残重) 7.32g	微細なウンモ片含む	やや不良	褐灰7.5YR5／1～ 褐灰7.5YR4／1	完形	管状土錘、土師質 使用による磨滅箇所あり	R 158
160	S K7877	土製品 土錘	(長) 3.6cm (孔径) 0.4cm (幅) 1.6cm (残重) 7.95g	クサリ礫多く含む	不良	にぶい黄橙10YR7／2～ 明褐7.5YR5／8	完形	管状土錘 土師質	R 163
161	S K7878	土製品 土錘	(長) 3.7cm (孔径) 0.4cm (幅) 1.6cm (残重) 7.83g	クサリ礫含む	やや不良	明赤褐2.5YR5／8 ～ 浅黄橙10YR8／3	完形	管状土錘、土師質 使用による磨滅箇所あり	R 164
162	S D7874	土製品 土錘	(長) 3.9cm (孔径) 0.3cm (幅) 1.2cm (残重) 5.13g	クサリ礫含む	不良	浅黄橙10YR8／4	完形	管状土錘 土師質	R 161
163	J35 包含層	土製品 土錘	(長) 3.7cm (孔径) 0.4cm (幅) 1.4cm (残重) 7.79g	クサリ礫含む	やや不良	にぶい黄橙10YR7／4～ にぶい黄橙10YR5／3	完形	管状土錘、土師質、使用による磨滅箇所あり 外面に網目状のヘラ描き	R 162

第１１９次調査

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	S K7930	土師器 杯	(口径) 13.4cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：にぶい橙 7.5YR7／4 外：浅黄橙 7.5YR8／4	95%		R 16
2	S K7930	土師器 杯	(口径) 14.2cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 5YR6／6 外：〃 〃	90%		R 7
3	S K7930	土師器 杯	(口径) 15.2cm (器高) 3.5cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：浅黄橙 10YR8／4 外：〃 〃	98%		R 10
4	S K7930	土師器 杯	(口径) 15.3cm (器高) 4.0cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 5YR6／6 外：橙 7.5YR6／6	65%		R 2
5	S K7930	土師器 杯	(口径) 11.9cm (器高) 2.5cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 5YR7／6 外：〃 〃	完形		R 11
6	S K7930	土師器 杯	(口径) 14.2cm (器高) 3.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：にぶい橙 7.5YR7／4 外：〃 〃	口縁部40%		R 6
7	S K7930	土師器 杯	(口径) 15.0cm (器高) 3.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：にぶい黄橙 10YR7／4 外：浅黄橙 7.5YR8／6	40%		R 23
8	S K7930	土師器 杯	(口径) 16.4cm (器高) 4.3cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 7.5YR6／6 外：〃 〃	80%		R 3
9	S K7930	土師器 杯	(口径) 12.5cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：にぶい黄橙 10YR7／4 外：にぶい橙 7.5YR6／4	90%		R 1
10	S K7930	土師器 杯	(口径) 15.2cm (器高) 3.1cm	内外面とも磨滅著しく調整不明	密 クサリ礫含む	やや不良	内：浅黄橙 10YR8／4 外：〃 〃	30%		R 27
11	S K7930	土師器 杯	(口径) 15.2cm (器高) 3.7cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	やや不良	内：黄橙 7.5YR8／8 外：橙 7.5YR7／6	85%		R 26
12	S K7930	土師器 杯	(口径) 16.0cm (器高) 3.9cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：浅黄橙 7.5YR8／6 外：黄橙 7.5YR8／8	25%		R 34
13	S K7930	土師器 杯	(口径) 13.9cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	やや不良	内：浅黄橙 7.5YR8／4 外：〃 10YR8／4	80%		R 14
14	S K7930	土師器 杯	(口径) 14.2cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 2.5YR6／8 外：明黄褐 10YR7／6	95%		R 4
15	S K7930	土師器 杯	(口径) 14.0cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 5YR7／8 外：橙 7.5YR7／6	35%		R 15
16	S K7930	土師器 杯	(口径) 14.2cm (器高) 2.9cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：浅黄橙 7.5YR8／6 外：橙 7.5YR7／6	30%		R 18
17	S K7930	土師器 杯	(口径) 13.1cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 7.5YR7／6 外：にぶい橙 7.5YR7／4	40%		R 24
18	S K7930	土師器 杯	(口径) 14.6cm (器高) 2.9cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：にぶい黄橙 10YR6／4 外：灰黄褐 10YR5／2	45%		R 33
19	S K7930	土師器 杯	(口径) 14.2cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 7.5YR7／6 外：にぶい黄橙 10YR7／4	80%		R 13
20	S K7930	土師器 杯	(口径) 15.4cm (器高) 3.3cm	口縁部強いヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：にぶい橙 7.5YR6／4 外：〃 〃	85%		R 9
21	S K7930	土師器 杯	(口径) 13.8cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 5YR6／6 外：〃 〃	45%		R 29
22	S K7930	土師器 杯	(口径) 14.6cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	やや不良	内：明黄褐 10YR7／6 外：浅黄橙 7.5YR8／6	50%		R 32
23	S K7930	土師器 杯	(口径) 15.5cm (器高) 2.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 2.5YR6／8 外：にぶい橙 7.5YR6／4	口縁部60%		R 8
24	S K7930	土師器 杯	(口径) 15.2cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 5YR6／8 外：橙 5YR7／8	40%		R 17
25	S K7930	土師器 杯	(口径) 12.2cm (器高) 2.4cm	口縁ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：浅黄橙10YR8／4～橙 7.5YR7／6 外：橙 7.5YR7／6	35%		R 22
26	S K7930	土師器 杯	(口径) 14.5cm (器高) 3.3cm	口縁ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 7.5YR6／6 外：〃 〃	50%		R 31
27	S K7930	土師器 杯	(口径) 14.9cm (器高) 2.9cm	口縁ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 7.5YR7／6 外：にぶい橙 7.5YR7／4	98%		R 5
28	S K7930	土師器 杯	(口径) 15.6cm (器高) 2.4cm	口縁ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 5YR6／6 外：〃 〃	30%		R 28
29	S K7930	土師器 杯	(口径) 14.6cm (器高) 2.9cm	口縁ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	やや不良	内：にぶい黄橙 10YR7／4 外：〃 〃	35%		R 30
30	S K7930	土師器 皿	(口径) 11.9cm (器高) 0.8cm	口縁ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：浅黄橙 7.5YR8／6 外：〃 〃	口縁部完存		R 36

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
31	SK7930	土師器 皿	(口径) 13.6cm (器高) 1.8cm	口縁ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 7.5YR7/6 外：〃 〃	40%		R19
32	SK7930	土師器 皿	(口径) 13.8cm (器高) 1.8cm	口縁ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 7.5YR6/6 外：橙 7.5YR7/6	30%		R35
33	SK7930	土師器 皿	(口径) 14.4cm (器高) 2.1cm	口縁ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 5YR7/6 外：〃 〃	80%		R21
34	SK7930	土師器 皿	(口径) 17.1cm (器高) 1.2cm	口縁ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 5YR6/6 外：橙 7.5YR6/6	50%		R25
35	SK7930	土師器 台付皿	(口径) 16.6cm (高台径) 7.2cm (器高) 2.3cm	口縁ヨコナデ、外面オサエハケ、高台部ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 7.5YR6/6 外：橙 5YR6/6	50%		R20
36	SK7930	土師器 台付杯	(口径) − cm (高台径) 7.9cm (残高) 2.8cm	高台部ヨコナデ、底部ナデ	密	やや不良	内：浅黄橙 7.5YR8/4 外：〃 〃	高台部完存		R39
37	SK7930	土師器 台付杯	(口径) − cm (高台径) 8.2cm (残高) 3.2cm	外面ナデ、高台部ヨコナデ底部ナデ	密	やや不良	内：浅黄橙 7.5YR8/4 外：〃 〃	高台部65%		R40
38	SK7930	土師器 台付杯	(口径) − cm (高台径) 9.0cm (残高) 3.5cm	高台部ヨコナデ、底部ナデ	密	不良	内：浅黄橙 7.5YR8/6 外：淡黄 2.5YR8/3	高台部完存		R38
39	SK7930	土師器 台付杯	(口径) − cm (高台径) 9.8cm (残高) 2.4cm	高台部ヨコナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：浅黄橙 7.5YR8/6 外：〃 〃	高台部完存		R37
40	SK7930	須恵器 椀	(口径) 13.0cm (高台径) 5.3cm (器高) 3.7cm	内外面上部回転ナデ、下部ナデ、底部静止糸切り	密	不良	内：にぶい黄橙 10YR6/4 外：〃 10YR7/3	完形		R12
41	SK7930	灰釉陶器 椀	(口径) − cm (高台径) 7.6cm (残高) 1.6cm	高台部貼付ヨコナデ、底部回転糸切り	密 1mmの砂粒含む	良好	内：灰白 2.5Y8/1 外：灰白 2.5Y8/2	高台部90%	墨痕あり	R44
42	SK7930	須恵器 椀	(口径) − cm (高台径) 6.8cm (残高) 1.5cm	高台部ヨコナデ、底部糸切り後ナデ	密	良好	内：灰白 7.5Y7/1 外：灰白 5Y7/1	55%	墨痕あり	R43
43	SK7930	土師器 鉢	(口径) − cm (高台径) 9.4cm (残高) 6.5cm	外面ナデ、高台部ヨコナデ底部ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：(杯部) 浅黄橙 7.5YR8/6 (脚部) 橙 7.5YR7/6 外：浅黄橙 7.5YR8/6	高台部20%		R41
44	SK7930	土師器 鉢	(口径) 30.0cm (残高) 8.2cm	口縁ヨコナデ、外面ハケ、内面ナデ	密	良好	内：浅黄橙 7.5YR8/4 外：にぶい黄橙 10YR7/4	30%		R45
45	SK7930	土師器 甕	(口径) 17.0cm (残高) 8.1cm	口縁ヨコナデ、外面ハケ、内面ナデ	密 1mmの砂粒含む	良好	内：黄橙 7.5YR7/8 外：浅黄橙 7.5YR8/6	30%		R42
46	SK7930	土師器 長胴甕	(口径) 26.0cm (残高) 21.0cm	口縁ヨコナデ、外面タテハケ、内面上半部ヨコハケ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 7.5YR7/6 外：〃 〃	70%		R62
47	SK7932	土師器 杯	(口径) 13.0cm (残高) 3.1cm	口縁ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	やや不良	内：橙 7.5YR7/6 外：〃 〃	80%		R47
48	SK7932	土師器 杯	(口径) 13.6cm (残高) 2.9cm	口縁ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR6/8〜オリーブ黒5Y3/1 外：橙 5YR6/8	口縁部25%		R48
49	SK7932	土師器 杯	(口径) 13.9cm (器高) 2.5cm	口縁ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 5YR7/8 外：〃 〃	50%		R46
50	SK7932	土師器 杯	(口径) 14.6cm (器高) 1.8cm	口縁ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR7/6 外：〃 〃	口縁部50%		R49
51	SK7932	土師器 杯	(口径) 16.0cm (器高) 3.4cm	口縁ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 クサリ礫含む	やや不良	内：にぶい橙 7.5YR7/4 外：〃 〃	口縁部40%		R50
52	SK7932	土師器 甕	(口径) 22.6cm (器高) 28.0cm	口縁ヨコナデ、外面タテハケ、内面板状工具ナデ、内外面底部ケズリ	やや粗	良好	内：浅黄橙 7.5YR8/4 外：(口縁部) 浅黄橙 7.5YR8/4 (胴部) 黒 10YR2/1	口縁部90% 体部50%		R51
53	SB7951	弥生土器 高杯	(口径) 21.4cm (残高) 4.3cm	磨滅の為、不明瞭	密 1mmの砂粒含む	良好	内：明赤褐 5YR5/6 外：橙 5YR6/8	杯部20%		R54
54	SB7951	弥生土器 壺	(底径) 3.8cm (残高) 3.3cm	磨滅の為、不明瞭	やや粗 1mmの砂粒含む	良好	内：にぶい黄橙 10YR6/4 外：〃 〃	底部のみ	内面に黒色付着物	R55
55	SX7945	弥生土器 高杯	(最大径) 6.0cm (残高) 6.4cm	磨滅の為、不明瞭	やや粗 1mmの砂粒含む	良好	内：橙 7.5YR6/8 外：橙 5YR6/8	脚部のみ	三方円形透孔 横線文2条2段	R52
56	SX7945	弥生土器 高杯	(最大径) 9.2cm (残高) 12.5cm	磨滅の為、不明瞭	やや粗1〜2mmの砂粒含む	良好	内：にぶい黄橙 10YR7/4 外：浅黄橙 10YR8/4	脚部のみ	三方円形透孔 横線文3条2段	R53
57	SE7920	土師器 杯	(口径) 16.6cm (器高) 3.5cm	口縁ヨコナデ、外面底部磨滅の為不明瞭、内面ナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 5YR7/8 外：橙 5YR6/8	40%		R56
58	SE7920	土師器 杯	(口径) 16.8cm (器高) 3.0cm	口縁ヨコナデ、外面オサエ内面ナデ	密 クサリ礫含む	やや不良	内：橙 7.5YR7/6 外：〃 〃	85%		R57
59	SE7920	土師器 高杯	(台径) 10.8cm (残高) 11.1cm	端部ヨコナデ、脚柱部ケズリにより面取り	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 5YR7/8 外：〃 〃	脚部完存		R70
60	SE7920	土師器 高杯	(最大径) 6.4cm (残高) 12.2cm	外面ハケ後面取りケズリ、内面ナデ(ハケメ残る)	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 5YR6/8 外：〃 〃	柱状部のみ		R71
61	SE7920	須恵器 蓋	(口径) 17.8cm (器高) 1.6cm	内外面回転ナデ	密	良好	内：灰黄 2.5Y7/2 外：灰白 5Y7/2	25%		R59
62	SE7920	須恵器 蓋	(口径) 19.4cm (器高) 3.1cm	内外面回転ナデ、外面上部回転ケズリ	密 1mmの砂粒含む	良好	内：黄灰 2.5Y6/1 外：灰白 7.5Y7/1	90%	ロクロ右回転 重ね焼痕あり	R58
63	SE7920	須恵器 蓋	(口径) 13.4cm (器高) 3.3cm	内外面回転ナデ、外面上部ヘラケズリ	密	良好	内：灰 N5/ 外：〃 〃	30%	ロクロ右回転	R60
64	SE7920	須恵器 台付杯	(口径) 15.5cm (高台径) 7.5cm (残高) 4.5cm	内外面回転ナデ、高台貼付後ナデ	密	良好	内：灰白 10Y8/1 外：灰白 5Y8/1	杯部 40% 高台部30%		R61

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
65	包含層	ロクロ土師器 台付小皿	(口径) 9.6cm (高台径) 4.4cm (器高) 2.5cm	内外面回転ナデ、底部糸切り	密 1㎜の砂粒含む	良好	内：浅黄橙 7.5YR8／6 外：橙 7.5YR7／6	完形	糸切痕あり	R68
66	包含層	ロクロ土師器 台付小皿	(口径) －cm (高台径) 6.0cm (器高) 3.1cm	内外面回転ナデ、底部糸切り	やや粗1～3㎜大の砂礫含む	良好	内：にぶい黄橙 10YR6／4 外：灰黄褐 10YR6／2	高台部完存		R69
67	包含層	ロクロ土師器 小皿	(口径) 9.0cm (器高) 2.1cm	内外面回転ナデ、底部糸切り	密 1㎜の砂礫含む	良好	内：橙 5YR6／8 外：〃 〃	完形	糸切痕あり	R66
68	包含層	ロクロ土師器 台付小皿	(口径) 10.2cm (高台径) 5.2cm (器高) 3.1cm	内外面回転ナデ、高台貼付時のナデ	密 クサリ礫含む	良好	内：橙 5YR6／8 外：〃 〃	口縁部20% 高台部完存		R65
69	包含層	ロクロ土師器 台付小皿	(口径) 9.2cm (高台径) 6.0cm (器高) 3.0cm	口縁ヨコナデ、内外面回転ナデ、高台貼付時のナデ	1㎜の砂礫多く含む	やや不良	内：黄橙 7.5YR7／8 外：〃 〃	口縁部20% 高台部40%		R63
70	包含層	ロクロ土師器 台付小皿	(口径) 9.0cm (高台径) 5.8cm (残高) 3.3cm	口縁ヨコナデ、内外面回転ナデ、高台貼付時のナデ	1～2㎜の砂礫多く含む	良好	内：橙 7.5YR6／6 外：黄橙 7.5YR7／8	口縁部5% 高台部10%		R64
71	包含層	灰釉陶器 皿	(口径) 11.0cm (高台径) 6.3cm (器高) 1.8cm	内外面回転ナデ、底部糸切り後ナデ、高台貼付時のナデ	密	良好	内：灰黄 2.5Y7／2 外：灰白 2.5Y7／1	完形		R67
76	P－13 Pit-18	須恵器 甕	(口径) －cm	内外面回転ナデ	密	良好	内：灰 5Y6／1 外：暗灰 N3／	長辺3.8cm 短辺2.6cm	外面にヘラ描きあり 「□部□」	R76
77	P－13 Pit-18	須恵器 蓋	(口径) 28.6cm (残高) 2.3cm	内外面回転ナデ、外面頂部回転ヘラケズリ	密 細砂多く含む	良好	内：にぶい黄褐 10YR6／3 外：灰 7.5YR6／	20%		R77

No.	出土遺構	器種	法量	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
72	SK7930	土製品 土錘	(総長) 2.5cm (最大幅) 3.1cm (孔径) 0.6cm (重量) 24.2g	密	良好	にぶい橙 7.5YR7／4	完形		R72
73	P－18 包含層	土製品 土錘	(総長) 4.2cm (最大幅) 2.4cm (孔径) 0.8cm (重量) 17.2g	密	良好	橙 7.5YR7／6	完形		R73
74	SK7958	土製品 土錘	(総長) 5.5cm (最大幅) 1.8cm (孔径) 0.5cm (重量) 13.8g	密	やや不良	灰黄褐 10YR6／2	完形		R75
75	O－17 包含層	土製品 土錘	(総長) 6.9cm (最大幅) 1.9cm (孔径) 0.4cm (重量) 19.0g	密	良好	黄橙 10YR8／6	完形		R74

第１２０次調査

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	SD6050	土師器 蓋	(口径) 21.2cm (器高) 3.3cm	口縁部ヨコナデ、外面ヘラミガキ、内面ナデ	密	良好	内：にぶい橙 5YR6／4 外：橙 5YR6／8	25%	器面の残存状況悪くミガキ残り悪い	R82
2	SD6050	土師器 杯	(口径) 17.6cm (器高) 5.8cm	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ後放射・螺旋暗文	密	良好	内：橙 5YR6／6 外：橙 5YR6／6 黄灰 2.5Y5／1	70%	器面の残存状況悪く螺旋暗文不鮮明	R86
3	SD6050	土師器 杯	(口径) 16.4cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ	密	良好	内：にぶい橙 5YR6／4 外：にぶい橙 7.5YR6／4	25%		R81
4	SD6050	土師器 杯	(口径) 13.4cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	やや粗	良好	内：橙 7.5YR7／6 外：橙 7.5YR7／6	ほぼ完形		R80
5	SD6050	土師器 杯	(口径) 13.8cm (器高) 3.7cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	やや粗	良好	内：にぶい黄橙 10YR7／4 外：にぶい黄橙 10YR7／3	40%		R85
6	SD6050	土師器 蓋	(口径) 22.2cm (器高) 2.1cm	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後ヘラミガキ	密	良好	内：にぶい橙 7.5YR6／4 外：にぶい橙 7.5YR6／4	40%		R91
7	SD6050	土師器 鍋	(口径) 22.2cm (器高) 残11.3cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、内面ヨコハケ、下半ケズリ	やや粗 2㎜大の砂粒含む	並	内：にぶい橙 5YR7／4 外：にぶい橙 5YR6／4	40%	外面ハケメ６本／cm 内面ハケメ９本単位	R92
8	SD6050	土師器 鍋	(口径) 27.7cm (器高) 残14.2cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、内面ヨコハケ、下半ケズリ	やや粗 ３㎜大の砂粒含む	並	内：橙 5YR6／6 外：橙 5YR6／4	40%	外面ハケメ４本／cm 内面ハケメ７本／cm	R79
9	SD6050	土師器 甕	(口径) 19.7cm (器高) 残21.2cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、内面ヨコハケ、下半ケズリ	やや密 1㎜大の砂粒含む	良好	内：にぶい黄橙 10YR6／3 外：にぶい橙 7.5YR7／4	50%	外面ハケメ８本／cm 内面ハケメ８本／cm	R94
10	SD6050	土師器 長胴甕	(口径) 25.0cm (器高) 残31.3cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、内面ヨコハケ、下半ケズリ	やや粗 3㎜大の砂粒含む	並	内：にぶい黄橙 10YR7／4 外：にぶい黄橙 10YR7／4	75%	外面ハケメ８本／cm 内面ハケメ８本／cm	R78
11	SD6050	須恵器 杯	(口径) 17.0cm (器高) 5.0cm	底部回転ヘラケズリ、口縁部内外面回転ナデ	やや密 1㎜大の砂粒含む	不良	内：灰黄 2.5Y6／2 外：灰～灰黄 N6／0～2.5Y6／2	35%	回転方向右廻り	R93
12	SD6050	須恵器 杯	(口径) 28.6cm (器高) 5.7cm (高台径) 23.8cm	底部回転ヘラケズリ、口縁部内外面回転ナデ	やや密 1㎜大の砂粒含む	良好	内：灰黄 2.5Y6／2 外：黄灰 2.5Y6／1	65%	回転方向左廻り 底部墨書あり判読不明	R84
13	SD6050	須恵器 盤	(口径) 24.8cm (器高) 2.0cm (高台径) 19.6cm	底部回転ヘラケズリ、口縁部内外面回転ナデ	やや粗 2㎜大の砂粒含む	良好	内：灰黄 2.5Y7／2 外：灰黄 2.5Y7／2	30%	回転方向左廻り	R83
14	SD6050	須恵器 甕	(口径) 23.8cm (器高) 残10.3cm	口縁部内外面回転ナデ、外面回転カキメ	やや粗	良好	内：灰 N4／0 外：灰～灰黄 N4／0～2.5Y6／2	つまみ完存 口縁部10%	回転方向廻り カキメ６本／cm	R87
15	SD6050	須恵器 甕	(口径) 28.0cm (器高) 残10.7cm	口縁部内外面回転ナデ、外面タタキ後ナデケシ	やや粗	良好	内：灰～灰黄 5Y5／1～2.5Y6／2 外：灰～灰黄 5Y4／1～2.5Y6／2	口縁部20%	回転方向廻り	R88
16	SD6050	須恵器 甕	(口径) 35.8cm (器高) 残16.2cm	口縁部内外面回転ナデ、外面タタキ後ナデケシ、内面同心円状当て具痕跡	やや粗 1㎜大の砂粒含む	良好	内：黄灰 2.5Y6／1 外：灰黄 2.5Y6／2	口縁部10%	回転方向廻り	R89

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
17	SD6050	須恵器 甕	(口径) —— (器高) 残5.6cm (高台径) 23.5cm	内外面回転ナデ、外面下部回転ケズリ、底部内面同心円状当て具痕跡	やや粗 1mm大の砂粒含む	良好	内：灰黄 2.5Y7／2 外：灰黄 2.5Y7／2	底部35%	回転方向右廻り 16と同一個体と思われる	R90
18	SK7985	土師器 杯	(口径) 14.2cm (器高) 2.9cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR7／8 外：橙 5YR7／8	口縁部40%	口縁端部に油煙付着	R10
19	SK7985	土師器 杯	(口径) 14.4cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR7／8 外：橙 5YR7／8	口縁部45%		R15
20	SK7985	土師器 杯	(口径) 14.0cm (器高) 2.9cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR7／8 外：橙 5YR7／8	口縁部40%		R21
21	SK7985	土師器 杯	(口径) 14.0cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR6／8 外：橙 5YR6／8	口縁部50%		R38
22	SK7985	土師器 杯	(口径) 15.2cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR6／8 外：橙 5YR6／8	口縁部60%		R13
23	SK7985	土師器 杯	(口径) 14.8cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR7／8 外：橙 5YR7／8	口縁部50%		R18
24	SK7985	土師器 杯	(口径) 14.4cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR7／8 外：浅黄橙 7.5YR8／3	ほぼ完形		R11
25	SK7985	土師器 杯	(口径) 15.0cm (器高) 3.3cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 2.5YR7／8 外：橙 2.5YR7／8	口縁部70%		R53
26	SK7985	土師器 杯	(口径) 14.0cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR7／8 外：橙 5YR7／8	口縁部30%		R33
27	SK7985	土師器 杯	(口径) 13.4cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：浅黄橙 10YR8／4 外：浅黄橙 7.5YR8／6	口縁部15% 底部 80%		R19
28	SK7985	土師器 杯	(口径) 15.4cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR7／8 外：橙 5YR7／8	口縁部60%	口縁部歪みあり 口径15.4cm～16.4cm	R23
29	SK7985	土師器 杯	(口径) 14.4cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ後螺旋暗文	密	良好	内：橙 2.5YR6／8 外：橙 2.5YR6／8	口縁部40%		R20
30	SK7985	土師器 杯	(口径) 15.4cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR7／8 外：橙 5YR7／8	口縁部50%		R17
31	SK7985	土師器 杯	(口径) 14.4cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR7／8 外：橙 5YR7／8	口縁部45%		R16
32	SK7985	土師器 杯	(口径) 13.9cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密だが2～4mm大の砂粒含む	良好	内：橙 5YR7／8 外：橙 5YR7／8	完形		R12
33	SK7985	土師器 杯	(口径) 15.0cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 2.5YR7／8 外：橙 2.5YR7／8	口縁部80%		R14
34	SK7985	土師器 杯	(口径) 17.2cm (器高) 3.9cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR7／8 外：浅黄橙 7.5YR8／6	口縁部40%		R34
35	SK7985	土師器 杯	(口径) 19.6cm (器高) 残4.3cm	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ	密	良好	内：橙 2.5YR7／8 外：橙 2.5YR7／8	口縁部60%		R52
36	SK7985	土師器 杯	(口径) 16.4cm (器高) 残4.7cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR6／8 外：橙 5YR6／8	口縁部20%		R37
37	SK7985	土師器 杯	(口径) 16.6cm (器高) 5.2cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ後放射・螺旋暗文	密	良好	内：浅黄橙 7.5YR8／6 外：浅黄橙 7.5YR8／6	口縁部25%		R39
38	SK7985	土師器 台付杯	(口径) 14.4cm (器高) 4.4cm (高台径) 7.1cm	口縁部ヨコナデ、外面ナデ後タテハケ、内面ナデ	密	良好	内：橙 2.5YR7／8 外：橙 2.5YR7／8	口縁部25% 底部完存		R51
39	SK7985	土師器 台付杯	(口径) —— (器高) 4.4cm (高台径) 7.1cm	口縁部ヨコナデ、外面ナデ後タテハケ、内面ナデ	密	良好	内：にぶい橙 7.5YR7／4 外：にぶい橙 7.5YR7／3	底部70%		R24
40	SK7985	土師器 蓋	(口径) 19.8cm (器高) 残2.3cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 2.5YR6／8 外：橙 2.5YR6／8	口縁部20%	内面の全面に煤付着	R35
41	SK7985	土師器 皿	(口径) 14.6cm (器高) 1.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR7／8 外：橙 5YR7／8	口縁部60%		R29
42	SK7985	土師器 皿	(口径) 15.2cm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 2.5YR7／8 外：橙 5YR7／8	口縁部40%		R28
43	SK7985	土師器 皿	(口径) 14.8cm (器高) 1.8cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：にぶい橙 7.5YR7／4 外：橙 5YR7／6	口縁部20%		R36
44	SK7985	土師器 皿	(口径) 14.4cm (器高) 1.9cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 2.5YR6／8 外：橙 2.5YR7／8	口縁部50%		R76
45	SK7985	土師器 皿	(口径) 15.4cm (器高) 2.0cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR7／8 外：橙 5YR7／8	口縁部50%	底部にはっきりしないが細いヘラ記号あり	R27
46	SK7985	土師器 皿	(口径) 15.4cm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 2.5YR7／8 外：橙 2.5YR7／8	口縁部20%		R26
47	SK7985	土師器 皿	(口径) 16.1cm (器高) 2.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：黄橙 7.5YR7／8 外：黄橙 7.5YR7／8	ほぼ完形		R25
48	SK7985	土師器 皿	(口径) 16.8cm (器高) 2.1cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR7／8 外：橙 5YR7／8	口縁部30%		R75
49	SK7985	土師器 甕	(口径) 11.8cm (器高) 9.5cm	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面板ナデ、下半内外面ともナデ	密	良好	内：浅黄橙 7.5YR8／6 外：橙 7.5YR7／6	口縁部90%	外面ハケメ2本／cm	R31
50	SK7985	土師器 甕	(口径) 12.8cm (器高) 残10.7cm	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、下半ナデ、内面ナデ	密	良好	内：にぶい黄橙 10YR7／2 外：にぶい黄橙 10YR7／3	口縁部50%	外面ハケメ3本／cm	R30
51	SK7985	土師器 甕	(口径) 18.0cm (器高) 残14.6cm	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ後ナデ、下半ナデ内面ナデ	密	良好	内：浅黄橙 10YR8／3 外：にぶい黄橙 10YR7／4	口縁部80%	外面ハケメ3本／cm	R32

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
52	ＳＫ7985	土師器 長胴甕	(口径) 25.5cm (器高) 残8.8cm	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面板ナデ	密	良好	内：にぶい黄橙～灰黄褐 7.5YR6／4～10YR5／2 外：橙 7.5YR7／6	口縁部25%	外面ハケメ３本／cm	R 104
53	ＳＫ7985	土師器 鍋	(口径) 28.9cm (器高) 11.4cm	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面ヨコハケ、下半内外面ともヘラケズリ	密	良好	内：にぶい黄橙 10YR7／4 外：にぶい黄橙 10YR7／4	口縁部80%	外面ハケメ３本／cm 内面ハケメ７本／cm	R 77
54	ＳＫ7985	土師器 鍋	(口径) 23.2cm (器高) 8.0cm	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、下半ヘラケズリ内面ナデ、底ユビオサエ	密	良好	内：橙 5YR7／6 外：橙 5YR7／6	口縁部70%	外面ハケメ単位確認６本／2.2cm	R 103
55	ＳＫ7985	須恵器 蓋	(口径) ― cm (器高) ― cm	外面天井部回転ケズリ、内面回転ナデ	密	良好	内：灰白 N7／0 外：灰白 N7／0	10% つまみ完存	回転方向右廻り	R 54
56	ＳＫ7985	須恵器 蓋	(口径) ― cm (器高) ― cm	内外面とも回転ナデ	密	良好	内：灰白 N6／0 外：灰白 N6／0	5%		R 9
57	ＳＫ7985	須恵器 杯	(口径) ― cm (器高) 残2.1cm (高台径) 11.0cm	内外面とも回転ナデ 高台貼付時ナデ	密	良好	内：青灰 5B6／1 外：青灰 5B6／1	10%		R 8
58	ＳＫ7985	須恵器 盤	(口径) ― cm (器高) ― cm (高台径) 14.0cm	内外面とも回転ナデ 高台貼付時ナデ	密	良好	内：灰白 N7／0 外：灰白 N7／0	15%		R 55
59	ＳＫ7985	灰釉陶器 椀	(口径) 13.4cm (器高) 3.6cm (高台径) 5.4cm	内外面とも回転ナデ 高台貼付時ナデ	密	良好	内：灰白 N8／0 外：灰白 N8／0	口縁部75% 高台部40%	回転方向左廻り	R 56
60	ＳＫ7985	灰釉陶器 椀	(口径) 18.2cm (器高) 5.2cm (高台径) 8.2cm	内外面とも回転ナデ 高台貼付時ナデ	密	良好	内：灰白 5Y8／1 外：灰白 5Y8／1 釉：オリーブ黄 5Y6／4	口縁部20% 高台部完存	回転方向左廻り	R 3
61	ＳＫ7985	灰釉陶器 椀	(口径) 21.0cm (器高) 6.7cm (高台径) 10.0cm	内外面とも回転ナデ 体部の高台付近回転ケズリ 高台貼付時ナデ	密	良好	内：灰白 5Y8／1 外：灰白 5Y8／1 釉：オリーブ黄 7.5Y6／3	口縁部80% 高台部完存	回転方向右廻り	R 4
62	ＳＫ7985	灰釉陶器 椀	(口径) ― cm (器高) 残2.6cm (高台径) 7.6cm	内外面とも回転ナデ 高台貼付時ナデ	密	良好	内：灰白 5Y8／1 外：灰白 5Y8／1	高台部40%	回転方向右廻り	R 2
63	ＳＫ7985	灰釉陶器 皿	(口径) ― cm (器高) 残1.8cm (高台径) 7.6cm	内外面とも回転ナデ 高台貼付時ナデ	密	良好	内：灰白 7.5Y7／1 外：灰白 7.5Y7／1	高台部30%	回転方向右廻り	R 7
64	ＳＫ7985	灰釉陶器 皿	(口径) 15.6cm (器高) 2.5cm (高台径) 7.2cm	内外面とも回転ナデ 高台貼付時ナデ	密	良好	内：灰白 2.5Y8／1 外：灰白 5Y8／1	口縁部50% 高台部50%	回転方向右廻り 外面・底部外面に墨書あり判読不明。	R 40
65	ＳＫ7985	灰釉陶器 皿	(口径) 16.5cm (器高) 2.7cm (高台径) 8.4cm	内外面とも回転ナデ 高台貼付時ナデ	密	良好	内：灰白 2.5Y8／2 外：灰白 2.5Y8／2 釉：灰オリーブ 7.5Y6／2	口縁部25% 高台部完存	回転方向右廻り	R 1
66	ＳＫ7985	灰釉陶器 皿	(口径) 15.4cm (器高) 2.7cm (高台径) 6.5cm	内外面とも回転ナデ 高台貼付時ナデ	密	良好	内：灰白 7.5Y8／1 外：灰白 7.5Y8／1 釉：灰オリーブ 7.5Y6／2	口縁部80% 高台部完存	回転方向左廻り 底部外面に墨書あり判読不明。	R 41
67	ＳＫ7985	灰釉陶器 段皿	(口径) 15.6cm (器高) 2.4cm (高台径) 8.4cm	内外面とも回転ナデ 高台貼付時ナデ	密	良好	内：灰白 5Y7／1 外：灰白 5Y7／1 釉：オリーブ黄 7.5Y6／3	口縁部10% 高台部25%	回転方向不明	R 5
68	ＳＫ7985	灰釉陶器 段皿	(口径) 20.0cm (器高) 2.8cm (高台径) 10.2cm	内外面とも回転ナデ 外面下半回転ケズリ 高台貼付時ナデ	密	良好	内：灰白 5Y7／1 外：灰白 5Y7／1 釉：オリーブ灰 10Y6／2	口縁部10% 高台部10%	回転方向右廻り	R 6
69	ＳＫ7985	製塩土器	(口径) 12.2cm (器高) 6.0cm (底径) 14.0cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 砂粒を含まず	良好	内：橙 7.5YR7／6 外：橙 7.5YR7／6	口縁部10%		R 42
70	ＳＫ7985	製塩土器	(口径) 10.6cm (器高) 5.3cm (底径) 12.2cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 砂粒少ない	良好	内：黄橙 7.5YR7／8 外：黄橙 7.5YR7／8	口縁部15%		R 43
71	ＳＫ7985	製塩土器	(口径) 14.6cm (器高) 5.8cm (底径) 15.8cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 2～10mm大の砂粒を含む	良好	内：橙 5YR6／8 外：橙 5YR6／8	口縁部40%		R 46
72	ＳＫ7985	製塩土器	(口径) ― cm (器高) 5.7cm (底径) ― cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 砂粒を含まず	良好	内：黄橙 10YR8／6 外：浅黄橙 7.5YR8／6	口縁部10% 以下		R 44
73	ＳＫ7985	製塩土器	(口径) ― cm (器高) 5.2cm (底径) ― cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 砂粒を含まず	良好 煤付着	内：淡黄 2.5Y8／3 外：浅黄橙 10YR8／4	口縁部10% 以下	外面煤付着	R 45
74	ＳＫ7985	製塩土器	(口径) ― cm (器高) 5.5cm (底径) ― cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 2～10mm大の砂粒を含む	良好	内：橙 5YR6／8 外：橙 7.5YR6／6	口縁部10% 以下		R 48
75	ＳＫ7985	製塩土器	(口径) ― cm (器高) 5.5cm (底径) ― cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密 砂粒少ない	良好	内：橙 5YR7／8 外：橙 7.5YR6／6	口縁部10% 以下		R 47
78	ＳＢ8000	土師器 杯	(口径) 12.7cm (器高) 2.9cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR6／8 外：橙 5YR6／8	口縁部20%		R 60
79	ＳＢ8000	須恵器 杯	(口径) ― cm (器高) 残1.2cm (高台径) 8.4cm	内外面とも回転ナデ 高台貼付時ナデ	密	良好 灰褐	内：灰 5Y5／1 外：灰 5Y5／1	高台部30%	回転方向左廻り	R 59
80	ＳＢ8000	須恵器 杯	(口径) 16.5cm (器高) 6.2cm (底径) cm	内外面とも回転ナデ 底部外面回転ケズリ	密	良好	内：灰褐 7.5YR2／5 外：灰～にぶい赤褐 7.5YR5／1～2.5YR5／4	口縁部10% 底部30%	回転方向右廻り	R 57
81	ＳＢ7998	土師器 杯	(口径) 15.2cm (器高) 残3.0cm	口縁部ヨコナデ、内外面ともナデ	密	良好	内：橙 5YR6／8 外：橙 5YR6／8	口縁部20%		R 62
82	ＳＢ7998	土師器 杯	(口径) ― cm (器高) 残3.2cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 10YR8／4 外：橙 5YR7／8	口縁部10%		R 61
83	ＳＢ7998	須恵器 蓋	(口径) 15.8cm (器高) 残1.2cm	内外面とも回転ナデ 天井部1／2回転ケズリ	密	良好	内：灰 5Y6／1 外：全面自然釉のため不明 灰オリーブ 7.5Y5／3	口縁部40%	回転方向右廻り	R 58

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
84	SB8003	土師器 皿	(口径) 16.9cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、一部粗いミガキ、外面オサエ後粗いケズリ、内面ナデ後放射・螺旋暗文	密	良好	内：橙 5YR6／6 外：橙 2.5YR7／8	口縁部30%		R63
85	SB7996	土師器 杯	(口径) 15.1cm (器高) 残3.5cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	やや粗1～2mm大の砂粒含む	良好	内：浅黄橙 7.5YR8／6 外：浅黄橙 7.5YR8／6	完形		R64
86	SB7997	土師器 台付杯	(口径) 15.0cm (器高) 4.8cm (高台径) 9.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ、高台貼付時ナデ	密	良好	内：浅黄橙 7.5YR8／4 外：浅黄橙 7.5YR8／4	口縁部50% 高台完存		R69
87	SK7980	土師器 杯	(口径) 16.0cm (器高) 3.5cm	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR6／6 外：にぶい橙 5YR6／4	口縁部40%		R105
88	SK7980	土師器 杯	(口径) 19.0cm (器高) 残4.8cm	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後粗いミガキ、内面ナデ後放射暗文	密	良好	内：橙 5YR6／6 外：橙 5YR6／6	口縁部10%		R106
89	SK7980	土師器 甕	(口径) ― cm (器高) ― cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、内面ヨコハケ	密	良好	内：にぶい橙 10YR7／3 外：にぶい橙 10YR7／3	口縁部10%以下		R107
90	SK7966	土師器 皿	(口径) 17.0cm (器高) 2.3cm	口縁部ヨコナデ、外面ユビオサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：明赤褐色 2.5YR5／8 外：明赤褐色 2.5YR5／8	完形		R108
91	SK7990	土師器 皿	(口径) 16.0cm (器高) 2.5cm	口縁部ヨコナデ、外面ユビオサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 7.5YR6／6 外：橙 7.5YR6／6	口縁部50%		R113
92	SK7990	土師器 皿	(口径) 17.2cm (器高) 2.1cm	口縁部ヨコナデ、外面ユビオサエ後ナデ、内面ナデ	やや粗	良好	内：橙 7.5YR6／6 外：橙 7.5YR6／6	口縁部40%		R112
93	SK7987	土師器 杯	(口径) 13.7cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、外面ユビオサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 7.5YR7／6 外：橙 7.5YR7／6	完形		R114
94	SK7987	土師器 杯	(口径) 13.8cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	やや粗	良好	内：浅黄橙 7.5YR8／6 外：浅黄橙 7.5YR8／6	口縁部80%		R115
95	SK7987	須恵器 蓋	(口径) ― cm (器高) ― cm	外面回転ケズリ、内面回転ナデ、つまみ貼り付時ナデ	密	良好	内：にぶい黄橙 10YR6／3 外：灰黄褐 10YR6／2	つまみ50%	内面「×」状のヘラ記号あり回転方向不明	R99
96	SD7976	土師器 杯	(口径) 14.2cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、内外面オサエ後ナデ	やや粗	良好	内：浅黄橙 7.5YR8／4 外：浅黄橙 7.5YR8／4	口縁部20%		R70
97	SD7971	土師器 台付杯	(口径) 20.4cm (器高) 5.2cm (高台径) 14.1cm	口縁部ヨコナデ、外面上部ヘラケズリ後ナデ・下部ハケメ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：浅黄橙 7.5YR8／6 外：橙 2.5YR7／8	口縁部50% 高台部50%		R68
98	SD7973	須恵器 蓋	(口径) 16.4cm (器高) 残2.8cm	外面天井部1／2ナデ、1／2回転ナデ、内面回転ナデ	密	良好	内：灰白 10Y7／1 外：灰白 10Y7／1	口縁部20%		R66
99	SD7968	須恵器 蓋	(口径) 16.4cm (器高) 残2.8cm	外面天井部回転ケズリ、口縁部・内面回転ナデ	密	良好	内：灰白 5Y7／1 外：灰白 5Y7／1	口縁部20%	杯の可能性もあり 回転方向右廻り	R65
100	SD7970	須恵器 鉢	(口径) ― cm (器高) 残4.0cm (底径) 11.0cm	内外面回転ナデ	密	良好	内：灰白 5Y7／1 外：灰白 5Y7／1 外面自然釉 暗オリーブ 5Y4／3	底部 25%	回転方向不明	R67
101	N－6 包含層	土師器 鍋	(口径) 9.5cm (器高) 残5.1cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、内面ナデ	密	並	内：にぶい黄橙 10YR7／4 外：橙 5YR7／6	口縁部20%	ミニチュア製品	R98
102	J－8 包含層	須恵器 鉢	(口径) 19.6cm (器高) ― cm	内外面回転ナデ	密	良好	内：灰白 10Y7／1 外：灰 N5／0	口縁部10%	玉縁口縁	R74
103	H－11 包含層	須恵器 円面硯	(口径) 11.0cm (器高) 残2.0cm	内外面回転ナデ	密	良好	内：灰黄 2.5Y6／2 外：灰黄褐～褐灰 10YR6／2～10YR5／1	口縁部10%	脚部方形透かし 使用痕跡あり 回転方向不明	R102
104	M－8 包含層	須恵器 風字硯	(口径) ― cm (器高) ― cm	内外面工具ナデ	密	良好	内：灰黄～青灰 2.5Y7／2～5B6／1 外：にぶい黄～黒褐 2.5Y6／3～2.5Y3／1	全体の20%程度	使用痕跡不明	R101
105	L－6 包含層	灰釉陶器 皿	(口径) 15.8cm (器高) 2.2cm (高台径) 8.2cm	内外面とも回転ナデ 高台貼付時ナデ	密	良好	内：灰白 5Y8／1 外：灰白 5Y8／1 釉：オリーブ黄 7.5Y6／3	口縁部20%	回転方向不明	R72
106	L－6 包含層	土師器 台付杯	(口径) 19.2cm (器高) 5.7cm (高台径) 7.6cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ後ナデ、内面ナデ、高台貼付時ナデ	密	良好	内：橙 5YR7／6 外：橙 5YR7／6	口縁部20% 高台完存		R73
107	SD7968	須恵器 蓋	(口径) 13.0cm (器高) 残3.3cm	口縁部ナデ、外面天井部回転ナデ、一部回転ケズリ、内面ナデ	密	良好	内：青灰 5B6／1 外：青灰 5B6／1	口縁部30%	杯の可能性もあり 回転方向不明	R71

No.	出土遺構	器種	法量	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
76	SK7985	土製品 土錘	(長) 4.2cm (孔径) 0.2cm (幅) 1.1cm (残重) 4.9g	密	良好	灰 5Y6／1	ほぼ完存	管状土錘 土師質	R49
77	SK7985	土製品 土錘	(長) 4.6cm (孔径) 0.5cm (幅) 1.6cm (残重) 10.6g	密	良好	橙 5YR7／6 黒 5Y2／1	ほぼ完存	管状土錘 土師質	R50

第１２１次調査

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	ＳＥ8010	土師器 杯	(口径) 17.4cm (器高) 3.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面不定方向のナデ	密	良好	内：にぶい橙 7.5YR6／4 外：にぶい橙 7.5YR7／4	50%		R 1
2	ＳＥ8010	土師器 杯	(口径) 17.0cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ、内面オサエ後ナデ	密 径1㎜以下の白石を多く含む	良好	内：浅黄橙 7.5YR8／3 外：浅黄橙 7.5YR8／3	50%		R 2
3	ＳＥ8010	土師器 杯	(口径) 15.2cm (器高) 3.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ、内面ナデ	密	良好	内：浅黄橙 10YR8／4 外：浅黄橙 7.5YR8／4	ほぼ完形		R 3
4	ＳＥ8010	土師器 杯	(口径) 15.4cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ、内面ナデ	やや粗	良好	内：浅黄橙 10YR8／3 外：浅黄橙 10YR8／3	90%		R 4
5	ＳＥ8010	土師器 杯	(口径) 14.5cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ、内面ナデ	やや粗 径1㎜以下の白石を多く含む	良好	内：橙 5YR7／8 外：橙 5YR7／8	80%		R 5
6	ＳＥ8010	土師器 杯	(口径) 15.0cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面丁寧なナデ	密	良好	内：にぶい橙 7.5YR6／4 外：にぶい黄橙 10YR6／3	50%		R 6
7	ＳＥ8010	土師器 杯	(口径) 15.3cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR7／6 外：橙 5YR7／6	50%		R 7
8	ＳＥ8010	土師器 杯	(口径) 14.8cm (器高) 2.5cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：灰黄 2.5YR6／2 外：灰黄 2.5YR6／2	40%		R 8
9	ＳＥ8010	土師器 杯	(口径) 14.8cm (器高) 2.5cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ、内面ナデ	密	良好	内：にぶい黄橙 10YR7／4 外：にぶい黄橙 7.5YR7／4	60%		R 9
10	ＳＥ8010	土師器 杯	(口径) 14.4cm (器高) 2.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ、内面オサエ後ナデ	密	良好	内：浅黄橙 7.5YR8／4 外：浅黄橙 7.5YR8／3	80%		R 10
11	ＳＥ8010	土師器 杯	(口径) 15.6cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：黄橙 7.5YR7／8 外：橙 7.5YR7／6	80%		R 11
12	ＳＥ8010	土師器 杯	(口径) 16.1cm (器高) 2.5cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ、内面ナデ	密	良好	内：浅黄橙 10YR8／3 外：浅黄橙 10YR8／3	40%		R 12
13	ＳＥ8010	土師器 杯	(口径) 15.4cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：橙 5YR7／6 外：橙 5YR7／6	60%		R 13
14	ＳＥ8010	土師器 杯	(口径) 14.2cm (器高) 2.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：褐灰 7.5YR6／1 外：褐灰 7.5YR6／1 (口縁の一部 橙 2.5YR7／6)	80%		R 14
15	ＳＥ8010	土師器 杯	(口径) 16.8cm (器高) 3.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良好	内：浅黄橙 10YR8／3 外：浅黄橙 10YR8／3	ほぼ完形		R 15
16	ＳＥ8010	土師器 杯	(口径) 15.7cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ、内面オサエ後ナデ	密	良好	内：橙 7.5YR7／6 外：橙 7.5YR7／6	完形		R 16
17	ＳＥ8010	土師器 杯	(口径) 15.3cm (器高) 3.3cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ、内面ナデ	密	良好	内：にぶい橙 7.5YR7／4 外：にぶい黄橙 10YR6／3	60%		R 17
18	ＳＥ8010	土師器 杯	(口径) 15.6cm (器高) 3.3cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ	密	良好	内面～口縁：橙 5YR6／8 外：浅黄橙 7.5YR8／3	完形		R 18
19	ＳＥ8010	土師器 杯	(口径) 14.8cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、外面ユビオサエ、内面ナデ	やや粗並		内：淡黄 5YR8／4～淡黄橙10YR8／3 外：にぶい橙 7.5YR7／4	ほぼ完形	底部に焼成後の穿孔あり	R 19
20	ＳＥ8010	土師器 杯	(口径) 16.0cm (器高) 3.3cm	口縁部強いヨコナデ、外面ユビオサエ後ナデ、内面ユビオサエ成形後ナデ	細砂を含む	良好	内：浅黄橙 7.5YR8／3 外：灰白 10YR8／1	ほぼ完形	底部に焼成前の外面からの穿孔あり(径0.8～1.2cm)	R 20
21	ＳＥ8010	土師器 小皿	(口径) 8.9cm (器高) 1.5cm	口縁部ヨコナデ、内外面オサエ後ナデ	密	良好	内：浅黄橙 10YR8／4 外：橙 7.5YR7／6	完形		R 21
22	ＳＥ8010	土師器 小皿	(口径) 8.7cm (器高) 1.3cm	口縁部ヨコナデ、内外面オサエ後ナデ	密	良好	内：浅黄橙 10YR8／4 外：橙 7.5YR7／6	完形		R 22
23	ＳＥ8010	土師器 鉢	(口径) 20.8cm (器高) 6.2cm	口縁部ヨコナデ、外面体部上半ユビオサエ後ナデ、下半ユビオサエ、内面底部ナデ	密	良好	内：浅黄橙 7.5YR8／2 外 (上半)：浅黄橙 7.5YR8／2 (下半)：黒褐 7.5YR3／1 (底部)：黒褐 5YR2／2	口縁部50%	口縁部外面に煤付着	R 23
24	ＳＥ8010	土師器 甕	(口径) 19.5cm (残高) 7.3cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ、内面ヨコハケ	やや密 径1㎜以下の砂粒を多く含む	良好	内：にぶい黄橙 10YR7／2 外：にぶい黄橙 10YR7／3	15% 口縁部40%	口縁部外面に煤付着 ハケメ6本／cm	R 24
25	ＳＥ8010	土師器 甕	(口径) 26.7cm (残高) 8.1cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ヨコハケ	砂粒を多く含む	良好	内：灰褐 7.5YR5／2 外：にぶい黄橙10YR7／2～褐灰7.5YR5／1	30%	口縁部～外面に煤付着 ハケメ5本単位	R 25
26	ＳＥ8010	土師器 甕	(口径) 21.0cm (残高) 7.3cm	口縁部ヨコナデ、外面オサエ後ナデ、内面ヨコハケ	やや粗 径1～2㎜の砂粒を多く含む	良好	内：灰黄褐10YR6／2～ 黄灰2.5Y4／1 外：黄灰 2.5Y4／1	15% 口縁部20%	ハケメ10本／cm	R 26
27	ＳＥ8010	土師器 甕	(口径) 18.0cm (残高) 16.1cm	口縁部ヨコナデ、内外面体部上半ヨコハケ、下半ヘラケズリ	やや粗 径1㎜以下の砂粒を含む	良好	内：灰褐 7.5YR5／2～黄灰2.5YR4／1 外：灰黄褐10YR5／2 ～ 灰5Y4／1	口縁部70% 体部60%	ハケメ8本／cm	R 27
28	ＳＥ8010	陶器 椀 (山茶椀)	(口径) 18.4cm (器高) 6.1cm (高台径)8.8cm	口縁部～体部内外面ロクロナデ、内面底部ナデ、貼付高台	密	良好	内：灰白 N7／0 外：灰白 N7／0	80%	内面に自然釉 モミガラ痕あり 輪花椀	R 28
29	ＳＥ8010	陶器 椀 (山茶椀)	(口径) 16.3cm (器高) 4.9cm (高台径)7.4cm	口縁部～体部内外面ロクロナデ、貼付高台	密	良好	内：灰白 N7／0 外：灰白 N7／0	60%	モミガラ痕あり	R 29
30	ＳＥ8010	陶器 椀 (山茶椀)	(口径) 16.5cm (器高) 5.5cm (高台径)7.6cm	口縁部～体部内外面ロクロナデ、内面底部ナデ、貼付高台	密	良好	内：灰白 7.5Y8／1 外：灰白 10Y8／1	60%	モミガラ痕あり	R 30
31	ＳＥ8010	陶器 椀 (山茶椀)	(口径) 17.2cm (器高) 5.7cm (高台径)8.6cm	口縁部～体部内外面～底部内面ロクロナデ、貼付高台	密	良好	内：灰白 10Y8／1 外：灰白 10Y8／1	ほぼ完形	口縁部ひずみ激しい 口径16.1cm～17.3cm 釉不明瞭 モミガラ痕あり	R 31
32	ＳＥ8010	白磁 椀	(残高) 3.0cm	全面施釉	やや密	良好	断面：灰白 5Y8／1 釉：灰白 7.5Y7／1	口縁の一部のみ	内外面に施釉	R 33

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
33	V22 Pit 1	陶器 椀 (山茶椀)	(高台径)7.8cm (残高) 1.9cm	外面体部回転ナデ、底部糸切痕、貼付高台	やや粗	良好	内：灰白 2.5Y6／1 外：灰白2.5Y7／1 ～ 灰5Y5／1	20% 高台径70%	底部外面に墨書、底部内面に墨痕あり 高台部に砂圧痕あり	R32
34	SD8011	灰釉陶器	(高台径)6.8cm (残高) 1.6cm	内外面ロクロナデ、貼付高台	やや粗	良好	内：浅黄橙 10YR8／3 外：灰白 2.5Y8／1	15% 高台径30%		R34
35	SD8011	灰釉陶器 椀	(高台径)7.6cm (残高) 2.7cm	内外面ロクロナデ、底部糸切痕、貼付高台	やや密	良好	内：灰白 2.5Y7／1 外：灰白 2.5Y7／1 釉：オリーブ灰 10Y6／2	15% 高台径30%	体部内面に灰釉付着	R35
36	SD8011	陶器 椀 (山茶椀)	(高台径)7.6cm (残高) 3.2cm	内外面回転ナデ、貼付高台	やや粗	良好	内：灰黄 2.5Y7／2 外：灰黄 2.5Y7／2	30% 高台径80%	外面に自然釉付着	R36
37	SD8011	陶器 椀 (山茶椀)	(高台径)7.5cm (残高) 2.1cm	内外面回転ナデ、底部糸切痕、貼付高台	やや粗	良好	内：灰黄 2.5Y7／2 外：灰白 2.5Y7／1	25% 高台径50%	体部内面に自然釉付着	R38
38	SD8011	陶器 鉢	(高台径)14.8cm (残高) 4.8cm	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、貼付高台	やや密	良好	内：灰白 2.5Y7／1 外：灰白 2.5Y6／1	高台径20%		R40
39	SD8012	陶器 椀 (山茶椀)	(高台径)8.4cm (残高) 3.3cm	内外面回転ナデ、貼付高台	やや粗	良好	内：灰白 5Y7／1 外：黄灰 2.5Y6／1	30% 高台部ほぼ完存	モミガラ痕あり	R37
40	SD8015	灰釉陶器 壺	(底径) 6.4cm (残高) 2.1cm	外面ロクロケズリ、底部糸切痕、ケズリ出し高台	密	良好	内：灰黄 2.5Y7／2 外：浅黄 2.5Y7／3	高台径50%	底部内面に自然釉付着	R39
41	SD8016	土師器 羽釜	(口径)約21.0cm (羽径)約24.0cm (残高) 4.5cm	口縁部～羽部ヨコナデ、外面ユビオサエ、内面ヘラケズリ	やや粗	良好	内：にぶい黄橙 10YR7／3 外：にぶい黄橙 10YR7／3 灰褐 7.5YR5／2	小片	羽部貼付断面不明瞭 外面羽部より下半煤付着	R41
42	I12 粘土採掘坑	土師器 杯	(口径) 17.0cm (器高) 4.2cm	口縁部～内面ヨコナデ、外面ユビオサエ	密	良好	内：橙 5YR6／6 外：にぶい橙 5YR6／4	25% 口縁部25%		R62
43	H10 粘土採掘坑	土師器 皿	(口径) 18.9cm (器高) 2.1cm	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ	やや密	良好	内：橙 5YR6／8～7.5YR7／6 外：橙 7.5YR7／6	20% 口縁部20%		R61
44	I9 粘土採掘坑	須恵器 蓋	(口径) 22.0cm (残高) 3.4cm	口縁部～内面回転ナデ、外面回転ケズリ	やや粗	良好	内：灰白 2.5Y7／1 外：灰白 2.5Y7／1～10YR7／1	25% 口縁部20%	ロクロ右回転	R66
45	J9 粘土採掘坑	土師器 甕	(口径) 24.2cm (残高) 7.8cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、内面ヨコハケ	やや粗	良好	内：にぶい黄橙 10YR7／3 外：にぶい黄橙 10YR7／3	口縁部20%	外面ハケメ6本／cm 内面ハケメ7本／cm	R64
46	J9 粘土採掘坑	土師器 甕	(口径) 24.1cm (残高) 7.2cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、内面ヨコハケ	やや粗	良好	内：にぶい黄橙 10YR7／3 外：浅黄橙 10YR8／4	口縁部10%	ハケメ4本／cm	R63
47	I12 粘土採掘坑	陶器 小椀 (山茶椀)	(口径) 10.3cm (高台径)5.8cm (残高) 2.3cm	口縁部～内外面ヨコナデ、底部糸切痕、貼付高台	やや密	良好	内：灰白 2.5Y7／1 外：灰白 5Y7／1	45%		R65
48	K9 粘土採掘坑	灰釉陶器 椀	(高台径)7.2cm (残高) 1.9cm	内外面ロクロナデ、貼付高台	やや粗 径1mm以下の砂粒を多く含む	良好	内：灰白 10YR8／1 外：灰白 2.5Y8／1 釉：灰オリーブ 7.5Y5／2	30% 高台径75%	底部外面に墨書あり「冨」か 内面に自然釉付着	R67
50	SK8022	土師器 杯	(口径)約14.0cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナデ	やや粗	並	内：にぶい橙 7.5YR7／4 外：橙 7.5YR7／6	25%	磨滅著しい	R56
51	SD8020	土師器 杯	(口径) 14.0cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、外面ユビオサエ後ナデ、内面ナデ	やや密	良好	内：にぶい橙 7.5YR7／4 外：にぶい橙 7.5YR6／4	ほぼ完存		R50
52	F5 粘土採掘坑	土師器 杯	(口径)約14.0cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、外面ユビオサエ	良	並	内：橙 5YR6／6 外：橙 5YR6／6	35%	内面磨滅著しい	R55
53	E5 粘土採掘坑	土師器 杯	(口径) 14.4cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、外面ユビオサエ、内面ナデ	やや密	並	内：浅黄橙 10YR8／3 外：浅黄橙 7.5YR8／4	45% 口縁部50%		R57
54	F6 粘土採掘坑	土師器 杯	(口径) 14.0cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナデ、外面ユビオサエ、内面ナデ	やや粗	並	内：橙5YR6／6～にぶい橙7.5YR7／3 外：橙 5YR6／6	90% 口縁部90%	器壁の保存状態悪い	R59
55	SD8020	須恵器 杯	(高台径)7.0cm (残高) 2.2cm	内外面回転ナデ、貼付高台	やや粗	良好	内：灰白 N7／0 外：灰白 2.5Y7／1	高台径25%		R48
56	SD8018	陶器 椀 (山茶椀)	(高台径)約7.4cm (残高) 3.2cm	内外面回転ナデ、底部糸切痕、貼付高台	やや粗	良好	内：灰白 N8／0 外：灰白 7.5Y7／1	15%	体部内面に自然釉付着	R47
57	SD8020	陶器 椀 (山茶椀)	(高台径)7.6cm (残高) 2.3cm	内外面回転ナデ、底部糸切痕、貼付高台	やや粗	良好	内：灰白 N7／0 外：灰白 N7／0	10% 高台径25%		R49
58	SD8020	陶器 椀 (山茶碗)	(高台径)6.7cm (残高) 3.5cm	内外面回転ナデ、底部糸切痕、貼付高台	やや粗	良好	内：灰白 5Y7／1 外：灰白 N7／0	30% 高台部完存	モミガラ痕あり	R45
59	SD8020	陶器 椀 (山茶椀)	(高台径)9.0cm (残高) 2.8cm	内外面回転ナデ、底部糸切痕、貼付高台	やや粗	良好	内：灰白 N7／0 外：灰白 N7／0	20% 高台径20%		R46
60	G5 表土下層	緑釉陶器 陰刻花文	(高台径)8.1cm (残高) 1.4cm	ケズリ出し高台	密	良好	断面：灰白 5Y7／1 釉：オリーブ黄 5Y6／4	高台径20%		R60

第９表　斎宮跡発掘調査次数一覧表

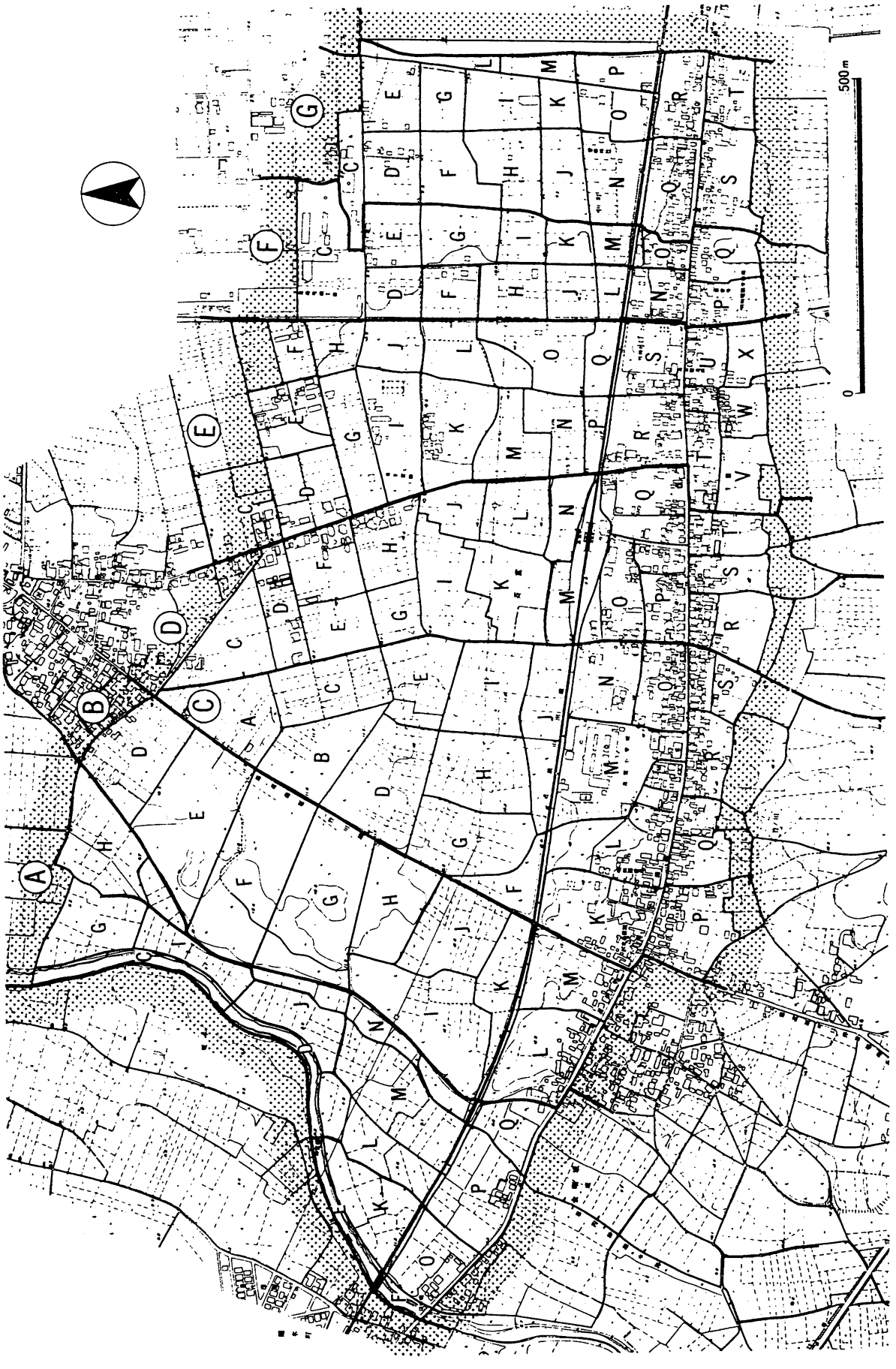
次	年度	調査地区
1	S45	試掘
2	46	古里Ａ地区
3		〃 Ｂ地区
4	47	〃 Ｃ地区
5	48	〃 Ｄ地区
6－1		Ａトレンチ
6－2		Ｂトレンチ
6－3		Ｃトレンチ
6－4		Ｄトレンチ
6－5		Ｅトレンチ
7	49	古里Ｅ地区
8－1		Ｆトレンチ
8－2		Ｇトレンチ
8－3		Ｈトレンチ
8－4		Ｉトレンチ
8－5		Ｊトレンチ
8－6		Ｋトレンチ
8－7		Ｌトレンチ
8－8		Ｍトレンチ
8－9		Ｎトレンチ
8－10		Ｏトレンチ
8－11		Ｐトレンチ
9－1	50	Ｑトレンチ
9－2		Ｒトレンチ
9－3		Ｓトレンチ
9－4		Ｔトレンチ
9－5		Ｕトレンチ
9－6		Ｖトレンチ
9－7		Ｗトレンチ
9－8		Ｘトレンチ
9－9		Ｙトレンチ
9－10		Ｚトレンチ
10		広域圏道路
11－1		西加座2661－１（山中）
11－2		〃 2681－１（山名）
11－3		東前沖2483－２（前田）
11－4		下　園2926－９（吉木）
12－1	51	２Ａトレンチ
12－2		２Ｂトレンチ
12－3		２Ｃトレンチ
12－4		２Ｄトレンチ
13－1		東加座2436－７（浜口）
13－2		〃 2436－４（中村）
13－3		古　里3283（村上）
13－4		楽　殿2916～2917（松井）
13－5		御　館2974－１（川本）
13－6	51	中垣内375－１（南）
13－7		東　裏328（小川）
13－8		西加座2771－１（細井）
13－9		〃 2773（細井）
13－10		東　裏362－１（児島）
13－11		西加座2681－１（浮田）
13－12		〃 2721－３，2724－２（森川）
13－13		東前沖2506－２（宮下）
14－1	52	２Ｅトレンチ
14－2		２Ｆトレンチ
14－3		２Ｇトレンチ
14－4		２Ｈトレンチ
14－5		２Ｉトレンチ
15		斎宮小学校
16－1		竹川町道Ａ
16－2		〃 Ｂ
16－3		〃 Ｃ
16－4		〃 Ｄ
16－5		〃 Ｅ
16－6		〃 Ｆ
17－1		竹神社社務所
17－2		竹神社防火用水
17－3		西加座2721－６（西沢）
17－4		楽　殿2894－１（中川）
17－5		〃 2895－１（西口）
17－6		出在家3237－３（吉川）
17－7		〃 3237－１（里中）
17－8		楽　殿2894－１（西村）
17－9		東海造機
18	53	６ＡＥＬ－Ｅ・Ｉ（下園）
19		６ＡＥＮ－Ｍ・Ｎ・Ｏ（御館）
20		６ＡＥＯ－Ｉ・Ｊ（柳原）
21－1		６ＡＧＮ－Ｂ（鍛冶山、北山）
21－2		６ＡＥＩ－Ｄ（西加座2711－２，2717－４他、山路）
21－3		６ＡＦＤ－Ｄ（西前沖2649－１、大西）
21－4		６ＡＦＨ－Ｆ（西加座2678，2679－３、森下）
21－5		６ＡＧＤ－Ｋ（東前沖、渡部）
21－6		６ＡＣＡ－Ｔ（古里3269－２、中西）
21－7		６ＡＦＥ－Ｆ（東前沖2631－１、鈴木）
21－8		６ＡＥＧ－Ａ（楽殿2909－３、大西）
21－9		６ＡＥＤ－Ｒ（篠林3218－３、宇田）
22－1		６ＡＧＵ
22－2		６ＡＧＵ
22－3		６ＡＧＷ
23	54	６ＡＥＬ－Ｂ（下園）
24		６ＡＧＦ－Ｄ（西加座）

次	年度	調　査　地　区
25－1	54	6ADP－K（牛葉3029－1、三重土地ホーム）
25－2		6ACA－Y（古里3270、脇田）
25－3		6ADD－F（篠林3139－3、池田）
25－4		6AER－H（牛葉3014、牛葉公民館）
25－5		6AGN－H（鍛冶山2392、丸山）
25－6		6AFH－A（西加座2675－5、谷口）
25－7		6AEK－V（下園2926－10、奥田）
25－8		6AFC－D（西前沖2064－5、山本）
25－9		6ACN－C（広頭3387－1、北出）
25－10		6AEV－A（鈴池339－1、永島）
25－11		6ACF－B（東裏364－1、沢）
25－12		6AEE－Y（楽殿2892－3、山本）
25－13		6AEJ－E（西加座2766－1、山内）
26－1		6AFR　（中西）
26－2		6AEX～6ACQ（鈴池、木葉山、南裏）
26－3		6AEV・W・X（鈴池）
26－4		6ACR　（木葉山、南裏）
27		6ACG－S・T（東裏）
28		6AEO－D（柳原）
29		6AF1、6AFL、6AFK、6AFM、6AGJ
30	55	6ABJ－M・X・W（中垣内）
31－1		6ADO－M（内山3038－13、岩見）
31－2		6ACP－I（南裏227－2、鈴木）
31－3		6ABD－A（古里588－4、北薮）
31－4		6ADQ－T（牛葉3018－2、百五銀行）
31－5		6ACC－G（塚山3338－3、水谷）
31－6		6ABO－X（古里576－1、池田）
31－7		6AGI－L（東加座2427－1、竹内）
31－8		6ACN－G（広頭3388－1・5・8・9、森）
31－8		6AGD－L（北野2487－1、中川）
31－10		6ADM－O（内山3043-3、斎宮駅）
31－11		6ADT－I（木葉山304－2、澄野）
31－12		6ADT－J（木葉山304－7、宇田）
32		6ACE－D・E・F（塚山）
33		6ADE－C・D他（篠林）
34		6ADE－F・G・H（西加座）
35		6APE他（西前沖）
36	56	6ABI－F（中垣内）
37－1		6AFC－M（西前沖2064、日本経木）
37－2		6ADQ－R（牛葉3021－2、野田）
37－3		6AFC－F（西前沖2604－6、神田）
37－4		6AFC－M（西前沖2604、日本経木）
37－5		6AFC－G（西前沖2064－7、中村）
37－6		6ABD－A（古里588－2、北薮）
37－7		6AEC－M（苅干2861－2、斎王公民館）
37－8		6ADR－P（木葉山128－8・13・14、富山）
37－8		6AGK－E（東加座2355－1、竹内）
37－10		6AED－O（楽殿3217－1、渡部）
37－11		6ADN－O（内山3043－3、斎宮駅）

次	年度	調　査　地　区
37－12	56	6AFH－J（西加座2681－1・3・4、渋谷）
37－13		6AGK－F（西加座2385－3、2386－3、竹内）
38		6ACD－S（塚山）
39		6ABD－R・S・T（古里）
40		6AGH－L・M（東加座）
41		6AGJ－J他（斎宮地内）
42－1	57	6AEI－D・F（楽殿）
42－2		6AEK－A・B（楽殿）
43－1		6ADC－C（出在家3235－2、永田）
43－2		6ADT－B（木葉山308－1、山本）
43－3		6ACP－T（南裏241－1、辻）
43－4		6ADS－D（牛葉123－3、西山）
43－5		6ADE－D（篠林3220－3、澄野）
43－6		6AGE（東前沖、町道側溝）
43－7		6ABD－F（古里588－6、今西）
43－8		6ADQ－H（牛葉3025－2、大西）
44		6AFL－A・B（鍛冶山2759－1、他）
45		6AEG－P・Q（楽殿2904－2、他）
46		6AGN－C・D（鍛冶山2737－1、他）
47		6ADJ－D・G他（西加座、御館、宮ノ前、上園）
48－1	58	6AGM－M（広頭3385、斎宮小）
48－2		6ADP－Q（牛葉3033－1・2、吉田）
48－3		6ABL－M（中垣内434－6、西川）
48－4		6AGL－B（東前沖2480、倉田）
48－5		6AGD～6AFE（東前沖、町道側溝）
48－6		6AGC－A（西前沖3550－1、今西）
48－7		6ADT－H（木葉山307、森西）
48－8		6ACL－E・F・G（東裏334－15、他）
48－9		6AEV－J（鈴池341－1、乾）
48－10		6AGT（牛葉、町道側溝）
48－11		6ADP－E（鍛冶山2351－1,2352－1、榊原）
48－12		6AFC－H（西前沖2604－8・9、清水）
48－13		6ACM－O（東裏、斎宮小）
48－14		6AET（牛葉、町道側溝）
49		6ADI－D・U・V・W・X（上園3083、他）
50		6ACH－H（東裏294,297、山本）
51		6AFF－D（西加座2663－1・4,2664、森下）
52		6AGF－D（西加座2703、他）
53－1	59	6ACM－P（東裏284、体育館）
53－2		6ACA－M（古里3280－2、中西）
53－3		6ABE（古里573－2、永納）
53－4		6ACL－S（東裏271－1、田所）
53－5		6ACR（木葉山97－5、田中）
53－6		6AGO（鍛冶山、町道側溝）
53－7		6ADD－U（篠林3147－3、野呂）
53－8		6AGE－O（東前沖2470－2、上田）
53－9		6ACS－O（木葉山95－2、浅尾）
53－10		6ACA－R（古里3267－1、西川）
53－11		6ADR－W（木葉山131－7、西村）

次	年度	調　査　地　区
53－12	59	6ＡＢＬ－Ｋ（中垣内464－２、沢）
53－13		6ＡＤＱ－Ｌ（牛葉3022、辻）
53－14		6ＡＣＭ－Ｏ（東裏287－３、体育庫）
53－15		6ＡＦＫ－Ｃ・Ｄ（西加座2721－１、鈴木）
54		6ＡＦＥ－Ｎ（西前沖2630、他）
55		6ＡＥＮ－Ｐ（柳原、御館2785－１、他）
56		6ＡＣＨ－Ｓ（東裏289－１、他）
57		6ＡＧＦ－Ｈ・Ｉ（東加座2441、他）
58－1	60	6ＡＦＫ－Ｃ・Ｄ（西加座2721－１、鈴木）
58－2		6ＡＦＨ－Ｎ（西加座2681－８、三村）
58－3		6ＡＣＭ－Ｎ（東裏3385－２、斎宮小）
58－4		6ＡＢＬ－Ａ（中垣内4731－１、小家）
58－5		6ＡＤＱ－Ｑ（牛葉、町道側溝）
58－6		6ＡＤＲ－Ｖ（木葉山131－３、西山）
58－7		6ＡＧＳ－Ｇ（中西611、山路）
58－8		6ＡＢＭ－Ａ（中垣内430－３他、近鉄）
59		6ＡＣＪ－Ｉ（広頭3379－１、他）
60		6ＡＧＪ－Ｂ・Ｄ・Ｇ（東加座2450－１、他）
61		6ＡＦＦ－Ｈ・Ｉ・Ｄ（西加座2663－１、他）
62		6ＡＧＩ－Ｊ・Ｋ（東加座2425、他）
63		6ＡＦＧ－Ｍ・Ｎ（西加座2659－１、他）
64－1	61	6ＡＣＯ－Ｈ（牛葉3395－１、トーカイ）
64－2		6ＡＧＬ－Ｆ（東加座2435－１、大和谷）
64－3		6ＡＤＤ－Ａ（篠林3136－１、山路）
64－4		6ＡＧＲ－Ｎ（笛川2340、丸山）
64－5		6ＡＣＭ－Ｒ・Ｑ・Ｐ（東裏3385－２、斎宮小）
64－6		6ＡＣＫ　（東裏361－２、竹川自治会）
64－7		6ＡＧＩ－Ｇ（東加座2435－２、大和谷）
64－8		6ＡＧＲ－Ｊ（笛川2341－６、山下）
64－9		6ＡＤＱ－Ｍ（牛葉、町道側溝）
64－10		6ＡＣＦ－Ａ（東裏365－１、樋口）
64－11		6ＡＣＭ－Ｏ（東裏3385－２、斎宮小）
64－12		6ＡＤＥ－Ｂ（篠林3162－３、江崎）
65－1		6ＡＣＣ－Ｍ（塚山3331－１）
65－2		6ＡＥＧ－Ｓ（楽殿2908－２、他）
65－3		6ＡＥＩ－Ｌ・Ｍ(楽殿2917－４、他）
66		6ＡＧＧ－Ｃ（東加座2437－１、他）
67		6ＡＢＦ　（古里523、他）
68		6ＡＢＦ　（古里502、他）
69		6ＡＧＭ－Ｅ～Ｈ（東加座2373、他）
70－1	62	6ＡＣＣ－Ｘ（塚山3325－１、江崎）
70－2		6ＡＥＥ－Ｗ（楽殿2875－２、岡田）
70－3		6ＡＤＲ－Ｉ（木葉山129－５、大西）
70－4		6ＡＣＮ－Ａ・Ｂ・Ｅ・Ｌ（広頭3389－８、林）
70－5		6ＡＥＷ－Ａ（鈴池333－１、八田）
70－6		6ＡＢＬ－Ｓ（中垣内430－６、奥山）
70－7		6ＡＥＥ－Ｔ（楽殿577、浅尾）
70－8		6ＡＥＵ・６ＡＥＸ－Ａ（牛葉、鈴池、三重県）
70－9		6ＡＥＰ－Ｃ・Ｄ（御館、榊原、近鉄）
70－10	62	6ＡＦＤ－Ｂ・Ｄ（西前沖2649－４、大西）
70－11		6ＡＧＯ－Ｈ（鍛冶山2363－２、川合）
70－12		6ＡＤＤ－Ｆ・Ｇ（篠林3158、長谷川）
70－13		6ＡＥＣ－Ｎ・Ｇ（苅干、佐藤）
70－14		6ＡＢＬ－Ｒ（中垣内459、北岡）
70－15		6ＡＦＤ－Ａ（西前沖2644－１、山本）
70－16		6ＡＣＢ－Ａ他（町道塚山線拡幅）
71		6ＡＢＥ　（古里501、他）
72－1		6ＡＢＥ　（古里500、他）
72－2		6ＡＢＦ　（古里523、他）
72－3		6ＡＢＦ　（古里551－２、他）
72－4		6ＡＢＦ　（古里528－１、他）
73		6ＡＦＦ－Ｂ・Ｃ・Ｅ・Ｇ（西加座2663－５、他）
74－1		6ＡＢＦ　（古里523、他）
74－2		6ＡＢＦ　（古里522、他）
74－3		6ＡＢＥ・Ｆ（古里524、他）
74－4		6ＡＢＥ　（古里548－１、他）
74－5		6ＡＢＥ　（古里543、他）
75		6ＡＧＦ－Ｃ（西加座2702、他）
76－1	63	6ＡＤＢ－Ａ～Ｄ（町道塚山線拡幅）
76－2		6ＡＤＥ－Ｆ・Ｇ（篠林3158、長谷川）
76－3		6ＡＢＥ　（古里554、明和町）
76－4		6ＡＣＫ　（東裏354－13、山際）
76－5		6ＡＥＥ－Ｗ（楽殿577、岡田）
76－6		6ＡＣＢ－Ａ（塚山3276－１、今西）
76－7		6ＡＣＭ－Ｍ（広頭3385－２、斎宮小）
76－8		6ＡＦＭ－Ｇ（鍛冶山2736－３、近鉄）
76－9		6ＡＣＱ　（南裏144－１、田所）
76－10		6ＡＢＤ－Ｕ（古里579、池田建設）
76－11		6ＡＢＥ　（古里554、明和町）
76－12		6ＡＥＥ　（楽殿、町道下水管）
76－13		6ＡＤＤ－Ｋ（篠林3143、中西）
76－14		6ＡＥＥ－Ｓ（楽殿2878－３、山路）
76－15		6ＡＢＦ～６ＡＢＨ（中垣内、県道拡幅）
76－16		6ＡＥＫ－Ｂ（下園2936－２、明和町）
76－17		6ＡＥＶ－Ａ（鈴池339－５、永島）
77		6ＡＧＪ－Ｄ（東加座2453、他）
78		6ＡＤＬ　（宮ノ前3054、他）
79		6ＡＧＧ－Ａ・Ｂ（東加座2440、他）
80		6ＡＦＧ－Ｆ～Ｉ（西加座2696、他）
81－1	Ｈ１	6ＡＥＣ～Ｆ（町道塚山線拡幅）
81－2		6ＡＢＪ、６ＡＢＫ（古里、県道拡幅）
81－3		6ＡＤＳ－Ｍ（木葉山137、中川）
81－4		6ＡＥＤ－Ｌ（楽殿2881－２、山本）
81－5		6ＡＦＱ－Ｃ（中西597－２、木戸口）
81－6		6ＡＤＤ－Ｆ（篠林313、池田）
81－7		6ＡＢＬ－Ｕ（中垣内430－７、川本）
81－8		6ＡＢＪ　（古里、明和町）
81－9		6ＡＣＦ　（中垣内、三重県）

次	年度	調　査　地　区
81－10	1	6ＡＤＲ－Ｖ（木葉山297、明和町）
81－11		6ＡＣＭ－Ｎ（広頭3385－２、明和町）
81－12		6ＡＥＤ－Ａ（篠林3225、中川）
81－13		6ＡＣＢ　（塚山3276－19他、明和町）
81－14		6ＡＥＤ－Ｆ（楽殿2844－２、澄野）
81－15		6ＡＥＤ－Ｕ（楽殿2885－２、西山）
81－16		6ＡＧ　（北野3655－１、他）
82－１		6ＡＤＩ－Ｆ～Ｊ（上園3095、他）
82－２		6ＡＤＩ－Ｋ・Ｌ（上園3100、他）
83		6ＡＦＪ－Ｃ～Ｆ（西加座2770－３、他）
84－１		6ＡＦＪ－Ｇ（西加座2764－３）
84－２		6ＡＦＨ－Ｇ・Ｈ（西加座2679－１、他）
85－１	2	6ＡＢＤ～6ＡＣＤ（古里、三重県）
85－２		6ＡＣＡ－Ｐ（古里3279、松本）
85－３		6ＡＣＪ－Ｂ・Ｄ（東裏、明和町）
85－４		6ＡＢＥ　（竹川573－１、永納）
85－５		6ＡＥＤ－Ｕ（楽殿2885－２、西山）
85－６		6ＡＦＨ－Ｂ（西加座、明和町）
85－７		6ＡＣＢ－Ｃ（塚山3276－３他、加藤）
85－８		6ＡＢＩ－Ｎ（中垣内427－１、小林）
86		6ＡＦＨ－Ｆ・Ｇ・Ｈ（西加座2679－１他）
87		6ＡＣＥ－Ｎ・Ｑ・Ｒ（塚山3356他）
88		6ＡＧＮ－Ｃ・Ｄ（鍛冶山2411－１他）
89－１	3	6ＡＤＭ－Ｏ（内山3043－５、近鉄斎宮駅）
89－２		6ＡＧＩ－Ｍ（東加座2432－２他、北村）
89－３		6ＡＤＭ－Ｎ・Ｏ（内山3060－４、近鉄斎宮駅）
90		6ＡＦＨ－Ａ・Ｂ（西加座2680他）
91		6ＡＢＨ－Ｆ（中垣内393、他）
92		6ＡＧＮ－Ａ（鍛冶山2734－３）
93		6ＡＤＮ（内山3045－12、他）
94		6ＡＥＭ（御館2942）
95	4	6ＡＤＮ（内山3046－17、他）
96－１		6ＡＧＭ（東加座2374　丸山）
96－２		6ＡＤＯ（内山3068－３、他　明和町）
96－３		6ＡＣＡ－Ｄ（古里3260　清水）
96－４		6ＡＦＮ（中西2749－１　本山）
96－５		6ＡＤＲ－Ｔ（木葉山28－３　加藤）
96－６		6ＡＤＤ－Ｄ（篠林3138－１　藤井）
97		6ＡＥＭ（中垣内482、他）
98		6ＡＦＭ－Ｃ・Ｅ（鍛冶山2745、他）
99	5	6ＡＤＮ（内山3046－11、他）
100		6ＡＢＩ－Ｔ（中垣内423）
101		6ＡＤＧ（篠林3194）
102－１		6ＡＤＳ（木葉山119－５　澄野）
102－２		6ＡＥＤ－Ｊ（楽殿2882－５　杉本）
102－３		6ＡＡＱ（花園663－１　中川）
102－４		6ＡＣＦ－Ａ（東裏365－１　樋口）
102－５		6ＡＢＪ－Ｄ（中垣内493－６　川口）
102－６		6ＡＧ　（鍛冶山地内　明和町）
102－７		6ＡＣＧ－Ｅ（東裏318－１　川本）
102－８		6ＡＥ　（楽殿地内　明和町）
103		6ＡＥＱ－Ａ（柳原2779－３）
104		6ＡＧＴ（笛川1048－１、他）
105	6	6ＡＦＮ（鍛冶山2758－１、他）
106－１		6ＡＥＷ－Ｊ（鈴池338－１　森西）
106－２		6ＡＥＥ－Ｗ（楽殿2891－３　向井）
106－３		6ＡＦＬ他（鍛冶山地内　明和町）
106－４		6ＡＥＣ－Ｌ（苅干2861　坂本）
106－５		6ＡＧＯ（鍛冶山2362　青山）
106－６		6ＡＣＣ－Ｂ（塚山3340－４　田畑）
107		6ＡＢＩ－Ｏ（中垣内414－１、他）
108		6ＡＥＱ－Ｃ（柳原2779－２、他）
109	7	6ＡＦＬ－Ｄ・Ｅ（鍛冶山2763－１、他）
110－１		6ＡＣＭ－Ｊ（東裏262－３ 斎宮土地改良区）
110－２		6ＡＧＲ－Ｏ（笛川2345－３　竹内）
111－１		6ＡＤＭ（内山地内）
111－２		6ＡＤＫ（上園地内）
111－３		6ＡＤＬ他（宮ノ前地内）
112		6ＡＣＢ－Ｂ（塚山3276－15、他）
113－１	8	6ＡＣＩ（広頭地内）
113－２		6ＡＣＩ（広頭地内）
114		6ＡＥＱ－Ｅ・Ｆ（柳原地内）
115－１		6ＡＤＫ・6ＡＤＬ（上園・宮ノ前地内）
115－２		6ＡＤＫ（上園地内）
116－１		6ＡＤＧ（篠林地内他）
116－２		6ＡＤＭ－Ａ（内山）
116－３		6ＡＤＩ－Ｑ（宮ノ前地内）
116－４		6ＡＤＩ－Ｍ・Ｎ（上園地内）
116－５		6ＡＤＩ（上園・篠林地内）
117－１		6ＡＥＦ（楽殿2894－４）
117－２		6ＡＤＦ－Ａ・Ｂ（篠林3155他）
117－３		6ＡＢＪ（中垣内地内）
117－４		6ＡＤＰ（牛葉地内）
117－５		6ＡＦＣ－Ｍ（北野3553－１他）
117－６		6ＡＣＭ－Ｂ（東裏266－６）
118	9	6ＡＤＮ　（内山地内）
119		6ＡＦＭ－Ｅ・Ｇ（鍛冶山西地内）
120		6ＡＦＩ－ＣＥ、6ＡＦＧ－Ｒ（西加座地内）
121		6ＡＪＢ他（宮ノ前地区他）
122		6ＡＦＮ　（鍛冶山地内）
123－１		6ＡＦＱ－Ａ（中西地内）
123－２		6ＡＦＮ他（中西・笹川地内）
123－３		6ＡＤＰ－Ｆ～Ｈ・Ｌ（牛葉地内）
123－４		6ＡＤＱ－Ａ～Ｃ　（牛葉地内）
123－５		6Ａ　（刈干地内）
123－６		6ＡＣＣ－Ｉ（塚山地内）



第32図　斎宮跡地区表示

第33図　斎宮跡方格地割区画名称

報告書抄録

ふりがな	しせきさいくうあと　へいせい9ねんどはっくつちょうさがいほう
書名	史跡斎宮跡　平成9年度発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	駒田利治・上村安生・大川　操（旧姓　赤岩）・角正芳浩・石渕誠人
編集機関	斎宮歴史博物館
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503番地　TEL 0596－52－3800
発行年月日	1999年3月31日

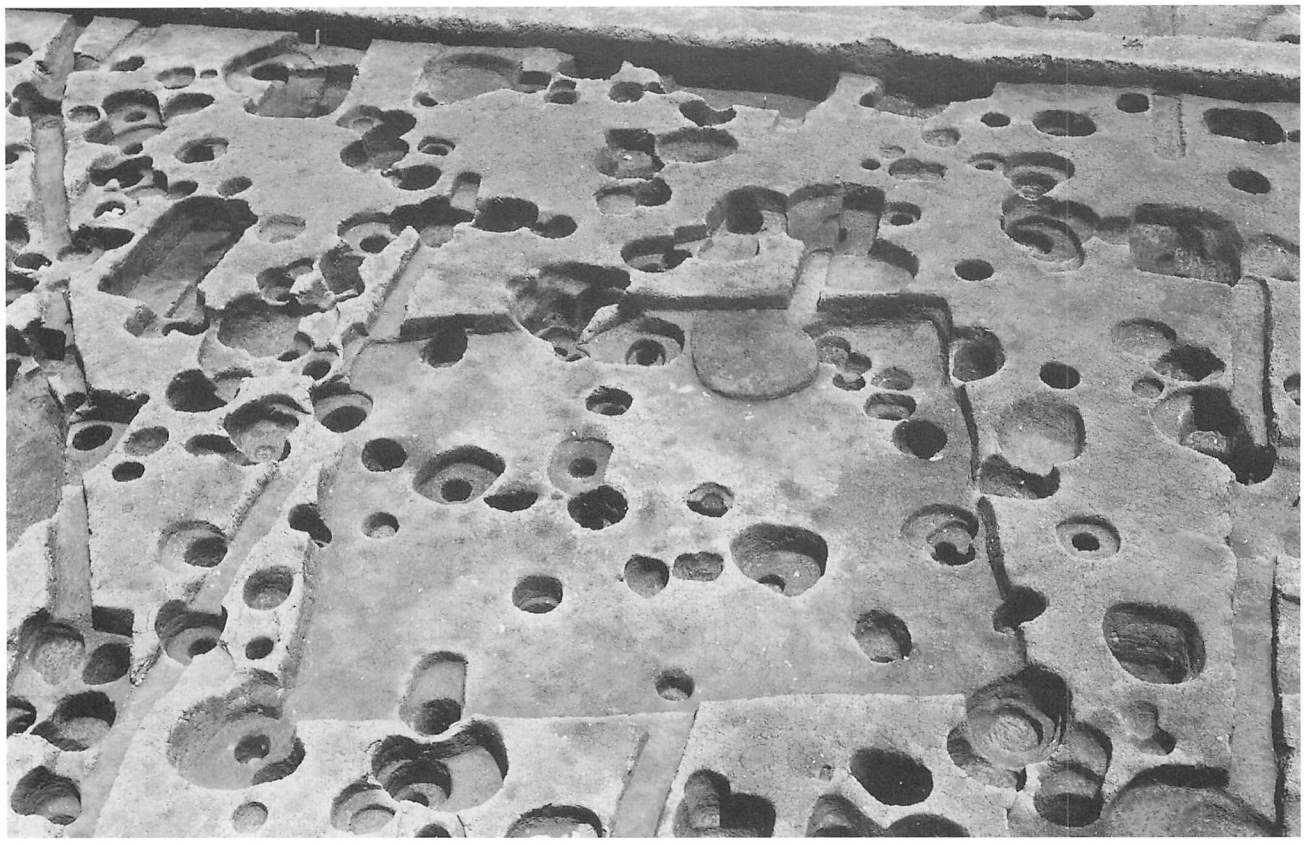
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
斎宮跡	多気郡明和町斎宮他	2442	210	34°31′55″ ～ 34°32′30″	136°36′16″ ～ 136°37′37″			
第118次調査	斎宮字内山					19970414 ～ 19970723	950	計画調査
第119次調査	斎宮字鍛冶山					19970730 ～ 19971218	697	〃
第120次調査	斎宮字西加座					19980120 ～ 19980331	805	〃
第121次調査	斎宮字宮ノ前					19971203 ～ 19970207	843	整備事前調査
第122次調査	斎宮字鍛冶山					19980105 ～ 19980114	28	計画調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
斎宮跡	官衙				
第118次調査		奈良後期 平安後期	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝	土師器・須恵器・山茶椀和銅開珎	平安時代前期の大型建物配置
第119次調査		奈良後期～平安中期	大型掘立柱建物・柵列・井戸	土師器・須恵器・刻書須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器	斎宮跡方格地割の中枢部を区画する柵列・大型掘立柱建物・井戸
第120次調査		平安前期	方格地割区画溝・道路・掘立柱建物・溝	土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器	方格地割の区画施設・交差点
第121次調査		平安後期	溝・井戸	土師器・須恵器・山茶椀灰釉陶器	方格地割北西隅部の区画施設
第122次調査		奈良後期	柵列	土師器・須恵器・山茶椀灰釉陶器・陶器	内院地区の柵列

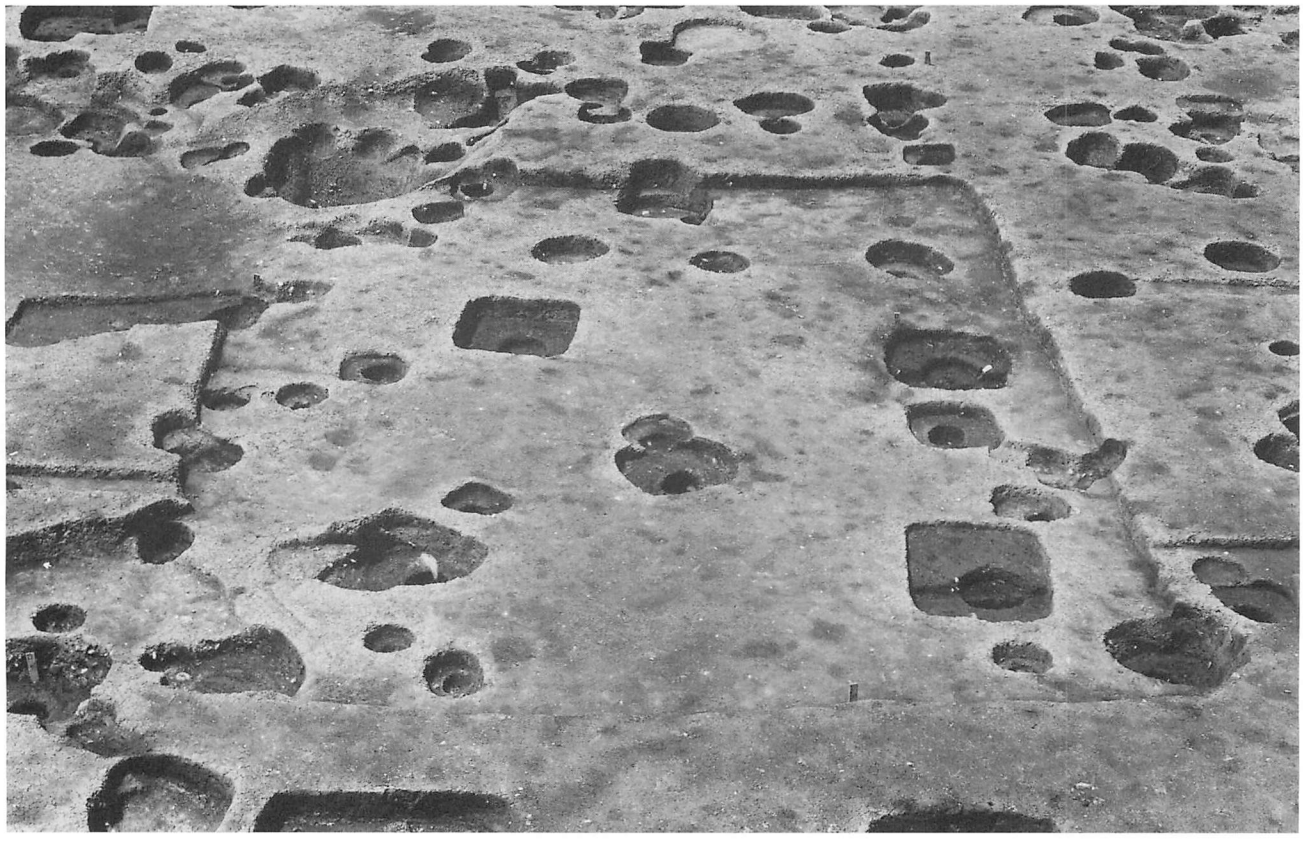
図　　版

調査区全景（北から）

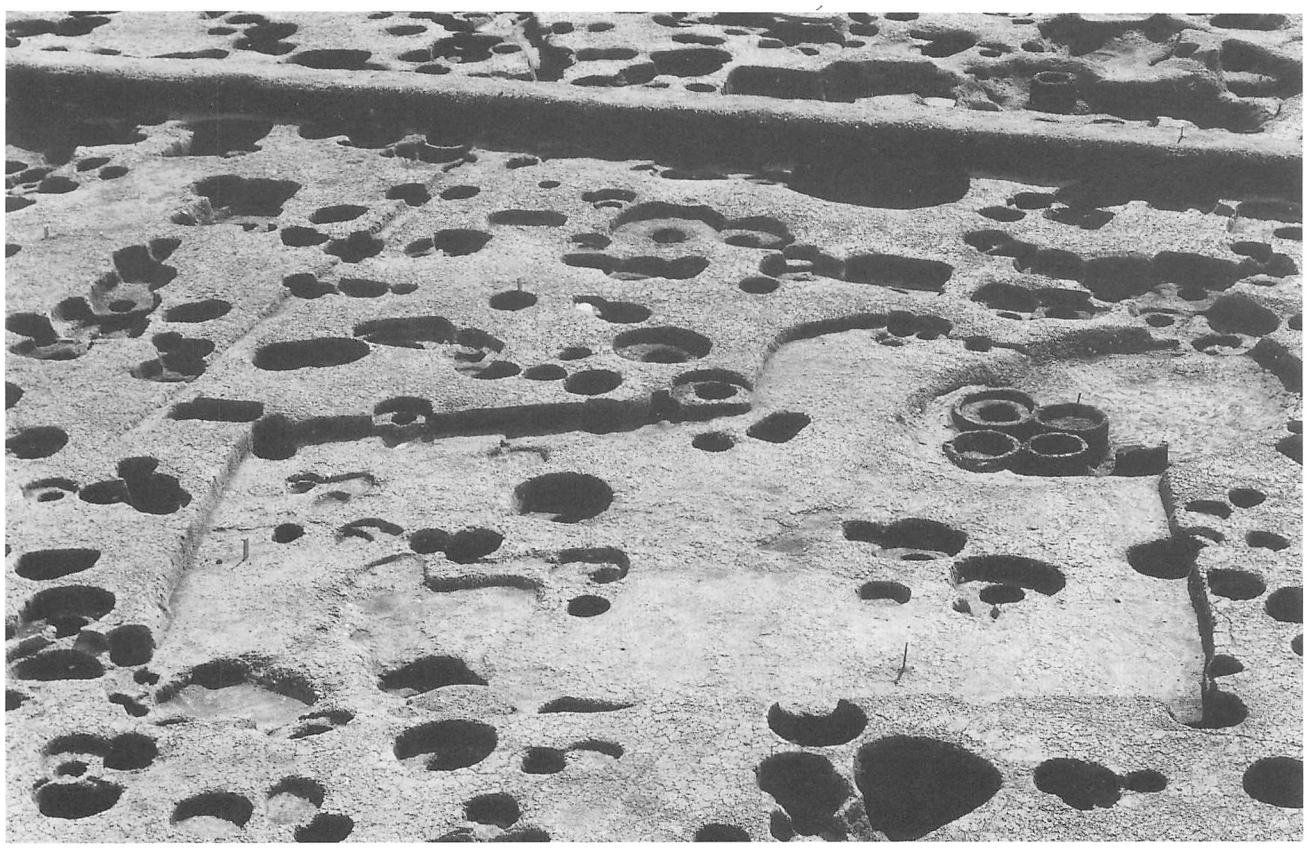
調査区全景（西から）



ＳＢ 7891（西から）



ＳＢ 7901（南から）

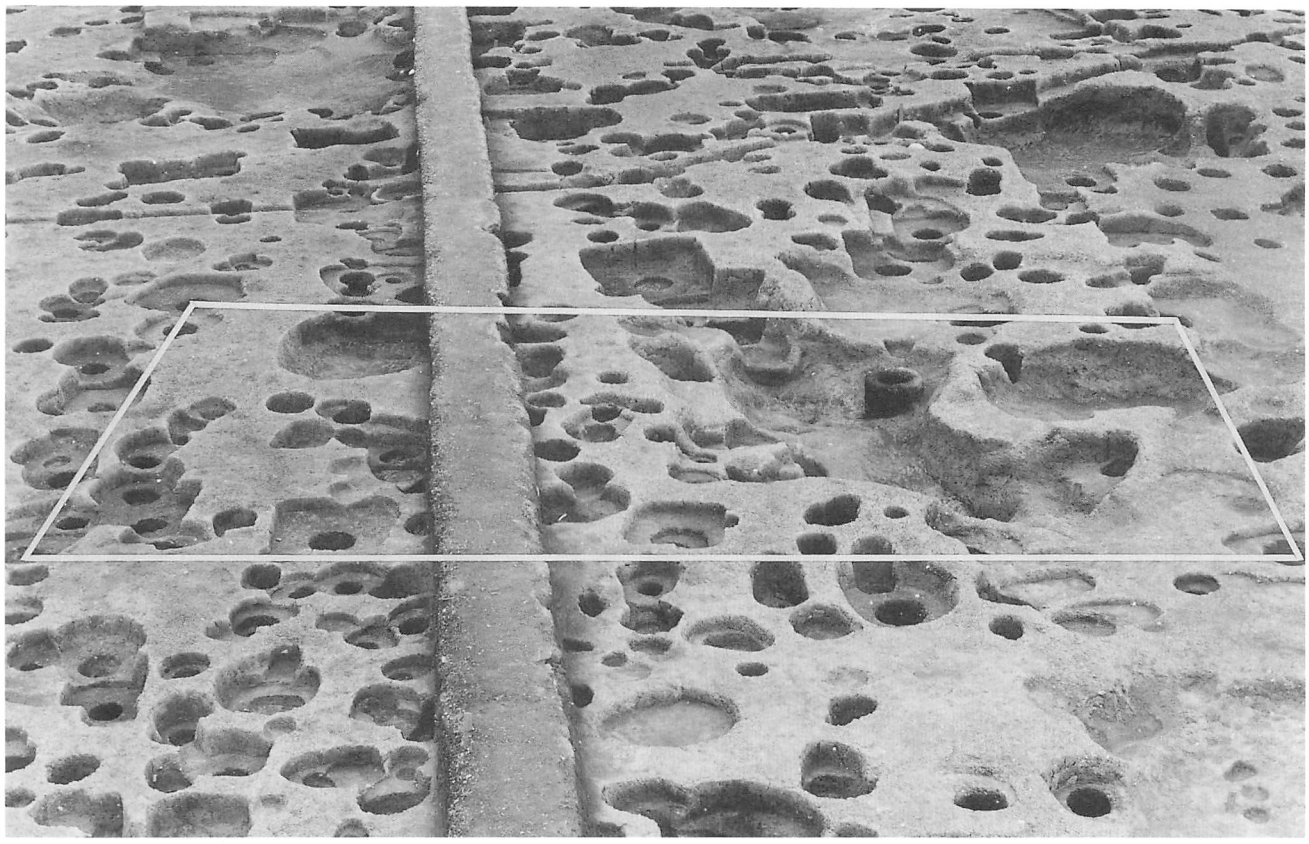


ＳＢ 7881・7882（東から）

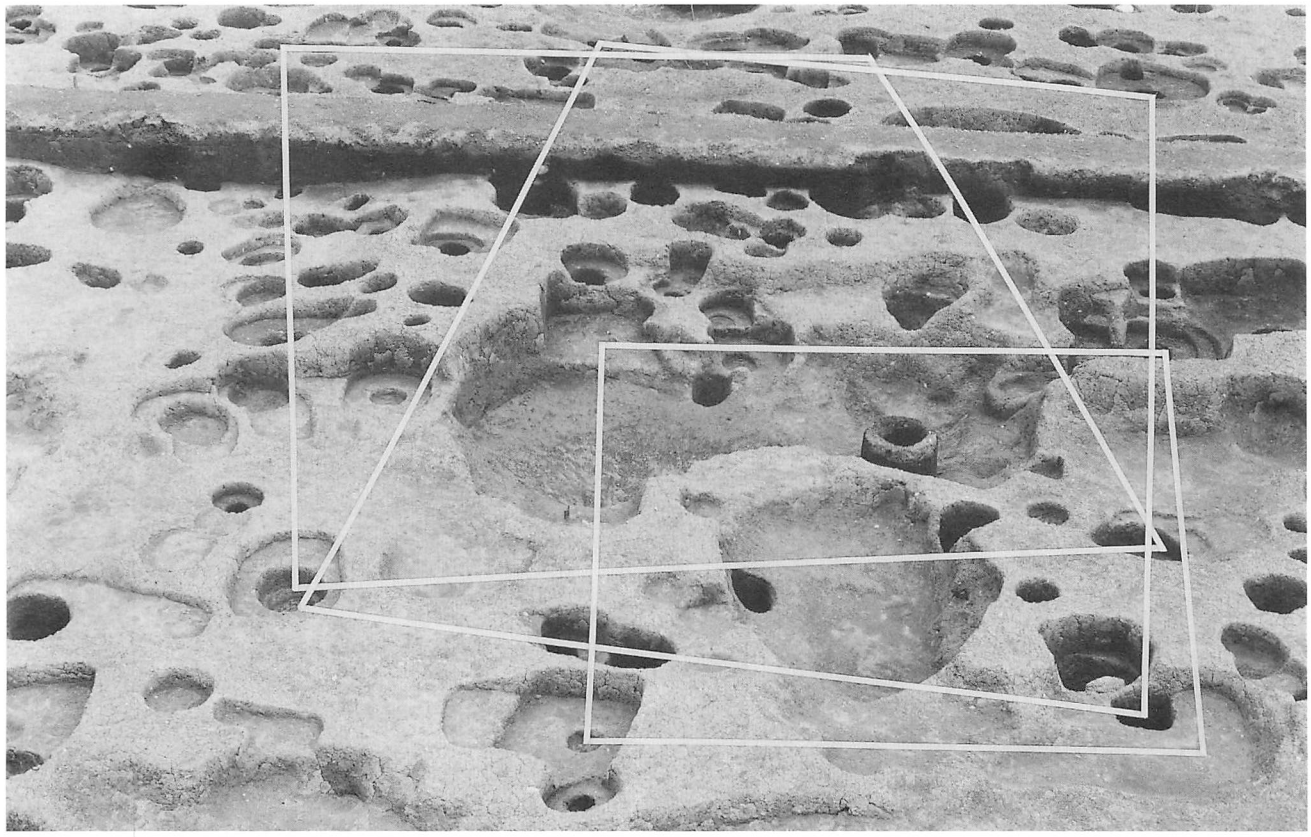
ＳＢ 7882 南東隅土器出土状況（北西から）

ＳＢ 7905（西から）

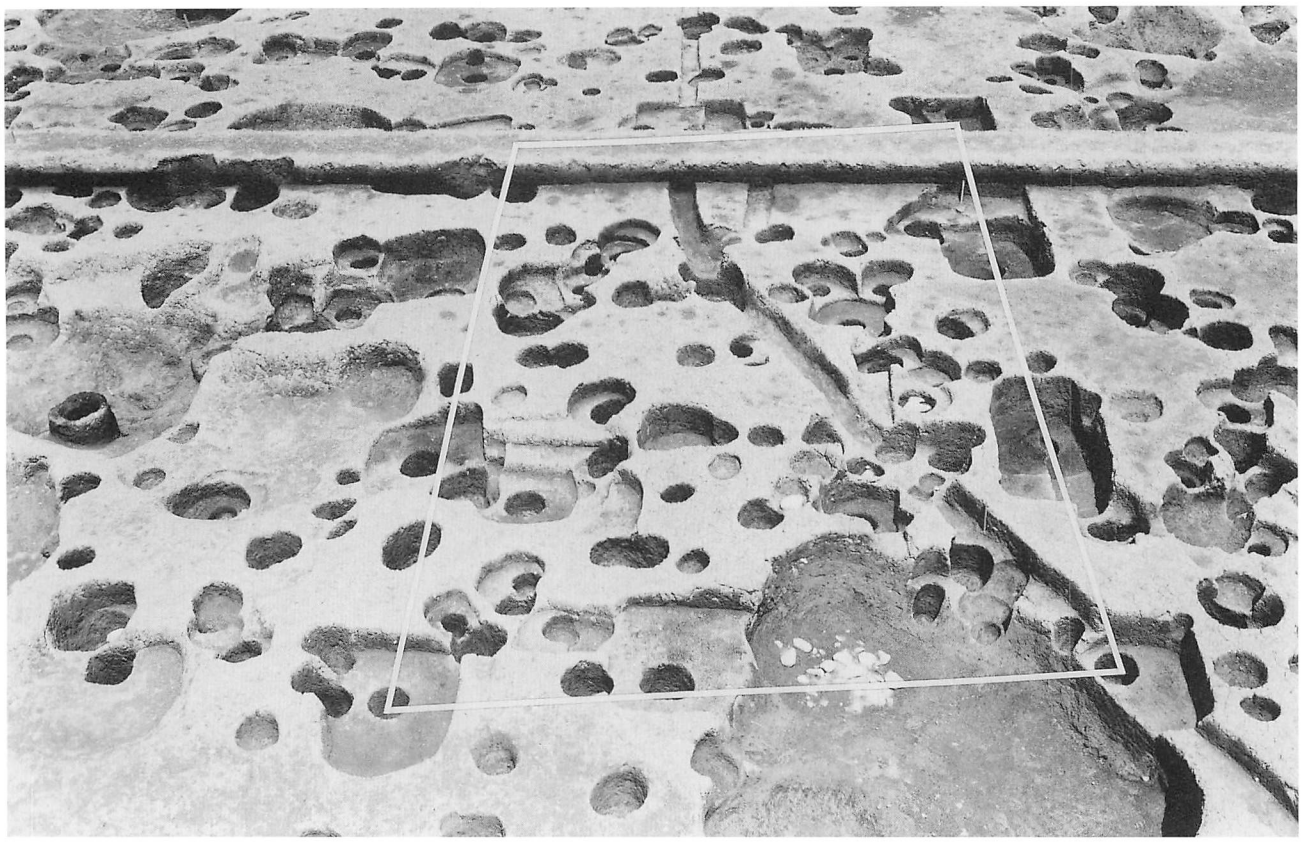
ＳＢ 7905　東壁カマド土器出土状況（北から）



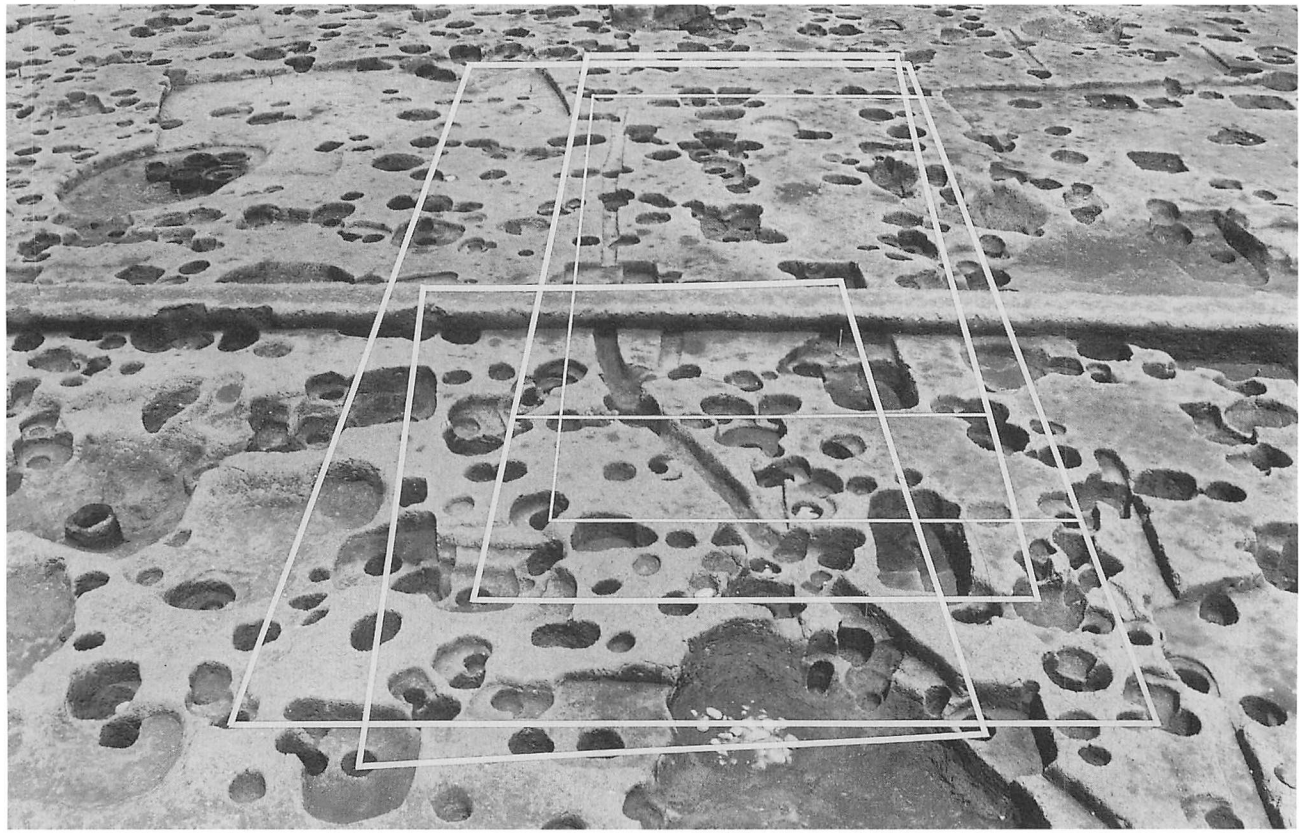
ＳＢ 7865（北から）



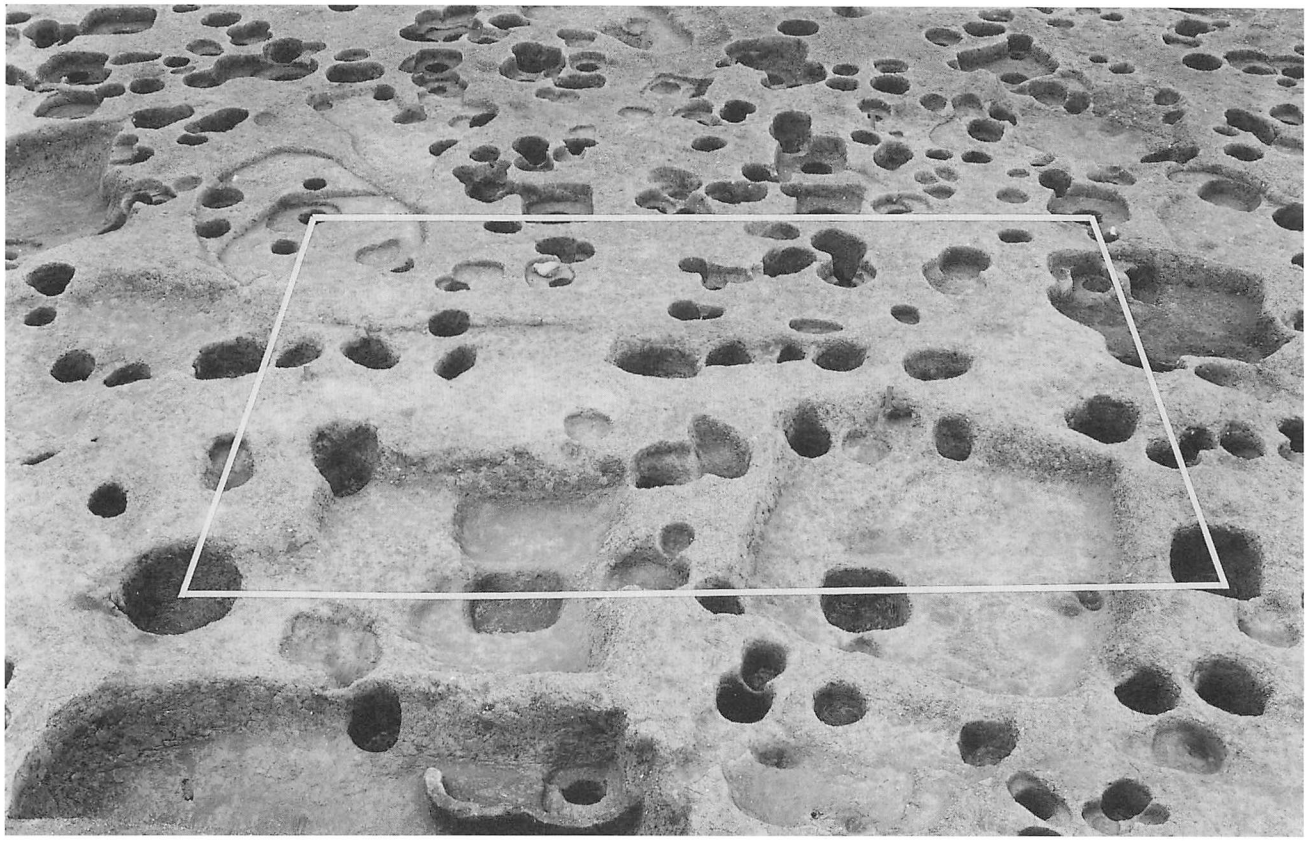
ＳＢ 7865・7871・7872（西から）



ＳＢ 7875（西から）

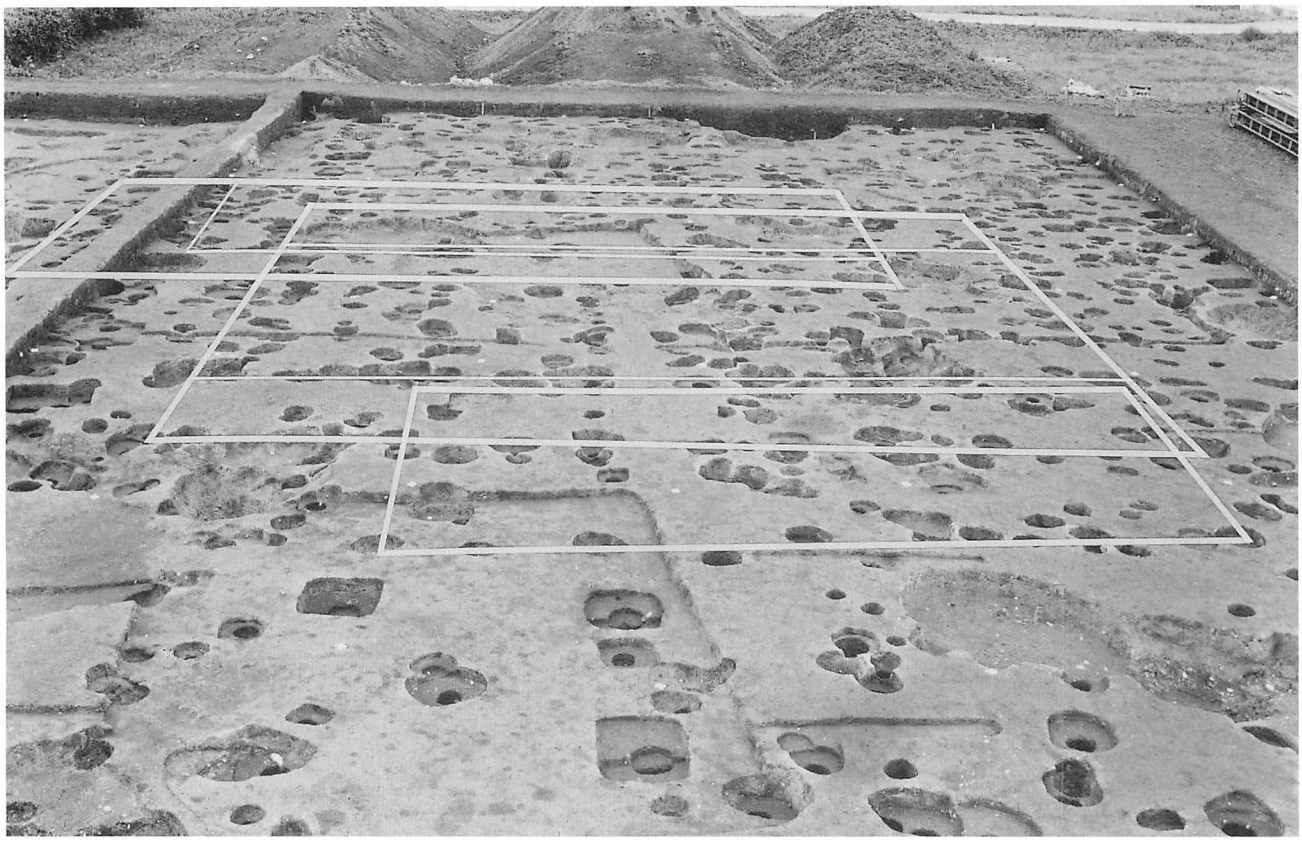


ＳＢ 7875・7895・7896（西から）

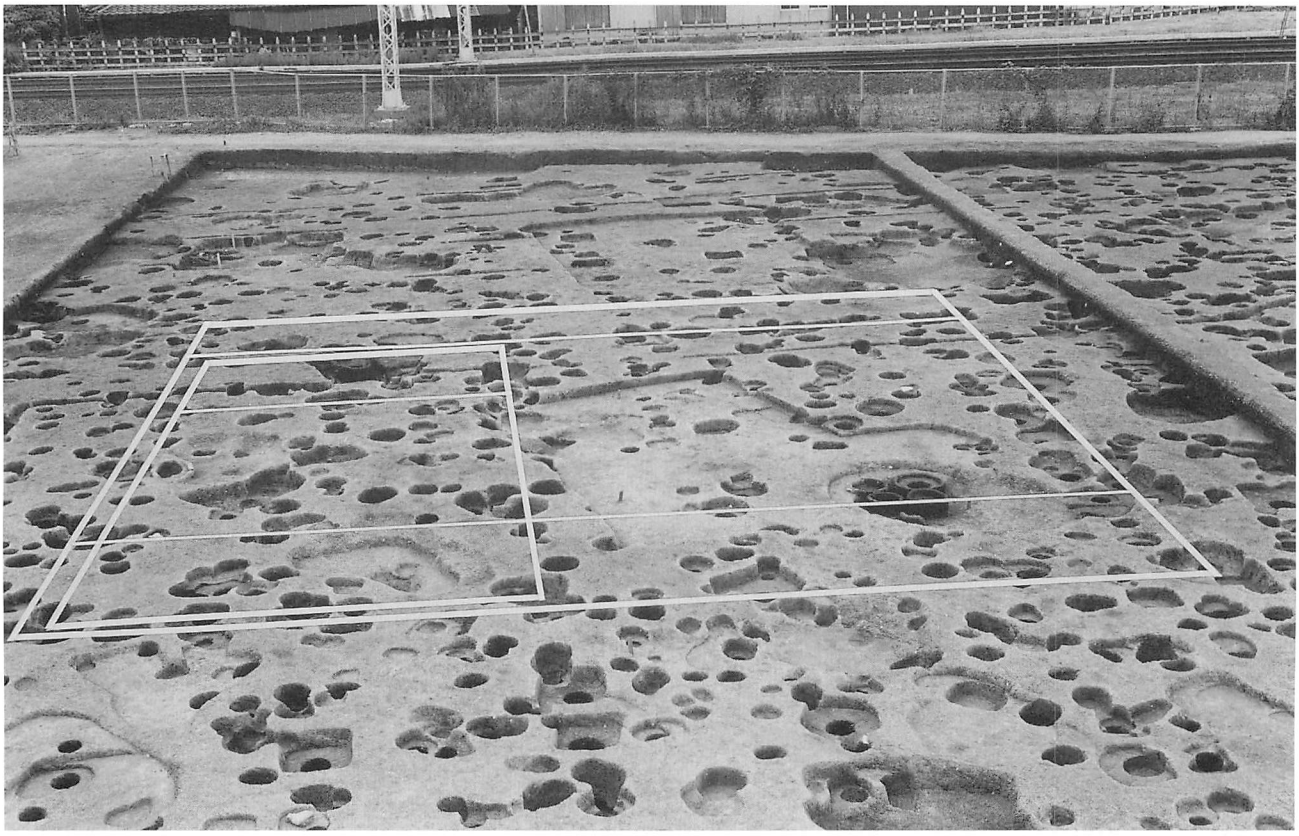


ＳＢ 0250（北から）

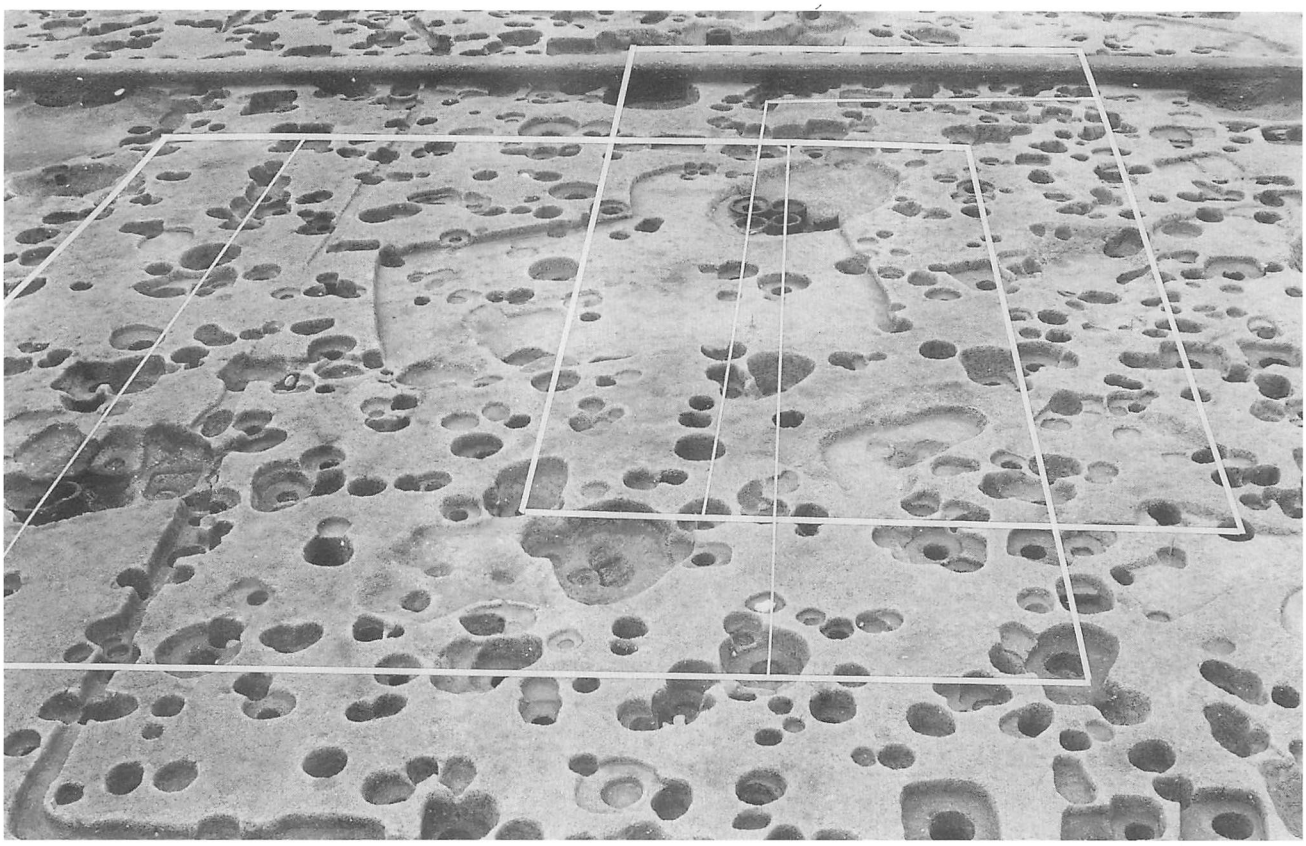
ＳＢ 7880・7890（西から）



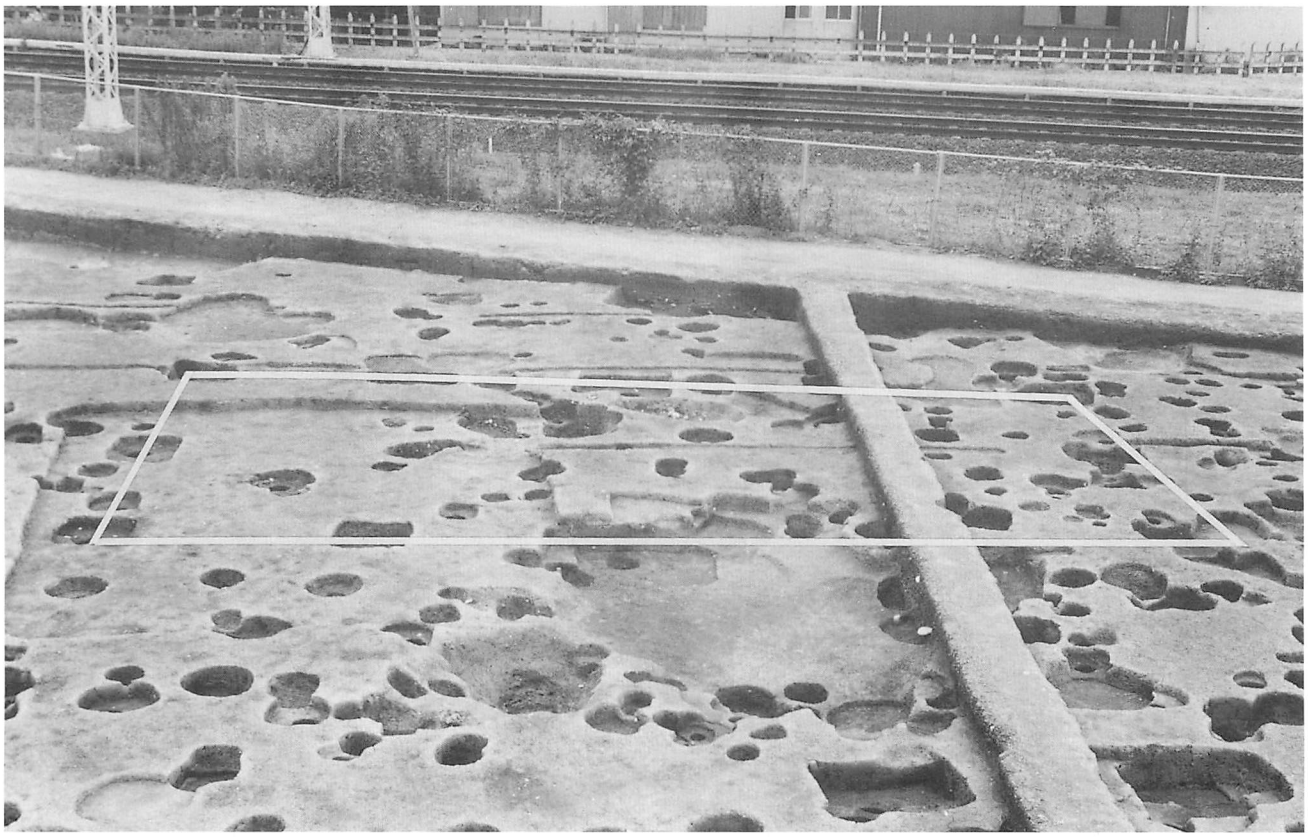
ＳＢ 7870・7880・7894（南から）



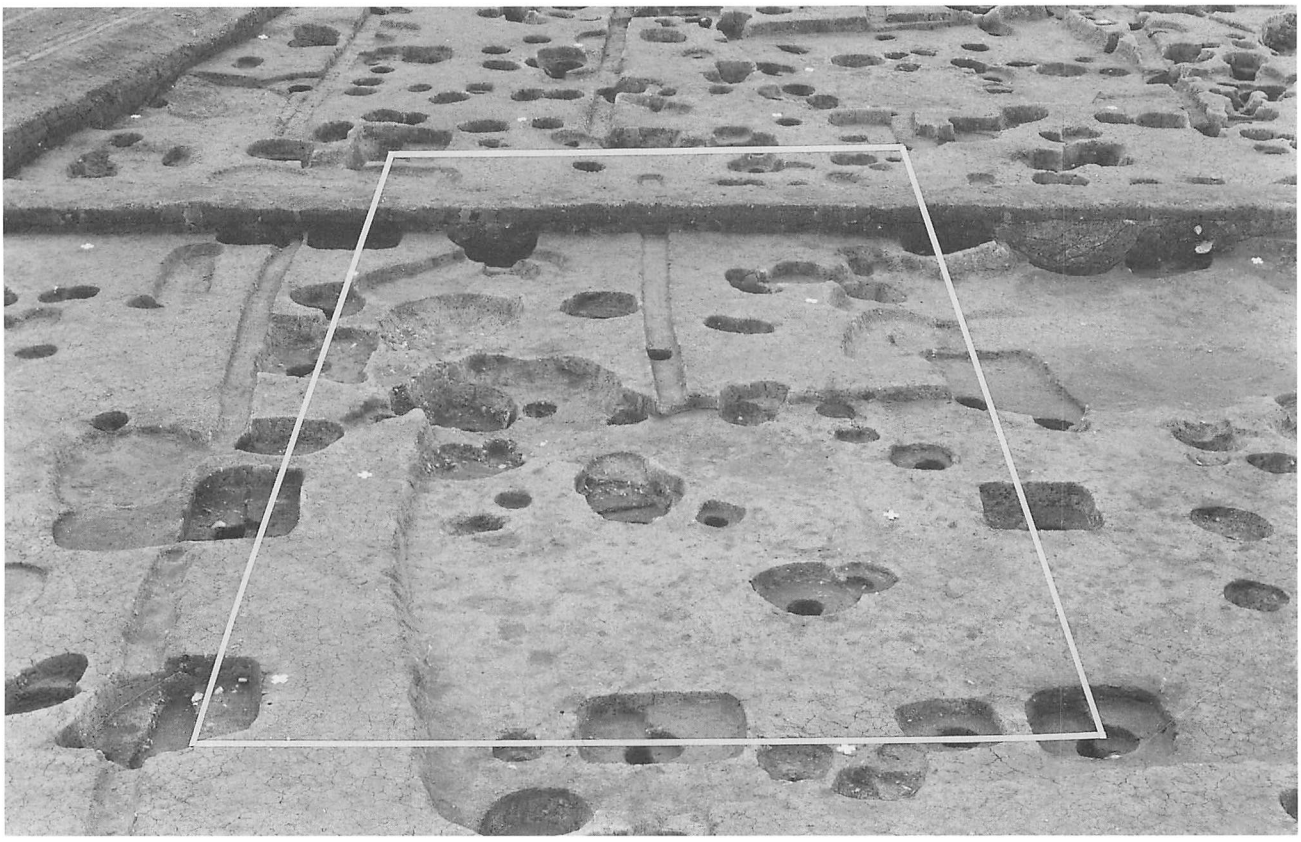
ＳＢ 7880・7885（北から）



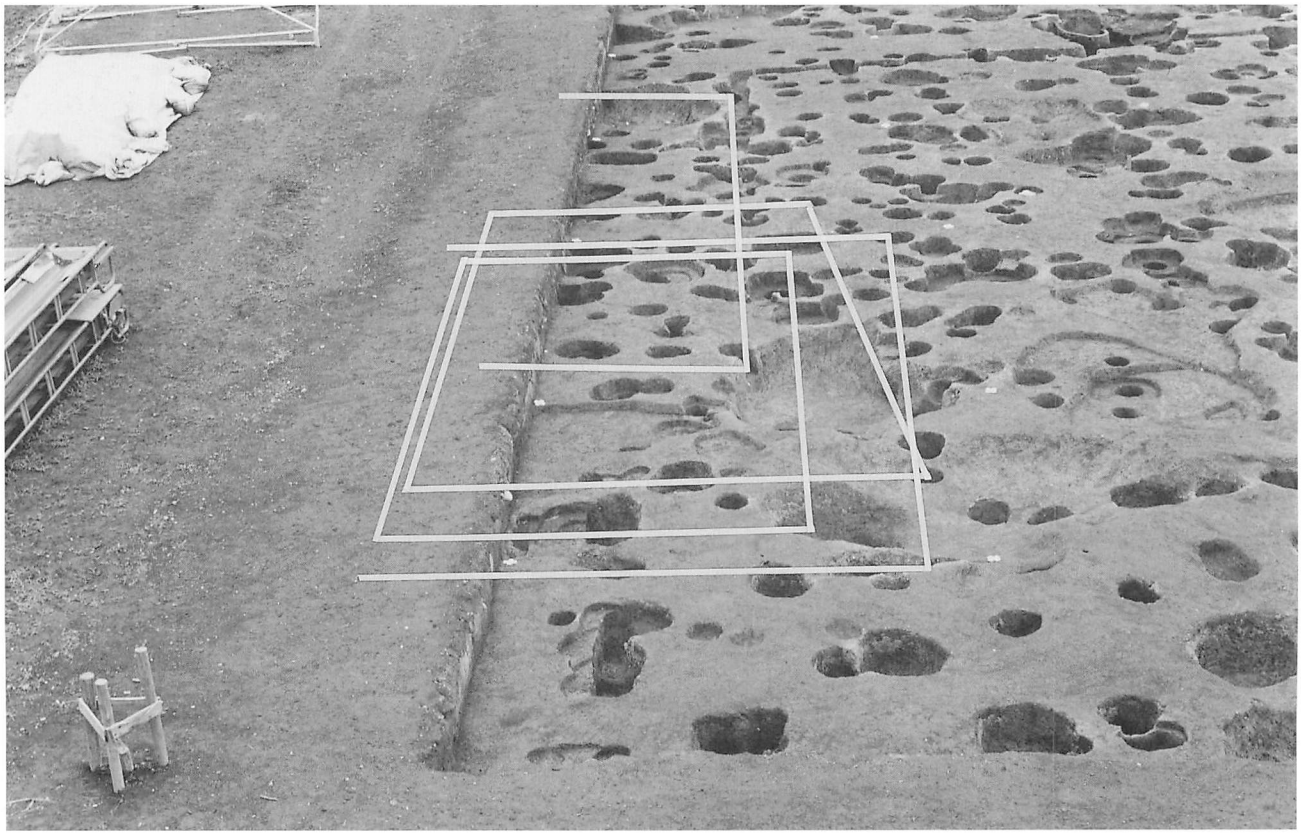
ＳＢ 7870・7880（東から）



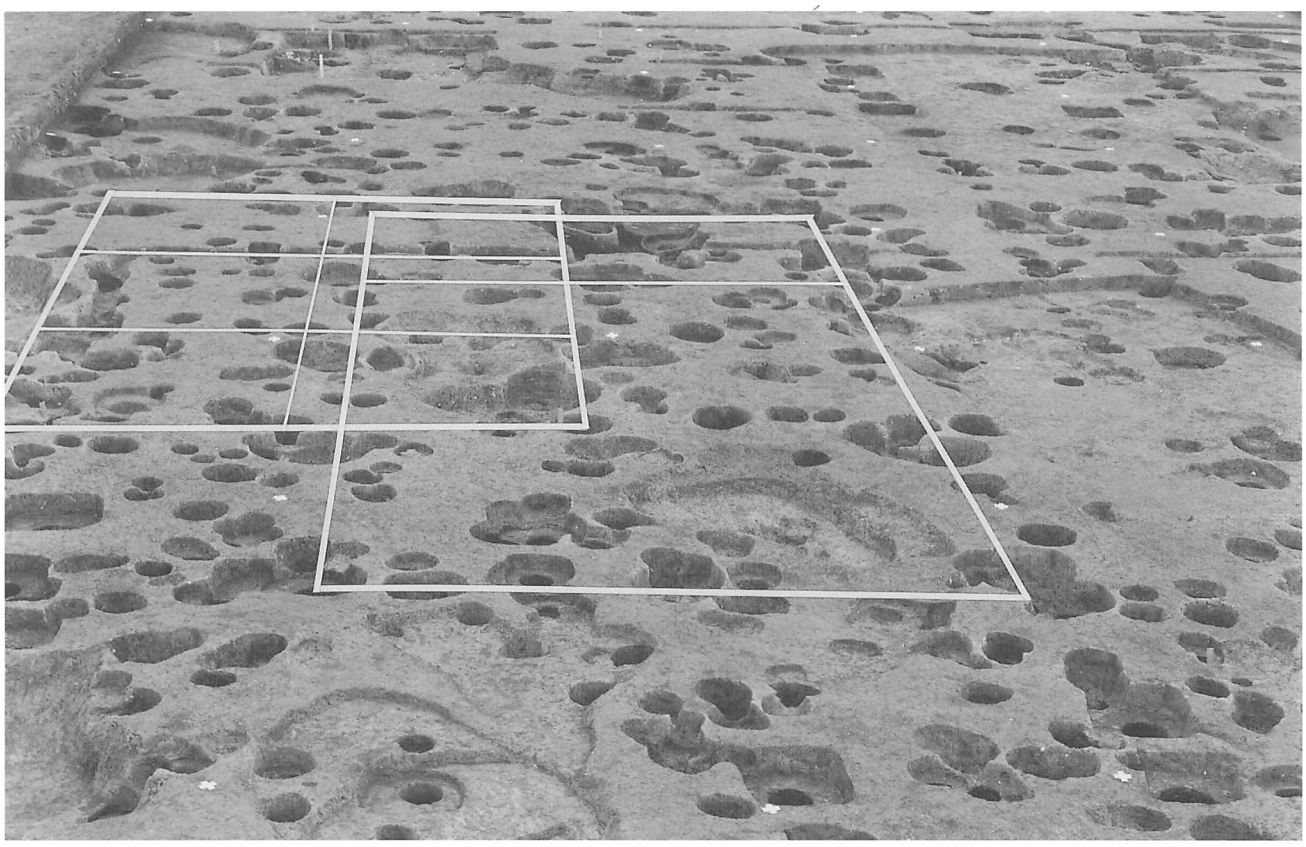
ＳＢ 7900（北から）



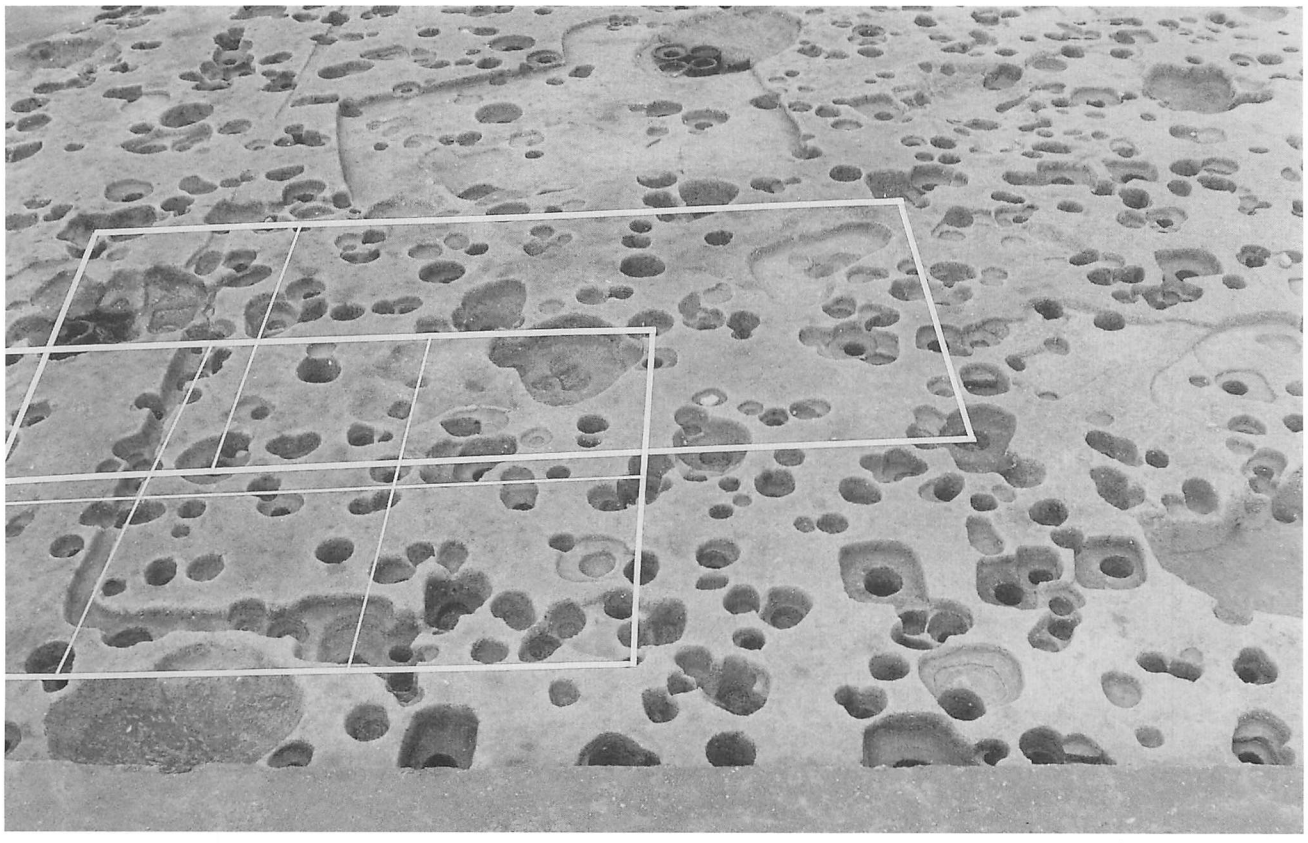
ＳＢ 7900（東から）



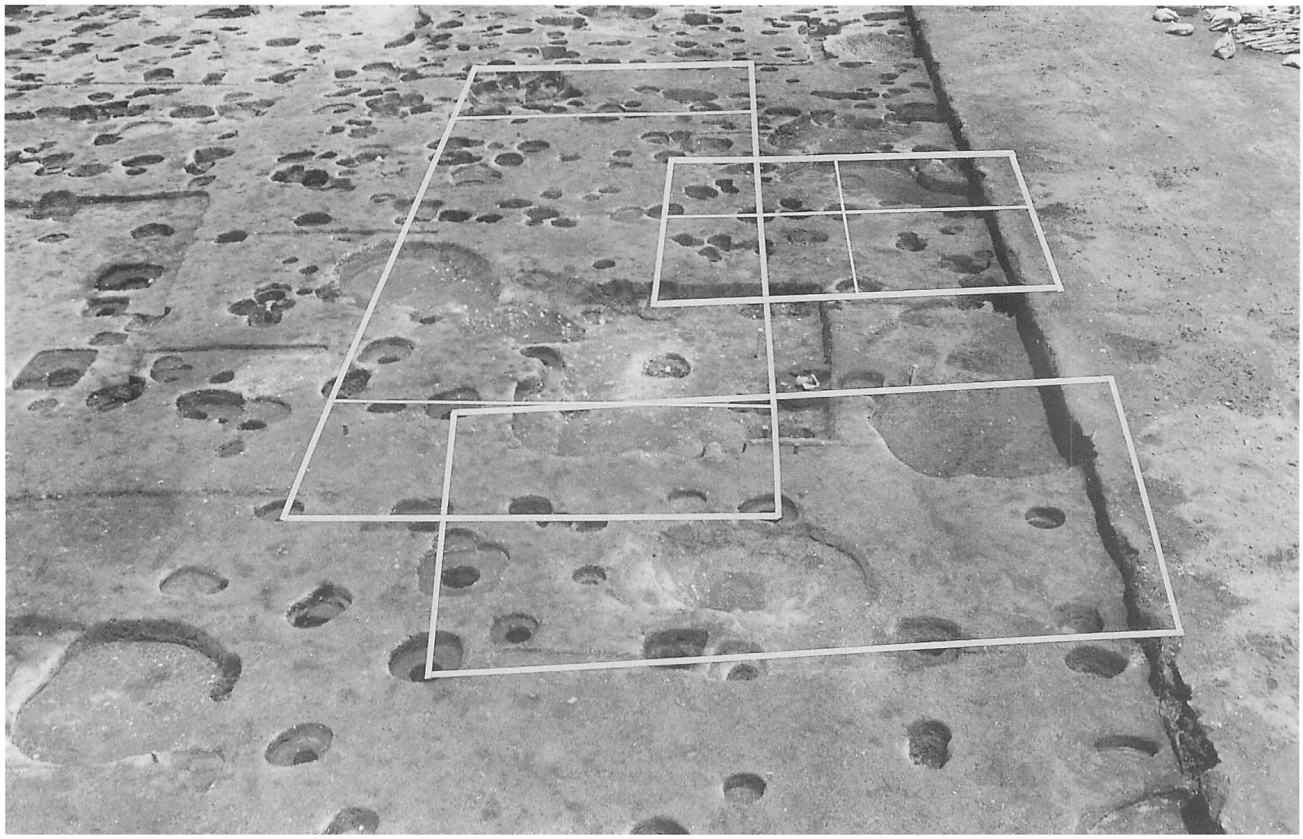
ＳＢ 6860・6861・6874・0251（北から）



ＳＢ 7885・7886（北から）



ＳＢ 7885・7886（東から）



ＳＢ 7897・7898・7903（南から）

ＳＫ 7867　土器出土状況（北から）

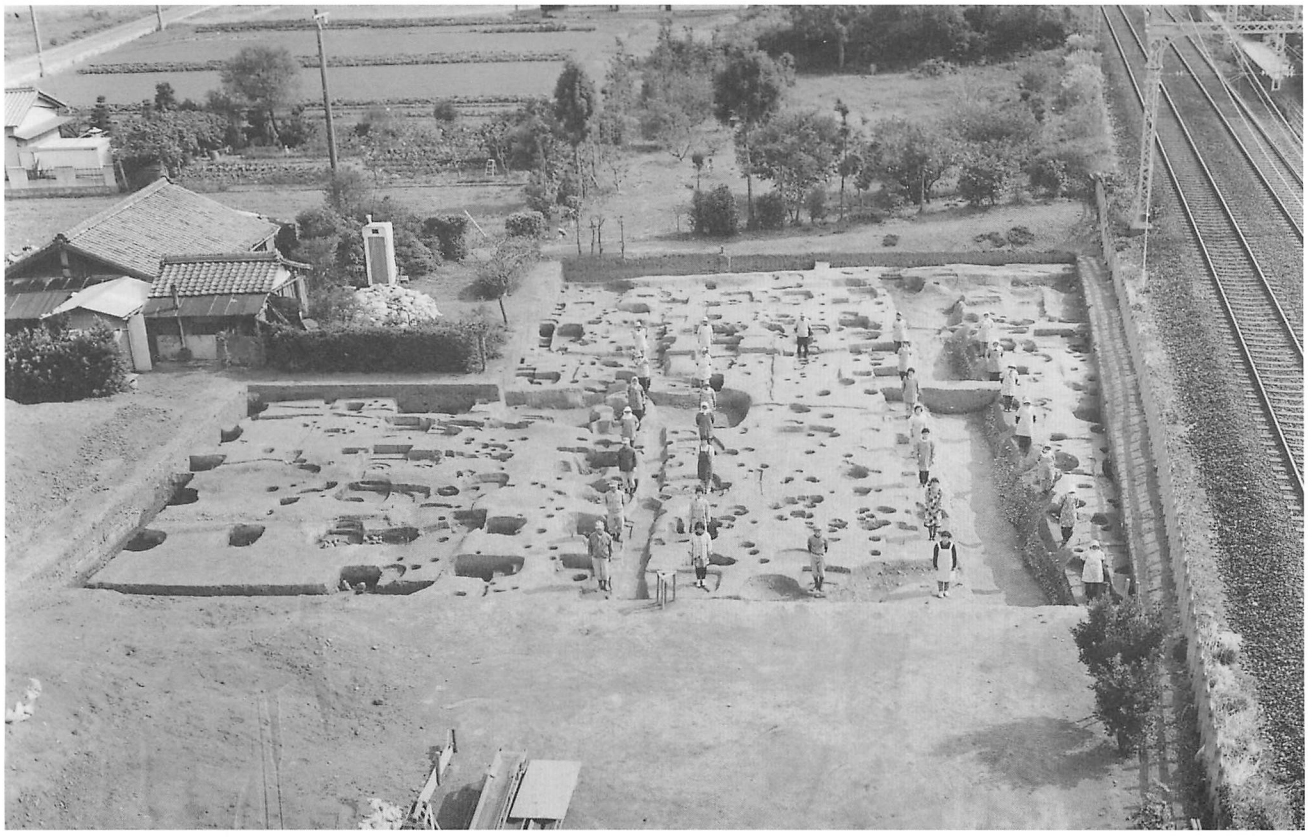
ＳＫ 7887 土器出土状況（南から）

ＳＫ 6247　中畔東壁面出土状況（東から）

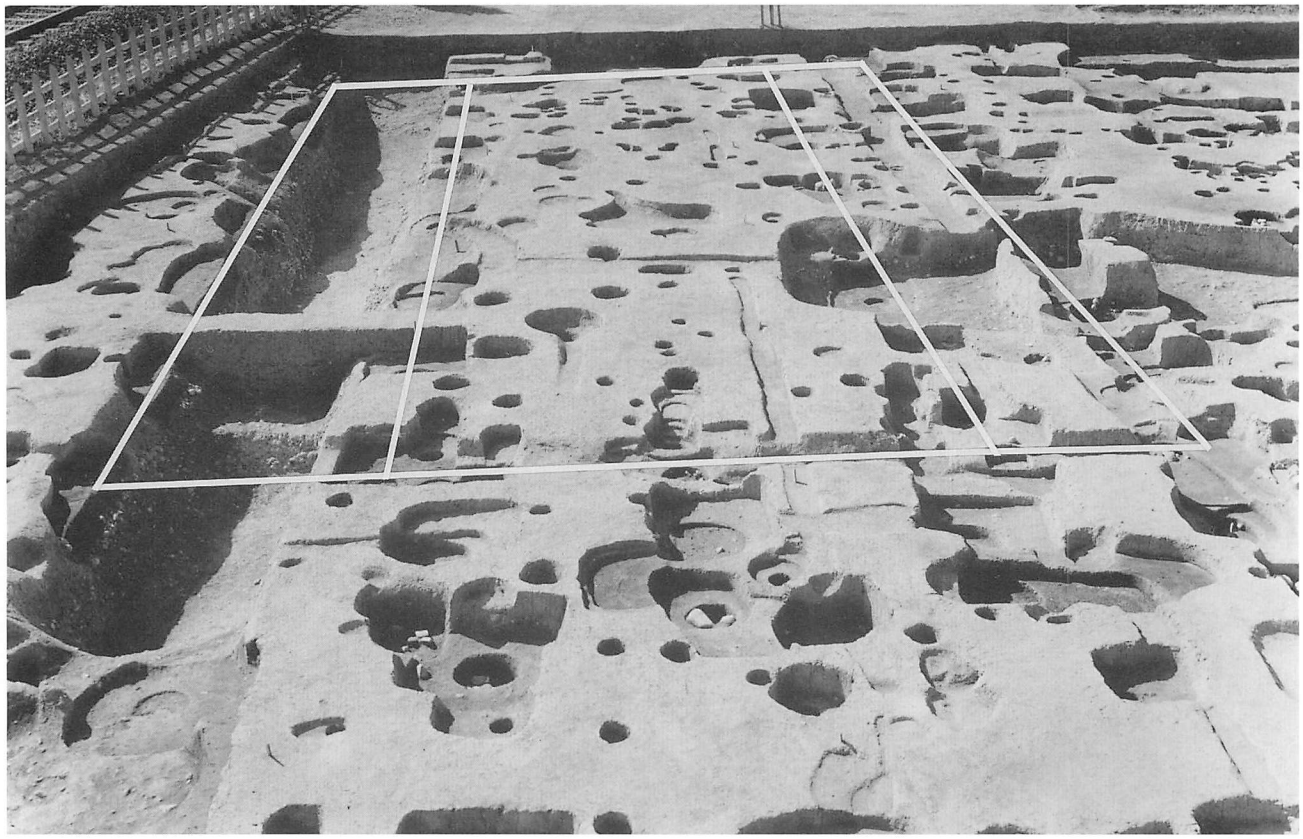
調査区全景（上から）

調査区全景（西から）

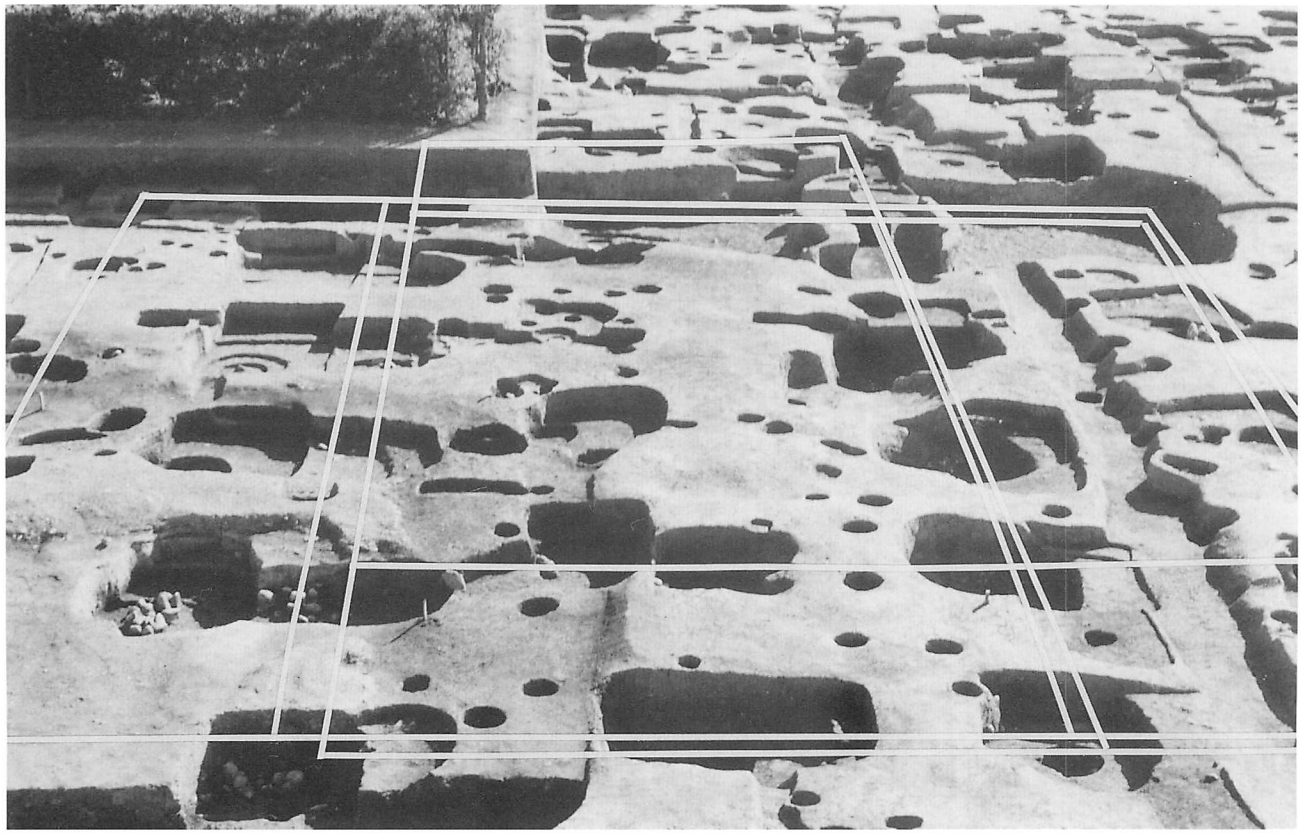
ＳＢ 7950（南から）



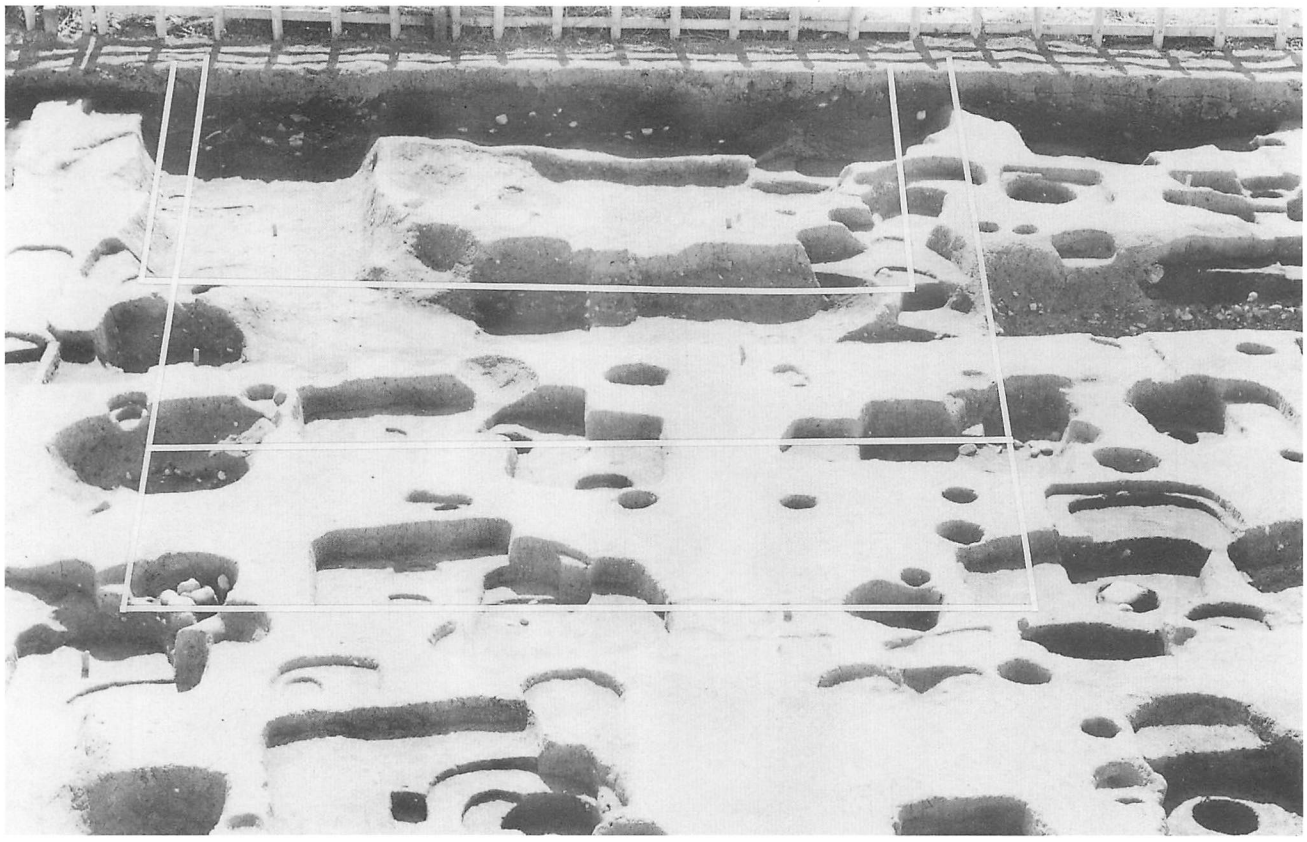
ＳＢ 7950（西から）



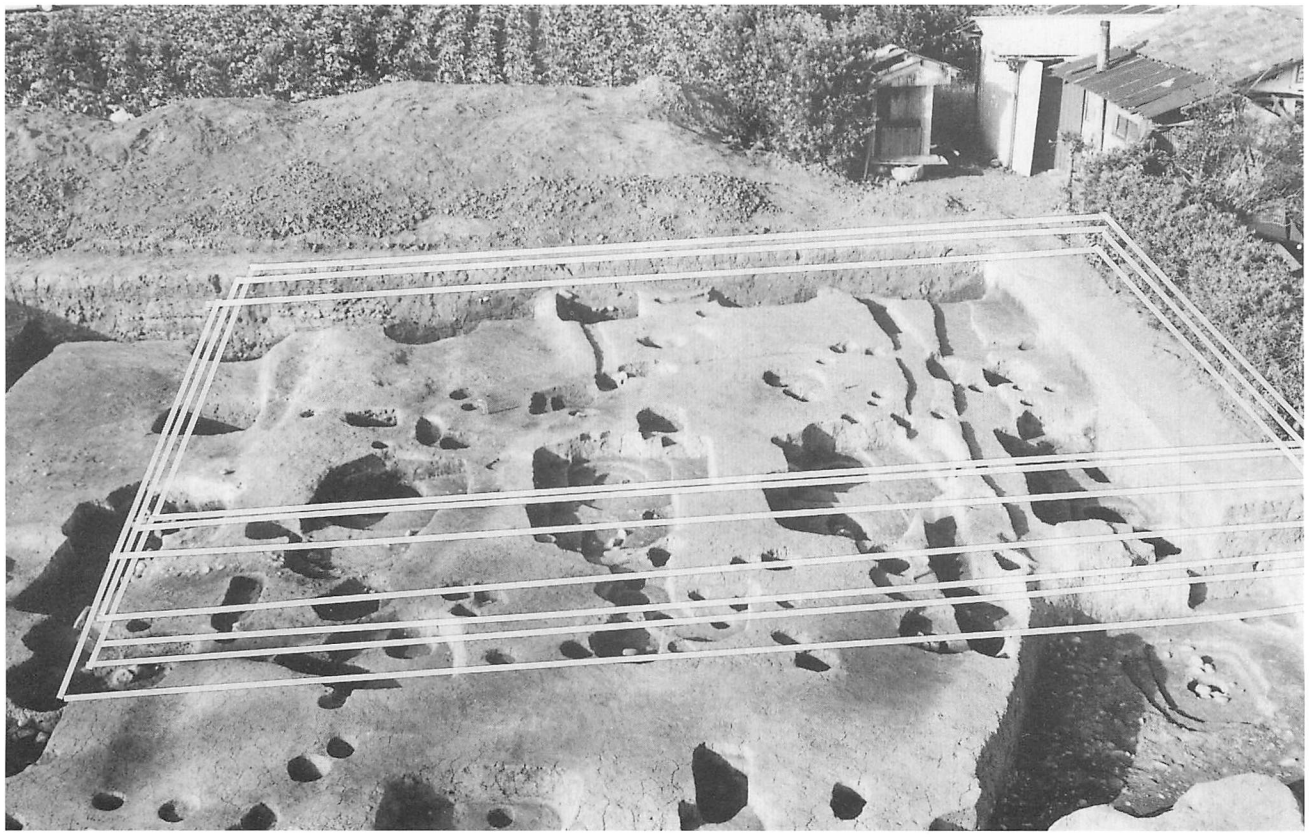
ＳＢ 7950（東から）



ＳＢ 7918・7919（西から）

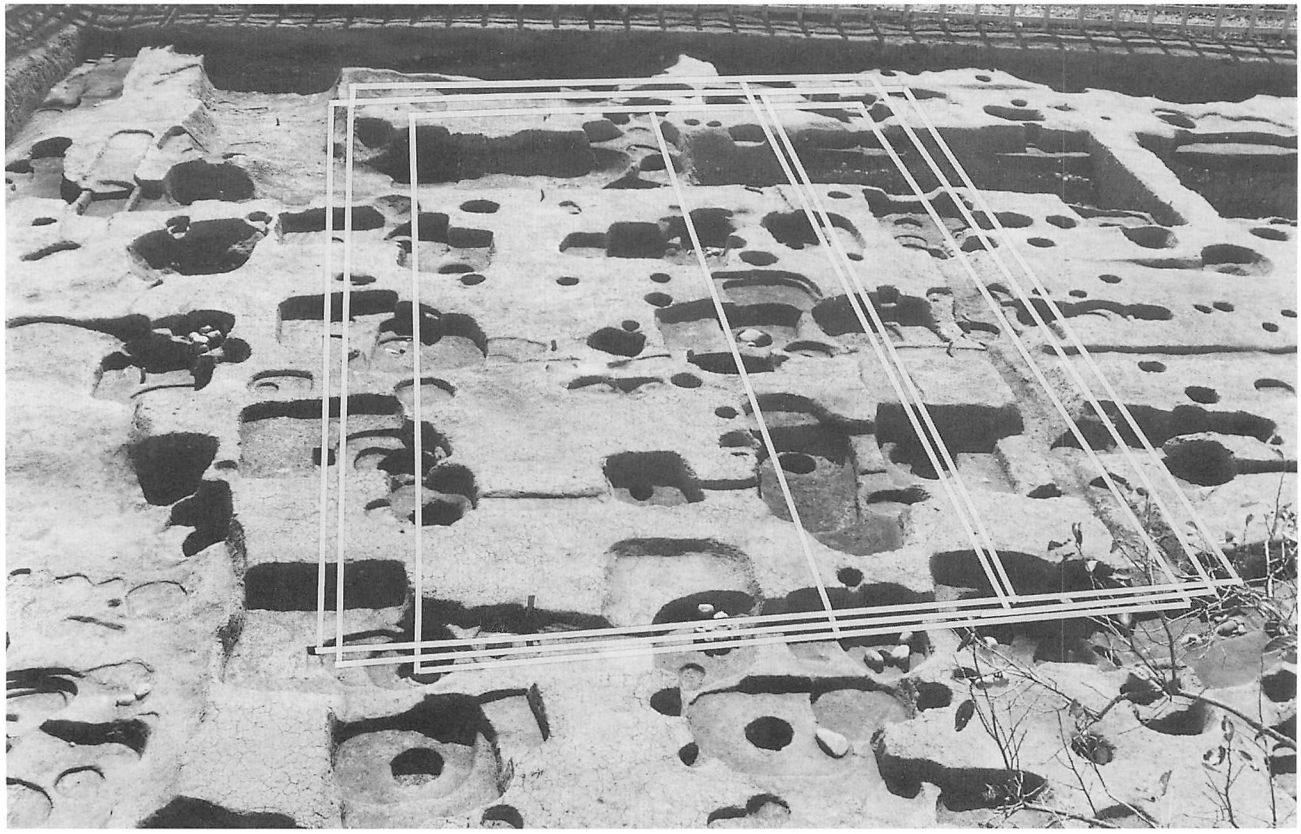


ＳＢ 7947・7948（北から）

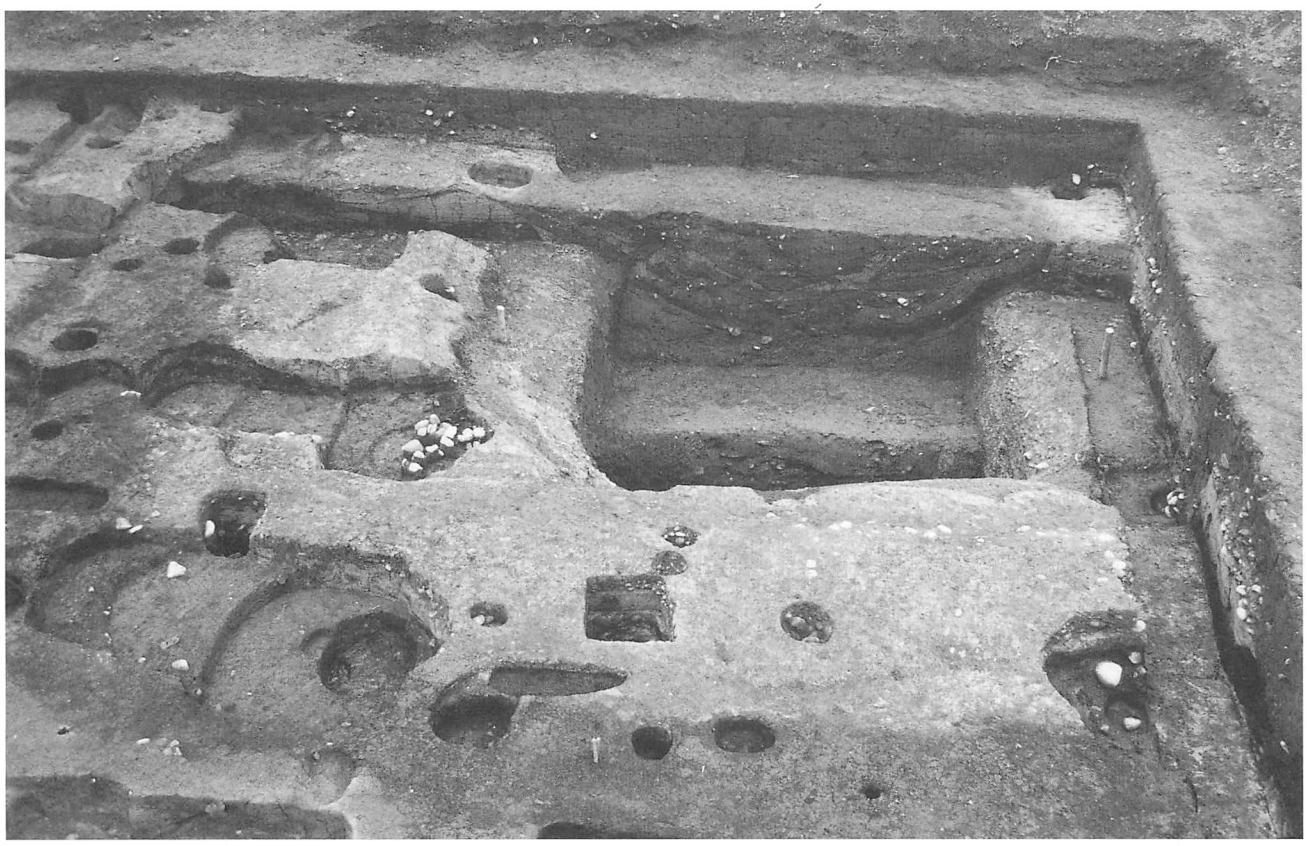


ＳＢ 7915・7916・7917（南から）

ＳＡ 6770・6790　ＳＤ 6803（北から）



ＳＢ 7938・7939・7940（北から）



ＳＥ 7920（東から）

ＳＥ 7920　井戸枠痕跡検出状況（東上から）

調査区全景（北から）

調査区全景（西から）

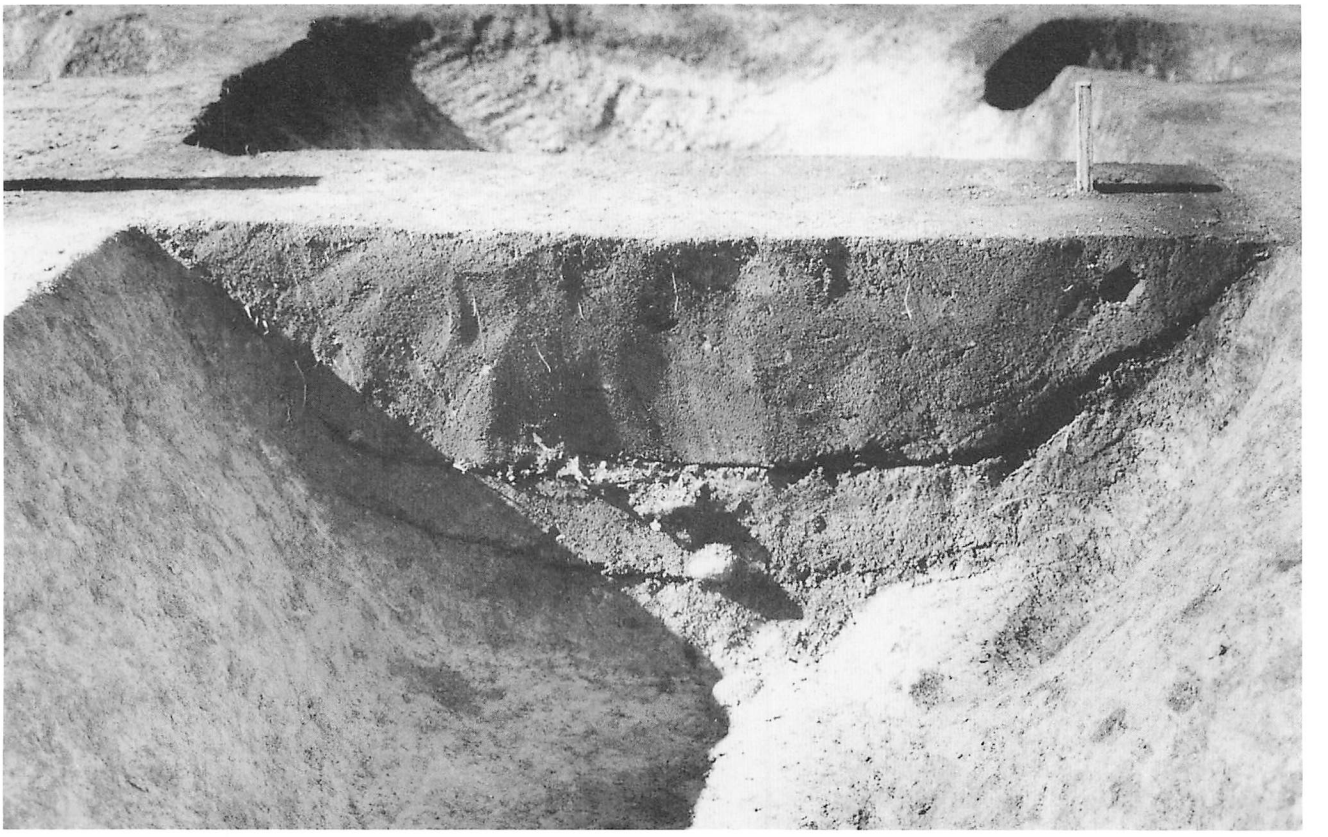
ＳＤ 6002・6050，ＳＦ 6009（西から）

ＳＤ 6002（西から）

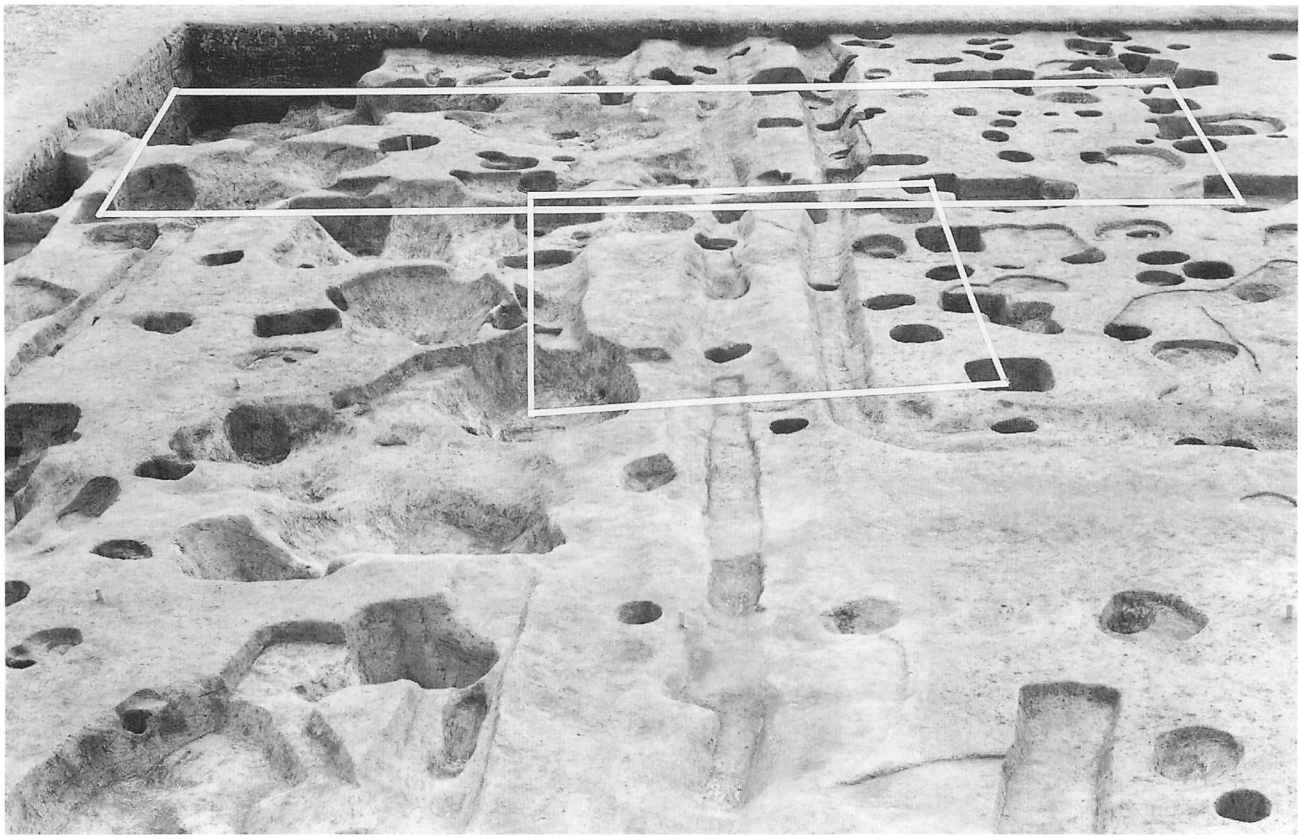
ＳＤ 7965，ＳＫ 7966（南から）

ＳＤ 7970（南から）

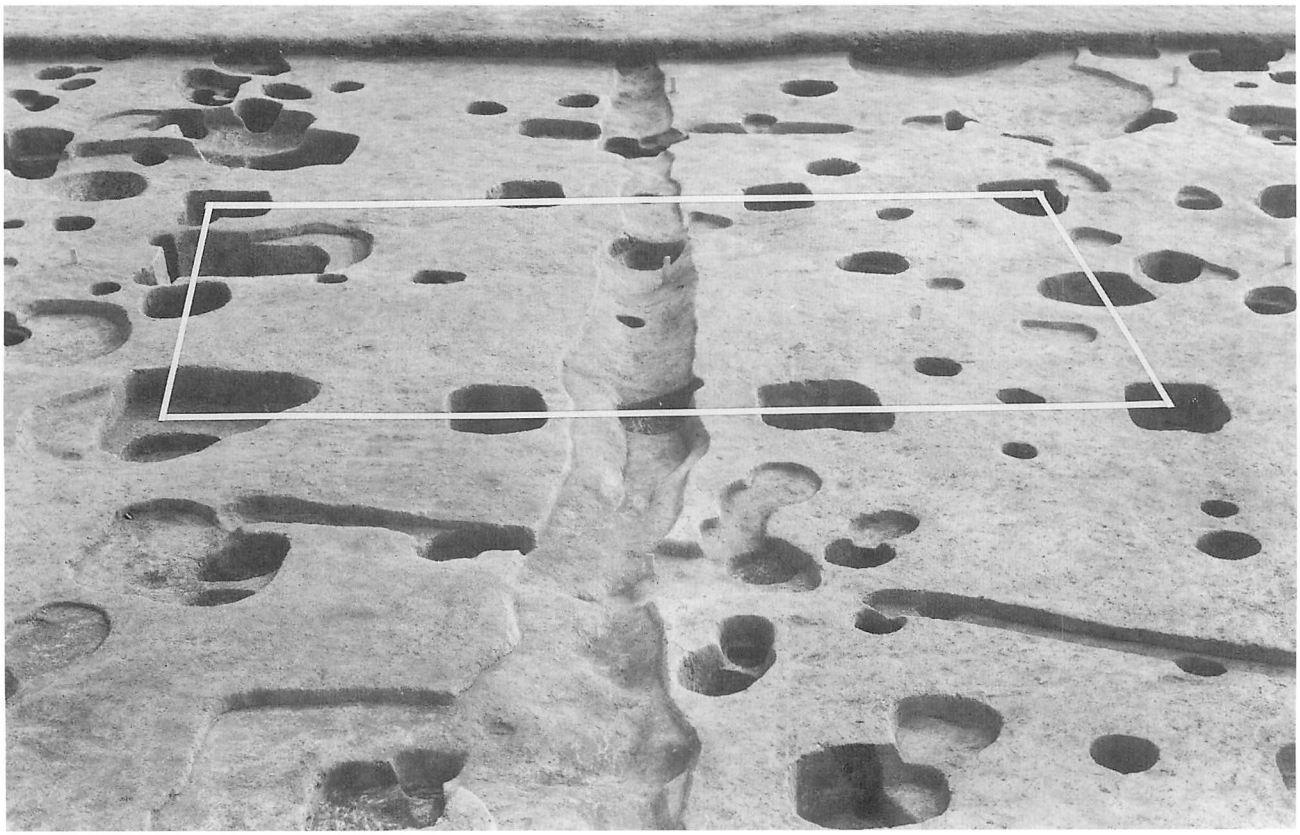
ＳＤ 6050 土層断面（西から）



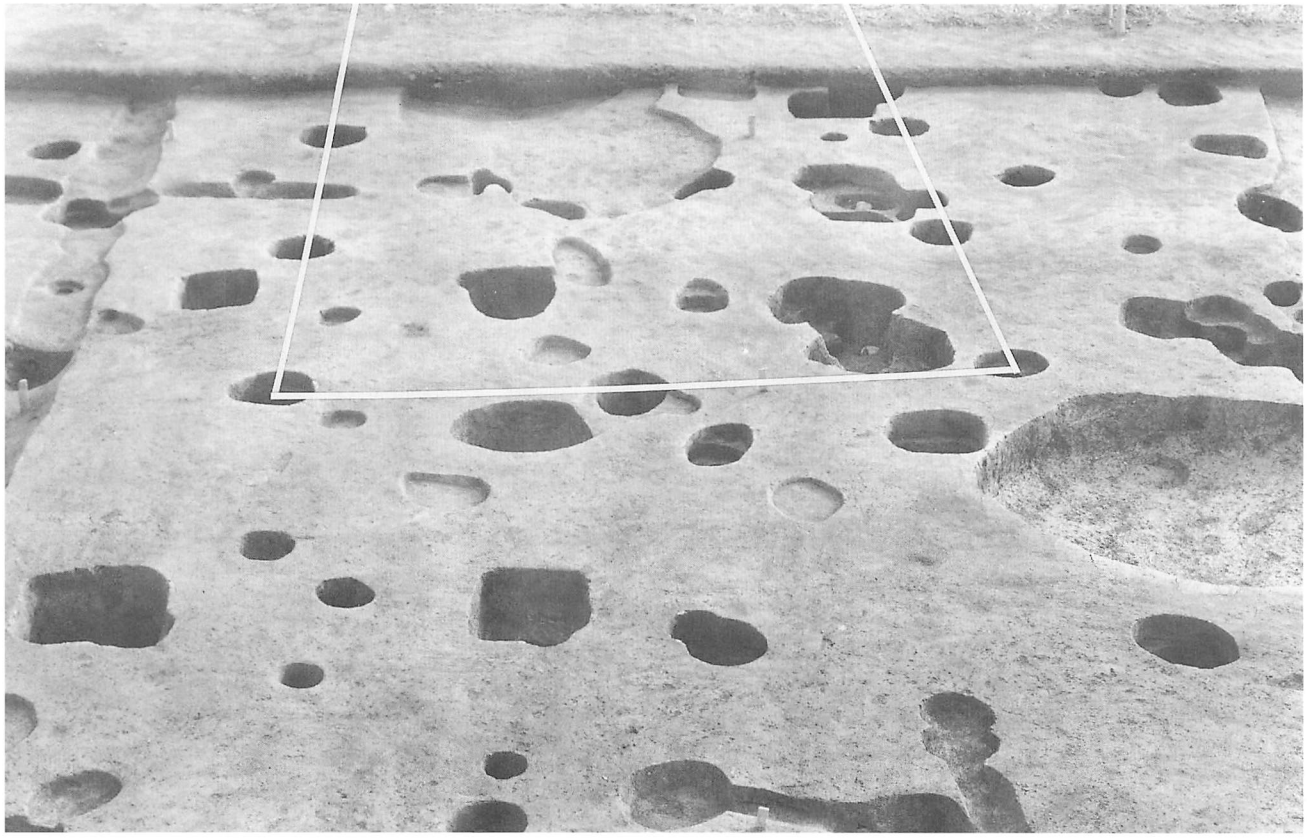
ＳＤ 6050 土層断面（東から）



ＳＢ 7998・8000（北から）

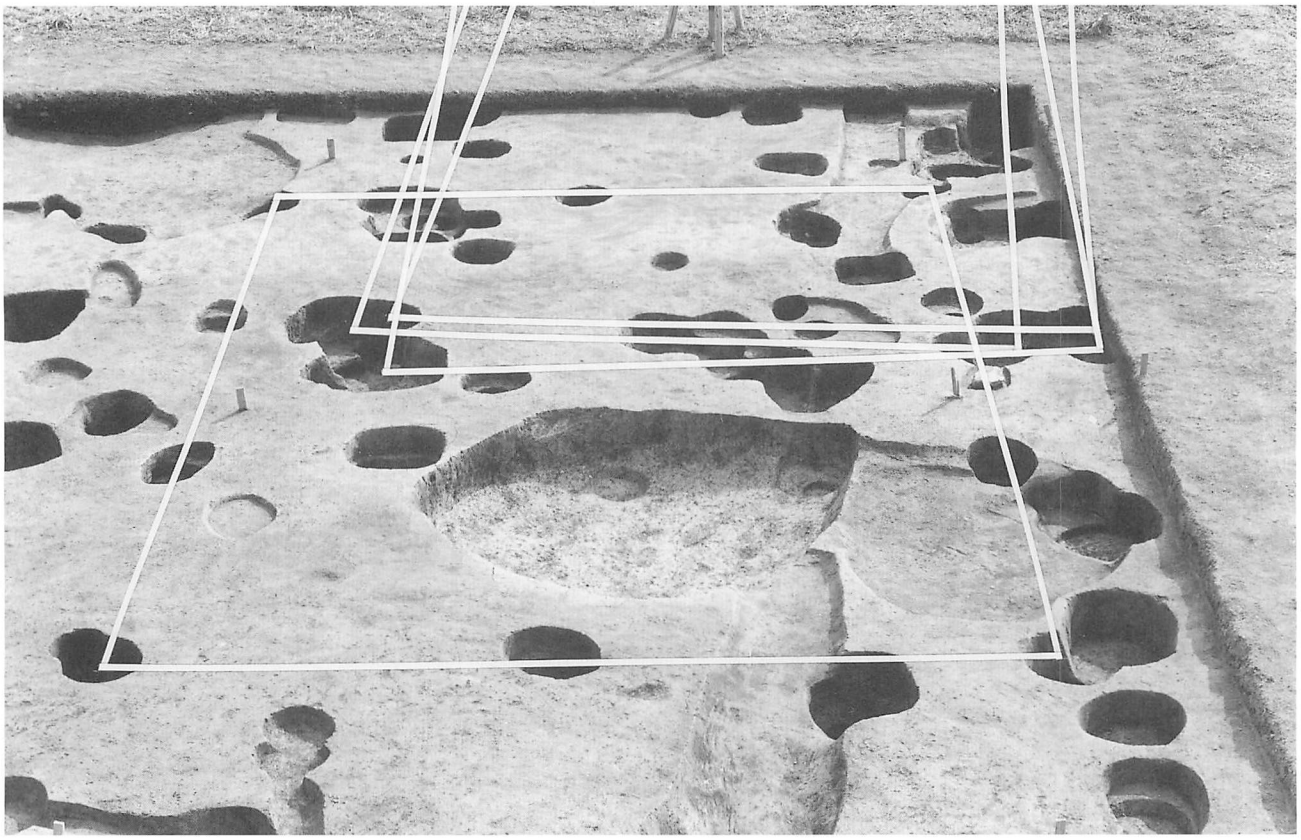


ＳＢ 7995（北から）



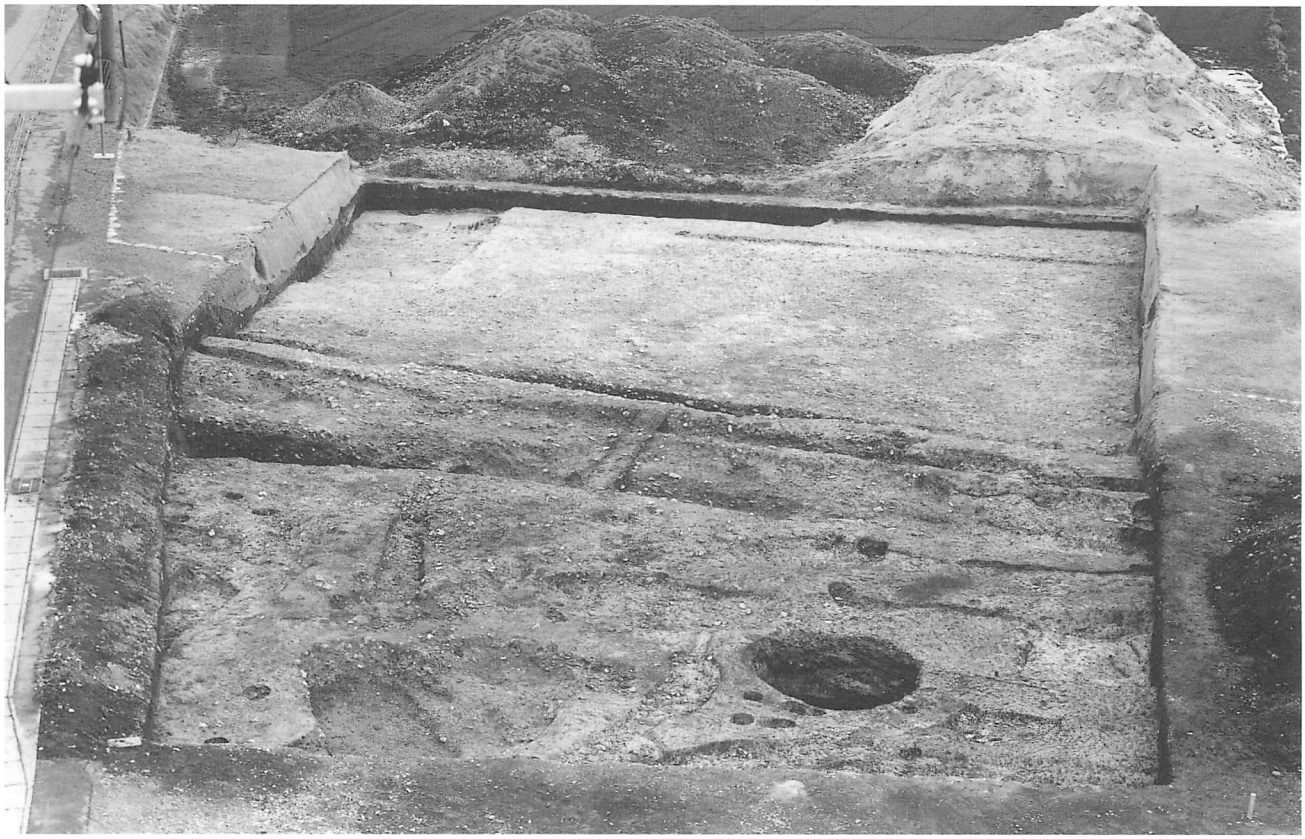
ＳＢ 7997・7987・7988（北から）

ＳＢ 7996（北から）



ＳＢ 7991 ～ 7994，ＳＫ 7985・7986（北から）

ＳＫ 7980（西から）



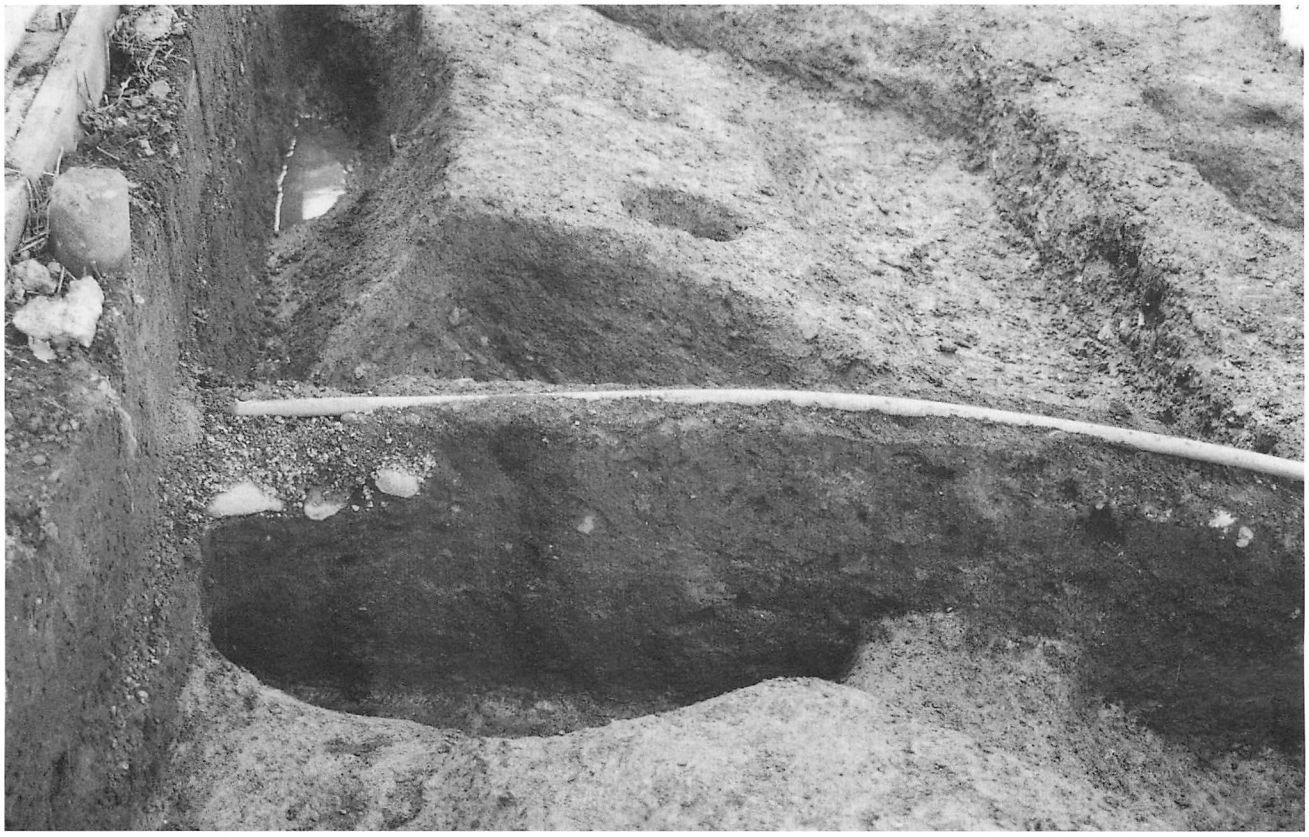
第 121 － 1 次調査区全景（北から）

第 121 － 2 次調査区全景（東から）

第 121 - 3 次調査区全景（東から）

第 121 - 4 次調査区全景（西から）

調査区全景（西から）



ＳＡ 7170　柱穴断面検出状況（東から）

2

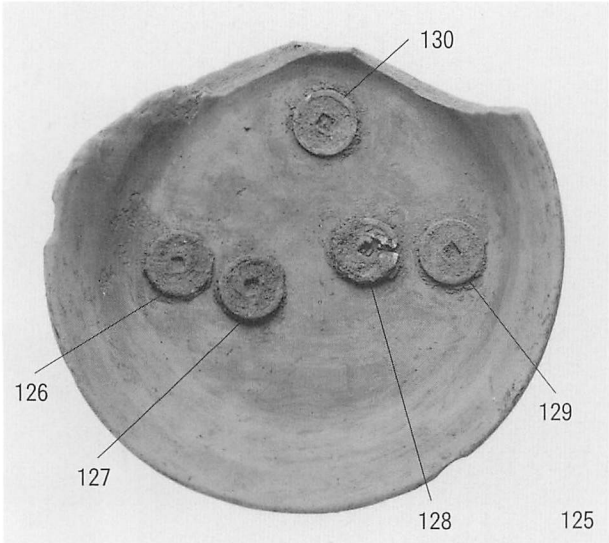
3

7

131硯面

131背面

6



125

124

出土遺物

8

23

22

9

21

15

10

18

14

12

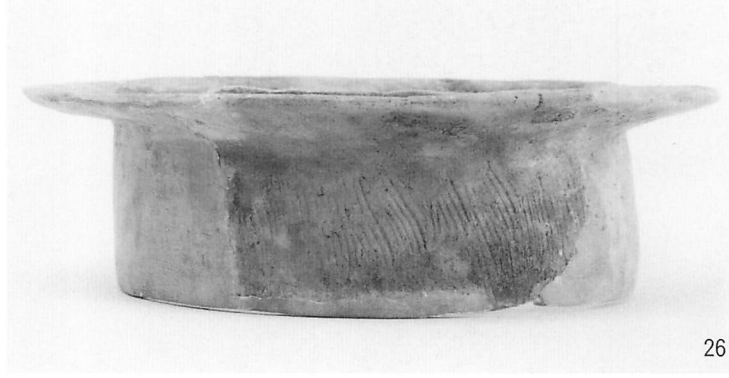
19

16

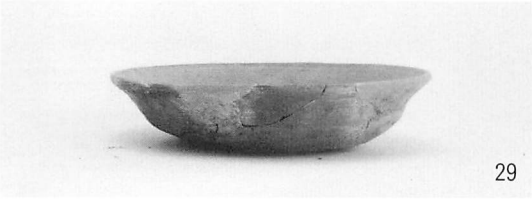
27

28

25


26

出土遺物


29

30

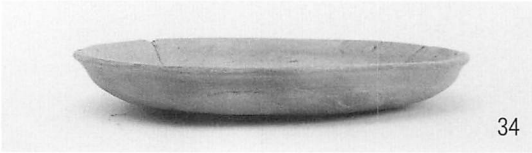
31

32

39

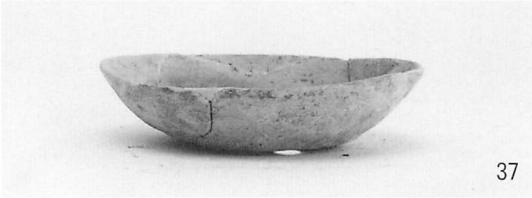
43

33


34

35

36


37

38

41

42

出土遺物

50

58

66

54

61

65

51

62

72

67

71

74

83

95

101

92

97

98

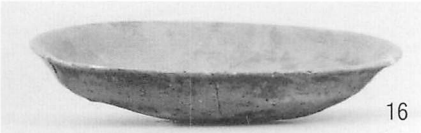
114

121

出土遺物

2

5


16

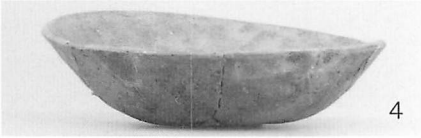
21

9

17

47

6


4

19

27

20

11

3

14

23

49

58

31

50

71

30

34

35

65

67

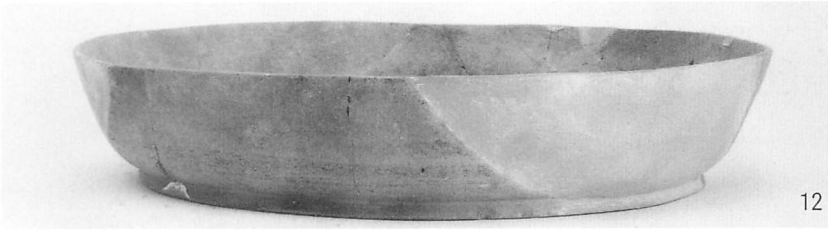
33

76

71

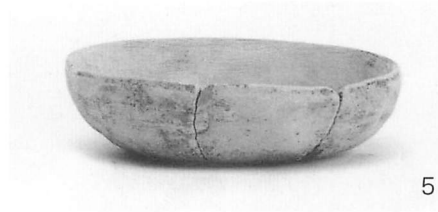
40

64


12

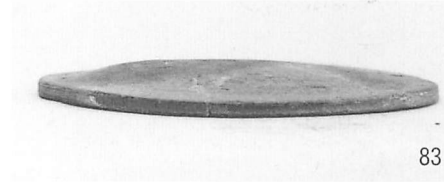
10

9


5

78

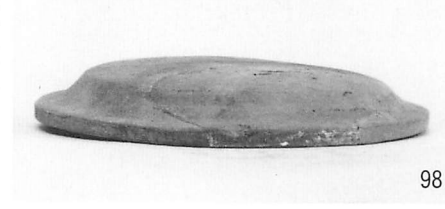
80


83

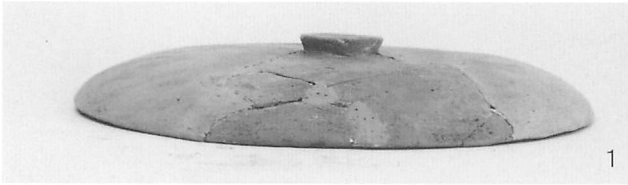
84

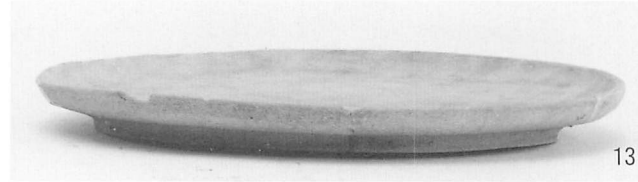
85

90


98

出土遺物


1


13

97

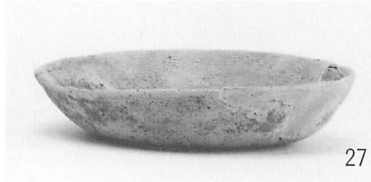
61

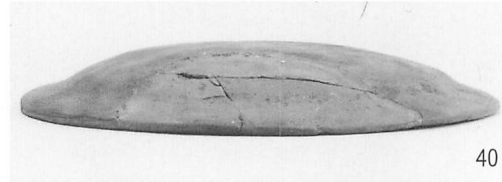
26

59

68

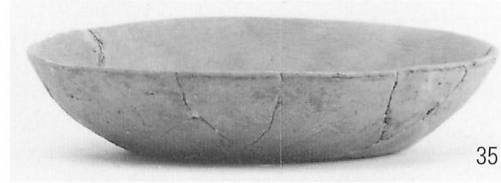
24


27


40

29

31

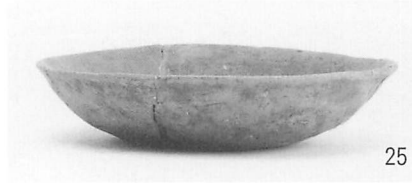

35

18

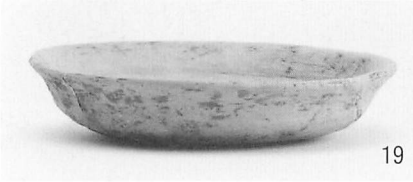
32

34

22


25

23


19

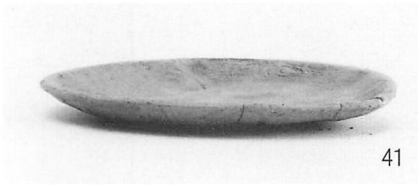
20

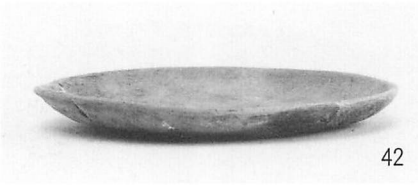
28

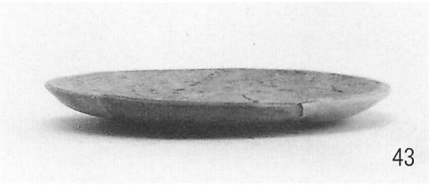
30

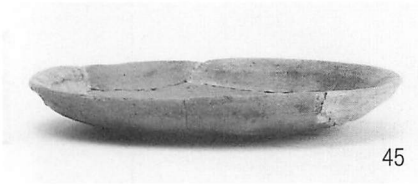
33

出土遺物

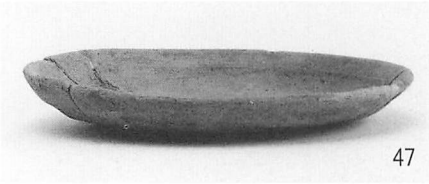

41


42

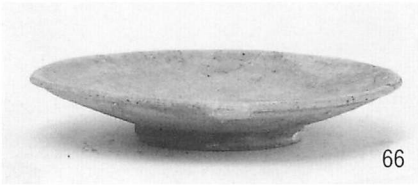

43

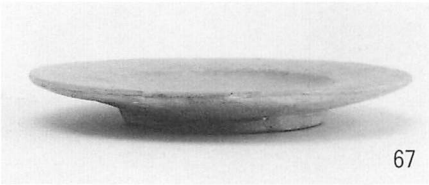

45

46


47

65


66


67

38

39

60

53

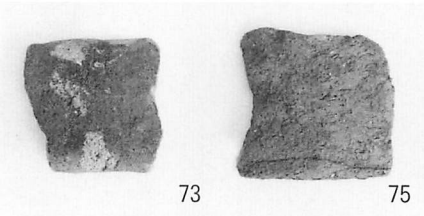
51

54

50

101

71

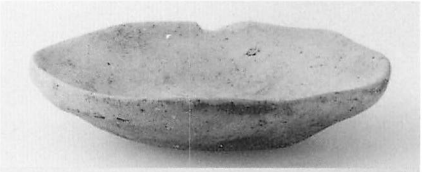

73　75

86

出土遺物

1

10



5

12

19

6

18

23

28

27

29

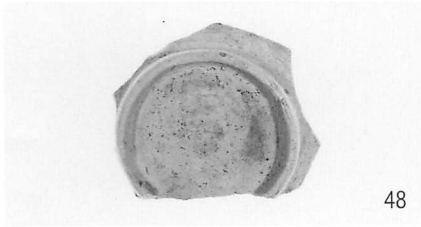
31

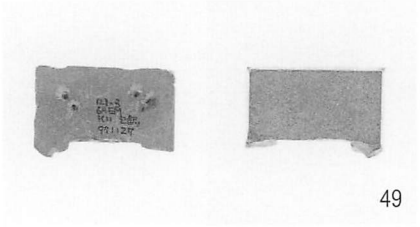
33

51

53

54


48


49

60

史跡　斎宮跡

平成9年度

発掘調査概報

平成11年3月31日

編集発行　斎宮歴史博物館

印　　刷　光出版印刷株式会社